贖罪の魔術師

暇人α

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
贖罪の魔術師

【Ｎコード】
Ｎ００４９Ｙ

【作者名】
暇人α

【あらすじ】
一生に満足して死んでいった１５歳の少年。彼は気が付いたら６歳児として異世界に転生していた。その世界はもうすぐ破滅が迫っているような世界、少年は気にせず家族や友人と平凡ながらも楽しい生活を送っていた。ところが……
※処女作です。変なところとかがあったら感想欄で優しく教えてくれるとうれしいです。
※タイトルが関係してくるのは二章からです。一章はほとんどほのぼのしてます。

プロローグ（前書き）

作者は初心者なので誤字脱字や矛盾があるかもしれませんので優しく教えてくださると助かります。
未熟な作品ですが楽しんでいただけると幸いです

プロローグ

「なかなかいい人生だったかな」
僕は病院のベッドの上で呟いた。

もうすぐ死んでしまうのだし僕の短い生涯を振り返ろうと思う。
僕は物心ついたころには既に孤児院にいた。
親の顔も知らない。
僕は小さいころから性格が少し歪んでいたので僕が心から信頼していたのは2人しかいない。
雨夜大地と森継優花である。
この苗字は大地がふざけてつけたものであるため大変なことになってしまった。
大地と優花は僕の幼馴染でもあり家族でもある。
二人とも僕には過ぎたやつらだったと思う。
大地はスポーツ万能でワイルドな好青年で、いつもみんなの中心にいるようなやつで僕の親友と言っても過言ではない。
優花は才色兼備で、告白された回数は学校でもダントツだ。なにしろ学校の二人に一人は優花に告白したことがあったからだ。
それを全部断っていたのは多分大地が好きだったからだろう。
一度そのことを優花に聞いてみると腹をえぐるようなボディーブローを食らった。
照れ隠しだろう。
そう言ったら今度は左フックを食らった。
泣きそうだった。
そんな二人との小学校、中学校生活はそう悪いものではなかった。
一か月に一回はある恒例ともいえる優花への告白騒動や泣きついてくる大地との試験勉強……なかなか面白いことばかりだった。
もっとも学期に一回は大地が何かやらかして僕まで怒られていたが

……理由はたいてい大地だけじゃあんな周到な作戦は練れないとか大地にしては準備がいいとかで僕が手伝ってると勝手に決めつけられていたからだ。
全く、理科室潜入も屋上のカギをピッキングしたのも大地だし僕は計画を提供しただけなのに……
そんな中学校生活も終わりを迎えた。
高校は、本当はみんな別々のところに行くはずだったんだけど優花の熱心なアピールにより同じ高校に行くことになった。
僕も大地もお金のかからない公立の高校か、奨学金のとれる高校ならどこでもよかったのであっさりと承諾した。
けどこのせいで入試前一週間は大地と徹夜だった。
なぜか？
大地だけボーダーに届いてなかったのだ。
ちなみに僕は余裕で優花はギリギリ――超えていることに変わりはない――だった。
なにはともあれそんな大地もなんとか合格してこの春からまた三人で一緒に学校に通うはずだった。
そんなときだった僕が倒れたのは。
もちろんすぐに病院に運ばれ、身体中くまなく検査を受けた。
結果はガン。末期らしいのでもう助かる見込みはなさそうだ。
それを聞いた時の周りの反応と言ったら様々なものだった。

大地は十秒間くらい黙った後、「また来る」と言って病室を出た。

優花は医者に泣きついていた。
「嘘ですよね」「嘘って言ってください」と。

できるのはごくわずかな延命措置だけ。高校の入学式にすら出れないみたいだ。
そんな状態で月日は過ぎた。

そして今に至る。
僕は中学ではそこそこ猫を被るのが上手だったので別段仲の悪いやつもおらず何人もの元クラスメイト達が見舞いに来てくれた。
しかし今日は大地しかいない。
他に来てくれそうなやつもいたけど今日は検査と言ってあるため来ないだろう。
無論優花にも、だ。
だから今日は大地しか来ないだろう。
大地が来たのも僕が呼び出したからだ。
「それで俺を呼んで何がしたかったんだ？　遺言でも聞いてほしいのか？　さっきも今にも死ぬみたいなこと言いやがって。」
大地にも優花にも僕の余命が今日尽きることはいっていない。
言ったら優花は何が何でも来るだろうそれだと僕は恥ずかしくてとてもじゃないが遺言を全て残せなくなるしいくら図太いこいつでも普段通りとはいかなくなるだろうからだ。
僕は普段通りという幸せの中逝きたいのだ。
「おお！大地にしては鋭いね。正解だよ」
僕はからかうように言った。

「僕の余命は残り0日。つまり今日中には僕は死ぬんだよ」

さすがの大地も言葉を失ったがすぐに自信満々そうな顔で言った。
「いやそれはない。なぜならお前は今日検査だろう？死ぬなら検査なんていらないはずだ」
イラッときたから医者からの診断書を見せてやった。
すると
「手の込んだイタズラだな。もうそんな紙一枚じゃ騙されないぞ」
と、もっと自信満々そうな顔で言った。
「これは本物だって」
僕は弁解したが大地は僕の言うことを信じていない。

「そんなこと言ってこの前も俺をだましただろう。俺に死ぬほど勉強させやがって」
こいつ……まだそのことを根に持っていたのか。
あれは大地がボーダーに届いてなかったからしょうがなかったんだ。
「確かにその時は騙したけどそれは大地のためを思ってだよ…」
そう思い僕が弁解する。
「嘘だっ。それならあんな喜々として罰ゲームとか考えないはずだっ」
大地が声を大きくして言ってくる。
身体に響くからやめてほしい。
「いや、まあそれはね…」
「ほら見ろ。だから今回のも嘘だっ」
そういう大地の顔は必死そうに見えた。
こいつの直感は獣並なので本当だと気づいているのかもしれない。
「まあこれが嘘だとしてもいずれ言うことだからさ、今日聞いといても損はないだろう？」
「た、確かにそうだが…」
いつお迎えがくるかわからないし僕は簡潔に大地に言った。
「大地、今までありがとう。大地のおかげで短くてもなかなか楽しい人生だったよ」
大地が言葉を返す前に続けて言った。
「優花には好きだったって伝えといて」
大地は少し黙った後、
「俺への遺言はともかく優花へのは直接言わなくていいのか？」
「そんなことしたらガンで死ぬ前に緊張のしすぎでショック死しちゃうよ」
自分で言うのもなんだがシャレになっていない気がする。
「別にどっちにしろ死ぬなら変わらなくないか？」
「いや、勝算があったら考えるけど優花はもう好きな人がいるだろうからね、地雷原に突っ込むつもりはないよ」

適当に言葉を濁しておいた。
優花の思いを大地に言ったら来世で優花に殺される。
ほんとは『優花は大地が好きなはずだからフラれるの確定じゃん。なんで死の間際でフラれていかなきゃいけないんだよ』って言おうと思ってたんだけどここで来世の命までかけるのは嫌だからね。
そんなことを思っていると大地が僕をかわいそうな馬鹿を見るような目で見てきた。
こいつにこんな目で見られるのはすごい腹が立つ。
「まあ、先に大地が優花に告白するなら考えないでもないけどね」
もっとも考えたところで実行するまで僕が生きている保証はどこにもないんだけどね
「なんで俺だけ地雷原に突っ込まなくちゃ……お前俺が告白したらお前も面と向かって告白するか？」
なんか大地が妙なことを口走り始めたので
「いいよ、ただし結果次第ではしないけどね」
彼氏がいるやつに告白とかしたくないし。
「よし、わかった。ここでちょっと待ってろ」
そう言って大地は走って病室を出て行った……あれ？これで大地が間に合ったら僕告白決定？
不味いことになったがどうせ大地の告白を受け入れるだろうから大丈夫だろう。
その雰囲気のなか逝くのは気まずい気がしないでもないけどまあ二人をからかいながら逝くとしよう。
そう思っていると病室の扉が勢いよく開いた。
もう来たのか、まだ２０分しか経ってないのに。
「おい、告白してきたぞ。次はお前の番だろう」
そう言いながら大地が優花と一緒に入ってきたが
「え？僕が見てないからノーカウントでしょ」
僕は冥途の土産として直で告白シーンを見たいのだ。
わかりきっている結果に興味はない。

僕の声と重なるように優花がと言った。
「え？大地告白したの？誰に？」
「優花、なんてことを言うんだ……」
それを聞いて僕が大地をじーっと見る。
「すみません、嘘つきました。」
大地が観念して謝ってきた。
「けどどうせ結果は変わらないし関係ないだろ」
大地があほなことを言っている。
結果よりも過程が重要なのだ。
具体的にいうと告白シーンを見るのが重要なのだ
さらに言うと結果は大地次第でかなり変わるので関係大有りだ。
直接フラれるのと間接的にフラれるのではダメージが段違いだ。
「まあ何はともあれ、大地も告白しなかったし僕の遺言はきちんと伝えてくれたまえよ」
僕をだませなくて悔しそうな大地を微笑みながら見ていると
「ちょっと遺言ってどういう意味？」
優花が口を挟んできた。
「いや、いずれ言うならいつ言っても変わらないかな、と思って」
大地にしたのと同じような言い訳をして優花を納得させようとする。
大地は馬鹿なので簡単に丸め込めるが優花をちょっと面倒だ。
ぼろを出すと今日死ぬことがすぐばれる。
そんなことになれば僕の静かに逝く計画が台無しだ。
「それでも言っていいことと悪いことがあるでしょう」
「遺言は言っていいことじゃないか。僕に遺言を残すなと？」
「いや、そういう意味じゃなくて……」
僕が屁理屈で優花を丸め込む作戦を実行していると
「よし、わかった。ここで告白すればいいんだな」
大地が大声でこんなことを言い始めた。
「優花、俺はお前が好きだ」
そして大地が告白した。

まあ計画通りではないけど告白シーンも見れたし、これで大地と優花二人とも幸せだろうし結果オーライだろう。
終わりよければすべて良しだ。
僕が満足していると優花がこちらの方をチラチラ見ている。
やはり第三者の前では答えづらいのだろうか。
とはいえ僕にはもうベッドから動く力は残ってない。
すると優花はあきらめたかのように口を開いた。
「ごめんね。私好きな人がいるの」
衝撃的な事実を口にした。
どういうことだ？
優花は大地が好きな人じゃないのか？
僕の頭が混乱する。
「知ってたよ」
大地がこんなことを口にした。
馬鹿な、こいつが気付いていて僕が気付いていないだって。
そんなことはありえない。
第一優花は大地に手作り弁当とか持って来てたし、クラスマッチとかのときも必ず大地のチームに応援に来ていた。
これで他の人が好きとかあり得るのだろうか、いやありえない。
僕がますます混乱していると
「次はお前の番だぜ」
大地が僕の肩をたたいてそう言った。
すると優花が大地に聞いた。
「どういうこと？」
「いや俺が優花に告白したらこいつもお前に告白するって約束したんだよ」
大地が馬鹿正直にばらしやがった。
これではもう僕が優花が好きなことがバレバレではないか。
気持ちがばれているのにいうしかないのか。
なぜ僕は死ぬ前から地獄にいるのだろうか。

まあどうせもうすぐ死ぬしいいか。
僕が開き直って言った。
「優花、僕は君が好きだよ」
大地と同じように告白したが優花は僕に見向きもせず机の上にある紙を凝視していた。
僕には答える価値すらないと？
さすがにそれはへこむなぁ……
落ち込んでいると
「ねえ……あんたの死亡予測日が今日と同じ日付になってるんだけど、どういうこと？」
げっ、隠し忘れてたか。
どうやって誤魔化そう。
僕が言い訳を考えていると
「それはこいつがドッキリ用に作った偽物だ。」
大地がうまいことフォローしてくれた。
大地ナイス。
まあ思いっきり騙されてるんだけど。
「そう……ベッドから動けないのにこんな物作ったんだ……」
や、やばいばれてる。
「そ、そんなことより僕の告白の返事は？」
「告白？」
どうやら聞いていなかったようだ。
まあ話題をそらせただけでよしとしよう。
それに答えてくれなかったわけではなかったのには安心した。
が、もう一度告白しないといけないのだろうか。
大地の方をちらっと見ると吹き出すのを我慢していた。殴りたい……
「だから僕は優花が好きなんだよ」
もう一度言った。フラれるために二回も告白した。
泣きたい…
「わ、私は……」

お、さっきと断り方が違う。
告白しなれている人は断り方のレパートリーも増えるのだろうか。
もっとも僕は最後まで聞けないらしい。
時間切れだ。
「ごめん優花。返事はいいよ。もう時間切れだ」
僕は口から血を吐いていた。
「さてと、言うことも言ったしもう心残りはないかな。大地、優花、元気でね」
本当は優花の好きな人が知りたかったけどそれを隠してできる限り笑って言った。
それに好きな人に看取られているのだから死に方としてはなかなかだろう。
優花の泣き顔が目に入った。泣き顔でもかわいいなぁ。
そんなことを考えているうちに僕の意識は途切れた。

第一話　天国？

僕はふと目覚めた。
が、まだ目は開けていない。
何故かというとさっき、といってもどのくらい時間がたったかはわからないが遺言まで残しているのだ。
別に死にたいわけじゃないけどその中には優花への告白とかあったから非常に目を開けづらい。
けどまあ僕はさっき死に掛けだったからもう死んでしまってここは天国的なところかもしれない。
が、そんな楽観していては目を開けた瞬間フラれる可能性がある。
てか僕は神とか信じていないので必然的に天国の存在も信じていない。
つまりは目を開けた瞬間フラれるということだ。
病室に二人がいればの話だが。
そんなこんなで１０分ほどベッドの上で悩んでいたが薄く目を開けて様子を見るという画期的なアイデアを思いついたのでそうすることにした。
見た人にばれないように薄く目を開けた。
するとそこには天蓋が見えた。
ここが天国ということが決定した。
僕が入院していたのはどこにでもあるような普通の病院だ。
間違ってもベッドに天蓋がついているはずはない。
そういえばベッドもさっきよりやわらかい気がするし……
天国ってどんなところなのかな。
そう思って寝たふりがばれないように寝返りをうって周りを確認すると右手には高級そうな家具や調度品が左手には……見知らぬ女性がいた。
髪は綺麗な銀色で、瞳はきれいな蒼色をしている。

もしかしたら天使かもしれない。
こんなにきれいな人は優花以外に見たことないし…
あれそれだと優花も天使だったのか？
まあ天使だとしてもかなり大きいと思う。
僕は高校生（なり損ねたが）では平均より少し高いくらいの身長だ。
この人は僕の１．５倍くらいある。
天国にいる人すべてを慈愛的なもので包むにはこのくらい大きくないとダメだったのだろうか。
まあ急に自分よりかなりでかい人を急に見たわけでね、僕が怖がりとかそういうわけじゃないんだけどね、誰でも驚くというかね。
思わず声を上げてしまった。
「うわっ」
と。
すると横に寝ていた女性が
「どうしたの？お腹すいた？」
とまるで幼児に接するように接してきた。
僕はそこまで子ども扱いされるほど子供じゃないんだけどな、天使から見れば僕なんて所詮子供にすぎないのだろうか。
そういえばさっきあげた声が妙に高かった気がするな。ボーイソプラノとかじゃあるまいし。
僕はそこで改めて自分の体を見た。
そして気づいた。
なんか縮んでね？と。
具体的にいうと幼稚園児から小学校低学年までの間、そのくらいまで縮んでいた。
僕が驚いて言葉を失っていると僕が何も反応を表さないのを訝しんだのかこの女性が言葉を重ねた。
「どうかしたの？どこか悪いの？お母さんにいってみなさい」
と。
お母さんにいってみなさい、と言ったのである。

別に僕の母さんは外人さんではないはずだ。遺伝的にふつうの黒髪黒目の日本人だったはずだ。
間違っても髪は銀髪じゃないし、瞳も蒼くないはずだ。
そもそも僕に母親はいないはずだ。
それともみんな神の子だから私の子供同然ですとかそんな考え方なのだろうか、けど死ぬ人一人一人に天使を送る必要はないとおもうんだけどな
僕が混乱していると扉が開く音がした。
そしてそちらのほうから
「どうしたセレス？」
と言いながら高級そうな服を着た金髪の男性が歩いてきた。
この人も天使だろうか、そう思うとこの人も容姿が整っている。
セレスか、そんな名前の天使は聞いたことないなぁ、といっても有名どころ（ガブリエルとかラファエルとか）しか知らないので何とも言えないが。
女性の方の天使（仮）は
「この子の様子がおかしくて」
と答えた。
すると男性の方の天使（仮）は
「心配だな。医者でも呼ぶか？」
と見るからに狼狽して言った。
医者という言葉に反応したのだろうか僕は大声で泣き出してしまった。
これは別に僕が泣き虫とかいうわけじゃない。本能が泣けと訴えてきたのである。
それにしても医者か天国なのに病気があるのか、それだと天国じゃないような……
それを見て女性の方の天使（仮）は
「お医者さんはいやみたいよ」
と、笑いながら言った。

すると男性の方の天使（仮）も
「そうみたいだな」
と、笑った。
う～ん、ここは天国なのだろうか。
根本的な問いをもう一度していた。
確かに天使のようにきれいな女性だが天使とは限らない、僕が勝手に思い込んでいただけだ。それに天国なのに病気があるのは矛盾している気がする。
となるとここは天国じゃない？
そうなるとどこだろうか、身体も縮んでいたし。
今の自分の状況について僕が珍しく頭をひねっていると男性（やっぱり天使ではない）が
「その子が泣き止むまで私もそばにいよう。なんたってお父さんだからな」
と続けた。
お父さんだからな、と続けた。
僕の父さんもやっぱり金髪ではない。黒髪黒目の日本人だ。
ここが天国じゃない以上は知らない人が僕の母さんと父さんを名乗っていることになる……これは病院に行ったほうがいいのだろうか？
それとも彼らに病院をすすめたほうがいいのだろうか？
そんなことを考えながらベッドの上を寝返りしながら動いている（ここで急に立つのは不自然だし）と一瞬の浮遊感、そして直後に床に落下した。
すごく痛い……ことはなかった。
絨毯がすごくやわらかくて助かったようだ。
絨毯の上であぷあぷしていると金髪の男性が
「ソラはやんちゃだなぁ」
といいそれに女性は
「あなたに似たんじゃないの？」
と笑いながら言った。

どうでもいいが僕の心配もちょっとはしてほしい。
人は高さが３０センチもあれば落ちて死ねるのだ。
さっきまでは僕の心配をしていたのにどういうことなのか。
そのまま二人は歓談しているが僕はベッドに持ち上げられた後放置されている。
だんだん蔑にされていっている気がする。
逃げようにも上手く身体を動かすことができない。
縮んだからだろう。
どうしよう、なにもできない。
そう思っていると睡魔が襲いかかってきた。
再び途切れ行く意識の中、これが夢じゃないなら転生とかいうのをしたのかもな…と思った。

第二話　状況確認（前書き）

説明回です

第二話　状況確認

結果からいうと……転生してました。はい。

僕の意識がはっきりしてから――あの後また起きてから――転生していることはすぐに分かった。

だって家の中で当然のように魔法を使っているんだもの。

この前なんて生きてる豚らしきものを一瞬でこんがり焼いていた。

僕がそれを見て年甲斐もなく――まあ六歳なんだけ――はしゃいでいると母さんや使用人たちからほほえましい目で見られた。

まあその時点で普通に転生どころか異世界に転生したのは確信した。

てかさせられた。

そのあと本を読んでもらったり――もちろん絵本だ――母さんたちから話を聞いてこの世界のことがいろいろわかった。

この大陸はヴァーニア大陸というらしい。

国は大国が四つと小国がいっぱいあるらしい。

その４つの大国の名前は僕たちが住んでいるアマルティア王国、王制だが今代の王は人格者なので反乱とか革命とかの心配はないらしい。

次にオルトルート帝国、ここもやっぱり王制だ。いや帝制というべきか……

ここは軍事力に秀でている国でアマルティア王国と戦争したら単純な国の軍だけでは帝国が圧勝らしい。それでも戦争がはじまらないのは理由があったりするがそれはおいおい話すとしよう。

そして三国目はハルモニア教国。

文字通り宗教国家だ。

ハルモニア教――まさに名前通り――を信仰している国で宗教のトップ、総代主教とかいう人が一番偉いらしい。

そしてエルフやドワーフといった異種族たちが暮らしている魔王領

だ。
え？
魔王領は国じゃないって？
僕もそう思ったけどそんなことはないらしい。
なんでも約二百年前までは人間ｖｓ異種族で争っていたらしいがある予言がきっかけで終了したらしい。
その予言はなんでもこのままだと約二百年後には世界は人類――異種族含む――は破滅を迎えるというものだったらしい。
それで当時の王様たちや魔王は大慌て。
すぐに平和条約を結びいずれ来るという破滅に備えて国力の増強を図った。
このおかげで国々の争いは回避されている。
今までいがみ合っていたのも忘れて中立を保っていた教国に優秀な騎士や魔法使いを育成するための学園までつくり世界中の才能ある子供たちを種族問わずそこに集め、育成を開始した。
その際に異種族が一か所に集まって街を作り魔王がそこを治めているのだがあまりにも規模が大きすぎるため国扱いされている。
ちなみに教国が戦争で中立を保っていたのはなぜか。
どちらかというと真っ先に異種族を弾劾しそうなイメージがあったので母さんに聞いてみると、神様も異種族だから彼らへの弾劾はそのまま自分の国そのものを弾劾することになるから中立だったらしい。
まあ言われてみれば神様も異種族なんだけどひとくくりにするのはそれはそれで失礼だと思う。
気づいたかもしれないが約二百年前に約二百年後の予言が下された。
予言を下したのはその当時の教国の巫女だ。
予言の誤差はその予言の開始までの時間の１割前後、これで言うと２０年の誤差があるらしい。
まあ今がまさに予言のど真ん中である。
だからと言って僕にはどうしようもないのでのんびり暮らしている。

その予言が眉唾ものという説もあるので是非ともその可能性にかけたいと思う。
まあ僕が新しく生きることになった世界はあまり後がないらしい。
破滅する前にもっと異世界らしいところを満喫したい。

時間については元の世界より一年の間隔はほとんど変わらないようだ。
この世界では一年は２８日×の十二か月だ。
元の世界よりちょっとだけ一年が短いが誤差の範囲だろう。
呼び方は白の一月、白の二月…白の四月、あと灰の月と黒の月も四か月ずつあるらしい。
なんでこの呼び方かというと年の初めは穢れとやらがないけど時間が経つにつれてだんだん溜まっていくからだそうだ。
多分宗教関係の理由だろう。

もっと身近なところでの変化はこの世界独特というわけじゃないけどこの家には使用人がいる。
しかもたくさん。
執事とかメイドさんとか料理人とか庭師とか。
いやまあ使用人の存在自体は不思議でもない。
この世界の文化水準はおそらく中世ヨーロッパと同じくらいだからだ。
メイドさんたちの話を聞いたところ奴隷もいるらしい……
もちろん盗み聞きだ。
奴隷なんて教育に悪いもの教えてくれるわけがない。
それに僕としては奴隷がいようがいなかろうが僕の生活には直接関係しなさそうだからとくに興味はない。
それで僕の家に使用人がたくさんいることについてだったけど、どうやら父さんは貴族らしい。
しかも三大貴族とかよばれているうちの一つらしいからこれでもむ

しろ少ないほうらしい。
どんだけーって話である。
ちなみに他の三大貴族はオルレアン家とネルトゥス家だ。
そんな感じで三大貴族とか父さんたちは呼ばれてるわけでものすごく偉いらしいけど僕の前ではそんな威厳なんて欠片も見せたことがない。
どこからどう見ても親馬鹿にしか見えない。
ほしいものはたいてい買ってくれる。
まあほしいものなんてほとんどないのが現状なんだけど。
そんな父さんの名前はアラン・ルビンシュテイン。
そして母さんの名前はセレス・ルビンシュテインだ。
それから僕には兄がいる。
年は少し離れていて１２歳らしい。
名前はゼノン・ルビンシュテイン。
兄さんも僕に甘い。
ほんとは他にも称号やら過去の家名やらが延々と続くんだけど覚えきれなかった。
僕の新しい家族はこんな家族構成だったりする。
使用人さんたちも実質家族のようなものだけどね。
他にも従妹とかいるし兄さんの婚約者もいるけど日常的に会うのは今の三人だ。
……兄さんの婚約者は普通に可愛かった。
彼女も僕に甘いけど彼女はどちらかというと僕を愛玩動物のように思っている節がある。
この前なんて着せ替え人形にさせられて男物だけならまだしも女物まで……
あの記憶は黒歴史として厳重に記憶の奥深くに封印したい。
まあそんなこんなで転生したことを理解して僕が何をやっているかというと……魔法だ。

やっぱり少年の夢っていうかね、心が躍るものがあるというかね。
とにかく暇さえあれば母さんや父さん、兄さんに魔法を教えてもらっている。
一回メイドさんに聞いてみたが教えてもらえなかった。
なんでもルビンシュテインの子に教えられるようなものではないといわれた。どういう意味だろう。
それはともかく僕の魔力は一族の中でもトップレベルに高いらしい、父さんが自慢げに話していた。
ということで魔法を習っているんだけど、魔法は危険だし僕の魔力ならなおさらということで今は正しい魔力の出し方といろんな魔法の使い方、つまり詠唱する呪文や空中に描く魔法陣について勉強して、父さんから許可をもらうまで使ったらダメだって言われた。
この世界の魔法は様々な発動方法があるらしい。
呪文を詠唱するのもあれば、空中に魔法陣を書くのもあるし、すごいところまでいくと指を鳴らしたりするだけで発動できるものもあるらしい。
すごいかどうかは微妙だけど舞的なもので魔法を発動する民族もあるらしい。
発動できるものにもいろいろなものがあるらしい。
その中でもポピュラーなものは火を出したり風を起こしたりする属性魔法だ。
けどそのスケールが上がると落雷まで呼び寄せられるようになるらしい。
他には無属性魔法というものがある。
これは属性魔法に区別できない特異な魔法をそう呼ぶらしい。治癒魔法や浮遊魔法――魔力で浮く魔法であるがこれとは別に風属性の魔法でも浮けるので無駄ともいえる――などをそうよぶらしい。
少年の夢をかなえるためにも早く父さんに許可をもらいたいと思う。
僕の新しい世界は大体こんな感じだ。

え？僕の名前？

僕の新しい名前はソラ・ルビンシュテイン転生したての六歳児だ。

第三話　貴族（前書き）

サブタイトルつけるの難しいですね
今回などほとんど関係しておりません。
参考程度にしていただけると幸いです。

第三話　貴族

転生したことに気づいてからもうすぐ三年経つ。
父さんも母さんも優しいし、兄さんも僕とよく遊んでくれる。
前世では味わえなかった家族との触れ合いが充実している気がする。
正直とてもうれしいし楽しい。
けど父さんたちはいまだに僕に魔法を使わせてくれない。

なんでもきちんと制御できるような知識と精神が備わるまで使わせてくれないらしい。
だからひたすら魔法の知識を取り込んでいる。
途中で文字が明らかに今使ってるのと違う魔法も勉強させられた。
ほかの国の魔法だろうか。
そういえば最近最近気づいたんだけど僕はこの世界の文字が読めるらしい。
当然過ぎて全く気付かなかった。
多分僕の意識がなかった六歳までの間に体に染みついたんだと思う。
僕にとっては便利だから構わないけど。

けど僕も毎日毎日魔法の勉強をしているわけではない。
護身術として一通りの格闘技と剣術なども習っているし、たまに兄さんに遊んでもらったりもしている。
貴族としての礼儀等はいずれいやでも覚える時が来ると父さんが後回しにしてくれている。

今僕が何をしているかというと……兄さんに遊んでもらっています。
なんか兄さんが魔法でドラゴンを作り出してくれたのでそれに乗って遊んでいる。
他にも鳥とか何故か空飛ぶ魚とか作ってもらってるのでそれをドラ

ゴンに乗って捕まえようとしてるんだけど……
追いつかないんだよね。
僕が重いのかと思って試しに降りてみたら次の瞬間にはドラゴンの口に鳥や魚が納まっていた。
ダイエットしようかな…
そんなことを考える九歳児だった。
そんな感じであれこれ二時間くらい――体感時間である―で遊んでいるとメイドさんが僕たちを呼びに来た。
もう夕食の時間かと思っているとそうではなく父さんが呼んでいるらしかった。
なんでも来週開かれる貴族のお披露目パーティーについていろいろ言うことがあるらしい。
貴族は九歳になるとお披露目パーティーというものをやるらしい。
正確には九歳～十二歳の貴族の子供を集めてお披露目パーティーをやるらしい。
僕に言うこととかあるのかなぁ～と思いつつ父さんの部屋へ向かった。

父さんの部屋に行くと父さんが話を切り出した。
「今度パーティーがあるのは知っているだろう」
「うん、知ってるけど……」
「そこではお前と同世代の貴族の子供たちが集まる」
「それがどうかしたの？」
「つまりお前と同世代の女の子も集まるわけだ」
嫌な予感がする。
「お前、貴族がどうやって結婚するか知ってるか？」
まさか
「今度のパーティーでお前との婚約がおそらく……いや、間違いなく申し込まれる」
やっぱりか。

いやまあ前世の漫画とかでもそういうのはあったけどまさか自分がまきこまれるなんてなあ。
「なんで？」
愚問だとは思うけど一応聞いてみる
「お前と結婚すれば三大貴族の縁者になれるからだ。早い話政略結婚というやつだ」
「僕は恋愛結婚がいい」
僕は即答した。
そんな道具みたいに使われるのもいやだけど顔も知らない人と結婚するなんてもってのほかだ。
可愛くなかったらどうするんだ。
……いやもちろん性格もだけど。
「そういうな。貴族の子供は大体このパーティーで婚約して結婚するんだ。」
父さんは僕をなだめるように言う。
「じゃあ父さんも母さんとは政略結婚だったの？」
気になった僕が聞く。
「いや父さんたちは恋愛結婚でもあり、政略結婚でもあったな。」
「どういうこと？」
「いやそのままの意味だよ。恋愛して愛を誓った相手が婚約者だったって話だよ」
なんて羨ましい。
僕だってそんな感じがいい。
愛を誓い合ってから結婚したい。
そのためにはどうにか断らないと。
「僕の要望もちょっとは取り入れてくれるの？」
「大事な息子の一生にかかわることだし、多少のわがままくらいなら聞いてやるぞ」
「じゃあ僕の条件をのんでくれる娘ならいいよ」
「どんな条件だ？」

「一夫多妻制ＯＫで別の貴族と二人組以上でくること」
これなら僕と婚約して得られるメリットが少なくなる。
メリットがなければ僕と婚約しようなんて話は出てこないだろう。
「お前妙なところで賢いな。とりあえずそれは擱いとくとして一夫多妻制なんて教育に悪い言葉誰が教えたんだ？」
あれ？話が変な方向に……
「誰が教えたんだ？アシュリーか？ルーナか？それともターシャか？」
どうやら僕が教育に悪い言葉を知っていたのが気に食わないらしい。
愛されてるのは嬉しいけどここまでいくとちょっと…
それはそうとして今出てきた名前はみんなこの家のメイドさんの名前だ。
他の庭師さんとかの名前が出てきてない。
「なんでメイドさん限定なの？」
「女性の方がそういう話をしそうだからだ。で誰だ、誰が教えたんだ？」
僕がこの言葉を知ってるのは当然前世の知識からだ。誰に教えられたわけでもない。
「教えた人をどうするの？」
「当然何か罰を……」
こんなことでアシュリーたちに迷惑をかけるわけにはいかない。
みんな僕には優しいんだ。
お菓子とかくれるし。
「本だよ、本で読んだんだ」
それっぽい嘘をつくと
「なんて言う名前の本だ？探し出して焼いてやる」
どうしよう。
本の名前なんてわかるわけない。
そもそも本を読んで知ったんじゃないんだから。
「それはともかく僕は絶対婚約は嫌だからね」

「どうしてもか？相手がいなくなるかもしれないぞ？」
うっ、それはつらい。
けど現実味のある話なのかもしれない。
この世界では平民と貴族の身分を超えた愛なんて絵空事だ。
だって平民と接する機会がない。
僕が接したことのある平民はこの家にいる使用人のみんなだけだ。
くっ、愛のない結婚も嫌だけど愛以前に結婚できないのも嫌だ。
どうすれば……
僕が心の中で葛藤を繰り返していると
「どうしても恋愛結婚がいいか？」
父さんが聞いてきた。
「もちろんだよ」
そりゃできるならそっちがいいに決まってる。
「父さんに考えがあるが聞くか？」
「聞く聞く」
いったいどんな考えが
「ひとまず明日くる話は全部断っておこう。そしてお前は今度のパーティーで好きな子を作れ、そしてその子と仲良くなって付き合え。そしてその子にこちらから婚約を申し込めば完璧だ」
父さんの会心の案。
多分兄さんがやるなら一部の隙もない完璧な案だろう。
しかし僕がやる場合は完璧ではない。
なぜなら過程に僕が女の子を口説き落とすというものが入っているからだ。
自慢じゃないが前世では死ぬ間際にフラれた男だ。ハードルが高いどころの話じゃない。全裸で鉄の処女（アイアンメイデン）に入って無傷で生還するくらいの話だ。
要するに不可能だ。
とはいえ僕が恋愛結婚するにはそれしか方法がない
「わかったよ。そうする」

僕が観念して言う。
この場合の観念は結果的に結婚をあきらめるというものも含まれてるかもしれないがそうならないように頑張りたい。
「大丈夫だ。お前が最後の、１２歳のパーティーまでに誰と婚約したいとか言い出さなかったら父さんが婚約を結んどいてやる」
父さんの優しさが心にしみる……
尤も実質出来レースなわけだが……
僕が何とも言えない気持ちで黙っていると沈黙を了解と受け取ったのか
「じゃあそういうことにしよう」
僕にもう打開策なんてないので
「うん……」
と返事するしかなかった。
まあ結婚できないことはなさそうだし良しとしていいのかな。
良しということにしよう。
良しだったらいいなあ……
僕が気を落としているのに気が付いたのか父さんはちょっとの間考えた後言った。
「そう落ち込むな。代わりと言ったらなんだがパーティーの日が終わったらそのご褒美ってことで次の日は魔法を使おうか」
「父さんが？」
魔法を見るくらいなら母さんたちに頼めばいつでもできるんだけど。
「まさか、お前がだよ。」
父さんが笑いながら言った。
僕は父さんを二度見した後
「つまり僕に魔法を使う許可をくれるってこと？」
ちょっと興奮気味になりながら聞いた。
なんたって念願の魔法だ。
少年の夢だ。
「そういうことだ」

ついにソラ・ルビンシュテイン魔法デビューだ。
「ありがとう」
思わず父さんに言ってしまった。
「ああ……」
父さんは照れながらそう言った。
「用事って婚約の話だけ？」
思い出してしまい気持ちが沈んだ僕が聞く。
「ああ、そうだ。」
と言われたので僕が部屋から出て行こうとすると
「あ、ソラちょっと待て。まだ用事があった」
父さんに呼び止められた。
なんだろうと思い戻ると
「お前に悪影響を及ぼした本のタイトルを教えて行ってくれ」
誤魔化し切れてなかったらしい。
延長戦に突入するようだ。

結局辞書で適当にページを開いたらそんな言葉があったから覚えた、
という苦しすぎる言い訳を何とか通した。
僕の言い訳に使われた哀れな辞書は焼かれ、次の日父さんが焼いた
ものと全く同じ辞書を買ってきていた。
焼いた意味はあったのだろうか？

それからお披露目パーティーまではずっと礼儀作法やダンス、服の
寸法を測るなどのことで忙しくて他のことについて何かやっている
時間はなかった。
今年のパーティーの会場には僕の家を使うそうなので父さんは準備
やらなんやらで忙しかったため母さんやメイドさんに礼儀作法とか
を教えてもらうことになった。
母さんたちは優しいから楽かなと思っていた。
結論としてその考えは甘かった。

そこで母さんやメイドさんの違う一面を見てしまった。
メイドさんはテーブルマナーでもいつもなら見逃してくれるようなことを見逃さなかった。
「退席するときは椅子をちゃんと入れてください。」
と言葉も敬語で顔も別に怒っているわけではないのに後ろからオーラのようなものを出して言われた時はは泣くかと思った。
ダンスでは母さんだった。
「そこはステップが逆よ」
メイドさんとは違い怖くはないが厳しかった。
具体的にいうとできるまでやらせるタイプだった。
初日なのに一通りできるまでレッスンは終わらなかった。
最後の方は足が痛くて仕方がなかった。

何の練習でもきつかったので手を抜きたかったけどそもそも教官――母さんやメイドさん――がそんなこと許してくれなかったし、なにより父さんが言ったこのセリフだ。
「マナーが良かったりダンスが上手な子はもてるぞ。」
前世ではモテなかった僕だけどここではモテられるかもしれない、という希望と十二歳までに誰かと付き合わなけらばならないというリミットが僕に手を抜くことを許さなかった。
尤も前半は父さんに騙された可能性も否定できないけど……
そんな切羽詰まったような希望に満ち溢れたような微妙な状態でパーティーまでの時間を過ごした。

第四話　パーティー

僕の誕生日パーティーは子供(ぼく)たちが眠くなるという理由から夕方の6時ごろからのスタートとなる予定だ。
主役が寝るのは避けたいのだろう。
名目上はお披露目パーティーだからね。
もっとも眠くなるという理由には子供をなめるな……と言いたいところだけど十時には眠くなるのだから仕方がない。
だってテレビとかないんだもん。

パーティーがもうすぐ始まるということで僕も父さんと兄さんに連れられて会場――まあ僕の家なんだけど――に入った。
会場には大人だけでも百人を超すような人数がいるみたいだ。その子供まで合わせると優に二百人は超すだろう。

パーティーが始まった。
まず父さんが主催者ということで来てくれたことに対する謝辞を二十分ほど。
それから今日ここに来れなかった貴族たち――子供の年齢が条件を満たしていない人だ――からのメッセージをかれこれ三十通ほど。
これでも厳選したものを読んだというのだから驚きだ。
例年ならもうちょっと少ないらしいが今年は僕たちルビンシュテイン家や他の三大貴族の家も参加するらしいのでしょうがないらしい。
これらを合わせると1時間半はあった。
僕はその間父さんの横で集まった貴族の方をみながら営業スマイル。
父さんは僕に何をやらせたいのか？
苦痛のスマイルタイムが終わり僕が父さんのそばにいると今度は一人一人父さんに挨拶に来た。
さすが三大貴族が一角挨拶に来る人が多い。

父さんの所に群がってくる。
父さんも大変そうだ。
……けどまあ今回はお披露目パーティーなわけで僕だけ勝手に離れるわけにもいかずていうかむしろ僕がいないといけなかった。
父さんもどうにか僕を解放しようと頑張ってはいるみたいだけど残念ながら結果はよくない。
時折くる質問に答えながらやっぱりスマイル。
質問が来るとき以外は暇なので父さんたちの会話を聞いていると、その中に父さんの予想通り婚約の話が多数持ち上がっていた。
僕はその話が来るたびに平静を装いつつも内心冷や冷やしながら聞いていた。
父さんが断るたびにそれに一安心しつつも挨拶に来る貴族の相手をすること1時間。
思ったこととしては貴族が連れてくる子はみんな可愛かった。
これは断らなくてもよかったかな、と軽く後悔した。
とはいえまだまだ先は長い。
次の相手を見た瞬間父さんが今までの貴族相手にしていた営業スマイルをといた。
無論僕だけ営業スマイルというわけではなかった。
その相手は赤い髪をした父さんと同じくらいの年の男だった。
営業スマイルをやめたということはどういうことなのか。
どういうことかと思っていると父さんが説明をしてくれた。
「彼はレイモン・オルレアン、私の親友だ」
そう言いつつ父さんがレイモンさんの肩を叩くとレイモンさんが僕に自己紹介をしてくれた。
「よろしく、僕がレイモン・オルレアンだ。」
オルレアンといえばルビンシュテインと同じ三大貴族の一角だ。
三大貴族同士通ずるところがあったのだろうか？
それはともあれ父さんが僕にも自己紹介を促す。
僕もしなければ父さんの顔に泥を塗ってしまう。

「ソラ・ルビンシュテインです。」
するとレイモンさんは僕は気付かなかったが彼の後ろにいる僕と同じくらいの女の子に同じように自己紹介を促していた。
赤い髪をした可愛らしい女の子だった。
彼女は怯えた感じで自己紹介をしてくれた。
僕の顔が怖いわけではない……と思うけどなぁ。
「わ、私はレティシア・オルレアンです」
「ソラ、レティシアちゃんと遊んできたらどうだ？」
父さんの渡りに船な提案に僕は元気よく返事をした。
「うん」
僕としてはこの状況から解放されればどうでもよかったのだ。
「行こう、レティシアちゃん」
僕は彼女の手を引っ張って歩いた。

「どこに行くんですか？」
レティシアちゃんが聞いてくる。
そういえばどこに行こう……
あの状況から抜け出したくて行先なんて考えてもなかった。
僕は苦し紛れに
「おいしいものを食べに行こう」
食べ物で釣ろうとした。
汚い大人のやり口だが背に腹は代えられなかったし、単純にお腹もすいていた。
ずっと立ちっぱなしだったのだ。
そういっていろんなテーブルの食べ物を食べて回った。
その際いろんな貴族に話しかけられ、食べ物を進められた。
これは賄賂というやつだろうか。
けどくれるものは全部おいしかったので遠慮なくもらった。
ちなみに顔を覚える気はない。
僕に負けず劣らずレティシアちゃんもよく食べていた。

僕と同じ立場である以上彼女も同じようなこと――つまりは営業スマイル――をして疲れたんだろう。
レティシアちゃんも最初は無口だったがだんだん「おいしいですね」とか言ってくれるようになった。
人見知りな性格なのだろうか。
笑っている顔が可愛くてつくづくこの世界の女の子はレベルが高いと思った。

そんなこんなでレティシアちゃんとも打ち解け、二人で会話しながら食べ歩きをしていると二人組の男の子と女の子が話しかけてきた。
男の子も女の子も金髪で整った容姿をしていた。
僕もこんな容姿だったらモテただろうに……
僕がイケメンを羨むオーラを出す。
「何をしているの？」
「せっかくのパーティーなんだからもっと別のことしたらどうなんだ？」
余計なお世話と言いたいところだけど僕もパーティーすることじゃないとは思う。
「食べ歩きだよ、パーティーっていつもよりおいしいものばかりだし」
「食べ歩きしてるなら暇なんだろ。俺たちと一緒に遊ぼうぜ」
レティシアちゃんの方を向くと食べるのに夢中で気づいてなかった。
そんなにお腹がすいていたのか。
まあ僕と同じような目にあったのだから仕方がないとは思うけど。
「いいけどなにやるの？」
「探検だよ探検、どうせここにいてもつまらないしそっちの方がおもしろいじゃん」
男の子が言った。
この子は自分の家を探検しようと僕に言っているのだろうか？
僕が誰だか知らないのだろうか。

……さっき前で父さんの横にいたからそう思うだけで僕がうぬぼれてるわけじゃない。
僕が黙っているとレティシアちゃんが元気よく言った。
「やりましょう！」
そんなに僕の家を探検したいのだろうか？
面白いものなんてないのに。
もしかしたら食べ歩きに飽きたのだけかもしれない。
僕も別に異存はなかったのでこの二人を加えた四人で僕の家を探検した。
金髪の男の子はやけに勘が鋭くて僕も知らないような隠し部屋とか隠し通路とかを発見していた。
女の子の方は怯えた様子もなく堂々と進んでいっていた。
それに比べレティシアちゃんは……後ろから音がして僕の前にまわって、前から音がしたら僕の後ろに隠れていた。
僕を壁にしたところで障子紙レベルで無駄と思うけど……
探検ではみんなで父さんの部屋や兄さんの部屋にも入った。
身内だから不法侵入じゃない。
僕はその間驚いたフリや初めて見るようなフリをしていた。
営業スマイルよりはましだから良しとしよう。
それに同年代の子供――僕は微妙だけど――と話すのはやっぱり楽しかった。

探検も終わり、会場に戻ってくるとなんだか会場が騒がしかった。
何事かと思っているとどうやら貴族の子供をさらいに来た賊がいたらしい。
が、なかなか子供だけの集団が見つからずうろうろしているところを見つかったらしい。
しかも話しかけられただけで見つかったと勘違いして自分から正体と目的を明かしたらしい。
なんて馬鹿な奴だろう。

賊が逃げ遅れた子を捕まえ
「この子を返してほしければ身代金白金貨十枚を持ってこい。」
捨て台詞をはいて逃げようとした。
なかなか速い。
どのくらい速いかというと僕の目には影しか映らないくらい速い。
子供の動体視力なのであてにはならないが。
執事さんたち――警備も兼ねている――は人質がとられているのでうかつに行動できていなかった。
周りの貴族もそのようだった。
もっとも人質がいなかったとしても貴族に何かできるかと言われればできないと思うけど。
僕もできないし。
そこに父さんが賊の前に出て足を踏み鳴らした。
すると賊の手足を拘束するように魔法陣が描かれそれだけで賊の手足は氷で拘束されていた。
賊が抱えていた子供は腕の中で今がチャンスと分かったのだろう。
腕の中から子供特有のすばしっこさで脱出して親の元へ走っていた。
その子が簡単に抜け出せたのはひとえに賊が拘束された恰好が格好だからだ。
氷で手が拘束された際に手が前に回っていてあたかも手錠を付けられた罪人のような状態だったのだ。
父さんはここまで考えていたのだろうか。
それともこうなるような魔法も発動していたのだろうか。
父さんは何事もなかったように言う。
「捕えろ」
父さんが言うと執事さんたちが賊を連れて行った。
彼はどこに連れて行かれるのだろう。
まあ僕には関係ないし別にいいか。

その様子をみているとギャラリーのあちらこちらから声が聞こえてくる。
「さすがは魔を統べる一族、格が違いますな」
「あれだけの動作で魔法を発動するなんて……」
などと聞こえてきた。
魔を統べる？いったいどういう意味だろう。
明日にでも聞いてみよう。
まあ僕としては魔を統べるっていうのも気になったけどあの賊は身代金の受け渡し場所とか言ってなかったけどどうするつもりだったのかの方が気になった。

まあそんなハプニングもあったけどパーティーも無事終わり、三人ともお別れの時が来た。
交友の少ない僕――友達が少ないのではなく機会が少ないんだ――には新鮮なもので本来の目的を忘れるくらいたのしかった。
来年頑張ろう。
「また遊ぼうね、レティシアちゃんと……」
言葉に詰まった。
そういえば僕はこの二人の名前を知らない。
「ああ、名前を言ってなかったわね。私の名前はシルヴィア・アマルティア、この国の第一王女よ」
「同じくリチャード・アマルティア、第一王子だ」
二人はどうやら王族だったようだ。
しかも二人とも第一王子と第一王女だ。
この国は王位継承に性別は関係ないので二人のうちどちらかが王位継承とかするんじゃないだろうか？
気軽に接していい相手なのだろうか？
横ではレティシアちゃんもあわてていた。
二人とも急いで姿勢やらなんやらを直そうとしていると

「別に態度はそのままで構わないわ。公の行事ならともかくここはプライベートな場よ。気軽にシルヴィアと呼んでもらって構わないわ」
「俺もだ。こんな時までかしこまられると調子が狂う」
二人ともそう言うのでお言葉に甘えさせてもらう。
「わかったよ。またね、レティシアちゃん、シルヴィア、リチャード」
「うん、さよなら」
「ええ、また遊びしょう、ソラ。それにレティシア」
「おう、またな」
そう言って三人ともどこかへ――おそらく保護者の方――去って行った。

まあめんどくさかったけど友達もできたしよかったかな。
そんな感じでお披露目パーティーは終わった。

第五話　魔法

さあ今日は待ちに待っていた魔法を使える日だ。
日が昇るのと同時に起きて父さんの部屋へと向かった。
すると父さんはベッドから出ずに言った。
「魔法はお昼からにしよう、大きな音を出したら周りに迷惑がかかる」
と、もっともらしいことを言っていたが顔は眠たいと雄弁に語っていた。
僕は早く魔法が使いたいのに……
仕方なく僕はお昼までずっと今までに勉強した魔法のことについて復習していた。

昼ご飯を食べ終わると父さんが僕に言った。
「よし、ソラ、魔法を使いに行くぞ」
それから僕を隠し部屋の一つである無駄に広い地下室に案内してくれた。

隠し部屋に向かってる最中、昨日気になったことについて聞いてみた。
「父さん、魔を統べるってどういう意味？」
「そのことか……それも含めて部屋についたら説明しよう」
そう言って父さんはまた黙々と歩き出した。

部屋につくと父さんは話し出した。
「さあ今から魔法を使う、というより今日から魔法を使う許可をやるわけだがお前にいろいろ言っておかないといけないことがある」
「言っておないといけないこと？」
なんだろう？

この期に及んで許可を取り消されたらさすがの僕でも怒るけど。
「ああ、この一族に生まれた責任ともいえるな」
父さんはいつになく真剣な表情で話し始めた。そんなに重要なことなのだろうか。
「私たちの一族が魔を統べると呼ばれるのは一族のものが皆すべての属性の魔法を使うことができ魔力、魔法技能も普通の人よりもずば抜けて高いからだ、と世間では言われている。
だが実際は違う。それは魔を統べるという言葉から事実を知らないものが推測したに過ぎない。もちろん、事実でもあるがな。
ソラ、お前は魔法がどうやって創られるか知っているか？」
「知ってるよ。すごい魔法使いの人たちが少なくとも十年以上の時間をかけて創られてるんでしょ。」
どんな魔方陣を作れれば作りたい魔法が発動したいのかを研究し、わかったら実際に発動してみる。その繰り返しで完成するらしい。
もっとも十年かけても新しく生まれるのは初級魔法レベル。中級魔法レベルなら数十年、上級魔法なら百年近くはかかる。
「ああ、正解だ」
「それがどうかしたの？」
「魔を統べるというのは一族の直系が受け継ぐ才能、いや、能力というべきものから名づけられている。それは魔法を創りだす能力だ」
「え？魔法は時間さえあれば優秀な魔法使いなら創れるんじゃないの？」
魔法を創る才能は魔法の才能があれば誰にでも一応はあると思うんだけど…
「確かにそうだ。だが私たちは魔法によってどのように何がしたいか思うだけでその魔法の使い方が自然とわかる。尤も使いたい魔法が大掛かりであればあるほど詠唱時間が長くなるなり、魔法陣が大きくなるなり何らかの形で時間がかかるようになるがな。他にも魔法によっては魔力をかなり使うが私たちの一族、ましてやお前ならよほど大掛かりなものじゃなければ問題ないだろう。

この能力は悪用しようとすれば国を揺らがすくらいのこともできる。
これがお前に言っておかなければならないことだ」
父さんの長い話が終わった。
途中から聞き流そうかとも考えたけど頑張って耐えた。
「大丈夫だよ、そんな悪いことはしないよ」
別にそのうち滅びる世界を揺るがしても何の得もない気がするし。
僕が答える。
「そうか。じゃあ魔法を使うか。そうだな、まずは各属性の初級魔法を使ってみてくれ」

魔法の使い方は簡単だ。
魔法陣を作り出せばいい。
作り出す方法は千差万別で呪文を詠唱したり直接描いたりと、魔力を込めてそういう動作をすれば魔法陣が出現し魔法が放たれる。

僕は言われたとおりに火の初級魔法、「火の玉（ファイヤーボール）」を発動するための魔法陣を描いた。
初級魔法は全部「〜の玉」だ。
イメージがしやすく扱いやすいからだそうだ。
描き終えると魔法陣から直径一メートルくらいの真っ赤に燃え盛る火の玉ができた。
「魔力の込め過ぎだな。普通ならもっと小さい」
と父さんにダメだしされたが、僕としては初めて魔法を使ったという感動（？）でそれどころではなかった。
浮かれながらも他の水、風、雷、土、光、闇と魔法を使っていった。
どれも浮かれていたせいか基準より大きいものができて父さんがあきれていたが、気にしないことにした。
一通り使い終わると
「よし、何か適当に魔法を創ってみろ。感覚で創れるとはいえ魔法を創る経験をしといたほうがいいからな」

父さんからこう言われたのはいいがどうしよう。
三年間もひたすら魔法について勉強していたので知らない魔法なんて公に公開されてるようなものはほとんど知っている。
僕が頭をひねって考える
すると、父さんが助け舟（？）をだしてくれた。
「別に自分で思いついたものでもいいぞ。」
とはいえそんな簡単に思いつくものでもないしどうしよう。
そういえば兄さんが生き物っぽいやつを造ってたことを思い出した。
あの魔法は発動の仕方知らないなぁ。
あれはやっぱり兄さんが創った魔法なんだろうか。
まあ発動の仕方を知らないという意味では条件を満たしているのであれにしよう。
魚にするか、鳥にするか、ドラゴンにするか……やっぱりドラゴンだよね。
早速発動しようとすると手が自然と魔法陣を描いていた。
魔法陣が完成し、魔法が発動した。
魔法陣から兄さんが造っていたのと同じドラゴンが出てきたが、やはり魔力を込め過ぎたんだろう。
すごいでかい。
ドラゴンはこの無駄にでかい地下室――二十五メートルプールが四つくらいの広さ――の実に半分を占拠していた。
僕が慌てていると、父さんがやっぱりか、みたいな顔で言った。
「魔法を創るのは制御が難しいからな～」
その間にも父さんの手は魔法陣を描いていた。
父さんの魔法はすぐに発動してドラゴンを消し去ってしまった。
僕が賞賛の目で父さんを見る。
「このくらいお前も簡単にできるようになるよ」
父さんは僕に笑いながら言った。
「魔法も作ったわけだしここからは自由に魔法を使っていいぞ。この部屋は上級魔法（マジック）くらいなら食らっても壊れないからな。ただ古代（ロスト・

魔法は使うなよ。あれを使うとこの部屋どころか屋敷までふっとびかねん」
この部屋はそんなに頑丈なのか。
それにしても古代魔法（ロスト・マジック）ってなんだろう。
僕はそんなもの習った覚えはないのだけれど。
「父さん、古代魔法（ロスト・マジック）って何？」
「ん？セレスが説明しなかったか？」
説明どころか名前を聞いたのすら初めてだ。
「されてないけど」
「そうか。古代魔法（ロスト・マジック）というのはその名の通り今はもう失われたとされる魔法だ」
「魔法が失われるなんてあり得るの？」
そんな消費期限じゃあるまいし。
「いや、ありえない」
「じゃあなんで？」
「古代魔法（ロスト・マジック）というのは魔力の消費量が大きすぎたり発動が難しすぎて使える人がいなくなった魔法のことだ。一応書物などには残っていたが二百年前の戦争でその書物もほとんど焼け落ちてしまった。」
「そんなの僕が知ってるはずがないじゃん」
実質使うの不可能じゃん。
「ルビンシュテイン家は古代魔法が使えたからな。伊達に魔を統べるとは言われてない。先代たちの書いた書物に残っているし、この家には戦争で焼け落ちなかった書物もあるからな。」
そんな馬鹿な。どれだけこの家は魔法にたけているんだ。
「けど僕そんなもの読んだ覚えないけど」
「おかしいな、なんか今の文字とは違う文字で書かれたやたらと古い本を読まなかったか？」
……
そういえば外国語かな～とか思いつつ読んだ本があった気がする。
そういえばあの本に載ってたやつも上級魔法と同じかそれ以上に複

雑なものばっかりだったな……
僕としては分の読解だけで精いっぱいだったけど。
「読んだかも……」
「それだ、その本に載ってたのが古代魔法(ロスト・マジック)だ」
なるほど。
あの本に載ってたのが古代魔法(ロスト・マジック)なのか。
ん？
けどなんで上級魔法は大丈夫なのに古代魔法(ロスト・マジック)はだめなんだ？
「なんで上級魔法はいいのに古代魔法(ロスト・マジック)は発動したらダメなの？」
「さっき言った通り威力が段違いだからだ。」
「それは上級魔法もそうなんじゃないの？」
上級魔法も威力に関しては半端ない。本で読んだ話によると一発で軽いクレーターを作れるらしい。尤も、魔力が一発で常人十人分くらい持っていかれるらしいが。
「いいか、上級魔法は今でも現存している。しかし古代魔法(ロスト・マジック)は失われている。これは上級魔法より古代魔法(ロスト・マジック)のほうが難しいことを意味している。魔力を除けば魔法の威力は魔法陣の難易度、正確には魔法陣の複雑さによって決まる。失われるほど難しかったのだから失われていない上級魔法より威力が強いのは当然だろう。」
そういえばそうだ。それにしても古代魔法か……
一回くらいは使ってみたいな……
「ちなみに古代魔法(ロスト・マジック)はどのくらいの威力なの？」
上級魔法でクレーターができるのだ。
それ以上ともなればいったいどのくらいなんだろう。
「そうだな、単純な破壊の古代魔法(ロスト・マジック)なら魔法防壁のかかった王城の外壁を消し飛ばすくらいはできるだろう。」
王城にいたことがないからいまいちわからない。
「ふ～ん」
とりあえず相槌を打っておくことにした。
「ところでさっき思ったんだけど魔法を創れるなら魔法陣とか知る

必要なくなかった？」
「それはこの能力（ちから）を隠すためだ。
知られたらおそらく毎日のようにいろんな国からの勧誘があるだろうし危険視されて暗殺者とかも来るかもしれないからな」
大きな力を持つのは持つので結構大変なんだな。
もはや他人事じゃないんだけど。
「いい機会だし、ほかに聞きたいことはないか？」
「もう全部聞いたよ」
もう魔法に関しては聞きたいことはない。
「よし、じゃあ上に戻るか。」
「うん」
父さんについて上に戻った。

階段で笑いながら言われた
「お前は魔力がまだ制御できてないからできるまではあの部屋でしか魔法を使うなよ。屋敷を焼けれても困るからな。」
。いつか見返したいけどそんな日が来る予定は今のところない。

こんな感じで僕の初めての魔法体験は終了した

第六話　従妹（前書き）

もうストックが切れました。
文章を書くのって難しいですね

第六話　従妹

あのパーティーから一週間、魔法を使えるようになってから六日が経った。
父さんからは「火の玉（ファイヤーボール）」を平均レベルの大きさで発動できるようになったら地下室以外でも使っていいと言われた。
それから毎日ひたすら「火の玉（ファイヤーボール）」を使っている。
そのかいもあって最近では最初は直径1メートルもあった「火の玉（ファイヤーボール）」が直径0．9メートルくらいになった。
普通の魔術師が使う場合は込める魔力の量にもよるけど大体直径0．3メートル位らしい。
あと0．6メートル縮めれば良いわけだ。
最低でもあと一か月はかかりそうだ。
魔法を一刻も早く外で使うためにも僕は今日も地下室で魔法の練習をしていると父さんに呼ばれた。
なんか既視感（デジャヴ）だ。
僕が父さんに部屋に行くと
「ソラ、先日のパーティーの件について王城に呼ばれた。期日は明日までだ」
と、なんか不味そうな話をしている。
多分あの賊（まぬけ）の侵入を許してしまったからだろう。
きっと怒られるのだろう。
父さんドンマイ。
「いってらっしゃい」
僕は笑顔で言った。
だって僕関係ないし。
むしろ被害者（候補）だし。
「何を他人事のように言っている。呼ばれたのは私だけではないぞ」
ということは兄さんも呼ばれるのだろうか。

次期当主だし。
跡継ぎは大変だな。
「お前も一緒に呼ばれたぞ」
幻聴が聞こえたようだ。
「父さん、怒られるかもしれないけど頑張ってね」
「だから何を他人事のように言っている。お前も行くんだぞ」
幻聴ではなかったようだ。
それにしてもいったいなぜ？
「怒られるのは父さんと兄さんだけでいいと思うけど」
僕が呼ばれる意味が分からない。
「ん？何を勘違いしている。ゼノンは呼ばれてないぞ」
なぜ僕まで？
僕は何か悪いことをしただろうか？
父さんや兄さんの部屋に入ったのは家族だから大丈夫なはずだ。
もしかしたらパーティーの最中に王様にぶつかったのかもしれない。
「どんなふうに怒られるの？やっぱり死刑とか？」
「お前はなぜ怒られると思っている？」
いやそりゃまあ
「パーティーに侵入者を許したから？」
「そんなものは王は気にしてないだろう。良くも悪くも寛容な方だからな」
「じゃあなんで僕まで呼ばれるの？」
僕は王様と接点があるとすればあのパーティーだけだ。
けれどパーティーには思い当たる節がない。
「それが私も聞いていないのだ。ただ、アラン・ルビンシュテインは下記の期日までにソラ・ルビンシュテインを伴って王城にて王に拝謁せよ、という書状が届いただけだからな」
父さんも知らないのか。
「まあなんにせよ明日王城に行くのは絶対だからあきらめろ」
父さんはさらっと言った。

くっ、そんなこと言って王城に入った瞬間処刑とかされたらどうするつもりなんだ。
どうにか拒否する口実を考えないと……
「話はそれだけだ。もう行っていいぞ」
部屋から出された。
口実を考える暇すらもらえなかった。

地下室に戻ると女の子がいた。
僕と同じ銀髪の髪に赤い瞳、年齢は九歳だ。
彼女は僕を見るといきなり魔法を放つ。
「水の玉（ウォーターボール）」
僕は咄嗟に回れ右をして逃げ出す。
魔法は基本的にまっすぐ飛ぶのでそのまま追いかけてくる。
僕も必死に走ってはいるが当然魔法の方が早い。
逃げ方を間違えたかもしれない。
そう考えるや否すぐにしゃがんだ。
「水の玉（ウォーターボール）」は無事僕の頭上を通り……すぎなかった。
僕の頭上で止まると玉の形態を解いて水が僕に降ってきた。
びしょ濡れだ。
先ほどの女の子の方を見ると笑い転げている。
「フレイヤ、何するんだ。」
彼女の名はフレイヤ・ヴィノクール、僕の従妹にしてルビンシュテインの血を受け継ぐ者、あの能力（ちから）は受け継いでいないが、の一人だ。
ルビンシュテインの血と交わった場合その時から三代から四代までの間は本家と同じく高い魔力に恵まれる。
だからここにいる理由はわかる。
僕と同じで魔法の練習をしていたのだろう。
この国を探し回ってもここと同じレベルの設備を持つ場所がそうあ

るとは思えない。
わからないのはなぜ僕をわざわざ魔法を使ってまで濡れ鼠にしたかだ。
「何って魔法の練習だけど？」
それにしては僕が入ってきた瞬間、僕の方を向いて魔法を使ってきたように見えた。
「偶然魔法の練習をしていて、偶然魔法を使った瞬間に、偶然その射線上にソラが居たんだよ。」
ずいぶんと偶然が重なったものだと思う。
人はそれを故意と呼ぶのではないだろうか。
「僕の頭上で狙い澄ましたかのように魔法を解いたことについては？」
あの時僕に水が降ってきたのはフレイヤが魔法を解除したせいだ。
「ソラに魔法が当たったらまずいと思ってソラのために解いたんだよ」
僕を濡らすためにの間違いじゃないだろうか。
これ以上聞いても埒があかない。
多分こいつはしらばっくれる気だろう。
「それでいつ来たの？僕がここにいたときはいなかったと思うけど」
僕は話題を変え、気になったことを口にする。
僕はここを一時間もあけていない。
あまりにもタイミング――僕に嫌がらせをする――が良すぎる。
「ゼノンさんに、魔法の練習をしたいのですが父と母が許してくれません。どうか隠蔽の術を私にかけてくれませんか？、って言ったら快くかけてくれたよ」
「つまり隠れてたと？」
「そういうこと」
悪びれもせずにこう答えやがった。
「ちなみになんで？」
「ソラが魔法の発動に困ってるのを横から笑うため」

フレイヤは僕と違って魔力の制御がうまい。
さっき魔法をピンポイントで解いたことからもよくわかる。
「楽しかった？」
「うん、とっても」
「じゃあよかったよ」
僕はため息をつきながらそう答える。
フレイヤはこんな性格なので言っても仕方がないだろう。
「気分がいいなら僕のためにちょうど服を乾かせるくらいの火を出してくれない？」
自分でやったら火だるまになる自信がある。
「いいよ」
フレイヤはそう答えるとまた僕に魔法を放つ。
「水の玉（ウォーターボール）」
と。
水にあたっても僕の体と洋服が渇くことはない。
むしろ全身余すところなく濡れてしまった。
「これはどういうつもり？」
「間違えたんだよ」
笑いながら言っても説得力は皆無だと思う。
洋服を乾かすのはあきらめた方がいいかもしれない。
「今日はどうしてきたの？」
フレイヤはもう練習なんて必要ないはずだ。
仮に必要だとしてもこの部屋でやるほど下手ではないはずだ。
「遊びに来たんだよ」
僕とフレイヤは仲がいい。
二人とも同年代の友達がいなかったせいかフレイヤはよく家に遊びに来ていた。
彼女は男の子のような性格なので僕としても付き合いやすい。
「この前のパーティーで誰かと仲良くならなかったの？せっかく友達を作るチャンスだったのに」

「この前のパーティーには行けなかったんだよ。ちょっと病気でね」
そういえばフレイヤの姿を見てなかったがまさかいなかったとは。
僕が探検――自分の家だけど――していたせいで会えなかったのだと思ってたけど……
ルビンシュテインに多少とも血縁関係のある家はあまり子供をパーティーなどで外には出さない。
子供がいろいろとじゃべってしまうのを恐れているんだろう。
それこそこの前の全員参加みたいなやつじゃないとなかなか許してもらえない。
てことはフレイヤは来年のパーティーまで友達がいないのか……
「てことはフレイヤは来年のパーティーまで友達がいないのか……」
可愛そうなものを見るような目で見る。
つい心の声まで口に出してしまった。
「ひどいな。どうせソラだって友達いないじゃないか」
「甘いよフレイヤ。僕はこの前のパーティーで友達を作ったのさ」
君とは違うのだよ君とは。
「そんな……じゃあもう私とは遊んでくれないの？」
涙に目を潤ませて聞いてくる。
これじゃあ僕が悪いことをしたみたいじゃないか。
「いや、そんなことはないけど……」
「じゃあいいよ。今度紹介してね」
「お安い御用……じゃないかも」
そういえばあの三人は貴い身分の人だった。まあ僕もだけど。
「あの三人は貴い身分の人だからさ」
「ソラがそんなことを言うなんてよっぽどなんだね」
「機会があったら紹介するよ」
あるかどうかは未定だ。
「ところでその人たちは男？それとも女？」
「女の子二人に男の子一人だけど……」
性別は関係ないと思うけど

「そう、ちなみにそのどちらと仲良くなるつもりなの？」
……
なんでそのことを知ってるんだろう。
「いやそんなつもりはないよ。全くの偶然だよ」
「ゼノンさんに、ソラが仲良くなった子は二人とも可愛かった、って聞いてるんだけど」
兄さんめ、よくもそんなことを……
まあ可愛かったのは否定しないけど。
「他にも、あいつも婚約者を決めるために必死だからな、とも聞いたんだけど」
フレイヤはここまでの流れを完全に予想していたのだろうか。
それともこうなるように誘導されたのだろうか。
「いやだから偶然だって。シルヴィアとかレティシアと仲良くなったのは……」
「ふ～ん、一人は王女様でもう一人はオルレアンの一人娘か。それはたいそう可愛かっただろうね」
そういうとまた魔法をぶつけようとしてくる。
ん？あれは「水の玉（ウォーターボール）」とは違うな。
あれは「雷の玉（サンダーボール）」だ。
僕＝びしょ濡れ＋電気＝感電
……
まずい、殺す気だ。
僕は慌てて「土の壁（アースウォール）」を発動しようとするが
「雷の玉（サンダーボール）」
あっちの方が発動は早かったようだ。
「ぎゃあ」
僕は倒れた。ここで立ち上がったら追撃を食らう気がするのでこのまま倒れておこう。
そう考え目を瞑っていると
「水の玉（ウォーターボール）」

呪文とともに水が降ってきた。
「ぶはっ、何するんだフレイヤ、気絶していたかもしれないのに」
「叩き起こそうとして使ったんだから当然じゃないか、そもそも気絶してなかったし」
いやまあ死んだふりをしてたわけですが。
「まあいいよ」
手加減してくれたみたいだしね。
「で、なんであの二人を知ってるの？」
名前だけでどんな人かわかるなんて
「それは第一王女と三大貴族オルレアン家の娘は有名だからだよ。もしかして知らなかった？」
知りませんでしたね、はい。
「二人ともそんなに有名なの？」
「そうだね、道行く人に聞いたら百人に九十九人は知ってるくらい有名だよ」
つまり僕は百人に一人しかいないくらい無知だと？
「まあさっきのでとりあえずは許してあげる」
逆にあれで許されなかったら僕はどうなっていたんだろう。
「さあ今日は何をして遊ぼうか？」
結局この日は日が暮れるまでフレイヤと遊んだ。

第七話　登城

今僕は馬車に乗って揺れている。

ルビンシュテインの屋敷は王都から少し遠い。

歩いていくと朝早く出て日が暮れるくらいに着く位遠い。

最初は初めて見る王都への道のりに興奮して周りの景色ばかり見ていた。

けどそれも一時間前までの話。

今はとても退屈している。

そりゃあ珍しいものがあったら退屈しなかったさ。

王都への道のりは確かに珍しかった。

けどさ、同じような風景を延々と見続けたら珍しくなくなるし、さすがに飽きる。

父さんに聞くと王都までの道のりは約２時間半、眠るには残り３０分しか残ってない。

つまり何をするにも中途半端な時間なのだ。

はあ、何か面白いこと起きないかなぁ～

それから数分後、馬車の前方に何か見えた。

お、ついに王都か？

と思ったら違った。

僕らと同じ馬車だった。

けどおかしい。

同じ馬車なら速度に大差はでないはず。

つまり追いつくはずはないのだ。

目を凝らして前方の馬車を見てみると盗賊（？）に襲われているようだ。

ほんとにこんなことあるんだなあ。

物語の中だけかと思ってたよ。
やっぱり助けるのかな。
「父さん。前に盗賊みたいなのがいるけど……」
「ああ、あれか。あれは無視していいと思うぞ」
父さんがおかしなことを言った。
ここは貴族の義務とかで助けるべきではないだろうか。
「と、父さん。いいの、助けなくて？あの馬車に乗ってる人殺されちゃうよ」
盗賊に襲われた場合、その末路は悲惨の一言に尽きる。
持っている金目のものは根こそぎ奪い取られ、生きている人は高確率で殺される。
殺されなかったとしても盗賊たちに捕まれば奴隷として売られる。
まあ本音を言うと彼らも心配だけど、あいつらこっちにも来るんじゃね、という懸念がある。
まあ父さんが負けるとは思ってないけど馬車を壊されでもしたらここから歩いて王都に向かうことになる。
自慢じゃないが僕は家から数回しか出たことがない引きこもりだ。
足腰が弱い自信しかない。
ここは父さんに行ってもらってこの馬車に被害を出さずに蹴散らしてほしい。
そんなことを思っているとその僕の様子を不安と受け取ったのかあることを教えてくれる。
「ソラ、先に言っておくがあの馬車は助けない、じゃなくて助ける必要がないんだ」
助ける必要がない？
「なんで？」
いやいやいや、明らかに襲われてるじゃん。
助ける必要大有りじゃん。
「あの馬車の家紋はオルレアン家のものだ」
オルレアン？

レティシアちゃんの家じゃないか。
なおさら助けないと。
「オルレアン家は王国ができたときから代々王国の近衛騎士をしている。故にあの一族は誰もが幼い時から騎士になるための教育を受けている」
てことはレティシアちゃんも鍛えているのだろうか？
もし一緒にいるときに何かあったら僕は守られる側なのだろうか。
女の子に守られる……
……明日からもうちょっと真面目に魔法の使い方でも学ぼうかな。
「つまりだ。あのくらいの盗賊なら……」
前方の馬車を見るといつの間にか死体の山が出来上がっている。
その横ではレイモンさんが手で砂埃を払っている。
返り血は一滴たりとも受けていないようだ。
どれだけ強いんだろう。
盗賊たちに斬り傷は見当たらない。
武器なしであの数、大体十人〜十五人ほどを倒したのだろうか。

そうこうしているうちに僕の馬車がレイモンさんたちの馬車に追いついた。
「お、ちょうどいいとこに来たねアラン」
レイモンさんが話しかけてくる。
「私は馬車を血で汚したくはないんだが」
「そういうなって」
どうやらこの盗賊たちを王都に運ばなければならないらしい。
しかし馬車が一つしかないため彼らを運ぶと自分は歩かなければならない。
歩くにはここからでも王都はまだ遠いため戦闘中に見えた後ろの馬車に乗せてもらおうと思っていた。
ということだそうだ。
「確かに僕一人なら走ってもいいんだけど……」

レイモンさんが言い淀んでいる。
すると前にある馬車の中から赤い髪の少女が出てきた。
見間違えるはずもない、レティシアちゃんだ。
「なるほどな」
父さんは嘆息すると言った。
「事情は分かった。だから今回は乗せてやる」
明らかに上から目線だったがレイモンさんは気にした様子がない。
人間ができている。
それに比べて父さんは……
同じ貴族なのに……
ともあれレティシアちゃんとレイモンさんをともなって王都に出発した。

◆◇◆◇◆◇

さあ着きましたよ、王都に。
……
倒置法で言ったことに特に意味はない。
馬車の中で聞いたところによるとレティシアちゃんたちも王様から呼び出されたということ。
もしかして三大貴族をみんな召集しているのだろうか。
けどそれだと僕を呼ぶ意味が分かんないし……
まあレティシアちゃんも呼ばれたのなら悪い話じゃないだろう。
レティシアちゃんたちが僕らと無関係の可能性も否定できないけど……
それにしても王都（ここ）は人が多い。
前世でも都心とかある程度人が集まるところじゃないとこうも人はいなかっただろう。
この世界にこんなに人がいる場所があるとは正直思っていなかった。

この時代は見るからに中世ヨーロッパと同じく位の文化水準だ。
馬車とか走ってるし。
そのころのヨーロッパは病気や戦争などで人口はあまり多くなかったはずだ。
戦争は予言のせい（おかげ？）でないにしても病気の方はそうもいかないはずだ。
この世界には魔法があるけど魔法はあまり病気には効かない。
その理由は病気に対する認識の差だと思う。前世、地球では病気は病原菌、つまりは生物だと証明されている。
しかしこの世界では病気は体の異常として見られている。
病気を治す魔法を開発するにも治し方が間違っていては開発しても意味はないと思う。
僕も魔法についてはかなり学んだけど、病気に確実に効く魔法は数えるほどしか知らない。
つまりこの世界でも病気というのは死の対象ということだ。
中世ヨーロッパと同じように人口が病気によって減少しても不思議はないしむしろその方が自然だ。
けどこんなに人がいるってことは衛生管理やらがきちんとしているおかげだろう。
僕がそのことに感心していると目の前に大きな建物が現れた。
城、おそらく王城だ。
父さんとレイモンさんが衛兵たちに話しかけられている。
二人が身分を明かすと衛兵たちは慌てて門の方に駆けて行った。

一分もしないうちに門が開かれた。
中はこれ以上ないくらい豪華なものだった。
僕の家もかなり高級そうな家具ばかりあったがここの比ではない。
全ての家具が高級そうなオーラを放っている。
壊したらとても怒られそうだ。
……コワスキナンテアリマセンヨ？

メイドさんが数人やってきた。どうやら僕たちを案内してくれるようだ。
父さんとレイモンさんはまっすぐ進んで、僕とレティシアちゃんは別の道へ。
あれ？
なんで別の道？
メイドさんに聞いてみても
「主から何も言うなと言われておりますので」
の一点張り。
どういうことだろうか。
まさか人質とか呼ばれるものだろうか。
僕らをネタに父さんたちを脅したりするのだろうか？
……
逃げよう。
僕はそう思うとすぐにレティシアちゃんの手を取って走りだ……そうとしたらメイドさんが後ろに回り込んでいた。
「どうかなさいましたか？」
このメイドさん、できる。
「いやちょっとトイレに」
「女の子を連れてですか？」
しまった、これじゃあ僕は変態だ。
レティシアちゃんが僕を変なものを見る目で見ている。
「ちなみにトイレは前方の曲がり角を左に曲がるとございますので」
とりあえずトイレに戦略的撤退だ。
逃げるわけじゃない。

ほんとにトイレに行きたかったわけではないのでトイレに入って一分数えたら外に出る。
王城とは言ってもトイレをあそこまで豪華にする必要はないと思う。
便座が金だった。

あれじゃあ気が引けると思うんだけどな。
トイレから出ると外にはメイドさんがいた。
レティシアちゃんは？
「メイドさんだけ？」
「はい。レティシア様は行先を告げたら一人で先に行かれました。」
おいて行かれただって……
このメイドさんが実は暗殺者とかだったらどうするんだ。
もしもの時はレティシアちゃんに守ってもらうつもりだったのに。
男のプライド？
命あっての物種というじゃないか。
第一僕がやったら加減できないから殺しちゃうかもしれないし。
そんなことを考えているとメイドさんはスタスタと歩き始めた。
城の中に詳しくない僕はついていくしかない。
着いた先が牢屋とかだったらどうしよう。

そしてメイドさんが一つの扉の前で止まる。
扉だけ見れば普通の部屋、豪華だけど。
けど横にいるのは警備兵……
やっぱり閉じ込められるのだろうか。
僕が躊躇していると非常にもメイドさんがノックした。
コンコン。
「ソラ・ルビンシュテイン様をお連れしました。」
すると扉の中から
「やっと来たの。いいわ入れて」
返事が返ってきた。
なんか聞き覚えのある声だなあ。
メイドさんが扉を開く。

中にいたのはレティシアちゃんと見覚えのある金髪の男女、シルヴィアとリチャードだった。

第八話　脱出

「なんでここに二人が？」
「私たちが呼んだのだから当然でしょう」
つまり僕は王様ではなく、王子様と王女様に呼ばれていたわけだ。
けど理由がわからない。
王様にしろこの二人にしろ僕は呼び出されるようなことはしていない……はずだ。
「なんで僕を呼んだの？」
そういうとリチャードは当然とばかり言い放った。
「遊ぶために決まってるじゃないか」
と。
その発想が出なかったのは僕が悪いわけじゃない。
この世界に来て友達と遊ぶなんてことは起こりえなかった。
フレイヤは友達でなく親戚だ。
なぜならこの前まで友達がいなかったからだ……
あまり大きな声では言いたくないけど。
つまり僕があんな発想――罰されるとか――しか思い浮かばなかったのはしょうがないことなのだ。
こんなに長々と語って何が言いたいかというと僕は馬鹿じゃないということだ。
「むしろそれ以外何があるの？」
シルヴィアが追い打ちをかけてくる。
「いや、それはいろいろと……」
「たとえば？」
沈黙は金という言葉がある。
まさにこのような状況で使うべき言葉ではないのだろうか。
……
……

気まずい、この上なく気まずい。
ここは話題の転換を図るべきかもしれない。
「そ、そういえばなんで僕たちを遊び相手として呼んだの？もっと他に人がいそうだけど」
別に僕たちである必要はないはずだ。
王族というならそういう専門の人――いるかどうかは知らないけど――をいくらでも呼び出せるはずだし。
「あいつら堅苦しくていけねえんだよ」
「そうよ、ここの城の人たちにしてもみんな堅苦しいのよ」
身もふたもない話だ。
「それは王族だから仕方がないと思うけど……」
「リチャード、お願い」
「私はアマルティア王国第一王子リチャード・アマルティアと申します。以後お見知りおきを」
急にリチャードがかしこまって話し出した。
いったいどうしたというのだろう。
「家族以外には皆この調子で話さないといけないんだぜ。気が狂っちまうよ」
どうやらこちらの口調が素でさっきの口調がいつもの口調らしい。
「そんな時に見つけたのよ。同い年でかつ私たちに敬語を使わない人を」
それは僕らが粗暴だと罵っているのだろうか。
僕がそんな視線をシルヴィアに送る。
「けなしているわけじゃないのよ。むしろほめているのよ。私たちが敬語を使わなくてもいいって言って本当に使わない人は今までいなかったのだから」
やっぱりけなしているのではないだろうか。
「とにかくこんな不愉快な話は終了よ」
やっぱり不愉快な話らしい。
そりゃそうだとは思うけど。

僕にわかりやすい感じで言うと学校で優等生を演じているようなものだろう。
あれって疲れるんだよな。
「あの……何をするんですか？」
今まで黙っていたレティシアちゃんが口を開く。
それを聞きリチャードが待ってましたとばかりに言った。
「今日は城下町に出ようと思う」
「聞いてないわよ」
「怒られないんですか」
「面白そうだね」
上から順にシルヴィア、レティシアちゃん、僕だ。
なんで面白そうかって？
だって僕はまだこの世界の町というものに行ったことがないんだもん。
それに多分、認めたくないけど僕には常識がない。
政治のことに関して言えばシルヴィアやレティシアちゃんのことを知らなかったし、
身の回りのことで言えば僕はこの世界の食べ物は調理済みのものしか見たことがない。
僕は家にいると外の情報を知ることができないし、料理場とかそういう作業する部屋には入れてもらえないからそういうことも全く知れない。
極端な話僕はこの世界についてもっと知りたいのだ。
最初は魔法が珍しくて魔法ばかりに気が向いていたがもうそろそろ他のことも知りたいのだ。
別にルビンシュテイン家の魔法の訓練が厳しいとかそういうことじゃない。
ホントダヨ。
「ここは公平に多数決で行こうぜ」
リチャードが提案する。

「いいわ」
「わかりました」
「いいよ」
誰にも異存はないようだ。
「じゃあ城下町探索に賛成な人」
今ここにいる人数は４人つまり３人分の手が挙がっていればいいわけだ。
対面にいるレティシアちゃんをみるとあの反応通り挙げていない。
え～と、挙がっている手は
一、二、三、四本だ。
……
四本？
おかしい。
レティシアちゃんは手を挙げていないのだから多くても手は三本のはずだ。
誰が手を挙げているか見てみる。
まず僕が一本手を挙げている。
次にシルヴィアが一本、
そしてリチャードが……
二本あげている。
……
「リチャード、なんで二本挙げてるの？」
「いや、あのままだと二対二で引き分けになると思ったからな。どうすればいいかと考えた末、ひらめいたのさ。俺が二つ挙げればいいと」
どうしよう。
意外とリチャードは残念な子のようだ。
しかもリチャードがそんなことしなくても普通に勝ってたし。
……
「じゃあ三体一で城下町に行……」

「ソラ、四対一だぞ」
……
黙っててくれないかなあ。
「四対一で城下町に行……」
「反則です、やり直しましょう。」
レティシアちゃーん。
……
僕にはどうしようもないようだ。
「リチャード、二本挙げても一票は一票よ、それにレティシアももう一回やっても結果は同じよ」
シルヴィアが助け舟を出してくれた。
「ありがとうシルヴィア。惚れちゃいそうだよ」
「それはありがとう。それでどうやって城下町に行くつもり？」
軽く流された。
……僕がスルーされるのは前世からの呪いか何かだろうか。
「もちろん普通に行くぞ」
「馬鹿ね。まあいいわ、試しにそのことを衛兵に伝えてみなさい」
リチャードが扉を開けて衛兵に聞きに行く。
あ、帰ってきた。
「護衛を大勢つけないとダメだとよ」
「ちなみにどのくらい？」
僕がリチャードに聞く。
せいぜい二、三人だろう。
「最低でも一個中隊はつけるそうだ」
……
過保護すぎると思う。
それとも王族ならこれくらいが普通なのだろうか
「うん、まあそれもしょうがないんじゃない、王族だし」
僕が納得したように言う。
「ダメだな」

「却下よ」
口をそろえて反対された。
いったい何故だろう。
「護衛をぞろぞろと引き連れて行ったら王族ってことがばれるじゃない」
「ダメなの？」
「ダメに決まってるじゃない。王族ってばれたら私たちはお行儀よくしないといけなくなるじゃない」
どうやら極力自由に動きたいようだ。
ふるまい方とかも込みで。
「じゃあ僕たちだけで行っていいか聞いてみたら？」
あれ？
シルヴィアだけでなくレティシアちゃんまで僕を馬鹿を見るような目で見ている。
「リチャード、ちょっと聞いてきて」
「おう、任せろ」
リチャードがまた衛兵に聞きに行く。
ん？
なんか衛兵たちが怒り始めたぞ。
もちろん怒られる対象はリチャード。
「こういうことよ。仮にも一国の王子や王女が護衛なしで出歩くなんてありえないのよ」
「ふ～ん。ところでシルヴィアはリチャードの扱いがひどいね」
「何を言っているの？わたしはちゃんとリチャードお兄様に敬意を表しているわよ」
……
こんなに平然と嘘をつけるシルヴィアはすごいと思う。
……様をつけたからと言って敬意を表してるわけじゃないんだなあ。
「これなら城下町へ行くのはなしですね」
レティシアちゃんがほっとしたように言う。

そんなに行きたくないのだろうか、面白そうなのに。
「まさか。抜け出すに決まってるだろう」
いつの間にかリチャードが帰ってきていた。
「もう終わったの？」
「ああ、なんとかな」
リチャードにはたんこぶができていた。
「抜け出すって具体的にはどうするの？」
「そんなの簡単じゃないか」
皆を馬鹿にしたようにリチャードは言う。
「まず部屋から出る。そして走って逃げる」
やっぱりリチャードは残念な子のようだ。
ちらっとシルヴィアとレティシアちゃんの方を見ると僕と同じように馬鹿を見る目で見ている。
さすがにリチャードも視線に気づいたようだ。
「なんだよその目は。けど他に案なんてないだろう」
言われてみればその通りだ。
ならこういうのはどうだろう。
「じゃあ今日はとりあえずその案でやってみて失敗するたびに改善していったらどう？」
我ながらなんて賢い提案。
「いいわね、私は賛成よ」
シルヴィアは快諾。
「わ、私は……」
レティシアちゃんはそもそもやりたくないのだからあまり乗り気ではない。
「おいソラ。いいとこどりすんなよな」
リチャードは不満を漏らしている。
「賛成なの？反対なの？」
僕が聞く。
「いやそれはまあ賛成だけど……」

「じゃあ決定で」
「時間も残ってなさそうだし早くしましょう。」
シルヴィアが急かしてくる。
「よし、行くぞ」
リチャードを先頭に扉に近づき、
「合図したら一斉に出よう」

「三」

「二」

「一」

「行くぞ」

僕らは一斉に飛び出した。
ここで僕らの運動能力について振り返ってみよう。
まず、一番できると思われるのがレティシアちゃんだ。
なんたって幼いころから騎士になるための訓練を受けている。
この年齢だし男女でたいした差も出ないだろう。
次はリチャードだ。
言うまでもなくああいう性格だし運動はできるだろう。
シルヴィアもリチャードと変わらないくらいできるだろう。
なんだかんだで二人は一緒に行動することが多いみたいだし。
そして誰が一番できないかって？
それは間違いなく僕だろう。
毎日家に引きこもって魔法ばっかりしている。
お箸より重いものが持てないわけじゃないけど本より重いものは自

信がない。
情けない限りだ。
まあ逃げ出すってことは衛兵に追いかけられるってことで……
追いかけられた場合最初に捕まるのは当然足が一番遅いやつなわけで……
「リチャード、おいていかないでよ」
僕はリチャードに言う。
「悪い、あきらめてくれ」
しかしリチャードは無情にも一言で切り捨てる。
そんな殺生な。
あっけなく捕まる僕、リチャードたちの部屋に連れ戻される。
それから数分後みんな連れ戻された。
いやまあ所詮九歳児の体だからね。
鍛えられた衛兵たちにかなうはずがないのは自明の理なわけで。

衛兵たちがどこかに連絡している。
あれは間違いなく父さんたちのところだろう。
数分後、僕の予想は違うことなくあたりそれから数十分の間怒られた。
この世界では最長記録かもしれない。
ちなみに前世では昼間から日が暮れるまで怒られたことがある。

第九話　計画的犯行

初めて脱出劇からどれくらいの月日が経っただろうか……
もう実に二年近くの時間が経った。
いまだに脱出は成功していない。
しかし、今日こそは行けるはずだ。

今までの教訓を生かし様々な対策をした。
最初はやはり九歳児では大人に勝てないのではないか、その問題を解決するために僕がみんなに身体強化の魔法をかけた。
しかも知っている限り最上級のやつだ。
それだけではもちろん問題は解決しなかった。
扉の前にいる衛兵たちと追いかけっこをできるようにはなった。
けど、逃げれば逃げるほど追っては増えついには回り込まれるようになった。
どうしようかと考えた末、衛兵たちの目が完全に僕らから離れた瞬間に隠蔽の魔法をかけるようにした。扉を出る時からかけないのはいくらなんでも扉があくのは誤魔化せないからだ。
それでついに成功するかと思われたがリチャードの間抜けなくしゃみにより隠蔽の魔法を使っているのがばれ、警備に魔術師まで配置されるようになった。
それに対抗して僕は土属性の魔法で僕たちの分身を作った。
このころからだろうか、衛兵たちの動きに規則性が現れ始めたのは。
おそらく本格的に警戒し始めたんだろう。
リチャードとシルヴィアに聞いても僕らが来る日は警備がいつもと違うと言っていた。
この日から一時の間、僕らは警備の穴を探すためにバラバラになって逃げるようにした。
一度レティシアは脱出に成功したらしいが僕らに遠慮して戻ってき

たらしい。
僕らがいかに足手まといかが分かった。
なおレティシアは最初は乗り気でなかったが元来負けず嫌いなのか一年後にはノリノリになっていた。
ついに二週間前、僕らが集まれるのは週に一回集まれるかどうかだ、ついに警備の穴を見つけた。
先週はこの穴を確実につくために入念な作戦会議をした。

そして今日、その計画を実行する日が来た。
計画は極めて単純だ。
衛兵たちの作戦では僕たちの逃走ルートを限定していって、最終的に挟み撃ちにするのが目標だ。
そしてそれは扉から右に出ようが左に出ようが前に出ようが必ずどこかで挟み撃ちにあうようになっている
。一度それぞれが別のルートに行った際はみんな十人ずつくらいの衛兵やメイドさんに連行されてきた。
見張りが増員されているのも間違いないだろう。
この計画の穴とは、三方向に――分身を含めて――逃げた場合、逃げるスピードによっては最初の部屋から王城までの最短ルートがから空きになる瞬間があるということだ。

僕らの作戦はこうだ。
まず土人形計１２体を三方向に逃走させる。もちろん詳細に動くスピードやルートを決定してからだ。
これには魔力をかなり使った。普通の人２０人分くらいは軽く使っただろう。
その間僕の隠蔽の魔法で僕らが部屋に残っていないように見せかける。
衛兵たちが丹念に部屋を調べた後彼らの計画通りの位置に動くのは分かっているのでそれを待つ。

衛兵たちが出ていったら、所定の場所に移動し再び隠蔽の魔法で身を隠し時間を待つ。
時間は僕特製の砂時計で計っているため狂いはないはずだ。
そして時間になったら一気に城門へ駆け出す。
人ごみに紛れればこちらのものだ。
という作戦だ。
失敗したらあちらの計画の穴が埋められてしまうので失敗は許されない。

「リチャード、シルヴィア、レティシア、準備はいい？」
「大丈夫だ」
「いいわよ」
「大丈夫です」
その言葉を合図に用意していた魔法陣に魔力を込める。
いつからか魔力の動きを感知する魔法まで使われていたようで一回身体強化を使った瞬間捕えられたこともあった。
それに対する対策だ。
魔法は一斉に発動する。土人形たちはインプットしていた通りにそれぞれの方向に逃げていく。
僕らには隠蔽魔法がかかる、それに加え今回は幻影の魔法までかけた。
隠れる場所は机の下普通に隠れれば遮るものがないためすぐに見つかってしまう。
それ故に衛兵たちも一回見ただけで素通りする。
そこも調査済みだ。

衛兵たちが出て行った。
所定の場所に急ぐ。
着いたらすかさず隠蔽の魔法をかけなおす。
隠蔽の魔法は激しい動きをすると解けてしまうのが玉にきずだ。

さあここからが正念場だ。
僕は魔法で砂時計を作り出す。
あとはこの砂時計が完全に砂を落としきったら最後の移動だ。
三
二
一
「いまだ」
僕たちは走りだす。
城門までは残り二百メートルというところ曲がり角はあと三つ、ずいぶんと複雑な構造だがこの城を二年近く走り回って――正確には逃げ回って――いる僕らには庭に等しい。
よし、あと二つ曲がり角を曲がれば城門まで一直線だ。
曲がり角の先に人の気配がする。
これは完全に計画を立てた僕のミスだ。
どうする。
どうする。
……
はあしょうがない、僕のミスだし僕が囮になるか。
魔法を使える僕が誰かに正面から見つかっても一番逃げ延びれる可能性が高いし。
「三人とも先に行って、ここは僕が囮になるから」
三人とも僕の意図を理解してくれたのかうなずいてくれる。
この二年間で三人とはアイコンタクトで軽い意思疎通が可能になるくらい仲良くなった。
レティシアを呼び捨てにするようにもなった。
その成果が発揮されたといえる。
曲がり角を曲がる、やっぱり人がいた。
服装はやけに豪華な服で衛兵ではなさそうだ。
これならいける。

三人は先に行った。
僕も続かなければそう思って僕が今まで使っていた身体強化の魔法のもう一段階高い魔法を創り出そうとする。
すると豪華なおじさんが聞いてくる。
「君がソラ君かね？」
とても驚いた。僕を君付けするような人はこの城ではレイモンさんしか見たことがない。
父さんは呼び捨てだ。
僕は予想外の問いかけに戸惑ってしまう。
「そうか、時間がないのだったね。では言いたいことだけ言わせてもらうとしよう」
言いたいこと？
いったいなんだ？
「君のおかげで息子たちはとても充実した生活を送れているようだ。ありがとう」
律儀に頭を下げてきた。
「レイモンも感謝していたよ」
レイモン？
レイモンさんを呼び捨てにしている？
そんなことができるのはそれこそ父さん以外にはこの城には一人しか……
「ほら急いでいるのだろう、後ろに追手が迫っているよ」
はっと我に返り後ろを見ると本当に追手が迫っていた。
今までの二年間で培った反射的な運動で――追われたら逃げるというものだ――僕は豪華な人のことを忘れ走り出した。

走っている最中に身体強化の魔法をさらに強化したのでなんとか城門まで逃げることができた。
城門では律儀に三人とも待っていてくれた。

「遅かったな」
「ごめん。ちょっと変なおじさんに会ってね」
「変なおじさん？」
「うん。まあそれより城門をふさぐからちょっと待ってて」
これは作戦として組み込んでいたものではないが、時間があったらやろうと思っていたものだ。
ふさぐといっても薄い土の壁でふさぐだけでただの目くらましにしかならない。
効果も十秒かそこらだろう。
けど十秒もあれば人ごみに紛れるには十分だ。

それからも十分くらいの間は走り続けた。

そして追手を完全にまいたと思ったところで一息ついた。
「やったぞ、ついに脱出してやったぞ」
「そうね、大快挙よ」
「やりましたね」
みんな口々に喜びの言葉を口にする。
僕らはついに城下町に出ることに成功した。

第十話　城下町

「街に出て何するの？」
城下町に出るために様々な策を弄しついに出ることに成功した。
それはいいんだけど街に出てから何をやるかはまるで決めてない。
「もちろん探検だろう」
「いえ、買い物でしょう」
「私はもう別に……」
上から順にリチャード、シルヴィア、レティシアだ。
それにしてもリチャードは知らないところに来たらまず探検するのだろうか？
僕の家でもしてたし。
「探検と買い物は同時にできるからいいんじゃない。レティシアちゃんは特に何もないの？」
「はい。私は城から出れればそれで……」
レティシアは城から出ることを目的にしてた節があるからな。
出た後のことなんて考えていなかったんだろう。
「よし、探検とついでに買い物に行くか」
「違うわ。探検がついでよ」
そこはどうでもいいと思う。
「ところでシルヴィア、買い物したいようだけどお金持ってるの？」
王族だからと言ってお金を払わなくていいわけではない。
「もちろんよ」
そういってシルヴィアは白金貨を数枚取り出した。
ここでこの世界の貨幣の価値について振り返ろうと思う。
と言っても単純だ。銅貨百枚で銀貨一枚、銀貨百枚で金貨一枚、金貨百枚で白金貨一枚ということだ。
平均的な平民の稼ぎは大体一月あたり銀貨十数枚、一年で約金貨二枚だ。

つまり今僕たちは平民の年収の百倍近い額を持っているということだ。
こんなものをそこらの店で使えばどうなるか。
お釣りがないくらいならまだいい。間違いなくパニックになるだろう。
白金貨を当然のように使えるのは名のある貴族や大富豪、それに王族位のものだろう。
「ちょっ、シルヴィア、なんでそんなに持って来てるの？」
「買い物してる最中にお金が無くなったりしたら大変じゃない。だから貯めてた分全部持ってきたのよ」
白金貨を数枚も使う買い物……
いったい何を買うつもりだったのだろうか。
家でも買いたかったのだろうか。
それにしてもこれは困った。
これじゃあ買い物なんてした瞬間に衛兵が飛んでくるだろう。
「シルヴィア、買い物はあきらめない？白金貨で買い物したらすぐに捕まっちゃうよ」
「いやよ。次に出られる保証もないのだから」
それは確かに一理ある。
一回逃走するのに二年かかった。
次は慣れてきたことを考えても一年はかかるだろう。
「白金貨がだめならこれならどうだ？」
リチャードが手を差し出してくる。
そこには銀貨三枚のっていた。
「それなら大丈夫だと思うけど」
銀貨なら多少裕福な家庭ならお小遣いとして渡していてもおかしくない。
多少無理があるけどまあ大丈夫だろう。
「なんでシルヴィアとリチャードは持ってる額が違うの？」
ここで僕は疑問を口にした。

二人とも王族のはずだ。双子だし。
それなのに所持金に差がありすぎる。
「それは簡単なことよ。私がこの作戦が決まってからずっとお金を貯めてきたからよ」
そういうことらしい。
それにしても二年で白金貨数枚溜まるのか……
どれだけもらってるのやら。
「リチャードはなんでそんなに少ないの？」
二年で白金貨数枚なら一月あたり金貨数十枚はもらってるはず。
何をしたらそんなに減るんだろう。
「それはシルヴィアの分までいろいろ払わされて……」
シルヴィアは自分のお金が使いたくないからリチャードに買わせていたようだ。
……
「あら、人聞きの悪いことを言わないでくれない。可愛い妹のためにって買ってくれたのはリチャードお兄様じゃない」
「それはお前が可愛い妹のためにって頼むから……」
リチャードはきっとシルヴィアに言い負かされるだろう。
見ているのも面白そうだけどここら辺で助け舟を出しといたほうがいいだろう。
「それでリチャード、その銀貨は使っていいの？」
「おうもちろんだぜ」
さすが王族気前がいい。
「じゃあこの銀貨をどうやってわけるかだけど……」
まずリチャードは持ってきたんだし一枚でしょ、シルヴィアも買い物を楽しみにしてるみたいだし一枚、レティシアもなんだかんだで女の子だし買い物は好きだろう、だから一枚、と……
僕の分はまあ……いらないかな。
僕は街が見てみたいだけだし。
「僕以外が一枚ずつでいい？」

僕が提案する。
「私たちはそれで構わないのだけどあなたはそれでいいの？」
シルヴィアが聞いてくる。
レティシアも申し訳なさそうな視線をしている。
しょうがないから僕がもう一枚銀貨を持っているように見せかける。
「ほら、僕は自分で一枚持ってるから」
「それなら最初から言ってください」
「本当ね。性格が悪いわ」
二人とも納得してくれた。
リチャードは僕にいた図が成功したような顔で笑いかけてくる。
こいつには見破られてるかもしれない。
何も言ってこないということは文句はないらしい。
「じゃあ行こうか」
こうして僕らは街の探検（買い物）を開始した。

「ねえ、あれは何かしら」
そういってシルヴィアが指差したのはリンゴみたいなもの――色は紫だ――おそらく果物だ。
常識のない僕が果物と分かるのはあれが切られたと思われるものを食べたことがあるからだ。
「あれは確か……」
「あれはチェリモヤです」
レティシアが言う。
レティシアを見てみると今にもかぶりつきそうな勢いで見ている。
「好きなの？」
「はい。大好物です」

ただの好物ではなく大好物らしい。
「買ってきたら？」
「そうしたいんですけど、どうやって買うのかが分からなくて……」
でましたブルジョワ発言、経済格差ここに極まり、って感じだね。
「これください、って言って代金言われると思うからその分払ったらいいと思うよ。足りないことはないだろうし」
そういうとレティシアはそのお店に走って行った。
おおっ、買ってる買ってる。
レティシアはチェリモヤを四個買って戻ってきた。
「どうぞ」
どうやら僕たちにくれるようだ。
口々に感謝を述べてレティシアからチェリモヤを受け取る。
受け取った順にチェリモヤを食べ始める。
ん？
シルヴィアが手に持ったまま食べていない。
どうしたのだろう。
「食べないの？」
「どうやって食べたらいいかわからなくて……」
リチャードやレティシア、僕はかぶりついているがシルヴィアにはその発想がないらしい。
さすがお姫様だ。お上品な方法しか思いつかないのだろう。
僕たちがかぶりついてるのを見てもそうしないってことはかぶりつく気はないのだろう。
僕はチェリモヤを魔法で食べやすい大きさに切った。
「これでどう？」
「ありがとう」
笑いながらそう言われた。やっぱり女の子、しかも美少女が笑うと可愛い。眼福だ。
みんな幸せそうで何よりだ。
食べ物で得る幸せなんて安いものかもしれないけど、安くても幸せ

は幸せだ。
それからも買い物は続いた。
僕はお金がないから何もしなくていい？
それは甘い考えだった。
何もやっていない男が女性の買い物に付き合っている。
荷物持ちにされるのは当然の流れなのかもしれない。
リチャードはどこから買ってきたかは知らないが焼き鳥（？）の串を常時持っていたため荷物持ちを免れていた。
女性の買い物はどこの世界でも長引くものなのだろう。
今も彼女らは服やアクセサリーを選んでいる。
どう考えても彼女らが今着ているものや家にあるものの方が良いものであることは疑いようもないだろう。
けど多分自分で選んだものを着るのが楽しいのであろう。
そう思い、近くにあったベンチに腰を掛ける。
するとリチャードが焼き鳥の串を僕に数本よこした。
「食えよ。どうせ金なんてないんだろう」
「気づいてた？」
「まあな。持ってるなら最初から出しているはずだしな」
この二年で少しは賢くなったようだ。
「ありがとね」
僕は焼き鳥串に対するお礼を言った。
「礼を言われるようなことはしてないぞ。お前はこの計画を成功させてくれたからな。その礼だ」
だそうだ。
「じゃあそういうことにしておくよ」
そうこう話してるうちに二人が返ってきた。
「リチャード、あなたはソラにしかそれをくれないのかしら」
「私もほしいです」
リチャードの持っていた焼き鳥串は瞬く間に奪い去られていった。
「ソラ……」

「わかってるよ」
そういって僕は焼き鳥串を一本リチャードに渡す。
そのあとも買い物は続いた。
いままでとどこが変わったって？
リチャードが買う食べ物がことごとく女子二人にとられるようになったり、奢らされるようになっていた。
僕には特にそんなことはなかった。二年間で築き上げた立ち位置みたいなもののおかげだろう。
荷物持ちはさせられたけど……

日が暮れてきた。
「もうそろそろ帰らない？」
さすがに暗くなる前に帰らないとまずいだろう。
どんなふうに拙いかというと怒られ方がひどくなるだろう。
「そうね、もうやりたいことはやったし」
それはお金が残っていないの間違いではないかと思う。
もう全員の所持金を集めても銅貨数枚だろう。
まあ正確には白金貨が数枚あるわけだけど。
「それにしてもうまい具合に見つからなかったな」
リチャードが言う。
「そうですね。衛兵さんも見かけませんでしたし」
レティシアも言う。
見つかるはずがないと思う。
なぜなら僕がかなりの魔法を使っていたからだ。
まず隠蔽の魔法は勿論として僕らの声が漏れないように防音の魔法、衛兵に出会ったことに気づかないように三人には幻覚の魔法までかけておいた。
実際は二、三度衛兵たちに遭遇したが、無事やり過ごすことができ

た。
買い物するときは魔法をいちいち解いていたのでとても疲れた。
けどそのおかげで三人は心置きなく楽しめたみたいなので良しとしよう。
僕たちは王城に向かう。
それはちょうど王城が見え始めたときだった。
「見つけた」
後ろからそんな声がした。
見つかっても連れ戻されるならもう隠れる必要はないと思って魔法はすべて解いていた。
だから見つかったことは別段不思議ではない。
最初から謝った方が怒られ方がやわぐかもしれない。
そう思い謝りながら振り返った。
「ごめんなさ……」
後ろにいたのはとても城仕えの衛兵や騎士、魔術師ではなかった。
まるで盗賊のような……
そこまで考えたところで僕の意識は途絶えた。

第十一話　盗賊

ここはどこだ。
目の前に広がるのは薄暗い天井。
僕はいったい何をしていた。
思い出せ。
……
……
そうだ、リチャードたちとやっと城を抜け出して買い物して帰ろうとして見つかって……
誰に見つかった？
その答えはすぐに頭上からもたらされた。
「やっと起きたか」
そういって声の主は僕を無理やり座らせる。
抵抗しようにもできなかった。
僕の身体を見るとロープで拘束されていた。
僕を座らせたのは男はどう取り繕ってもごろつきにしか見えなかった。
「さあ全員起きたところで言っておこう。お前たちは人質だ」
……
どうやら僕たちは誘拐されたらしい。
人質ということは身代金でも要求するつもりだろうか。
男は話を続ける。
「お前たちは大事な人質だからな、危害を加えないことは約束しよう。尤もお前らが逃走なんて馬鹿な真似を測ったりしなければの話だが」
要するに逃走しようとしたらひどい目に合わせるぞ、ってことだろう。
「まあその格好で俺たち二十数人から逃げられればたいしたものだ

がな」
目を凝らしてみるとこの男の向こう側に何人もの同じような奴らがいるのが見える。
こいつらは盗賊団か何かかもしれない。
なら手練れとみるべきだろう。
そんな奴らが本当に身代金だけで満足するのか。
「本当に僕たちを解放する気はあるの？」
僕は聞いた。
僕がこいつらなら……
「坊主、賢いな。その通りだ。解放する気はさらさらない」
となると……
「お前らは身代金を受け取り次第そこらの奴隷商にでも売り飛ばす予定だ」
やっぱりか。
僕が彼らの考えがわかったのは偶然だ。
彼らと同じ穴のムジナというわけではない。
「そうだな、そこの銀髪と金髪のガキ、お前らは愛玩奴隷と労働奴隷どっちがいい？お前らにはたんまり稼がせてもらうからな。その位選ばせてやる」
下品に笑い声をあげながら男はそう言った。
「こいつらはどうなるんだ」
リチャードが聞く。
「そいつらは勿論愛玩奴隷だろう。選択の余地はないな」
レティシアは泣き出してしまっている。
シルヴィアも目じりには涙がたまっている。
こんなことになってしまっては当然だろう。
二人には悪いがこれは好都合だ。
このまま泣き出してくれれば泣き声が漏れて僕たちの監禁場所がここだとすぐにわかるだろう。
「泣いてもいいが無駄だぞ。この部屋には防音の魔法がかかってい

るからな」
僕の考えを読んだかのように男が言ってくる。
ここはおとなしく待っておくしかないようだ。
それに最悪僕が魔法を使えばいい。
魔法を使っても二十数人を倒すのは難しいだろう。
けど三人が逃げる時間くらいは稼げるはず。

そのまま時間は過ぎていくが助けは来ない。

部屋に男が一人入ってきた。
どうやら交渉してきたようだ。
先ほど僕たちに話しかけてきたリーダー格と思われる男に報告している。
「お頭、交渉は成功しやした。あっちはこっちの要求を呑むそうです」
「金の受け渡し方法もこちらの指定した方法か？」
リーダー格の男が聞く、
「もちろんでさあ、受け渡し時刻は明日の明朝だそうです」
「そのくらいの条件は？んでもいいだろう」
交渉は無事成立したようだ。
今は夜、受け渡し時間は明朝と言っていたな。
すぐにでも取引しないのは時間までに僕らを救出するからだろう。
おそらく今の交渉役の男の痕跡なりなんなりを辿ってこの場所にも見当がつけられるはず。
なら安心しても大丈夫だろう。
僕もいくつか保険をかけておいたけど余計なお世話だったようだ。
僕が安心したのも束の間の間、身代金の山分けやらで盛り上がっていた男たちが言い出す。
「お頭、このガキどもは奴隷商に売り飛ばすんですよね？」
「ああそのつもりだが。」

「多少傷物にしても問題ありませんか？」
そう聞いた下っ端の一人が下品な笑い声を漏らす。
こいつらなんてことを考えやがる。僕たちはまだ十一歳だぞ。
「ダメだな。売値が下がる」
お頭ナイス、敵ながらあっぱれだよ。
「いいじゃないですか、どうせ売値なんて身代金に比べれば少ないですし」
「しかしだな……」
お頭が押されている。
このまま押し切られるとレティシアとシルヴィアが大変なことになる。
そんな考えを裏切り他の男たちからも声が出る。
「いいじゃないですか、お頭」
「多少少なくなるくらいなら我慢しますんで」
「じゃあ男の方だけでも」
口々にお頭に言う。
これはまずい。
一人が言うだけなら間違いなく不発に終わっていただろう。
しかし今はほとんど全員が言っている。
これは組織のボスとしてはほぼ全員が言っているのであれば無茶なものではない限り要求をのまざるを得ない。
ストライキのようなものだ。
まずい、お頭が許可を出す前に助けが来ないとレティシアとシルヴィアだけでなくさっきの発言を聞く限りだと僕とリチャードの貞操まで危ない。
「わかった、いいだろう。ただし一時飯のグレードを下げるくらいは我慢しろよ」
お頭ーーーーーー
まずいまずいまずい
ここはもう……

そう思っていると
「俺が一番だ」
「いや俺が」
順番を争っている。
うわっ、殴り合いをはじめやがった。
「やめんか」
響くお頭の怒声、
「そんなにもめるならナシにするぞ」
さすがの貫録。
けど僕としてはこのまま仲間割れしてくれた方がうれしかった。
お頭に怒鳴られると男たちは円形になっていく。
何を始めるかと思えばジャンケンだ。
そんな人数でやっても決着がつくわけないのに。
それより男たちが騒いでる今がチャンスだ。
今ならリチャードと会話できるだろう。
「リチャード、どうする？」
「お前の魔法でロープを切って逃げたいところだが……」
リチャードが視線をちらっとレティシアとシルヴィアの方に向ける。
二人とも逃げれる雰囲気ではない。
「助けを待つ？」
「あいつらがあんなことしてる間はとりあえずそうしようと思う。」
「あれが終わったら？」
あれとは間抜けなジャンケン大会のことだ。
「ダメもとで抜け出してみようと思うが頼めるか？」
「任せてよ」
ぼくは力強くうなずく。
これだとさっきまで用意してた魔法とは別のものを用意した方がいいな。
僕は新たに複数の魔法を待機させる。
待機させてるのは身体強化や「風の玉（ウインドボール）」だ。

属性魔法の初級より上を使うと魔力を込め過ぎて僕らまで吹き飛ぶかもしれないからだ。
刻一刻と男たちのジャンケン大会の脱落者が増えていく。
助けはまだなのか。
ついに勝者が決まった。
と思ったら今度は勝ったやつ順にから僕たち四人の中から選んでいく。
ついに決まったようだ。
選びたいように選んだはずなのになぜか僕の列は他の女子と同じくらい長い。
僕は女顔じゃない……はずだけどな。
しょうがないこうなったら……
僕たち――僕とリチャード――の瞳が輝きを失っていないことが気に食わないのかこんなことを言ってくる。
「助けは来ないぞ、交渉に行った奴は隠蔽の魔法の達人だからな。痕跡を見つけるなんてよほど熟練した魔術師じゃないと不可能だからな」
他の男が言う。
「そこの銀髪の坊主がさっきから魔法陣を待機させてるのは知ってる、使ってみたらどうだ」
レティシアとシルヴィアは目を輝かせ、リチャードは勝利を確信している。
こいつ、僕が子供だからと言ってなめてるのか。
ばれてるなら隠しても仕方がない。
僕は「風の玉（ウィンドボール）」を発動させる。
その数実に二十以上、風の砲弾が盗賊たちを打ち抜く……はずだった。
「魔法が発動しない……？」
思わず口から漏れてしまった。
いったいどういうことだ。

「そんなに待機させてたのか、ガキのくせにやるじゃないか。だがこの部屋には魔法を封じる魔法がかかってる、無駄なあがきだったな」
まずいまずいまずい、これじゃあ本当に万事休すじゃないか。
「うわ、うわあああああ」
盗賊たちは僕の叫び声を聞き下品な声で笑う。
パニックになって他にも待機させてる魔法を発動させようとしている。
盗賊たちにはそう見えるはずだ。
その間に僕はオリジナルの魔力障壁を作り出すために魔法陣を創る。
お頭が気づく。
「そのガキ、まだ何かしようとしてるぞ。」
もう遅い。
僕の創り出した魔法が発動する。
僕たち四人を囲むように魔力障壁が展開される。
「くそっ、なんで魔法が発動した。」
盗賊たちは戸惑っている。
理由は簡単だ。
僕が創り出したこの魔法は僕の魔力が尽きるまであらゆるもの、魔法でさえもを無効化する。
正確には受けたものを跳ね返せるだけの魔力を僕から吸い取っていく。
今もこの障壁は魔法を妨害する魔法を無効化するために僕から魔力を吸っている。
もうすぐ許容量を超え魔法を妨害する魔法は壊れるだろう。
そう思い待っていると魔力の減少が急激に少なくなった。今は盗賊の攻撃だけを無効化しているのだろう。
少し余裕ができたので順々に僕たちのロープを切る。
「やったな、ソラ」
「助かったの？」

レティシアはいまだに泣いている。
「ひとまずはね」
僕は答える。
ここで無責任に希望だけを言うのは拙いだろう。
寝ていた、正確には気絶させられていたおかげでさっきまで魔力は満タンだった。
僕の魔力は常人よりはるかに多い。
とはいえ無限ではない。
この程度の攻撃でも続けられれば一時間もつかどうか……
「この障壁は持っても一時間しかない。助けを待つか逃げ出すか決めないと」
「この壁ぶち抜けば逃げ出せるんじゃないか？」
この馬鹿大声で言うな。
「五、六人は裏から回り込んでおけ。」
お頭の号令。
「他の案は？」
「もうそろそろ助けが来ると思うのだけれど？」
「さっきそこの中が言ってたように追跡は難しいらしい、父さんがいるからできないことはないはずだけど」
リチャードもシルヴィアもうつむいてしまう。
くっ、自分で聞いておきながら自分でダメ出しとは……
逃げる……のは数の差的に難しい。
助けを待つ……のはいい案ではあるが助けが来なかったら終わる。
……
打開策はない……ことはないけど。
ルビンシュテインの秘密がばれるかもしれない。
ただでさえこの障壁を創りだしたというのに。
それにこの障壁は半端じゃなく燃費が悪い。
盗賊がナイフのようなもので突き刺すだけでも下級魔法レベルの魔力を持っていかれる。

魔力は残り四割程度……
仕掛けるならもうそろそろ仕掛けないとまずいだろう。
まあ友達を守るためなら父さんも許してくれるだろう。
絶対ばれるとも限らないし。
そう開き直るとこの状況を打開すべく僕は魔法陣を創りはじめた。
父さんがいつかのパーティーで使っていたような氷の枷。
あんな感じで制圧できるのが理想だ。
けどこの人数じゃ厳しい。
拘束よりも行動不能の方が簡単だろう。
なら雷かな。
人が間違うなく気絶するレベルの雷を半径十メートル以内の生物へ。
こんなところかな。
そういう効果の魔法を創りだす。

出来た。

すぐさま発動する。
すると雷は僕らを含めた生物すべてに襲いかかる。
もちろん壁の向こうも例外ではない。
もちろん僕らへの雷は障壁が防いでくれる。
これで終わっただろう。そういう魔法を創ったのだから。
「おわったよ」
「そうか」
リチャードが座り込む。
シルヴィアは泣き出してしまった。
緊張の糸が切れたのだろう。
それから十分後、救助隊が駆け付けた。
これなら無茶をする必要はなかったかもしれない。
シルヴィアとレティシアが泣きながら僕にしがみついてくるが僕が泣かせたみたいなので勘弁してほしい。

もっとも離そうとしたら捨てられた子犬のような目で見てくるから離せないけど……
リチャードは救助隊を見た瞬間気を失ってしまって今は担架で運ばれている。
あいつもやはり緊張の糸が切れたんだろう。
僕がなんでそんなことになってないかって？
前世でも一回誘拐されたからね、二回目だしそんなパニックにはならないさ。
はあ、今から僕だけしこたま怒られるんだろうな。
ほかの三人は怒れるような状態じゃないし……

予想通りこの日はしこたま怒られた……と思いきやそうでもなかった。
王様がかばってくれたらしい。
それでも魔法を創ったことに関しては怒られて、とんでもない罰まで言い渡されてしまった。

「ソラ、お前これから一年王城に行くの禁止な。」

第十二話　一時の別れ

はっ？
「父さん、今なんて？」
僕の聞き間違いだったかな。
「だからお前は一年間王城に行くのを禁止だ。尤もお前の返答次第だがな」
「どういうこと？」
「まあ私の話を聞け。私も最初は一か月でいいと思っていたんだがな。」
「じゃあどうして？」
「お前の将来について考えたことはあるか？」
将来ね……
「ないけど？」
「お前はルビンシュテインの家督を継げない、つまり貴族であるためにはどこかに婿入りするなりしないといけないわけだ」
婿入りねえ……
「だが私はお前は自分で自分の道を決めていいと思う。どこかで国の騎士になるなり、冒険者になるなりお前の自由に決めさせてやりたいと思う」
まあ僕の人生だしね。
「とはいえ私も人の親だ。息子にはできる限り幸せになってもらいたいわけだ」
ふむふむ。
「先日お前が馬鹿な真似をしたあと王に謝りに行ってな。そこで王にある提案をされてな」
「提案？」
「ああ、お前が大きくなったら近衛騎士にならないかと？」
「近衛騎士？」

「ああ、お前はどう思う？」
「どう思うって？」
「近衛騎士になりたいかどうかということだ」
う～ん。
あの部隊は確かエリート部隊だったはず、近衛騎士の小隊長とかというだけで貴族と同じくらいの地位は
与えられる。
けど今将来を決定するのもなあ……
「今答えないとダメ？」
「いやそういうわけじゃないが……ところでお前はもうすぐ十二歳になる、あの約束を覚えているか？」
「約束？」
いつの話だろう。
「お前の婚約の話だ」
……
ありましたねそんな話、てっきり流されたまま忘れられたのかと思ったよ。
「もし婚約するならお前はおそらく貴族の地位を得るだろう。だが爵位を持っている貴族は近衛騎士にはなれない」
つまりこの場で将来の方向性だけでも決めろと。
ていうか決める必要があると。
「近衛騎士の話がなければ約束通り婚約を決めるつもりだったのだがな。ソラ、お前はどうしたい？」
十一歳にそんな選択をさせますか……
貴族になればきっと楽な生活ができるだろう。
もちろん領地の統治くらいはあるかもしれないけど前世の記憶を持ってる僕ならそう苦でもないだろう。
それに比べ騎士や冒険者だとどうなるだろう。
騎士なら護衛やら戦争やらで忙しいだろう。世界の破滅とやらも迫ってるらしいし。

冒険者はいわば何でも屋であり傭兵でもある。毎日が死と隣り合わせの日々となるだろう。
何でも屋と言っても高ランクになれば魔獣の討伐なども出てくる、傭兵は言わずもがなだ。
……
……
「婚約は結ばないでよ」
僕はそう言った。
「いいんだな？」
父さんは確認するように言う。
確かに楽な生活も楽しそうだけど僕にはスリリングな生活の方がある気がする。
この前の脱出計画みたいにね。
それに守りたいときに守りたい人を守れるだけの力はほしいからね。
この前だって本当はギリギリだった。
あいつらが余裕かまして僕の行動を見逃さなければやられていた。
そういう意味で騎士や冒険者はうってつけだろう。
……
儲かるしね。
「うん」
「そういう職業に就くのはつらいぞ？」
「うん」
「いつ死ぬかわからないぞ？」
「うん」
……
わずかな沈黙。
「やっぱりそういうと思ったよ」
父さんは予想していたようだ。
「ならやっぱり一年は会えないな」
「なんでそうなるの？」

別に将来がどうだろうと関係ないはずだ。
「絶対一年間会えないとは言ってない。条件をクリアするまでそのくらいかかるというだけだ」
「条件？」
「ああ、お前が騎士になるにしろ冒険者になるにしろ強さは必要だろう。しかしお前は武術は護身術程度だろう？」
いやそりゃあね。
武術なんて中学校の体育で剣道しかやったことがない。
「うん」
「けど騎士だろうが冒険者だろうが大成するにはかなりの実力がいる、今から武術を磨いてもよほど才能がないと無理だろう。お前運動は……」
できませんよ。
引きこもってましたからね。
「……」
「ならどうするか。私は偶然この国で一番の魔術師だ。そしてお前には偶然魔法の才能がある」
……
偶然じゃないでしょうそれは。
そしてそれは要するに……
「私がお前を鍛えてやろう。条件とは私が認めるくらい魔法を扱えるようになることだ」
それは世間一般で無理ゲーと呼ばれるものではないだろうか。
「まあそれに一年くらいはかかるだろうと思っての一年だ。それより早く認させたらその時点で禁止は取り消すがな」
まいったな……
せめて一言言っておかないと再会した時にすごい嫌味とか言われそうだな。
「とはいえあのまま一年間も会えないのは精神的にきついだろう。だから明日王城に行くときに連れて行くからその時に別れの挨拶な

りして来い」
せめてもの情けというやつだろうか。
なんにせよありがたい。
はあどうやって説得しようかな……

「はあ？一年近く会えない？」
リチャードが怪訝な顔で言ってくる。
「うん、そういうことになるね」
いつもの部屋に行くと三人とも部屋の中にいた。
三人には事情を説明した。
一応理解はしてくれた。
納得はしてないみたいだけど……
「くそっ、レティシアだけじゃなくてソラもかよ」
リチャードが吐き捨てるように言う。
レティシアも？
「レティシアも来れなくなるの？」
僕がレティシアに聞く。
「はい。ソラさんと同じような理由で……」
そうだった。
オルレアン家は騎士の家系、あんなことがあればこうなるのも必然かもしれない。
「シルヴィアがあんなこと頼むから……」
リチャードが愚痴を漏らす。
今までやってしまった的な顔をしていたシルヴィアがようやく口を開いた。
「しょうがないでしょ、まさかこんなことになるなんて思ってもな

かったし……」
気まずそうに言う。
「シルヴィア何かしたの？」
シルヴィアの代わりにリチャードが答える。
「ああ。こいつが父さんにお前を近衛騎士に推薦、ていうより懇願したんだ。」
懇願ってまた大げさな……
「こいつにしては珍しくかなり必死だったな。」
そんなに僕のことを考えていてくれたのか。
僕は自分の将来なんて全く考えてなかったのに。
シルヴィアの方をみると顔が赤くなっている。
僕を気遣っていたのが僕にばれて恥ずかしいんだろう。
「ありがとねシルヴィア」
「お、お礼も嬉しいのだけれど感謝を表すならもっと別のものがいいのだけれど」
かろうじていつもの口調を保っているが顔は真っ赤だ。
そんなに僕を気遣うのが恥ずかしいのだろうか。
もしかして僕なんかを気遣ったことがばれたからだったりするのだろうか。
……ネガティブな思考はやめようと思う。
「僕はシルヴィアにあげられるようなものは何も持ってないけど」
王族にあげられるようなものは持っていない。
あげるならそれこそオーダーメイドなりなんなりしないと。
「大丈夫よ、あなたでもできることだから」
う～ん、なんだろう。
魔法で花火位なら打ち上げられるけど……
僕は魔法しかできないからなあ。
「まあ僕にできることならするけど……」
「簡単なことよ。こ、今度会うときから私のことをシルって呼んでくれればいいわ」

そんな簡単なことでいいのか。
「わかったけどなんで今日からじゃないの？」
そのくらいならいくら僕でも今からでもできるけど
「冗談じゃないわ。こ、心の準備が……」
最後の方はうまく聞き取れなかったがまた真っ赤になってしまった。
言い方的に怒ってたみたいだ。何か気に障る事でもしたのだろうか。
リチャードはそんなやり取りをニヤニヤしながら見ていた。
何がおかしいんだこの野郎。
さて、言うことは言ったしもう帰ろうかな。
いや正確には言うこと言ったらさっさと帰るって言われただけだけどね。
「じゃあ僕はもう帰るよ、父さんから言われてるからね」
「また会えますよね？」
レティシアが聞いてくる。
そんな大げさな。
今生の別れとかじゃあるまいし。
「もちろんだよ」
「約束ですよ」
「うん」
そうだ、いいことを思いついたぞ。
「じゃあせっかくだからここでみんなで約束でもしようよ。また一年後ここで会う約束をね」
「それいいな、のったぜ」
「私も賛成よ」
「やりましょう」
「じゃあ一年後にここで」
「ああ」
「ええ」
「はい」
っと、約束ってこんな感じでいいのかな。

「じゃあまたね」
そういって僕は家に帰った。

第十三話　襲来

もうすぐあの約束から一年経つ。
この一年は本当に地獄だった。
父さんの鍛え方が厳しいとかそんなレベルじゃなかった。
鍛えられる初日、いきなり父さんとスパーリングだった。
けど実際になぐり合ったわけじゃない。
今の実力が知りたいからと魔法をうちあっただけだ。僕はその時魔法陣の同時展開は同じものなら三つ、違うものなら二つが限界だった。
同時展開とは同時に発動ではなく同時に魔法陣を描くことだ。
描いてある魔法陣を起動させるのなら魔力を流すだけなので軽く二十はいける。
スパーリングが始まった瞬間僕は三つの魔法陣を展開させようとした。
魔法陣を描いた瞬間には父さんの魔法はこちらへ飛んできていた。
しかも二つや三つではない、少なくとも五つは飛んできていた。しかも丁寧に基本光と闇以外の五属性を一つずつだ。
危うく死にかけた。
その日はそれで終了となった。
次の日、僕ができないことを一つずつ克服していくメニューを作ってきた。
父さんは教え方が悪いわけでも無茶なメニューを組んできたわけじゃない。
ただ、週に一度のスパーリングで最初の数か月はひたすら死に掛けた。
一回だけではない、朝から夜までやるのだ。
え？
けがをしたら中断ではって？

この時ほど魔法を憎んだことはない。
多少の傷ならすぐに治ってしまう。
あれは拷問ともいえるようなものだった。
何を基準にしていたのかは不明だが半年もするとスパーリングはなくなった。
何をするかって？
リアルファイトだ。
ひたすら魔物と戦っていた。
そんなこともあって体力もそこそこついた。
「この調子なら私に追いつくまであと二週間もかからないだろう。」
その甲斐あって父さんがこう言ったのがつい二週間前の話。
本当なら明日で終わるはずだったのだが今日は兄さんの誕生日だ。
めでたい日まで鍛えんでもいいだろう、ということで試験は来週に持ち越された。
正直もう父さんにも負ける気はしない。
やっとリチャードたちに会える。
そう思うとやはりうれしい。

◆◇◆◇◆◇

いつもより屋敷に人が多い。
それもそのはず、今日は兄さんの誕生日パーティーだからだ。
とは言っても貴族が普通やるような派手なパーティーではない。
身内しかいない貴族にしては異例とも言うべき小規模なパーティーだ。
これは兄さんが自ら望んだわけでもないし、ましてやお金がなくてできないなんていう理由でもない。
兄さんは今日で十五歳となる。
ルビンシュテインの家では次期当主、この場合で言うと兄さん、が１５歳になると継承式というものを行うことになっている。

僕は何を継承するかは詳しく聞いていない、ていうか教えてくれなかった。
唯一聞いたことは継承するものはルビンシュテインの原点とも宝ともいうべきものらしい。
その証拠に魔法を創る能力はルビンシュテインの直系だけに受け継がれる能力だ。
しかしそれは正確には継承式で継承するものをもった者の子供に受け継がれる能力らしい。
そしてそれには言い伝えとしてルビンシュテインの血を受け継ぐものとその夫や妻しか参列できない決まりらしい。
だから今日は必然的に身内だけでやることになった。
それにしても何を継承するのだろうか、宝というからには宝石とか秘伝の巻物とかそういった類のものだろうか。
まあ継承できない僕には関係のない話だけどさ。
「ソラ、食堂につまみ食いにでも行こうよ」
そう言ってきたのは僕と同い年――正確にはまだ誕生日を迎えてないから十一歳だけど――の少女フレイヤだ。
もうそろそろ少女から美少女に格上げしてもいいかもしれない。
そのくらいフレイヤは綺麗になってきている。
シルヴィアやレティシアもこんな風になっているのだろうか。
そう思うと再会がなおさら楽しみになってきた。
「いいよ」
そういって僕らは調理場に行ったがつまみ食いできる状況ではなかった。
今日のパーティーは身内しか参加できない。
必然的に使用人も一人もいない。
では誰がパーティーの料理を作るのか？
貴族に料理なんてできるのか？
答えは当然ＮＯだ。
だからあらかじめ料理を作ってもらっている。

料理人たちも次期当主の誕生日とあって気合が入っている。
料理が食べるのが持っていないくらい芸術的だ。
完成された美といってもいい。
そんなものをつまみ食いすればどうなるか？
すぐばれる。
この家にいる子供は僕とフレイヤだけ。
間違いなくばれる。
「……引き返そうか」
「……そうだね」
僕らは部屋に戻ろうかとも思ったけど先にパーティー会場――この場合で言うと儀式会場になるかもしれない――に行くことにした。

部屋の真ん中にとてつもない魔法陣がある。
おそらく僕が今まで見た中で最も大きいものだろう。
儀式に使う薬品やらもすでにおいてある。
通常、魔法を使うためには魔力さえあればいい。
しかし、魔力の代わりに物などを使うことがある。
簡単な魔法の強化に使う場合や難しい魔法を発動するために使う場合があるが今回はおそらく後者だろう。
ていうかあそこにある触媒の大半が僕が修行で狩った魔物の戦利品だったりするんだけどどういうことだろう……
「すごい魔法陣だね、どんな魔法を使うのかな？」
フレイヤが聞いてくる。
「わからないけどきっとすごいのだろうね」
父さんがここまで用意するのは異例だろう。
いったいどんなものを継承するのやら……
ちらほらと人が集まり始めてきた、どうやらもうすぐ始まるようだ。

「継承式を開始する」
父さんが厳かな声で言う。
今日集まった人はみんな魔法陣の周りに円を描いて立っている。
父さんと兄さんは魔法陣の真ん中にいる。
いよいよ儀式が始まるようだ。
父さんが用意された触媒を魔法陣の各所、恐らく決められた場所においていく。
結構余ってる気がするんだけど、僕の努力は無駄だったのかな……
そして真ん中に指輪を置く。
……指輪？
そして兄さんは魔法陣の中から出た。
なぜに？
継承しないの？
そう思っていると魔法陣が作動した。
父さんの中から光のようなものが指輪に吸い込まれていく。
……あの指輪を兄さんにあげて継承終了とかだろうか？
けどそれだと説明がつかない、光は父さんから出てきた。
なら兄さんの中に入るはずだ。
父さんが兄さんに指輪を渡す。
「それでは次に……」
激しい崩壊音とともに父さんの背後の壁が突如崩れた。
現れたのは一人の男、その後ろにはたくさんの魔物、竜種までいる。
「何者だ、貴様は」
声に怒りを含ませた父さんが聞く。
「俺は神的な人だよ。あんたたちの中にこの世界の異常（イレギュラー）がいるはずだからさ。けど誰かまでは分からなくてね。だから皆殺しにしに来た」
男は笑いながらそう言った。

第十四話　悲劇

僕以外はみんな困惑している。
僕には心当たりがあった。
異常（イレギュラー）？
それも世界の？
僕は前世の記憶を持っている。
しかも別の世界のだ。
それはこの世界にとって異常（イレギュラー）と言ってもいことだろう。
そしてあの男の皆殺しという言葉、あながちウソでもなさそうだ。
そもそも竜種を率いてる時点でかなり現実味がある。竜種は魔物の中でも上位だ。時には神獣とさえ言われるほどに。
一度修行で竜種の中でも下位のものを倒しに行ったが危うく殺されそうになった。
行ったのは最後の方の修行、僕の実力が父さんに追いつきつつあったころの話だ。
やばい、どうしよう。
どうしたらいいのかわからない。
その様子に気づいたのか兄さんが僕の方に駆けよってくる。
「ソラ、お前あの男の言ってることに心当たりがあるのか？」
僕はうなずいた。
誤魔化してもしょうがないだろう。
兄さんが父さんのほうを向く。
父さんがうなづいている。
どうやら魔法で会話しているようだ。
前世で見たら頭がおかしい人にしか見えないだろう。
僕なら精神科をおすすめしている。
父さんが結界で男と自分を囲みこむ。
あの結界はおそらくあの男を逃がさないためと本気でやるから周り

に被害を及ぼさないためだろう。
あの男の強さは少なくともそこにいる竜種よりは強い。
だから全力でやる必要があると思ったのだろう。
けど残りの魔物はどうするんだろう。
竜種以外はあまり強いのはいないと思う。
ただ見たことがないやつもいるから絶対そうとは言い切れないけど……
会場にいた人で取り乱している人はいても逃げようとしている人は一人もいなかった。
それもそうだろう。
魔を統べる一族がここに集結しているのだ。
ここより安全なところは大陸中を探してもそうないだろう。
さて、僕も戦わないと。
そう思い魔法を放とうとすると急に兄さんに手をひかれた。
「何するの？」
僕はもう戦力外というわけではない。
むしろこの中でも上位の方の実力だろう。
「お前、守るべきものを戦場においておく馬鹿はいないだろう？」
つまり僕を避難させたいらしい。
確かにそれは尤もだけどこの面子では少々心配だ。
竜種はここにいる人で一対一で倒せるのは僕と兄さんと父さんだけだろう。
父さんはあの男にかかりきりだ。
竜種は見える限り三体、どれも下位の竜種だろう。
それに対しこちらは僕を含めて戦えるのは１０人前後。
竜種が強いと言っても二人いれば勝てる。
僕がいれば僕と兄さんとあと二人で竜種を殲滅できるから残りの六人で屋敷の外にいる魔物を殲滅することができる。
けど僕がいなかったら兄さんとあと四人で竜種を殲滅する必要が出てきて残り四人で屋敷の外にいる魔物を殲滅しなければならない。

ここから見える限りでは四人では手に余りそうな数だ。
僕が戦うか戦わないかで勝敗にそこそこの影響があるだろう。
「僕も戦うよ」
「いや隠れていろ」
「大丈夫だよ」
僕と兄さんの問答が続く。
これはどうやら僕のせいで起こったみたいだし他人に尻拭いさせてばかりだと気が引ける。
「聞き分けがないな」
兄さんはそう言うと僕を強引に引っ張りだした。
魔法を使うわけにはいかないから兄さんに腕力では勝てない。
そもそも僕をどこに連れて行くつもりだろう。
ここの方がどう考えても安全だ。
連れて行かれたのは地下の修行部屋、どうやら僕をここに隠すつもりのようだ。
「ここに隠れていろ」
兄さんはそう言うと魔法で隠し部屋に隠し部屋を作った。
さらに魔法を使おうとしている、いったい何を……
僕を突如電撃が襲う。
僕はそのまま気を失った。

◆◇◆◇◆◇

ふう、まさか強引に眠らせる羽目になるとは……
今使った魔法はソラが以前使ったという人を眠らせる魔法だ。
話に聞いた時は使い道があるのかわからなかったが意外と役に立った。
さてと、早くこの部屋を隠してしまわないと。
隠し部屋の扉を閉め入り口を隠す。
さらに魔法で幾重にも結界を張る。

主に幻術系のものだ。
これで結界が解かない限りはここが見つかることはないだろう。
さあ、急いで上に戻らないと。

みんなかなり善戦しているようだ。
というのも屋敷の壁に遮られていくら数がいても少しずつしか入れないからだろう。
この屋敷の結界は竜種でも容易に破ることはできない特別性だ。
やはり私が竜種を引き受けるべきだろう。
ちょうど少女、確かフレイヤちゃんと言ったかな、に攻撃を仕掛けようとしているものがいる。
あいつでいいだろう。
私はこちらに注意を引き寄せるために見た目だけ派手で中身は空っぽな雷の魔法を放つ。
案の定こちらの方を向いた。
さあここからは気が抜けないな。
まずは屋敷から出た方がいいな。
竜種は体の大きいものが多い。
この狭い室内では他の人にまで魔法の影響が及ぶかもしれない。
風の魔法を複数同時に使い一気に屋敷から出す。
私もそれを追って屋敷から出る。竜種が落ちた場所は魔物の群れのど真ん中だ。
……これはまずい。
もう一度同じことを行いさらに向こうに飛ばす。
かなり屋敷から離れてしまったが問題はないだろう。
竜種は属性を持っている。その属性の魔法ではダメージが与えられないどころか逆に回復する。
だから竜種と戦う場合は最初に属性を確認するのがセオリーだ。
火や水、すべての属性の下級魔法を放つ。

ダメージを与えるのが目的ではないから大きな魔法をうつ必要はない。
……
どうやら属性は火、炎竜のようだ。
シンプルに動きを止めた後魔法の乱れ撃ちで終了といこう。
僕たちがいるのは森の中だ。
屋敷より少し離れた森の中。
私は氷の鎖と鋼の鎖を木々と炎竜に巻きつけてを炎竜の動きをとめる。
森が大変なことになるかもしれないけど古代魔法(ロスト・マジック)で早く終わらせてしまおうと思う。
あちらの戦況が心配だ。
「氷槍水散」
炎竜に普通の槍と同じくらいの氷の槍が飛んでゆき、中まで食い込んでいく。
炎竜はまだまだ息があるようだ、だから今のうちに離れないと。
「氷槍水散」は氷の槍を相手に相手を貫通する勢いでぶつけるだけの魔法ではない。
むしろそこまでが前段階だ。
そこからあの槍は爆発する。
水が爆発するなんて意味が分からないがとりあえず爆発する。
しかも規模がかなりでかい。
鎖でがちがちに固めてるから被害は多くはないと思うが……
魔法で炎竜の方を見るとその辺りにはかろうじて鋼の鎖のかけらが残っているだけだった。
さあ屋敷に戻ろう。

屋敷に戻った瞬間私は言葉を失った。

魔物は全滅している、竜種も含めだ。
正確には全滅したと思われる。
なぜならここにもう魔物はいないからだ。
ただ魔物と思われる死体もない。
だがその辺りには死体が転がっている。
死体と言っても原形をとどめている者はほとんどいない。
どの死体も獣に食い散らかされたようなありさまだ。
魔物でないなら何の死体なのか？
もちろん人のだ。
そんな馬鹿な。
あわてて近くの死体に駆けよる、それは父さんだった。
父さんはあの男に負けたということか……
あの男はどこに？
「はあ、やっと戻ってきたのか」
私はゆっくりとした動きで後ろを振り返る。
そこにはあの男がいた。
「逃げられたかと思って冷や冷やしたよ。君ともう一人いるはずだけど彼はどこに隠したのかな」
おそらく私はこの男に勝てないだろう。
父さんですら勝てなかったのだ。
先ほど継承した指輪を使っておそらく勝てない。
そもそもあれは実力を上げるようなものではない。
ある能力（ちから）を指輪をつけたものに付与するものだ。
ソラだけは何とか逃がしたいものだが……
「もう死んだんじゃないか？」
「それなら嬉しいんだけどね。僕が連れてきた魔物たちの中に彼を殺したやつはいないみたいなんだ」
この男は魔物と会話できるのか？
私はよほど困惑した顔だったのだろう。
「不思議そうだね。無理もないけどね。冥途の土産ってやつで教え

てあげるよ。あの魔物たちは僕が創り出したんだ。だから意思疎通も可能なんだよ」
この男は本当に神だったのか？
そんなことができる人間なんて聞いたことがない。
「なんで神様が異常（イレギュラー）とやらにこだわる？」
これほどの力があればソラくらい簡単に殺せるだろう。
「それはね……おおっと冥途の土産は僕の能力だけだったね。じゃあ殺すよ」
私がやられれば次はソラを探すだろう。
この男はソラの生存を確信しているみたいだがらな。
これは賭けだが……
魔法を創り出しそれをこの男に放つ。
「最後の悪あがきってやつだね。けど残念、不発だったみたいだ」
このまま気づくなよ。
「これでやっと全員だ、僕の仕事も終わるよ」
成功みたいだ。
私を最後の一人と思いこんでいる。
ソラ、生きてくれよ……

◆◇◆◇◆◇

ここは……
そうだ、変な男が襲ってきてそれで兄さんにここに入れられて……
とにかく外に出ないと。
兄さんに思いっきり文句を言ってやる。

あ……れ……？
なんでみんな死んでるの？
ここにいたはずのルビンシュテイン家は残さず死体となっている。

僕を除けばルビンシュテイン家が途絶えてしまった。
僕のせい……？
僕があいつを呼んだから？
僕がルビンシュテイン家を、兄さんを、父さんを、母さんを、フレイヤを殺した？
僕はどうしたらいい？
こんなことをしてしまった僕はいったいどんな顔で明日を迎えればいいんだ？
兄さんの死体の近くに行くと兄さんの指には指輪がはまっていた。
継承式で継承した指輪だ。
……
僕が滅ぼしたなら僕が元の状態に戻すべきじゃないのか？
そうだ、そうしよう。

◆◇◆◇◆◇

この日を境にルビンシュテイン家は壊滅した。
継承式にいた者の中で生存確認がされている者は誰もいない。
その中には死体すらも見つからないものも数名いたという。

第十四話　悲劇（後書き）

これで第一章が終了ですね。
一章と言っても世界観の説明とかフラグ立てとかでしたので長いプロローグと思ってもらっても構いません。

二章から三人称でいこうと思っています。
どうか生暖かい目で見ていてください。

それと次の投稿は一章の改稿が終わった後になる予定なので少々遅れるかもしれません。

プロローグ（前書き）

初の三人称ですのでおかしなところがあれば指摘してくださると助かります。

プロローグ

≪時の巫女≫アリア・ナイアデスは今日の職務を終え、自分の部屋へと戻っている最中だった。
彼女の職務とは教国の利害に伴った予言を下すことだ。
だが通常、巫女とは未来を予言することはできない。
ナイアデス家の巫女だけが唯一未来を予言できる。
アリアの母親もまだ現役ではあるがそれでも二人しかいないため負担が大きいことに変わりはない。
アリアは悩んでいた。
自分で自分に下した予言についてだ。
その予言の内容はもうすぐ入学することになっているエリュシオン学園、そこに入学してから一か月以内に殺されてしまうというものだ。
予言は回避できるものだ、正確には回避するために予言をするようなものだ。
だから今回の予言も当然回避するつもりだがそれは難しい。
護衛を雇ったとしてもその護衛が殺すつもりなのかもしれないし護衛が守りきれないこともありうる。
信用できてなおかつ生半可な実力ではないものを探し出さなければならない。
心当たりはあるが彼と連絡を取る方法をアリアは持ち合わせていない。
何より彼は今長年の目的を果たしているはずだ。
それを邪魔するのも気が引ける。
（はあ、どうしましょう……）
部屋の扉を開ける。
中には人影があった。
身長はアリアからすれば高いが男性なら平均位だ。

黒いローブを着て顔を隠している。髪すらもヴァーニア大陸では珍しい黒髪だ。
百人が見れば百人とも暗殺者というような容貌だ。
アリアはとても驚いていた。
しかしアリアはこの人物を知っているし、彼がこんなことをするのはもう何度もあったからだ。
ではなぜ驚いたのか。
彼はまさに先ほど考えていた人物でありここに来ることが当分はありえないと思っていたからだ。
「≪黒の魔術師≫さん、今回はいったい何の御用ですか？」
アリアは驚きながらも聞いた。
彼から接触してくるときはたいていが頼みごとなのだ。
たまには買い物に誘ってくれたりしてもいいのに、とアリアは常々考えているが彼がそんなそぶりを見せたことは一度もない。
「ひさしぶりでもないか。今日は頼みごとがあってきたんだよ」
アリアにとってこれは好都合だ。
この頼みごとをかなえる代わりに自分の護衛を引き受けさせればいいのだ。
「いいですがこちらの頼みごとも聞いてくださいますか？」
このように聞いて彼が断ったためしはない。
アリアは気が付いていないが彼からすれば美少女が上目づかいで頼んできているのである。
男であれば断れるはずがない。
「それはいいけど今回の頼み事は結構重いよ」
彼は軽い口調で言った。
「重い……ですか」
彼の今までの頼みごともアリアからすればかなり重いことだったのだ。
それにもかかわらず彼は平然と頼んできた。
その彼が重いという頼みごと、アリアは恐る恐る聞いた。

「いったいどんなことでしょうか？」
「エリュシオン学園に入学させたい子がいるんだよ。確実にね。そのためにアリアに頼みに来たんだ」
アリアの仕事の中にはエリュシオン学園の入学者の選抜も含まれている。
そもそもエリュシオン学園は世界の危機に対抗するために創られた学校である。
それなら少なからず素質がある子供を入学させる必要がある。
素質はどのような基準で判断するか？
テストなどでもいいがこの世界にはもっと確実なものがある。
予言だ。
そうは言ってもたいそうなものではなくその代の≪時の巫女≫が入学志願者の名簿を見て素質があると思った――巫女の直感は当たる確率が高い――名前を所定の人数まで選ぶだけだ。
不思議なことに同じ年に同じ名前の人が志願して片方だけ落ちるなんてこともある。
とにかくエリュシオン学園への入学についてはアリアとその母親が全権を担っているのだ。
（この人が推薦する人なら大丈夫でしょう）
「わかりました。その子の名前を教えてくれませんか？」
「ありがとう、助かるよ。その子の名前はフレイヤ・ルビンシュテインだよ」
アリアは彼が自分にわざわざ頼んできた理由が分かった。
入学志願者として教国に送るとき偽名を使った場合ほぼ確実に落ちるのだ。
ちょうど三年前、アマルティア王国の名家ルビンシュテイン家が壊滅した時にはいるといわれる最後の生き残りを騙って入学しようとした輩が大勢いたがもれなく全員落ちた。
アリアはフレイヤという名前の少女がルビンシュテインの名を語る理由を知っている。

これはあながち偽名ともいえないのだが彼は念を押したいのだろうとアリアは勝手に推測した。
「わかりました。何とかしましょう」
もう入学までは時間がなくとっくに入学者も決まっている。
だからアリアは巫女の持っている推薦枠に二人追加することを決めた。
「では私の頼み事ですが……」
彼はアリアの頼みごとをなめていた。
今までの頼み事は街に出てみたいだとか、魔王領にいってみたいだとか彼としては楽なものだったのだ。
今回もその類だろうと思っていた。
「先日私がエリュシオン学園に入って一か月以内に殺されるという予言を下しました」
護衛か、と彼は幸運だと思いながら推測した。
二つ名はギルドで一定ランクを取ったり、国の騎士団長などになったりしたときに与えられる。
彼の二つ名≪黒の魔術師≫とはギルドランクが個人でAランクになった際に与えられたものだ。
ギルドから二つ名の与えられたものはAランク、Sランクを含めて大陸に１００人ほどだ。
彼は危険区への立ち入りが許可されるAランクになってからはランクを上げようとはしていない。
彼の目的には必要ないからだ。
つまり彼に勝てるものなど大陸中を探してもそうそういないわけだ。
護衛だけなら男にとって楽なものだろう。
それにアリアは今の男にとって数少ない知り合いの一人だ。
その死を見過ごすような真似をするつもりはない。
しかしアリアが継いだ言葉には驚かざるを得なかった。
「あなたにはその予言を回避するために私と一緒にエリュシオン学園に入学してもらいます」

男は見るからに狼狽した。
「なんで？護衛として一か月いればよくない？」
エリュシオン学園は護衛を連れて入ることが認められている。
エリュシオン学園には大陸のほとんどの国の王族の子女が入学するからだ。
学園の警備がざるというわけではないが狙われる可能性が高いものも低いものも警備体制が変わらないのでは万が一ということがあるかもしれない。
故に護衛が認められている。
彼はアリアの護衛が終わり次第フレイヤの護衛としてはいるつもりであった。
ルビンシュテイン家を騙るものはとても多い。
故にルビンシュテインを名乗るものがいてもおかしくはない。
その名に反応してあの男が来るかもしれない。
しかし彼は二度とあの神を名乗る男にフレイヤを殺させるつもりはなかった。
あの男が来る可能性がある以上、彼はフレイヤのそばを離れるわけにはいかなかった。
フレイヤを守るために、そしてあの男を確実に殺すために。
学生として入っては自由に行動ができない。
それでもしフレイヤが殺されてしまったら彼の長年の苦労は水の泡と化してしまう。
「あなたが言いたいことはわかっています。しかし私としてもここは譲れないのです」
アリアは凛とした様子で言った。
アリアは今狙われやすい立場にある。
二百年前、彼女の祖先が下した予言について疑う者たちがいる。
その者達は徒党を組んでアリアやその母親を殺そうとしている。
理由は「自分の死が予言できるなら殺されるはずがない、もし殺されたのなら今までの予言はすべて嘘だ」というものだ。

アリアは現に予言をして何度も防いでいるのだがそれでも殺そうとする者は後を絶たない。
アリアの住む大神殿には二つ名もちの護衛が十数名おり大陸の中でも有数の安全地帯だ。
だがエリュシオン学園は護衛がいると言っても大神殿とはレベルが違う。
せいぜい学園長が二つ名を持っているくらいだ。
だから予言を下すたびに護衛を探さなけらばならない。
それは真面目なアリアですらも面倒だと思うようなことであった。
それにこの機会に彼との時間をたくさん作りたいという年頃の少女らしい思惑もあった。
「どうしてもかい？」
彼は確認するように聞いた。
繰り返すようだがアリアは美少女である。
しかも類稀なる美少女である。水色の髪、深い蒼色の目、整った顔、体つきもこの年の少女としては平均と言ったところだろう。
彼も男の端くれである。
すでに断るのはあきらめていた。
故にこの問いはただの確認である。
「はい」
アリアは力強く返事をした。
「わかったよ」
彼はエリュシオン学園でもう魔法に関しては習うことなどない。
しかし魔道具のことを習えば彼が遺体から形見として受け取った指輪に関することがわかるかもしれない。
それならいく価値もあると彼は思い始めていた。
「本当ですか？」
喜びを隠しきれない表情でアリアは聞き返す。
「もちろんだよ」
彼がアリアの望む返事を返したことでアリアは入学手続きに関して

かなり真剣に考えていた。
一度入学手続きをしてしまえばエリュシオン学園からは最低三年間は逃げられない。
逃げればギルドによって指名手配される。
それは彼の目的にとってあまり良いことではないはずだからだ。
その手続き上どうしても必要な情報をアリアを思い浮かべ、彼に聞いた。
「名前はどうしますか？」
アリアは彼の本名を知っている。
先ほど≪黒の魔術師≫と呼んだのはいつも変わらない格好に対する皮肉として言ったのだ。
そもそも≪黒の魔術師≫というのもギルドでは常に全身黒づくめ、依頼を受けるのはいつも一人、誰も戦闘しているところを見たことがないため得意な魔法もわからない、わかるのはギルド登録時に魔術師と名乗ったことだけ。
故に≪黒の魔術師≫か≪正体不明≫の二択しかなかったため≪黒の魔術師≫という二つ名を与えられた。
しかし彼がここまでして自分の情報を隠す理由をアリアは知っている。
そして何より隠すべきものが名前だということも理解している。
だからアリアは聞いた。
それに対し彼はこう答えた。
「じゃあソラ・シシュフォスにしてよ」

第一話　エリュシオン学園

入学式まであと一時間。
ソラ学園の敷地を散歩していた。
もちろん今日はいつものような黒づくめの格好ではない。
きちんと制服を着ている。
横には銀髪の少女、フレイヤが付き添っている。
しかし彼女の表情は機械のように無表情だった。
彼女の美しい外見と相まって人形のように見える。
ソラが話しかけたところで表情を変えることはない。
ソラもそのことはわかっているので特に気にしてはいない。
ソラ達が学園を散歩しているのは緊張して早く来すぎたわけでもないし、学園の施設が見てみたいわけでもない。
ソラは警備の穴を探しているのだ。
穴が分かっていれば対処もしやすい、アリアを守るという仕事も彼はおろそかにする気はない。
それに対しフレイヤはというと……何をやっていいのかわからずソラについて行っているだけだ。

◆◇◆◇◆◇

入学式が始まった。
「え～、本日は君たちがこのエリュシオン学園に……」
壇上では学園長がもはや定型文ともいえるようなことを延々と話していた。
（あれが≪超人≫ヨハン・エメリッヒか……）
入学式の間ソラの興味はもっぱら学園長のみに注がれていた。
≪超人≫、その二つ名は大陸中に轟いており大国の王族に匹敵するレベルの知名度を誇る。

理由は簡単で学園長が数少ないＳクラスの冒険者だったからだ。
Ｓクラスの冒険者は大陸に二十人といない、故に名前も知れ渡ってしまう。
学園長はここを卒業していてその縁で学園長に就任したらしい。
ソラが学園長に興味を注いでいるのには理由がある。
この学校にソラと拮抗しえるものがいるとすればその筆頭が学園長だからだ。
上級生の中にはすでに二つ名を入手している強者も数名いるがやはりもっとも強いものは学園長であろう。
元Ｓランクは伊達ではない。
アリアを狙うはずの賊を撃退するにあたってソラは極力実力を隠しておきたい。
つまりソラの代わりにやってくれるものがいるのならそれに越したことはないのだ。
そのとき最も期待できそうなのが学園長なのだ。
とはいえ老いているため実力も衰えているかもしれない。
故にソラは先ほどから力試しのために何度かちょっかいをかけているが難なくかわされている。
（うん、実力は大丈夫そうだ……）
「……特に今年の新入生は期待できるであろう顔ぶれが実に多い。アリア様を筆頭に様々な名のある家の方々も多い。また、真偽はわからないが≪黒の魔術師≫殿もいらっしゃるそうじゃ。君たちは恵まれている。君たちは光る原石じゃ。今あげたような方々と切磋琢磨しあい、この学園での三年間、実りのあるものにしてもらいたいのう」
学園長が≪黒の魔術師≫という二つ名を言った瞬間、講堂の中は騒然となった。
そもそもこの学園に入る目的の大半が冒険者や騎士となって大成することだ。
二つ名はその最終目標といってもいい。

それをすでに果たしている者が自分たちの中にいるのだ。
妬みややっかみ、また彼に取り入ろうと考えるものが現れるのも当然といえよう。
また≪黒の魔術師≫は巷で最もSランクに近いうちの一人と言われている。
ちなみに本人はこのことを知らない。
この二つのことから生徒達は騒然となったのだ。
尤も、肝心の≪黒の魔術師≫殿は自分とはばれていないようなので特に気にしていない。
学園長の話が終わる。
それに伴い司会の先生が言う。
「それではこれよりクラス決定のための能力測定を行います。講堂を出て、男女別に測定室へと向かってください。まず男子の測定室は……」
エリュシオン学園では入学式自分の受ける学科を決める。
学科はは能力測定によってわかる適性、それから個人の希望によって決まる。
この学校の科は大きく分けて3つ武芸科、魔術科、戦闘科だ。
武芸科はさらに近接科と遠隔科、魔術科は攻撃魔法科と補助魔法科、魔道具科に、戦闘科は実戦科と戦略科にそれぞれ分かれていく。
生徒はこの中から二つか三つほど選ぶことができる。また、魔道具科と戦略科に関しては個人の希望により別途で受けることができる。
とはいえ、実際この能力測定の結果はよほど異常なことがない限りは自分の希望する学科を取ることができる。
故に生徒が取る学科はパターン化している。
まず最も多い近接科＋攻撃魔法科または補助魔法＋戦闘科、通称魔法近接クラス、次に攻撃魔法科＋補助魔法科＋戦闘科、通称魔術クラス、この二つが他のパターンと比べて非常に多い。この二パターンだけで三クラスずつある。
上記の二つと比べて少ないのが遠隔科＋攻撃魔法科または補助魔法

＋戦闘科、通称遠隔魔法クラス、が二クラスある。
そして最も少ないのが補助魔法科＋魔道具科、通称装備クラス、が一クラスだ。
そして同じものを選ぶクラスの中では成績順でクラスが分けられる。
ソラは自分は装備クラス、フレイヤには魔術クラス、しかもその最上位のクラスに入ってもらいたいと思っている。
彼の目的の一つとしてフレイヤの名前を有名にすることがあるのだ。
故に彼女にはこの学園で最高の教育を受けてもらいたいと思っている。
尤もソラはフレイヤのクラスについてはさほど心配していない。
彼女はルビンシュテインの血を引いている。魔力量がそこらの人間とはけた違いに多いためそれだけで魔術科に入るのは確定であろう。
ソラのクラスに関しても測定する人に思いっきり魔法で幻覚を見せるつもりなので心配していない。
ソラは今測定室に行っても人で混雑しているのは目に見えているため椅子に座ったまま考え事をしていた。
（寮にすべきか、ここら辺で家を買うべきか……）
フレイヤは彼女が生きているがゆえに常識というものがない。寮に放り込むにはかなり心配だ。
アリアが私が相部屋になりましょうか、と提案してくれたが狙われている人物の近くにおいておくのも気が進まない。
ちなみにこの提案はアリアの下心、フレイヤと一緒ならソラと会う回数が増えるかもしれないというものからきている。
一方この学園の近くに家を借りるというのが一見良案のように見えるがこれだと街にいろいろな書類を提出する必要があり時間がかかる。
その間宿暮らしというのはあまり良いとは思われない。
ソラが真剣に悩んでいると
「ソラ、何をそんなに悩んでいるのですか？」
いつの間にかアリアがフレイヤを連れて近くに来ていた。

まだ混雑は収まりそうにない。
ちょうどいい機会なのでソラはアリアに住まいのことについて相談した。
「……ってことだから住む場所をどうしようかと思ってさ」
アリアはソラの話を聞いてソラが自分の思惑に気づかなかったことにほっとしたような残念なような複雑な気持ちとなった。
アリアはソラがこういうことをわざわざ予言していたので打開策も用意してある。
こんなことを予言するのは馬鹿らしく思えるがアリアにとっては重要なのである。
「それなら寮で同じ部屋にすればいいじゃないですか」
アリアはさも当然のように言い放つ。
ソラは全く考えていなかったこと言われ驚いた。
しかしソラがこのことを考えていなかったのは当然と言えよう。
ソラは男でフレイヤは女なのだ。相部屋なんて不可能と考えるのが常識だ。
「え？そんなことできるわけないでしょ」
ソラは当然聞き返す。
「大丈夫です。学園に一つ使ってない寮があるのでそこを使えばいいではありませんか」
つまりそこを改造して自分たちの家として使えということなのだろう。
とは言ってもソラは二つ名があろうがアリアの護衛であろうが一生徒に変わりはない。
そんな異例とも言えるようなことができるわけがない。
「無理だよ」
ソラは普通に考えてでる結論を言う。
しかしアリアはＶＩＰである。
その口から漏れる言葉はソラには考えられない言葉であった。
「私の口添えと、使っていない寮を貸しきれば問題ないでしょう」

平然とアリアは言う。
つまりコネと金でどうにかするつもりなのだ。
ソラはそれを名案というように
「なるほど、そんな手があったか。ありがとうアリア」
アリアにお礼を言う。
ソラもなんだかんだで元貴族なのだ。
発想は似ている。
お金の問題もAランクの冒険者として稼いだお金があるので生活費を含めても三年間もつだろう。
「じゃあ口添えをお願いしてもいい？」
ソラは確認するように聞きアリアも当然のように答える。
「はい、もちろんです」
二人が会話をしている間に行動の中にはほとんど人がいなくなっていた。
フレイヤは2人が会話している間ずっと窓の外に見えた蝶々を目で追っていた。
「それでは私とフレイヤさんも測定に行きますので……」
アリアが名残惜しそうに言う。
「わかったよ」
そう行って三人はそれぞれの測定室へと歩いて行った。

◆◇◆◇◆◇

（まだ意外と人が残っているな）
ソラは目の前の行列を見てそう思った。
人がいなくなったといっても講堂の中からいなくなっただけである。
いなくなった人はみんなここに向かっていたわけなのでここに人がまだ多いのは当然と言える。
測定に緊張している人、おそらく同郷と思われる人と話している人などが大半である。

ソラはその中では珍しい部類であり、誰と話しているわけでもなく、かといって緊張してもいない。
何をしているかというと測定室にいる測定官にかけるための魔法を考えていた。
ソラは測定方法をきいていない。
そのため使うものを間違えると魔術科に入れられてしまう。
それではフレイヤを主席卒業させる計画が台無しだ。
ソラが気付いたころにはソラの順番まであと数人であった。
そしてソラの番がくる。
「失礼します」
そう言いながら測定室に入る。
そこにいたのはなんと学園長であった。
「君が≪黒の魔術師殿≫かね？」
いきなり聞いてくる。
ソラの表情は一瞬崩れてしまったがすぐに驚いたような顔で切り返す。
「何のことですか？」
「君でもなかったか。それでは≪黒の魔術師≫殿は女性なのかのう」
学園長はここに来る男子全員にこの質問をしていた。
学園長としては≪黒の魔術師≫がこの学園に来たのは嘘だと思っている。
来る理由がないからだ。
二つ名を持っている時点で生活には困らないし、この学園で得られる学と箔も必要ないからだ。
しかしソラの反応を見て少しだけ考えを変えた。
（いないとは思うがいるとすればこの少年がおそらく……）
ソラの表情の変化は一瞬、学園長も絶対とは言い切れないほどであった。
「まあよかろう。それでは儂はこれで失礼するとしよう」
そう言って学園長は部屋を出て行った。

（危なかった）
ソラは真面目にそう考えていた。
学園長、≪超人≫がいたらソラの魔法が見破られていたかもしれない。
そうなればソラの計画に支障が出ていた。
「僕は補助魔術を担当するマルセル・カルヴァンです。それでは今から測定を始めます」
マルセルがそういうと同時にソラは魔法を発動させた。
「これで測定を終わります。今日は帰って結構です。クラスの掲示は明日の昼、登校は明後日からです」
ソラが使った魔法の効果は見ての通り思い込みを強制する魔法だ。
ソラはマルセルに測定が終わったように見せかけた。
他にも書類の数字を書き換える魔法で自分の数値を全て平均にしているはずだ。
これで間違っても希望の装備クラス以外に行くことはないだろう。

◆◇◆◇◆◇

女性用の測定室は騒然となっていた。
≪時の巫女≫アリアが連れてきたフレイヤが歴代でもトップクラスの魔力量を記録したからだ。
（これほどとは……）
事情を知っているアリアですらもこれには驚いた。
フレイヤは確かにルビンシュテインの血をひいているがそれでも歴代トップクラスという馬鹿げた記録を出すとは思っていなかったからだ。
ともあれこれでフレイヤは間違いなく魔術クラスしかもその最高位のクラスであることは間違いないだろう。
アリアも学年トップクラスの魔力でフレイヤと同じクラスであることは間違いないだろう。

これも十分にすごいことなのだがやはりどうしてもフレイヤと比べられると見劣りしてしまった。
当のフレイヤは何食わぬ顔で測定を済ましてしまった。
周りの喧騒など無視してアリアのところへ来た。
「……ソラのところに行こう」
そう言っても自分から動こうとしない。
ソラの場所がわからないからアリアに案内させようというのだろう。
教国のお偉いさんが聞いたら激怒するであろう。
しかしアリアは気にした様子もなく
「そうですね、行きましょう」
アリアは何とも言えない表情をしながら歩き出した。

第二話　住処

入学式の日、ソラとフレイヤは街の宿屋に泊った。
入寮、正確には借寮の手続き、は測定の後アリアと合流してそのまま行った。
そしてアリアと別れた後、早速寮に行ったのだが……
使っていない寮というのは当然手入れもされない。
手入れがされないということはゴミがたまる一方だ。
ソラたちが使う寮が封鎖されたのは二年前の話。
とても泊まれる状況ではなかった。
そして今日二人は街で買った掃除道具を手に寮の前にいる。
「フレイヤ」
「……何？」
「行くよ」
「うん」
決意を言葉にしなければ入りたくないほど寮の中は汚かった。
床は木製のようだが板目が見えないくらい黒ずんでいる。
角という角には蜘蛛の巣が張っている。
家具はもはや真っ黒で区別がつかない。
寮は二階建てで部屋は個室が全部で十六つ、それにキッチンが一つ、ダイニングが一つ、お風呂は一つ、それにトイレも各階に二つずつ。
今日のノルマは最低でも個室を二つ、キッチン、、ダイニング、トイレ、お風呂だ。
せめてこれだけは終わらせないとここに住めない。
ソラは張り切って、フレイヤはいつも通り無表情で掃除を開始した。

◆◇◆◇◆◇

ソラ、フレイヤは共に元貴族である。

貴族は自分で掃除をするのか？
答えは否である。
自分で掃除するのならメイドさんはいらない。
ソラは前世では庶民であったため掃除をしなかったわけではない。
しかし前世には掃除機という文明の利器があったためもっぱらそれに頼っていた。
できても雑巾がけ程度である。
ソラもそのことは重々承知していた。
そのうえでソラはある作戦を立てた。
家具は買いなおせばいい。だから魔法で家の中を水で洗い流そう、と。
この世界の家屋用木材は腐らないように加工なんてされていない。
水を使うのならその後始末を念入りにやらなければならない。
しかしソラもフレイヤもそんなことは知らない、または思い当たっていない。
「……」
「……できた」
上からソラ、フレイヤの順だ。
部屋の汚れや蜘蛛の巣は綺麗になくなっていた。
ついでに家具も原形を残すつもりはなかったのでもはや木片と化している。
魔法を部屋の中で使うだけ、それでも二人には簡単なことではなかった。
魔法のコントロールができない。
別にソラの技術が未熟というわけではない。
むしろ学園内では間違いなくトップであろう。
ただ、掃除をしたことがないのでどのくらいの加減でやれば汚れがとれるかわからない。
弱ければ黒ずんだままだし強ければソラたちの魔力では部屋ごと吹き飛ばしてしまう。

しかし弱くても何度もやればとれるはず、そう考えて地道にやっていたのがほんの一時間前まで。
では一時間前からは何をしていたのか。
部屋の中に魔法で水をため、更に水流を作りだし洗濯機のようにしていた。
部屋の壁や床は綺麗になったが部屋の中身は木片で散らかっている。
ちなみに水浸しだ。
「……街にいく」
こういったのはフレイヤだ。
この作戦が決まった時ソラはフレイヤに終わったら街に買い物に行くと言っていた。
無論、壊れたであろう家具を買いなおすためである。
しかしソラの予定には木片の掃除という第二幕はなかった。
フレイヤはソラのほうをじーっと見ている。
フレイヤも女の子である。
街での買い物を楽しみにしていた。
それを目標に掃除を頑張っていた。
「フレイヤ、買い物は今日じゃないと嫌？」
「うん」
間髪いれずにフレイヤは答える。
「フレイヤ、もう少し掃除してもいいか？」
フレイヤは無言で指を一本立てる。
後一時間ならいいということだろう。
が、魔法を使うならっとソラは調子に乗ってすべての部屋を掃除しようとした。
当然どこも木片だらけだ。
今日のノルマだけは最低限終わらせなければいけないが一時間では掃除のノウハウのないソラたちでは終わりそうにない。
（……どうしよう）
案としてはフレイヤと別行動すればいいのだがフレイヤを一人にす

るのはあまりにもリスクが高い。
そんな時だった。
「クラス分けの結果を教えに……何ですかこれは！？」
神（アリア）が降臨したのは。
「いや、魔法で掃除したらこうなってさ……」
ソラはアリアに事情を説明した。
魔法を使ったら床と壁は綺麗になったが木片で散らかったこと、ソラもフレイヤも情けないことに掃除ができないこと、それを聞いたアリアはこういった。
「私が手伝ってあげましょう」
「本当？ありがとう」
こう言いつつもソラはアリアを戦力としては数えていなかった。
正確には自分たちと同じくらい、つまり役立たずとしか思っていなかった。
なぜならアリアも教国で王族のような扱いを受けているからだ。
自分たちと同じ穴のムジナである、そう思っていた。

◆◇◆◇◆◇

神（アリア）が降臨してから約一時間が経った。
木片で散らかっていた寮はもはやなかった。
アリアの掃除スキルはソラの想像をはるかに超えていたのだ。
ソラが一時間で片づけたのは自分で使う予定の部屋と男子トイレ。
さすがに男子トイレはアリアやフレイヤにやらせるわけにはいかなかった。
フレイヤは自分が使う部屋だけしか掃除できなかった。
一方でアリアはキッチン、ダイニング、女子トイレ、お風呂、個室を三つほど終わらせてしまった。
とてもいいとこのお嬢様とは思えないほどのスキルである。
「なんでそんなに掃除ができるの？」

ソラが疑問に思ったことを聞く。
アリアは自分以上にお嬢様のはずだ。まあソラはお嬢様ではないが。しかも前世の記憶があり、宿とはいえ三年間ほとんど一人暮らしをしていたソラを上回る掃除スキルを持っている。
「花嫁修業の一環としてお母様に教わったのです」
アリアは顔を赤らめ、照れながら言った。
ちなみにこの花嫁修業はソラと出会って半年ほどたった一年半前から始まったものだ。
むろんこれをソラが知るすべは直接アリアから聞くしかない。
だから花嫁修業と聞いてソラが考えたのは全く的外れな答えであった。
（やっぱりアリアも婚約者とかがいるからだろうな。）
しかもそれはアリアにとって致命的な勘違いをだった。
「それは大変だね」
「確かに大変ですがこれも未来の旦那様のためですから」
会話が噛み合っているようで噛み合っていない。
「……買い物に行こう」
今まで黙っていたフレイヤが口を開いた。
二人とも動く気配がなかったのでまた先延ばしにされるのかと思ってフレイヤは口を開いたのだ。
「そうだったね。じゃあアリアまた今度」
そういってソラはフレイヤと一緒に街の方へ歩き出そうとする。
「ちょっと待ってください。なんで街に行くのですか？」
アリアは部屋に散らばった木片が家具の残骸であることを聞いていない。
アリアからすればそもそも一時間で掃除を切り上げたことが不可解であった。
「いやそれはだって最低限必要な家具くらい買っておかないと生活できないし」
ここでアリアはさっき片づけたものの正体がわかった。

「それなら私も連れて行ってください。家具の選び方も少しなら習いましたし」
嘘だった。
そもそも家具の選び方なんてある程度の機能があれば後は感性の問題でしかない。
習う以前に学ぶ必要のないことだった。
「本当？それなら是非ともお願いするよ」
先ほどソラから見ればすさまじい掃除スキルを見せたアリアだ。
本来なら気づくことにも気づかずあっさり了承した。
そうして三人で街へと向かった。

◆◇◆◇◆◇

三人の街での買い物は貴族顔負けなほど豪快なものだった。
ソラはAランクの冒険者だ。
その稼ぎは貴族に匹敵する。
ソラがAランクになったのは二年半前、それからは一つ目の目的のためにひたすらギルドの依頼をやり、時には危険区に行き、娯楽にお金をかけたことは一度もなかった。
唯一大金が入った次の日の夕食を多少豪華にしていたくらいだ。
金なら有り余っている。
寮の部屋を十六部屋を三年間借りるにはギリギリだが長期の休暇にでも二、三個依頼をこなせば全く問題ない。
もともとエリュシオン学園の寮費は一般庶民も入学してくることもありかなり安めだ。
それに加えAランク以上の報酬は高い。
今日いくら使おうがたいした問題にはならなかった。
それに加えアリアがまるで自分で住む家に飾る家具のように質のいいものを勧めてきたので買ったものは全て貴族が買うようなものだ。
その高級家具を見せびらかすようにしながら――本人たちに全くそ

の気はない――さらに極上の美少女二人をと一緒に街中を歩いていた。
傍から見れば貴族の坊ちゃまが美少女を侍らせながら歩いているように見える。
それを格好の標的とみるたちの悪い輩はどこにでもいるわけで……
「あと買うものは？」
「そうですね。フレイヤさんは女の子ですし……」
アリアは気まずそうな顔だ。
つまり女の子にとっては必需品であるものを買うべきだと言っているのだ。
そのくらいわからぬソラではなかった。
「わかったよ。僕はここで待ってるから二人で買ってきて」
そう言ってソラは近くにあったベンチに腰を掛ける。
「わかりました。それほど時間はかからないと思いますので」
そう言ってアリアはフレイヤの手を取って人ごみの中へと消えて行った。
客観的に見て女二人の方が絡まれやすいと言えよう。二人とも美少女だ。ナンパされる可能性も大いにある。
またアリアに至っては死の予言を自分でしている。
暗殺者とやらに狙われる可能性もある。
尤もそちらの場合はソラにすぐ伝わるようにしているので問題ではない。
しかしこの状況、貴族の坊ちゃまと思われる少年が一人でベンチに座っている。
護衛らしき者たちもいない。
「おいおいにーちゃん、ちょっと金貸してくんない？」
ソラは絡まれた。
相手は二人、頭の悪そうな金髪にスキンヘッドの男だ。
この程度のやから、ソラであれば文字通り秒殺だ。
しかしソラは絡まれるのは久しぶりだったため自分に絡んできてい

ると最初はわかっていなかった。
≪黒の魔術師≫として黒のローブを着て顔を隠していた頃はある時期を境に一度も絡まれることは無くなった。
ソラが活動している教国でごろつきたちにある暗黙の了解ができたからだ。
Aランクに上がるまでは何度も絡まれていたがそのたびにかなりひどい目にあわせていた。
絡んできたやつを片っ端から全裸で木からぶら下げてやったりしていた。
そんな折Aランクになり≪黒の魔術師≫という二つ名とその由来が教国で噂となった。
ごろつきを散々な目にあわせているのは≪黒の魔術師≫ではないか、と。
それから一度も絡まれたことはない。
「聞いてんのかコラ」
ようやく自分に絡んできているのだとソラは理解した。
（僕に絡んできてたのか。こいつらはどんな目にあわせてやろうかな。また全裸にして木からぶら下げるか、そういえば女装させて動けないように固定して街中に飾ったときはなかなか面白かったな。）
理解して最初に考えるのはこんなことであった。
ソラが哀れな馬鹿二名どうするか考えていると

「貴様ら、何をしている」

横から叱咤と言える声が飛んだ。
ソラが声の主を見ると声の主は深紅の長い髪をポニーテールにした少女だった。
少女は普通ではなかった。
容姿は確かにそれこそフレイヤやアリアに匹敵するくらい整っている。

しかしそこではない。
彼女は当然のように帯剣していた。
「なんだてめえ」
スキンヘッドの男が凄みながら言う。
「ふん、知れたことだ。お前たちがそこの少年を脅そうとしているようだから止めに来たのだ」
平然と少女が言う。
「いい度胸じゃねえか」
頭の悪そうな金髪はおもむろに指を鳴らし始める。
どうやら女性相手に暴力をふるう気満々のようだ。
もうそろそろ止めないとまずいかな、ソラがそう思い始めていると
「やるというなら相手になるぞ」
明らかに上からの発言、挑発としか思えない行為だ。
それにまんまと乗った頭の悪そうな金髪は
「この女」
そういって少女に殴り掛かる。
まずい、ソラは魔法を使おうとして途中でやめた。
少女が難なく躱せると分かったからだ。
金髪は何度も拳をふるうが一発として少女に当たるどころかかすりもしない。
（へえ、やるな）
ソラは感心していた。
少女は最低限の動きで躱しているように見える。
これほどの腕ならギルドならBランク相当だとソラは思った。
ソラがそんなことを考えているうちにも状況は動いていく。
見かねたスキンヘッドの男が加勢に加わろうとしている。
ソラはこれを見ても何をしようともしていない。
ここで不用意に実力をさらせば自分が≪黒の魔術師≫だとばれるかもしれないという懸念があったからだ。
スキンヘッドが加勢しても少女は顔色一つ変えない。

黙々と男たちの攻撃をよけ続ける。
そして男たちの動きが止まった、おそらく疲労で、一瞬で少女は剣を抜いた。
次の瞬間には金髪の喉もとに添えられてある。
「これ以上やるというなら私も手加減しないが」
少女は言う。
「覚えてろ」
負け犬を遠吠えを言いながら哀れな二人組は去った。
こんな大衆の面前で少女にもてあそばれたのだから当分彼らはこの街を堂々と歩けないだろう。
ソラは立ち上がって礼を言う。
もちろん助けてもらう必要はなかったが礼儀として言っておこうと思ったのである。
「ありがとう、助かったよ」
ソラが言うと彼女は
「礼には及ばない。私は当然のことをしたまでだ」
「それでも僕を助けてくれたことに変わりはないからね」
「しかし君はおそらく私の助けなしでも撃退できたのだろう？」
どうやらこの少女はソラが魔法を発動しようとしていたことに気づいていたようだ。
ソラは驚嘆しつつも聞いた。
「買いかぶりだよ」
ソラも実戦ではなかったし本気ではなかった。
それでもソラの魔法に気づけるものはなかなかいない。
……と言ってもある程度の使い手なら違和感程度の魔力を感じ取るくらいはできる。
「ではそういうことにしておこう」
ここで目立つつもりのないソラは沈黙した。
「まあいい、私は姫様を待たしているからな。これで失礼させてもらう」

そういって少女は人ごみの中へと消えて行った。
少女と入れ違うようにアリアたちが帰ってきた。
「遅くなってしまってすみません」
アリアが申し訳なさそうに謝ってくる。
ソラはそんなことは特に気にしていない。
むしろ自分たちの買い物に付き合わせているのだから申し訳なくすら思っている。
「いやいいよ。それより今日のお礼として何かプレゼントしたいんだけど何かほしいものある？」
ソラは聞いた。
人の心に聡くないソラは感謝＝お礼＝プレゼントくらいしか思いつかない。
アリアは少し考え込んだ後
「……それなら指輪を」
顔を赤らめながら小さな声で言った。
この世界においても異性に指輪を贈るということの意味はソラの前世とあまり変わらない。
もちろんソラにそんな気はないのでアリアの自己満足にすぎないがそれでもアリアは指輪を買ってもらおうとした。
ソラはこちらの世界のそういった常識はあまり知らない。
そう言ったことに興味が出てくる年齢をギルドで死と隣り合わせの生活を送ってきたからだ。
だからアリアの言っていることの本当の意味は分からずただのプレゼントとして了解した。
「わかったよ。じゃあそこの店にでも入って……」
結局ソラはアリアには指輪を、フレイヤにはネックレスを買ってあげた。

当初フレイヤに買う予定はなかったがフレイヤがソラにねだったため、基本的にフレイヤに甘いソラは当然のことをするようにフレイヤにも買った。
「ありがとうございます、ソラ」
アリアは見るからに機嫌がよさそうだ。
幸せオーラを振りまいている。
「ありがとう」
フレイヤも心なしか嬉しそうだ。
しかし二人とも買ってもらったものをつけていないどころか持ってすらない。
これは別に新手のいじめではない。
後日届けてもらうようにソラが提案したのだ。
正確には後日ソラに送った後彼女らにソラが渡すように、だ。
その理由は一応あるがアリアに言うと職務怠慢のように思われそうなので言ってはいない。
アリアも直接渡してもらえるということでむしろ歓迎していた。
「じゃあ帰ろうか」
「そうですね」
「……うん」
そう言って三人は寮へと帰った。

◆◇◆◇◆◇

「すみません、姫様。待たせてしまいましたか？」
そう言ったのは先ほどソラを助けた少女。
「いいえ、待ってはいないわ。それよりこの学園にいる時はその口調はやめてと言ったはずだけど」
姫様と呼ばれた金色の髪をもった少女は言う。
「そうだったな、シルヴィア」
「それでいいわ、レティシア。これから三年間は同級生として過ご

すのだからこれに慣れてもらわないと」
金髪の少女の、シルヴィアの本音は言っていることとは全く違う。
彼女が自分を偽らずに接することができる唯一となった友人にかしこまった接し方をされるのが嫌なだけだ。
もし城でもこのような口調で接してくるならシルヴィアはこの学園に通おうとすら思っていなかったはずだ。
「それにしてもどこへ行っていたの？あなたが時間に遅れるなんて珍しい」
シルヴィアは不思議そうに聞く。
シルヴィアの知る限りレティシア・オルレアンという少女は規則を破ることを好まない。
シルヴィアが知っている限りではあの脱出作戦の後そのようなことをしているのを見たことがなかった。
「たちの悪そうな輩が少年に絡んでいるのを見たものでな、つい間に入ってしまった」
レティシアは少し苛立ったように言う。
もちろんその少年、ソラにいら立っているのではなくあんなことをしていた男たちにいら立っているのだ。
「それはかわいそうなことをしたわね。あなたが相手じゃそこらの有象無象じゃ相手にならないでしょう。尤も、そんな奴らに同情する必要はないと思うけどね」
シルヴィアもいら立ちをあらわにする。
彼女らにとって彼らのような輩は敵でしかなかった。
それは二人の幼いころの記憶からくるものだ。
「さあもう用事はないのだし帰りましょう。明日からは楽しい楽しい学校よ」
気を取り直したようにシルヴィアは言う。
「そうだな、機嫌を悪くしていても何も得をしないしな」
レティシアも同意し、二人もまた寮へと帰って行った。

第三話　落ちこぼれ

「フレイヤ、準備できた？」
「……もうちょっと」
今日から学園生活が始まる。
フレイヤはギリギリまで寝ようとしていたがソラが叩き起こした。
学園生活の始まる初日――入学式は除く――から遅刻ギリギリでは体裁が悪いとソラが張り切っているのだ。
といってもソラ自身が遅刻してもソラは笑って済ますだろう。
ソラのこの学園での目的はあくまでフレイヤの実力向上と知名度の向上だ。
自分の評価なんて二の次である。
「わかったけどなるべく急いでね」
ソラはフレイヤを急かす。
なおこれは扉越しでの会話だ。
血縁があるとはいえ同じ部屋に住むようなことはしていない。
自分たち以外に人がいればソラが強硬に同じ部屋になることを主張したかもしれないが――もちろん安全面からだ――この寮には二人しかいないためそんなことはしていない。
「できた」
そう言ってフレイヤが部屋から出てくる。
「似合ってる？」
フレイヤが無表情ながらも聞いてくる。
「似合ってるよ」
ソラは正直に言う。
ソラがフレイヤの制服姿を見るのは今日が初めてだったが似合っていると思っているのは本心だ。
ただ、元の素材がいいためフレイヤ自身に似合っているかどうかはソラにはわからない。

ソラは前世では美術のセンスが学校で一番ないと評判になったほどの男だ。
それを自覚しているためとりあえずほめておけばいいと思った。
フレイヤが何を着ても綺麗なのには変わりがないからだ。
「それじゃあ行こうか」

◆◇◆◇◆◇

昨日ソラがアリアから聞いたクラス分けの結果はソラの希望通りであり予想通りでもあった。
ソラは装備クラス、フレイヤは魔術クラスの中のAクラス。もちろん最上位のクラスのことだ。
ついでにアリアもフレイヤと同じクラスだそうだ。
フレイヤのことをアリアに任せればソラは気兼ねなく学園生活を送ることができる。
ソラがこの学園に来るにあたってしていた懸念はの一つは解消されている。
あとの懸念は二つ名のことや神を名乗る男がここに来るかどうかなどだ。
ちなみにアリアの護衛に関しては懸念のうちに入っていない。
とりあえずソラが普通に学園生活を送るにあたって懸念すべきことはフレイヤの日常生活だけだった。
だから教室の前でフレイヤと別れた際に思ったことはフレイヤが教室にたどり着けるかどうかだった。
ソラが教室に入ると中にいた生徒から一斉に注目された。
戸惑いつつもソラは自分の席を知るために黒板を見る。
ソラの席は一番後ろの列の端っこだった。
この学園の席順はそのまま成績を表している。
今日の場合で言うなら入学式での能力測定での数値をもとに作られている。

要するにソラの能力は偽装したものではあるが最下位だったということだ。
（あれ、平均程度にしたはずだけどな）
不思議に思いながらも与えられた席に着く。
原因を考えているうちに担任と思われる人が教室に入ってきた。
「今からホームルームを始める。みな席につけ」
全員が席に着いたのを確認すると担任は再び話し始める。
「私がこのクラスの担任のエヴァ・アンティクルだ。え～まず入学おめでとう。この学園での生活はきっと君たちの将来をより良いものにすると思うぞ。さて早速カリキュラムとかの説明だが……」
次々と説明をしていく。
この学校で生活するにあたって必要なことはたいてい話していく。
「よし、これで説明は以上だ。今日から授業があるから頑張れよ」
そう言って教室から出ていく……かと思うと何故かソラのところによってきた。
ソラとフレイヤに血縁があることは知られていないはずなので成績に関して言われることはないはずだ、それならいったい何の用事で、とソラが頭をひねっている間にもエヴァはソラに近づいてくる。
近づくと小声でソラに優しい口調で言ってくる。
「何か心配なことがあればいえよ、できる限り力になるからな」
教師のかがみともいえるかもしれない。
しかしソラにはなぜそんなことを言われるかがわからない。
「それをなんで僕に言うんですか？」
ソラが疑問に思いながら聞く。
「それはまあ大声では言い辛いがお前が学園の記録をぶっちぎって更新したからだ」
（記録？）
ソラは焦った。
ソラの魔力量はルビンシュテインの遺品の指輪により通常では考えられない量となっている。

記録を破るどころか大陸中で話題になれるレベルの量だ。
「お前……昨日の測定結果が学園始まって以来初のすべて二桁なんだよ」
「どういうことですか？」
ソラは測定の仕方なんて知らないためエヴァの言っている意味が分からなかった。
「この学園の能力測定では能力が運動能力や魔力といったように分類され数値で表される。入学式に生徒が出す数値は大体三桁、学年に一人くらいは何か一つで四桁を出す生徒もいる。もちろん二桁を出す生徒もいないことはないがたいてい一つや二つの項目だ。それにそういうやつらは他の能力がずば抜けてることが多いからな。しかしお前はあらゆる項目で二桁だ。この学校は実力がものを言うから困るだろうと思ったんだよ」
どうやらソラを心配してくれているらしい。
やはり教師の鑑といえる。
「わかりました。困ったことがあったら相談します」
いつでも言うんだぞ、そういってエヴァは教室から出て行った。
ソラは言葉の上では殊勝な答えを返したが本当に相談する気はない。
仮に自分が最下位だとしてもそれが数値も含めて公表されない限りはこのクラスで最下位という扱いしかされないはずだし、なにより自分の成績なんてどうでもよかった。
ソラにとって問題なのはフレイヤの成績であるし実害はないさそうなので放っておくというのがソラの選択だった。
授業が始まる。
ソラはこのことを忘れ授業を聞き始めた。

◆◇◆◇◆◇

午前の授業が終わって昼食の時間となる。
ソラは一人で食堂に向かう。

フレイヤと今日だけは一緒に食べる、成績が気になっていたからだ、というのもあるがクラスでソラに話しかける生徒がいなかったためでもある。
この学園には将来有望生徒が大勢いる。
誰しも有望な人に取り入るために成績優秀者と話し知己を作ろうと躍起になっていた。
ここでソラも同じようなことをして入れば交友関係を作れたかもしれないがソラにはそんなことは必要なかったためしなかった。
なによりソラにそんなことは許されなかった。
故に一人で食堂に向かっている。

食堂に着くとフレイヤの姿は見えなかった。
まだ着いていないのか食事を買ってきているのかわからないがとりあえず自分も食事を買うべきだろうと学食の列に並ぼうとする。
この学園では学食が主流だ。
生徒の多くが寮ということもあるし、値段も安い。
が、何よりもここの学食は美味しいと評判なため弁当をわざわざ作るような生徒もいない。
ソラはとりあえず無難なものを買い席へ戻ろうとする。
するとフレイヤと何故かアリアがソラに向かって手を振っている。
だが手を振っているのは二人だけでもそこにいるのは二人だけじゃない。
男女問わず十数人が二人にそれぞれ集まっていた。
正直ソラは逃げ出したくなったが今日だけと言い聞かせ二人の方へ歩き出す。
「フレイヤ、アリア」
と二人に向かって声をかけると思いがけない方向から返事が来た。
「お前はなんだ。フレイヤさんとアリア様を気安く呼びやがって」
言ったのは二人の取り巻きの計二十数人のうちの一人だが他の取り

巻きも気持ちは同じのようでみなソラをにらんでいる。
「二人の友達だけど……」
ソラが言うとにらんでくる人数が二人ほど増えた。
「クラスと名前を言え」
先ほどとは違う取り巻き、取り巻きBが言ってくる。
「装備クラスのソラ・シシュフォスだけど」
ソラが正直に言う。
「お前が装備クラスのソラ・シシュフォスか。」
取り巻き達は一斉に笑い始める。
アリアは気まずそうに眼をそむけている。
「ぶっちぎりで学年最下位のソラ・シシュフォス君が二人の友達？
嘘ならもうちょっと上手につけよな」
どうやらソラの成績は名前も含め他の生徒にも知られているようだ。
「いい加減にしてください。ソラは私たちの友だ……友達で間違いありません」
見かねたアリアが大声で言う。
何故言い直したのかはソラにはわからなった。
もちろん言い直したのはアリアが友達と自分で言って悲しくなったからだ。
フレイヤは横で首を縦に振ったり横に振ったりしている。
「去ってくれませんか、私は友達を侮辱するような人と一緒に居たくはありません」
疑問形ではあったがもはや命令のようなものだった。
それを聞いた取り巻き達は素直に去っていく。
アリアの立場的にここはおとなしく引くべきだと悟ったのだろう。
「すみませんソラ。私たちのせいで……」
「……ごめん」
アリアとフレイヤ、二人が謝ってくる。
「いいよ。別に気にしてないしね。それより僕の成績が広まってるのはどういうこと？」

ソラにはそちらの方が問題だった。
成績は気にしないとはいえ平穏な学園生活が送りたくないわけじゃない。
エヴァの言った通りこの学園が実力主義な面の大きいところだとすれば厄介ごとに巻き込まれるかもしれない。
「それはですね……」
アリアとフレイヤは学食とは別の人だかりに目を向ける。
そこはソラが不思議に思っていた場所でもある。
なにしろおいしいと評判の学食を差し置いてまで人が集まっていた場所だ。
「あそこがどうかしたの？」
不思議に思っていた場所であるので何があるかソラは当然知らない。
「あそこには掲示板がありましてね……能力測定の結果が名前と数字付で貼られているのです」
ようやくソラは納得がいった。
担任のエヴァが言っていたことも先ほどの生徒たちに自分の成績が名前付きで知られていたのもだ。
成績が貼り出されれば主に注目すべきは三か所だ。
まずはもちろん自分の成績、次に成績上位者の成績、そして最後に成績下位者の成績だ。
自分の成績は言わずもがな、上位者の成績は羨むためで下位者の成績は馬鹿にするために見る。
それが大体の生徒の行動だ。
そしてその行動の中でも特に注目される一つに成績最下位があげられる。
「なるほどね。それはまあいいよ。それより二人の成績はどうだった」
フレイヤだけ聞くことが失礼にあたると思いソラは2人に聞いた。
「私は学年八位でした」
「一位」

アリアはソラに申し訳なさそうに言う。
フレイヤはそんなことはなくむしろ誇らしげだ。
「つまりさっきのは……」
「はい。多分私たちとのつながりを作ろうと……」
それだけではないとソラは思っている。
二人とも自覚がないのかもしれないが立派な美少女である。
あの時集まっていた男子の九割はアリアの言った目的に加え下心もあっただろう。
ソラに絡んできたのが男子だけだったというのもその根拠となる。
「二人とも凄いじゃないか」
ソラは素直に称賛した。
これは本当に凄いことだと思っているからだ。
この学園は一クラス三十人前後、装備クラスは二十人前後だ、の計二百四十人近い生徒がいる。
その中で上位十人に入るのはアリアに関して言えば予想していなかったし、フレイヤも魔力だけではないので一位は無理だと思っていた。
それゆえの心からの称賛だ。
「けど、そのせいでソラに迷惑が……」
ソラはそのことに関しては何も心配していない。
「気にしなくていいよ。僕が二人と一緒にいるのは今日だけにするつもりだし」
なぜなら言葉通りソラは少なくとも学校が終わるまで、三年後ではない放課後までという意味だ、二人とかかわりを持つつもりはなかった。
二人とも成績を抜きにしても有名になるのは入学前から予想していた。
その二人とつるんでいればソラも注目されてしまうし、今の自分の評判から言えば二人に迷惑をかけるのはむしろソラの方となってしまうだろう。

「成績最下位が一緒にいたら二人に迷惑がかかるだろうしね」
フレイヤの名前にきずがつくのはソラとしても困るし妥当と思われる提案をしたつもりだった。
「嫌です」
「……ダメ」
二人同時に拒否する。
「けどそれだと二人に迷惑がかかるし……」
平穏な学園生活が送れない、後半を言わなかったのはよい判断だったと言えよう。
「それなら私たちが迷惑でないと言えばいいのですね？」
「私からもお願い……」
ソラはアリアに関しては彼女が迷惑でないというなら構わないがフレイヤに関しては彼女の名に気は付く可能性がある以上気は進まない。
しかしフレイヤにお願い、と言われた以上拒否するつもりはなかった。
「わかったよ。二人とも、けど後悔しても知らないからね」
ソラはこのように言いながらも二人に矛先が向くことはないと思っている。
むしろ矛先を向けられるのは……
「さあこんな話はもうやめにして食べましょう」
アリアがそういって食べ始める。

「そういえばどうして成績が最下位になったのですか？」
食事の合間にアリアが聞いてくる。
ソラの実力を知っている身からすれば不思議で仕方がないんだろう。
「魔法を間違えてね、桁を一つ少なくしてたみたいだよ」
そういうことだった。
ソラは結果をすべて偽装する際に間違えて桁を一つ少なくしてしまったのだ。

そのため全項目二桁の学園史上初めての人物となってしまったのだ。
「あなたにしては珍しいですね」
アリアが心底珍しそうに言う。
確かに珍しいことではあるだろう。
こんなことをもし危険区でしたら怪我することは確実だろう。
「まあたまにはこんなこともあるんだよ」
フレイヤが心配してミスしたのかもしれないとは言えなかった。

「ではまた放課後に」
そう言ってフレイヤと一緒に帰って行った。
アリアは放課後も一緒に帰るつもりらしい。
アリアの目的の一つではあるのでアリアからすれば当然である。
ソラは二人を見送るとすぐさま教室に帰ろうとした。
周りからひしひしと視線を感じるのである。
もちろんその視線は好意的なものではなく妬みなどの非好意的な視線だ。
アリアたちが去ってから一層強くなっている。
このままでは何をされるかわからないとばかりにソラは教室へと逃げかえった。
尤も教室に味方がいるわけでもないのだが。

第四話　告白（笑）

学校が始まってからもうすぐ一週間が経つ。
しかしソラはいまだにクラス内で友達はできていない。
その理由はこれだ。
「ソラ、早く帰りましょう」
「……ソラ、帰る」
≪時の巫女≫様と学年主席様がこぞって迎えに来るからだ。
これは帰りだけの話ではなく昼食の時も登校の時もだ。
登校時はフレイヤだけだったのが二日前まで、昨日からはアリアが迎えに来るようになっていた。
ソラにクラスメイトの視線が突き刺さるがこればかりは仕方がない。
もちろんソラもこれを避けるために一度昼食をクラスメイトと食べたことがある。
会話も何もなかったので一緒にと言っていいのかはわからないが。
その帰りから二人で迎えに来るようになったのだ。
ソラは荷物をまとめ立ち上がると緩慢な動きで二人の方へ歩いていく。
「じゃあ帰ろうか」
そう言って短い道のりではあるが三人は和やかな雰囲気で帰りだす。

◆◇◆◇◆◇

「私たちのクラスではこんなことがあってですね……」
アリアがおかしそうに話す。
帰り道で話される内容はその日自分のクラスであった面白いことや珍しいこと、それを話題にしたものだった。
帰り道が長いのであればこれだけの内容では足りないのかもしれないが寄り道しなければ十五分程度の道のりだ。

このくらいの内容がちょうどいいのである。
尤も学園内の校舎から寮に帰るだけで十五分というのはおかしいかもしれないが。
「そういえば」
そう言ってソラは荷物の中から箱を二つ取り出す。
「はいこれ」
中身は先日買った指輪とネックレスだ。
この二つをソラを介して二人に送ろうとしたのにはちゃんとした目的がある。
この二つにはソラがつい最近習った道具に魔法を付加する方法によってある魔法が込められている。
これをするためにわざわざソラを介して二人に送ることにしていたのだ。
無論そのことは二人にはいっていない。
これでソラは使い魔を飛ばして常時見張る必要もなくなる。
今夜からはゆっくり眠れるわけだ。
「ありがとうございます。一生大切にします」
「……ありがと」
二人が嬉しそうに、フレイヤは声だけだが、言ってくる。
喜んでくれるならソラもあげたかいがあったというものだ。
「どういたしまして」
しかしアリアの一生大事にするというのは無理だと思っている。
あの指輪は耐久度があり使いすぎると壊れる。
そのため込められた魔法を使いすぎると壊れる。
ソラの腕ではこれが限界だったのだ。
それを言うべきかいうべきでないかソラは迷ったがこの雰囲気に水を差すことはあるまい、と判断し黙っておくことにした。
あとで怒られる可能性があってもだ。
そうこうしているうちにソラたちの寮に着く。
二人が暮らしている寮はソラが貸切っているためソラとフレイヤの

二人だけしか住んでいない。
つまり郵便受けに何かあればそれはどちらかへの届け物ということだ。
今日も例外なくたくさんの手紙が届いている。
入学してからほぼ毎日フレイヤへのラブレターが何通も届いている。
ソラはそこらへんはフレイヤの自由にさせてやるつもりだったので当初は口をはさむ気はなかった。
しかし何気なく除いた手紙に教育に大変よろしくないようなことが書かれていた。幸いフレイヤはそのような知識もないため意味が分からず困惑していた。
そんなことがあったためその考えを改めた。
家に届く手紙はまずソラが目を通してからフレイヤに渡すことにしている。
「毎日フレイヤも大変ですね」
フレイヤも、ということはアリアも困ってはいるのだろう。
こればかりはソラにもどうしようもできないので助けることはできない。
二人とも人目を引く美少女なのでしょうがない、とソラは思っているが口に出したことはない。
「……アリアも」
フレイヤが相槌を返す。
「けど二人とも試しに付き合ってみたらよくない？案外いい人とかいるかもよ」
ソラがなんでもないことのように言う。
アリアとフレイヤは目で合図をし同時に左右の頬をぶつ。
左右からの攻撃のため衝撃の逃げ場はなくもろにソラにダメージがくる。
「なにするんだ」
重傷を負ったソラが言う。
「いえ、乙女心がわからない人には制裁を、と思いまして」

「……うん」
「まあ確かに手あたり次第っていうのはよくないかもしれないけどさ」
ソラは全く反省していない。
正確には反省はしているがアリアとフレイヤが思った方向に反省してはいない。
こんな会話をつづけながらもソラは手紙に目を通していく。
ここで変な内容のものを見つけた場合アリアにもその差出人の名前を教えるためだ。
一度二人とも同じ日に全く同じ人からラブレターをもらったことが発覚したためだ。
二人に届いたものを見ていくと同じ名前を見つけることが多かったため寮の前で手紙を開封するのは日課となっている。
そんな日課になってしまった悲しい作業中、ある手紙を見たときソラは激しく狼狽した。
教育によろしくない内容の手紙なら前にもあった。
かなり過激なものでは十八禁は免れないようなものまでだ。
それでもここまで狼狽はしなかった。
それほどまでにこの手紙は他の手紙とは違う箇所があったのだ。
内容ではない。
宛名だ。
フレイヤ宛てではなくソラ宛てになっていた。
「どうかしたのですか？そ、そのそんなにいかがわしい内容のものでもありましたか？」
アリアが心配して聞いてくる。
（平静を装うんだ平静を、心を無にして……）
「いやいつも通りの内容のラブレターだよ」
嘘ではない。
が、無論誰宛てにかは言わない。
「それならいいのですが」

ソラはさりげなく手紙をポケットの中にしまう。
それを見咎めたフレイヤが無言で手紙をソラのポケットから引き抜く。
「……説明してもらえます？」
アリアが笑いながら言ってくる。
もっとも目は獲物を見る猛禽のような目だ。
「いやこれはその……」
「その？」
「……」
（どうしよう、言い方間違えたら殺されそうな感じだ）
殺されそうは大げさな表現に見えるがアリアの目を見るとあながちウソでもないように思える。
「前に見たやつと同じ名前があったからフレイヤに渡す必要はないと思ったんだよ」
筋道は通っている。
一度断った相手のラブレターを一週間もたたないうちに再度もらっても了承するはずはない。
ならば渡す意味はほぼないだろう。
確かに筋道は通っている。
ソラの激しい狼狽を除けば、だが。
「そうですか。それならそう仰ってくれればいいのに」
アリアの態度が平時のものへと戻る。
幸いアリアはこのことには気付かなかった。
ちゃんと笑っている。
目も含めてだ。
「それではまた明日」
そういってアリアは帰っていく。
「僕たちも中に入ろうか」
ソラたちも寮の中へと入っていく。

◆◇◆◇◆◇

深夜、フレイヤも寝静まった頃。
（さあさああけるぞ、あけちゃうぞ）
ソラはこの上なくハイテンションだった。
理由は簡単ラブレターをもらったことは今までで一度もなかったからだ。
今までとは無論前世も含めてだ。
（差出人の名前は……なしか）
そのことに少しがっかりしつつも中身を確認する。
（なになに、明日の放課後体育館裏に来てください、これってやっぱり告白か？）
自問自答しながらもソラは手紙を何度も見る。
字体は女の子っぽい字だしソラは少しも疑っていない。
内容を確認したソラは明日着ていく服を考え始める。
ちなみに明日も学校があり制服以外で行くことはできないと気付くのはこの三時間後、それから間もなくベッドに入り寝ようとするが遠足の前の日の子供のようにそわそわして眠れずそこから眠るのにさらに三時間かかった。

◆◇◆◇◆◇

「ソラ、帰りますよ。起きてください」
アリアがソラの体をゆすりながら言う。
昨日ソラは寝て一時間もしないうちに目覚ましという名の悪魔に起こされ寝不足であった。
今日の時間割は基本科目の割合が高かった。
それなら寝ても問題ないだろう、その判断の元ソラは寝た。
無論基本科目の時間はすべてだ。
なお基本科目とはいわゆる数学や国語のことだ。

しかし一時間ごとに起きる余裕はソラにはなかった。
その結果基本科目に挟まれた選択科目――魔道具、補助魔法の授業のことだ――も寝ることになり今日は一日中寝ていた。
「……アリア？」
寝ぼけ眼でソラが問う。
「そうですよ。もう学校は終わりましたよ」
つまりは放課後ということだ。
寝起きのソラの頭はうまく回らない。
「そうだね。もう帰ろ……あ」
ソラは思い出した。
「ごめん、ちょっと先生に呼ばれてるから先に帰ってて」
もちろん思い出したのはこれではないしそもそもこれは嘘だ。
しかしこうでもしないと二人についてこられても困る。
これは根拠のないものでなく今までの短くはあるが学園生活における二人の行動から推測したものだ。
二人は授業のある時間以外はいつもソラと一緒にいる。
だから普通なら他人の告白に同行するなんてもってのほかだがこの二人は何をするかわからない、これがソラの考えだった。
告白されるのに彼女ではないとはいえ女連れで行くのは愚行にもほどがあるだろう。
「それでは仕方がありませんね。では職員室の前で待っておきましょう」
ソラの考えは見事に正解でソラの予想通りソラの予想していなかったことを言い出した。
普通職員室に呼び出された生徒について行こうとするだろうか、しかも一日中寝ていた生徒のだ。
もし本当に呼び出されているのであれば怒られるのは確定である。
先生の機嫌によっては自分自身も怒られる可能性があるというのに。
「大丈夫だから先に帰っててよ」

ソラはやんわり断ろうとする。
「しかし……」
「大丈夫だって」
同じようなやり取りが何度も続く。
「じゃあ二人は校門で待ってるっていうのはどう？」
ソラは譲歩した。
「わかりました。ただあまりに遅いと探しに行くかもしれません」
アリアは譲歩したとばかりに新たな条件を付けくわえようとする。
告白現場にアリアが来たら最悪である。
「わかった、じゃあ七時までに僕が来なかったら探しに来てよ」
今は四時過ぎ、あと三時間ある。
「いえ五時半で」
ソラの狙いはわざと遅すぎる時間を言って多少遅い時間くらいを言わせることだった。
ソラの想定していたのは六時でそれより少し早い時間だが問題はないとソラは判断し
「わかったよ。それじゃあ五時半までに校門に行くよ」
「わかりました」
「じゃあね」
そう言って二人は校門の方に歩いていく。
（助かった。一時間もあれば大丈夫なはず）
ソラは男子トイレへ走ると身だしなみを整える。
そこで実に十分ほどの時間を費やした。
そしてソラは体育館裏に向かう。
（かわいい子だったらいいな）
そんな妄想をしている間にもソラの足は進んでいく。
体育館裏まであと数メートル目の前を曲がればすぐだ。
緊張しすぎてソラはもはや何かを考える余裕はない。
ソラが目の前の曲がり角を曲がる。
そこに待っていたのは……総勢五十人は下らないと思われる男の群

れであった。
見れば上級生のような姿もちらほら見える。
「あれ、みなさんここでいったい何をやられていらっしゃるのでしょうか？」
予想外の出来事に思わず敬語になるソラ。
先頭のリーダーっぽい男、よくみれば額に誰かの名前が書かれた鉢巻をしている、が答える。
「それはお前を呼んだのがおれたちだからに決まってるだろう」
その瞬間から浮かれきっていてまともに働いていなかったソラの頭が急激に働き始めた。
さらに懐かしい記憶も次々とよみがえってくる。
「貴様は成績最下位の分際でこともあろうにフレイヤちゃんとアリア様を独占し……」
リーダーっぽい男が向上を垂れるがソラは聞いていない。
前世では平々凡々なソラが優花と大地の横にいたため不幸の手紙やらなんやらが月一で靴箱に入っていた。
二人には言わなかったが一度呼び出された場所に行ってみると全校生徒の約半分が待ち構えていたこともあった。
しかも男子だけでなく女子もいて「大地君を不純な道に堕とすな」とかも言われたことがある。
あの時は大地に八つ当たりをしたものだ。
この記憶がよみがえったのを境に今回おかしい点も次々と浮かび上がってくる。
そもそもソラはアリアとフレイヤ以外の生徒と話したことはない。
自分が好きになられる動機がないことにソラは気付く。
尤も自分の容姿に自信のないソラは一目ぼれという選択肢を消しているが客観的に見てソラの容姿はかなり整っている。
つまり自分が女子に惚れられる要素はない、それは呼び出されることがないということ。
そこまで頭が回ってようやくソラは言葉を口にした。

「僕の純情を返せ」
と。
大声で。
いまだに口上を垂れていたリーダーっぽい男はその声に驚いたが構わず向上を続ける。
「ここには二年生や三年生もいる、おとなしく俺たちフレイヤちゃんファンクラブ・アリア様ファンクラブ連合にに殴られるんだな」
ようは妬みである。
フレイヤとアリアの整った容姿に加えアリアの立場からすれば上級生でもお近づきになりたいのは当然のことである。
ソラの驚きのポイントはもうファンクラブができたことと驚いている。
まだ入学して一週間ちょっとである。
それだけフレイヤとアリアの人気が高いということだろう。
現実を見るのを放棄したのではなく穏便に済ますのは不可能。
そもそも穏便に済ませるつもりはない。
すでに全員を氷漬けにするだけの用意は整っている。
あとは効果範囲に入りさえすれば一瞬で氷漬けになる。
先頭の男が効果範囲まであと一歩、このタイミングでソラの後ろから怒声と言える声が飛ぶ。

「貴様ら、何をしている」

ソラには既視感を覚えさせるものだったが今のソラは誰が邪魔したのか、と頭に血が上っており気づいてはいない。
ソラもファンクラブ連合も一斉に声の主に視線を向ける。
それは街でソラを助けてくれたのと同じ深紅の髪の美少女であった。

第五話　報われぬ再会（1）

深紅の髪の美少女は平然とソラと男たちの間に割って入ってくる。
このままではこの少女が氷漬けになってしまうため慌てて、しかし表には出さず、魔法を解いた。
「もう一度問おう。貴様らはここで何をしていた？」
少女は見たものを射殺すような目線でファンクラブ連合を見る。
ファンクラブ連合の男たちも自分がやましいことをしていた自覚はあるようで誰も言葉を発さない。
リーダーっぽい男が言った。
「ここでレティシアファンクラブと争うのはまずい。総員撤退」
そう叫ぶや否リーダーっぽい男は真っ先に逃げて行った。
それに続いて他の男たちも次々とソラたちとは逆方向に逃げはじめる。
しかしソラの意識はすでに男たちになかった。
ファンクラブたちにもいろいろあることにも驚いたが何よりこの少女の名前、レティシアと言っていたのは聞き間違いだろうか。
ソラはそのことが気になりつつもやはりこの前と同じようにお礼を言う。
「ありがとう。また助けてもらったね」
「この間も言っただろう。当然のことをしたまでだ。それにどちらかというと私が助けたのはあちらの男どものようだしな」
そして今回もまた彼女はソラの魔法を見破っていた、正確には気付いていたようだ。
「この前も言ったけど買いかぶりだよ」
二人は以前と同じような会話をしている。
「別に警戒しなくても私は言いふらしたりはしないがな」
そんな性格でないのはこの少女がソラの予想通りの人物であるならソラはよく知っている。

しかし確信が持てないのは明らかに口調が違うからだ。
「この前も助けてもらったし今度お礼がしたいから名前を教えてもらってもいい？」
ソラは最も気になっていたことをさりげなく聞く。
「名前を聞くときはまず自分から名乗るべきじゃないか？」
思わぬ返しにソラは驚くも笑いながら言葉を返す。
「それは失礼。僕の名前はソラだよ。ソラ・シシュフォス」
ソラが名乗った瞬間、正確にはソラが名前を言った瞬間少女の表情は目に見えて変わった。
ソラは予想への確信を強めるがこの名前はこの学園では悪い意味で有名なので完全に確信はできない。
「そうか、ソラというのか……」
感慨深そうに少女はつぶやく。
「あれ？ソラって名前おかしかったりする？まあ学年最下位だからしょうがないかもしれないけど」
ソラはショックを受けたように装い聞く。
「いや、そういうわけではない。誤解をさせてしまったのなら謝ろう」
本当に申し訳なさそうな様子で少女は頭を下げる。
「ならなんでソラって名前に反応したの？」
ソラは半ば帰ってくる内容がわかっていながらも聞いた。
「昔の友達の名前と同じだったからな。つい反応してしまった」
昔の友達、これでソラの予想はほぼ確信に変わった。
「それでは名乗られたことだし私も名乗ろう。私の名前はレティシア、レティシア・オルレアンだ」
ソラにとって懐かしい名前が少女の口から返ってきた。
「へえ、君があの有名なオルレアン家の……」
ソラはおそらく普通の人が返すであろう受け答えをする。
「家のことは出さないでくれると嬉しい。私たちはそういうのが嫌でこの学園に来たのだからな」

レティシアの言っていることは本当だ。
彼女の、彼女らの友達が消えてからは自分達を対等に扱うのは2人になってしまった。
「てことは敬語とかもダメ？」
わかりきったことをソラは聞く。
「ああ、そうしてくれ」
「僕みたいな庶民には難しいけどできる限りそうさせてもらうよ」
「既に敬語でないではないか」
笑いながらレティシアは言う。
「それにしてもありがたい。ここにきても私たちを敬うような扱いしかしない奴らばかりでな。少しうんざりしていたところだ」
「それはそうでしょ。この学園には大陸中から人が集まるけどオルレアンさんみたいな名家出身はなかなかいないからね」
実際レティシアの周りに集まっているのはアリアやフレイヤに群がるような者たちの同類ばかりだ。
「しかしだな。ここは学園で対等な場ではないか。それなのに……」
愚痴をこぼすかのようにレティシアは言う。
いや、これは実際に愚痴をこぼしているのだろう。
今日知り合った――少なくともレティシアの中ではである――人に不満を漏らすほどレティシアは学園の生徒たちの態度が気に入らなかったのだ。
「それはしょうがないと思うよ。この学園で一生が終わるわけじゃないからね。それよりさっき私たちって言ってたけどオルレアンさんって兄弟とかいるの？」
ソラの記憶にはそんな人物はいない。
「すまないな。誤解をさせてしまったようだ。私たちというのは私の唯一二人の友達のことだよ」
ソラは唯一二人の、と聞いてわずかな、いやかなりの悲しみに見舞われる。
「唯一が二人って悲しい青春だね」

ソラはあえてその部分を茶化す。
ちなみにソラの方も学園にはアリアとフレイヤくらいしか親しい間柄な人はいないがそこは棚に上げている。
「私を対等に扱ってくれるのが二人しかいないのだからしょうがないだろう」
すねたような口ぶりでレティシアは言う。
不覚にも可愛いと思ってしまったソラはそれを悟られないように話題を変える。
「その二人の名前は？」
ソラにはもうその二人の名前はわかっているが流れとしては聞いておくべきだろうと判断した。
「この二人は私より位は高いのだがな。シルヴィア・アマルティアとリチャード・アマルティアだ」
今回も大げさに驚いたように装う。
「アマルティア王国の王子様と王女様じゃないか」
「だから言ったではないか。それに二人とも打ち解けてみればいいやつらだ」
「ふ～ん」
そんなことはソラにとっては既知の事実であるためそう驚いたりはできなかった。
「それより私のことばかり話しては不公平だとは思わないか」
「僕のことなんて話すようなことなんて何もないと思うけど」
「私が疑問に思っていることがいくつもあるのだ。それについて質問したいのだが……」
遠慮がちにレティシアが言う。
聞かれたらまずいことは誤魔化すつもりなのでソラも了承した。
「いいよ。僕の話せる範囲でいいなら何でも聞いてよ」
この時ソラは自分の失言に気づいていない。
しかしレティシアは気づいていた。
話せる範囲があるということは話せない秘密もあるということだ。

もともとからレティシアはこの少年を、ソラ・シシュフォスが気になっていた。
彼は≪時の巫女≫アリア以外で唯一フレイヤ・ルビンシュテインと接触しているの人間だ。
この学園に入れたルビンシュテインを名乗るものは彼女たちの代ではフレイヤだけだ。
さらにフレイヤという名前はルビンシュテイン壊滅の日にルビンシュテイン家にいた人物の名簿にもあった。
もし彼女があの日を生き残ったのなら彼の生死についてもしているかもしれない。
レティシアもシルヴィアもリチャードも、三人とも彼の死を疑っていた。
正確には嘘であってほしいと願っていた。
あきらめかけていた中彼女が、フレイヤが現れた。
フライヤはルビンシュテインの名を語りながらエリュシオン学園に入学している。
彼女たちにとって最後の希望である。
そのフレイヤと接触できる数すくない人物、だからいずれは一度訪ねようと思っていた。
レティシアはソラが魔法を使おうとしていたことを確信している。
しかしソラはそれを隠そうとしている。
そこには何らかの秘密があるはずだ。
ますます疑惑は深まった。
もっともソラが、ソラ・シシュフォスがソラ・ルビンシュテインであるとは思っていない。
髪の毛の色が違うのはともかく瞳の色が変わっている。
なによりソラ・シシュフォスがソラ・ルビンシュテインなら自分が名乗った瞬間に教えてくれるはず。
その信頼がレティシアには、レティシア達にはあった。
それ故に事実を見逃していることにはレティシアは気づいていない。

「そうだな……君が最下位な理由とかはどうだろう？」
レティシアは自分の最も気になることではないが疑う理由足り得ることを聞いた。
ソラにとってはあまり重要でないが積極的にばらせるようなものではない。
「僕はアリアの護衛だからね。実力を隠しとく方がいいと思ってね。尤もアリアは≪黒の魔術師≫って人も雇ってるみたいだけど」
半分本当で半分嘘、護衛ではあるが部下ではない、それに自分と≪黒の魔術師≫が別人ともいってない。
「なるほど。納得がいった」
レティシアはエリュシオン学園は教国が運営しているためアリアの伝手で成績を偽造したのだと勝手に思い込んだ。
しかし偽造するにしてもあそこまで極端にする必要はない。
「他には……ないな」
「いくつじゃなかったじゃないか」
「ああそうだ。最後に一つ聞きたいことがあった」
やけに必至そうにレティシアはなっている。
「何？」
思わず身構えながらソラは聞き返す。
「その……だな、友達になってくれないか？」
恥ずかしそうに、いかにも精一杯の勇気を出したかのような様子だ。
「あはははは」
ソラは思わず笑った。
「そんなことを言われると悲しいな。僕はもう友達のつもりだったんだけど」
本当は六年前からだが。
「そうか」
花が開くような笑顔にソラは数秒間見とれてしまう。
「それなら今度シルヴィアやリチャードも紹介していいか？」
それはソラとしては悪い予感がする提案ではあったがばれる筈はな

いと思っているので条件付きで了承した。
「もちろんだけどそれなら三週間後にしてほしいな」
三週間と明確に期間を設けたのにはもちろん理由がある。
「なぜだ？私と初対面で話せているのなら二人と話すために準備が必要というわけでもないだろう」
レティシアは疑問を口にする。
「それまでにアリアが殺される予定だからね。それを阻止しないと満足に遊べもしないよ」
レティシアやシルヴィア、リチャードは今も変わらずソラの守るべきものだ。
ソラはそんな三人を必要以上に危険な目にあわせるつもりはない。
「なるほどな。それなら私だけならたまに話に行ってもいいか？」
「たまにと言わず毎日でもいいよ」
社交辞令のように言ったが本心とは真逆である。
シルヴィアやリチャードと会うのはあまりにもレティシアが嬉しそうなためつい了承したが本来あまり関わるつもりはなかった。
神を名乗る男が来たときソラの狙われ方は何とも曖昧なものだった。
この前は血筋だったが今回はどのようなものかわからない以上自分が関わっては三人に迷惑がかかる。
それでは三人が幸せになれない。
ソラと関わらない。
これがソラの考えた三人の幸せだ。
「それじゃあ僕はアリアたちを待たせているからもう帰るとするよ」
もうすぐ五時半だ。
アリアのことだから間違いなく五時半になった瞬間からソラを探し始めるだろう。
「そうだな。私もシルヴィアが寮で待っているだろう」
そう言って二人はわかれた。

◆◇◆◇◆◇

「ごめんごめん、結構待たせたね」
ソラは形だけの謝罪を口にする。
「別にかまいませんよ。私たちが待ってると言ったのですし」
「……今度、ケーキ。」
フレイヤはここぞとばかりねだる。
「わかったよ。今度何か買いに行こうか」
「それなら私も行って何か買ってもらいたいです」
思いついたようにアリアも便乗する。
「……わかったよ。今度三人でどこか行こうか。」
ここで争っても負けは見えているためソラはおとなしく白旗を上げる。
このペースで奢らされていると休み期間の依頼をさらに増やさなくてはいけなくなるかもしれない。
その可能性にソラは柄にもなくため息をついた。
「さあ帰ろう」
気分を変えるようにソラは口にし、帰路へとつく。

◆◇◆◇◆◇

「あらレティシアずいぶん楽しそうね」
帰ってきてからずっと嬉しそうな顔をしているレティシアにシルヴィアが聞く。
「ああ。ソラ・シシュフォスと話したのだがなかなか面白いやつでな」
レティシアが嬉しそうに口を開く。
「あなたがそんなに嬉しそうってことはそのソラ君は敬語じゃなかったのね」
確信しながらもシルヴィアは聞く。
シルヴィアたちに負けず劣らずレティシアもそういう扱いが嫌いだ。

いや、嫌いになったというべきか。
だからそういう扱いをされたことを喜々として話すことはないとシルヴィアは思っている。
「ああ」
「それはよかったわね。けれど今はそっちよりもこっちよ。やっとそのソラ君とフレイヤ・ルビンシュテイン、いえフレイヤ・ヴィノクールの情報が届いたわ。明日接触するわよ」
シルヴィアたち三人が入学してすぐにフレイヤに接触しなかったのは情報が少なかったからだ。
本当にルビンシュテインかもわからない、証拠となりそうなのはエリュシオン学園に入学できたことだけ。
しかし途中経過を聞くごとに可能性は高くなっていった。
だから完全に情報が届くまで待機していたのだ。
尤もルビンシュテイン壊滅の日からつい最近までの足取りはつかめなかったのだが。
「そうだな。ついにか、ついにソラの居場所がわかる」
レティシアは感極まったように言う。
彼女の名前からしてもソラについて何かわかる可能性は非常に高い。
もちろんわかることの中には
「死んでいるかもしれないわよ」
シルヴィアは無情にもその可能性を口にする。
「そんなことを言ってもお前も死んだとは思っていないのだろう」
「いいえ。思いたくないだけよ」
そう言ってシルヴィアは無言になり窓の外を眺めはじめた。

第六話　報われぬ再会（2）

ソラへの告白騒動（笑）があった次の日の昼、アリアとフレイヤはシルヴィア達三人に捕まっていた。

「何か御用ですかシルヴィア王女？」
やんわりとした表情でアリアが聞く。
が、こうしている間にもソラとのランチタイムの時間は減っていくので心中穏やかではない。
いつもの有象無象のように無視しなかったのは今自分のところに来ているのが仮にも一国の王族だからだ。
「ええそうですわ。用事があるのはフレイヤさんに、ですが。とりあえず場所を移しません？聞かれたらまずいこともあるでしょうし」
今ここの集まっているのはフレイヤを除けば将来国政にかかわるであろう人材だ。
気づかずに機密を周囲に聞かせるのはまずい。
これにはアリアも同意なのでおとなしくシルヴィアたちの後ろについていく。
フレイヤはわれ関せずといった様子で一人ソラの待つ食堂へ行こうとする。
「フレイヤさん、どこに行こうとしているのですか？」
「……食堂だけど？」
何を馬鹿なことを、そう目で語りながらフレイヤは言うが他の四人――アリア含む――からすれば馬鹿なことをしているのはフレイヤである。
「この人たちがお話があるそうですから食堂はそのあとですね」
アリアがなだめる。
「……ケーキ」
簡潔なフレイヤの要求。

「わかりました。ソラに頼んでおきましょう」
そう言ってアリアはフレイヤの手をつかんで再度歩き始めた。

シルヴィア達がアリアたちを連れてきたのは体育館裏、ソラが昨日無残にも散った場所である。
「そういえばアリア殿、ソラ君は君の護衛らしいな」
アリアはなぜこんなことを聞いてくるのか不思議に思った。
「確かにそうですが、なぜ急にそんなことを？」
そもそもアリアはソラがレティシアと会ったことを知らないため殊更不思議だった。
「昨日ここで放課後にソラ君と会ってな、その時にいろいろと話したのだ」
レティシアは嘘はついていない。
しかしこれを言うとある人物の嘘がばれてしまう。
「……そうですか、ソラは嘘をついたのですか」
修羅のような雰囲気がアリアから噴き出る。
レティシアもこれはまずいと思いどうにかしようとする。
「君は彼以外にも≪黒の魔術師≫殿も護衛に雇っているのだろう。そんなに命の危険が大きいのか？」
レティシアの懸念は尤もだ。
二つ名もちを護衛に呼ぶほどの事態、よほどのことと思うのが普通である。
ソラを雇ったのは単純にその実力もあるが下心も満載なアリアである。
「え、ええ。そうです」
焦って誤魔化したのも当然と言えよう。
結果として先ほどの雰囲気はなくなったのでほっとするレティシア。
「それは大変だな、私も加勢しようか」
レティシアは親切心で言っているのだがアリアには、というよりソ

ラには都合が悪い。
「大丈夫ですよ。お心遣い痛み入ります。そういえばソラはここで何を？」
自分たちをだましてまでやっていたこと。
アリアは勿論フレイヤも気になっている。
「事情は分からないがこの学園の男子数十名と戦闘を始める直前だったぞ」
この言葉に驚くアリアとフレイヤ。
先生に怒られているのではなく怒られる行為をしていたというのだ。
「わ、わかりました。後でソラに事情を聴いてみましょう」
何か事情があったのかもしれない、アリアはそう考えた。
無論正直に言えばソラの命運が尽きるだろう。
正直に告白と間違えて乱闘になりかけましたと言ったら保健室は免れない。
「そんなことはどうでもいいでしょう。それより本題に入りましょう」
シルヴィアが仕切りなおす。
「そうだったな」
レティシアも表情を引き締める。
それだけ彼女らにとって重要なこととということだろう。
「フレイヤさん、あなたがルビンシュテインの血を引いているというのは本当？」
シルヴィアは単刀直入に聞いた。
はぐらかしたら自分の得たい答えすらもはぐらかされる恐れがある。
それだけは避けたかった。
「ええ、彼女はルビンシュテインの血をひいています」
フレイヤの代わりに答えたのはアリア。
ソラからフレイヤのことを任されているアリアはフレイヤが拙いことを口にしないようにソラに対して気を使ったのだ。
「すまない。アリア殿私たちはフレイヤ殿に聞いているのだ。余計

な口出しは遠慮願いたい」
そう言ったのはレティシア。
彼女もやっとたどり着いた手がかりがフレイヤであるため横槍を入れられるのは面白くないようだ。
「しかし……」
アリアもソラから任されたという責任感があるため反論しようとするが
「いい加減にしてくださらない？私たちはフレイヤさんに聞いているの」
王とでもいうべき威厳をもった発言。
アリアも方針を変えフレイヤが拙いことを口走ったら口をはさむことにした。
それを確認したのち再びシルヴィアは問うた。
「フレイヤさん、あなたがルビンシュテインの血を引いているというのは本当？」
「……本当って聞いてる」
フレイヤは聞かれたことを自分の知っている限りきちんと話している。
「それならあなたはフレイヤ・ヴィノクールで間違いない？」
「もともとはそういう名前だったって聞いてる」
フレイヤは可能な限りこたえている。
「誰に聞いたの？」
「……それは言ったらダメだって言われてる」
これはソラがフレイヤに禁止していることの一つだった。
シルヴィアは盲点ともいえるべき場所をついた。
「なぜ聞く必要があったの？」
「……私の記憶がないから」
これはフレイヤがソラから聞かされた真実である。
正確には記憶と人格がない、そうソラからフレイヤは聞いている。
しかしこれは事実ではない。

この場で真実を知っているのはアリアだけだ。
アリア自身もこのことを聞いたのは学園に入学する直前だ。
「なぜ記憶がないかは？」
ここで引くシルヴィアではない。
彼女にとってこれが唯一ソラと自分たちをつなぐかもしれない糸なのだ。
「……それは教えてくれなかった」
ソラが教えなかったのはフレイヤにショックを与えないためだ。
「あなたはあの日、ルビンシュテイン家が壊滅した日その現場にいた？」
このあたりからがシルヴィアたちが最も欲している情報だ。
「……いたって聞いてる」
「それならあなた以外に生き残りはいるの？」
これこそがシルヴィアたち三人が最もほしい情報だ。
ソラの生死、それだけが唯一シルヴィアたちのほしい情報だった。
「……それは……」
フレイヤが言いよどむ。
フレイヤはそれに関してソラから直接聞いたわけではないが自分が聞いた話から考えるといないはずである。
なぜならフレイヤはこう聞いているからだ。
「あの日生き残ったのはただ一人です」
横から口を出したのはアリア。
これと同じことをソラは言っていたからだ。
フレイヤが聞いた内容とも一致している。
「先ほども言っただろう。君は黙ってい……」
「待ってレティシア。アリアさん、あなたがなぜそれを知っているの」
ルビンシュテインはアマルティア王国の貴族だ。
その王族すらも知りえない情報をどうして他国のものが知っているのか。

その答えは簡単である。
「私はフレイヤさんをこの学園に引き取るときにすべてを聞きましたから」
アリアはソラからすべてを聞いている。
少なくともアリアはそう思っている。
だから本当にシルヴィアたちがほしい情報を持っているはアリアなのだ。
尤もアリアの方が用心深いため聞き出すのはさらに難しくなるが。
「それなら教えてくださらない、ルビンシュテイン壊滅の日に何があったのかを」
ここで遠回しな表現をしたのはシルヴィアが生き残りは一人でフレイヤは生きている。
つまりソラは死んだということになる。
そのことから目をそらしたいからかもしれない。
「あの日、ルビンシュテインの継承式の最中に大量の魔物がルビンシュテインの屋敷を襲撃したそうです。それによって参加者は一人を除いて死亡。今フレイヤさんが生きているのは≪黒の魔術師≫様のおかげです」
アリアは意図的に情報を隠した。
これはソラに頼まれていたことである。
「そう、それはつまりソラは……」
一同は暗い雰囲気になる。
「待ってくれ、やはり私たちは≪黒の魔術師≫殿に直接話を伺いたい。どうか彼の正体を教えてはくれないかな？」
こういったのは今まで沈黙を保っていたリチャードである。
彼はアリアが何か隠したことをぼんやりとではあるがわかった。
しかし隠すということはアリアの口から出ることはないはず。
なら直接本人に聞くしかない。
そう思っての発言だった。
「申し訳ありませんがそれはできません」

もともとソラが正体を隠したのはソラ・ルビンシュテインの存在が消えたと思わせるためである。
それをおいそれとばらすわけにはいかない。
しかも最もソラが大切に思い巻き込みたくないと思っている人たちに、だ。
「どんなに頼んでもダメなのかい？」
「すみません。これだけは……」
あっさり引くリチャード。
「そうか、ならいいよ。その代わりひとつ聞かせてくれ・君の護衛として今≪黒の魔術師≫殿はこの学園にいるのだな？」
ソラがうかつにも話しているため否定はできない。
「……はい。少なくとも今月中は」
これがアリアのせめてもの抵抗であった。
ソラは三年間いる予定のはずだが護衛はあの予言の期間内だけだ。
「そうか。ありがとう。すまないな、昼食の時間が減ってしまった」
「いえいいですよ。それでは」
アリアとフレイヤは去ろうとする。
「私たちもご一緒させてもらっていいかしら？私たちもいつも三人ではさびしいのよ」
リチャードの言葉で多少元気を取り戻したシルヴィアの提案。
「全然かまわないよ」
そういって体育館の陰から出てくるのはソラ。
いきなりソラが出てきたことにその場にいるリチャード以外は驚いて言葉を失う。
リチャードだけはソラの顔を何度も視ては考えるような顔をしていた。
「アリアもフレイヤもひどいなあ。僕が食堂で一人さびしく待っているのがどれだけ居心地が悪かったことか」
にこやかに笑いながら言うソラ。
だが気まずかったのは確かである。

周りからの視線に好意的なものも一切なかったため猶更であった。
「それにしてもこんなところで何をしていたの？アリアにフレイヤにオルレアンさんに……誰？」
さも初対面のようにふるまうソラ。
アリアがその様子を悲しげな表情で見ていたことにソラは気付かなかった。
「この前言っただろう。シルヴィアとリチャードだ」
レティシアが二人を紹介する。
「よろしくお願いします王子殿下、王女殿下、って言った方がいい？」
一応の確認、この二人がそういうのを嫌うことをもちろんソラは覚えている。
「いえ、素の口調で構わないわ」
「そうだね、シルヴィアの言うとおりだよ」
「それならそうさせてもらうよ」
ソラは今日で三人全員と会ったことになるがリチャードとレティシアの変わりようには驚いていた。
二人とも口調やら行動やらが三年間の間でずいぶんと変わっているからである。
しかしこれは本来ソラの望む形ではない。
ルビンシュテイン家のように巻き込むかもという懸念があるからである。
それはともあれとりあえず場は落ち着いた。
「そういえばソラ、昨日はどうして私たちを騙してまで体育館裏にいたのですか？」
アリアから落とされる爆弾、それにソラは……
「ちょっと用事ができたからまた帰りね」
逃げた。
問答から物理的に、具体的にいうと走って逃げた。
単純にアリアからの爆弾から逃げたのかそれともレティシアたちと

一緒にいることから逃げたのか。
ソラ本人ですらもわかっていなかったかもしれない……

第六話　報われぬ再会（２）（後書き）

来週から期末テストなので更新を一時止めさせてもらおうと思います。
再開は１２月ごろからにさせてもらおうと思っています。

第七話　模擬戦（前書き）

お待たせしました。
待ってくれた方がいらっしゃるかどうかはわかりませんが（笑）
面白いと思っていただけると幸いです。

第七話　模擬戦

今ソラの目の前にある競技場――野球ドームのようなものだ――では月に一度あるという学年別チーム対抗試合が行われている。
エリュシオン学園に入る生徒の戦闘技術や知識が少ないということはかなり珍しい。
しかし、その中に実戦を経験したことのあるものはほぼいない。
実戦では教科書に載っているような対応では対処しきれない場合も多く存在する。
また、実戦でしかわからない自分の癖や弱点というものもある。
それらを克服させるために行われているのがこの学年別チーム対抗試合だ。
要するに実戦慣れをさせるための訓練だ。
試合と言っても極力実戦に近づけているためルール等はほとんどない。
生徒をチーム単位で二つに分け、その二つを戦わせる。
それだけだ。
チームとはそもそも生徒が組まされるグループのことだ。
この学園から出た場合多くの生徒は冒険者ギルドに入る。
そこでは一人ではなく数人で依頼を受けるのが普通だ。
依頼もその人数を想定して作られている。
だからこそ一人でAランク以上の冒険者は二つ名が与えられ尊敬されるのだが。
しかし学園から出ていきなり複数人で依頼をやれと言われても一人とは勝手が違い依頼の失敗率が高くなってしまう。
そのためこの学園では一年のときから一年間の契約で生徒たちにグループ、チームを組ませる。
複数という状況に慣れさせるためだ。
このチームは一度組んだらほとんど卒業まで変わることはなく、卒

業後もそのチームでギルドの依頼をこなすことも多いようだ。
このチームの組み方は生徒の自由で人数制限は一応ないが大体五人以上十人未満というのが普通だ。
この学年別チーム対抗試合ではそのチームのメンバーの成績そのチームのレベルを測りそのレベルが均等になるようにチームを二つに振り分ける。
今回はまだチームに所属していない人も多く単純な成績だけで分けたようだが。
こうやってなるべく実力が拮抗した状態で試合を行わせるつもりなのだ。
あとはせいぜい刃のついた武器の禁止、殺傷または再起不能に至るレベルの魔法の使用禁止くらいだ。
これだけではさすがに危ないので参加するものには全員一定以上の防御力を持った装備に加え、それに衝撃緩和などの魔法を込めていることが必須条件だ。
この学年別チーム対抗試合には戦闘科を取っている者はもれなく全員参加が義務付けられている。
任意ではない、義務だ。
しかしソラの所属している装備科は戦闘科を取っていないため参加は任意だ。
その理由は一学年にチームは少なく見積もっても三十はできるが装備科は人数が二十人前後、一つのチームに一人とはいかないからだ。
装備科が造る武器はそこらの店で売っている物よりもよほど質がいいためその支援を受けられるか受けられないかでは戦力に大きな差ができるからだ。
それでも装備科の人間がチームに所属することは許されているがそのチームだけに何か作るのは許されていない。
しかし同じチームの人に優先的に武器を作るのは認められているため優秀な装備科の人間はいろいろなチームに引っ張りダコとなる。
正式なチーム申請は来月の強化合宿が終わった後からだがすでにチ

ームの骨格ができているところは多い。
それらのチーム（仮）は装備科の生徒をひきいれようと勧誘しているところも多い。
尤もソラのところに来た例はないが。
ソラの周りには装備科の生徒が数人いるが他の生徒はこの試合に参加している。
参加しない装備科の生徒や怪我などで参加できない生徒は特別観覧席で試合の様子を見ている。
ここは年に一回あるチーム対抗試合――学年別ではない――が行われる際に各国の騎士団などが有望な生徒を見極めスカウトするための席だ。
そこで参加しない生徒と救助隊は観戦している。
もちろんこの参加しない生徒にソラは含まれている。
（フレイヤたちは大丈夫かな）
この会場は途方もなく広くまた実戦を想定しているため様々なフィールド――今回は森だ――になるため生徒一人を探すのは困難を極める。
「フレイヤ君たちが心配かね？」
ソラに話しかけてきた白髪の偉丈夫、学園長ヨハン・エメリッヒだ。
「僕などが学年主席のフレイヤや≪時の巫女≫アリアを心配できる立場ではないでしょう」
ソラは当たり障りのない回答を返したつもりだ。
敬意が微妙にかけていることに関しては気付いていない。
「心配とは立場が関係するものではないよ。相手が大切であれば大切であるだけするものじゃよ」
年長者らしい諭すような学園長の言葉。
言葉に詰まるソラに学園長はさらに言葉を重ねる。
「それに君は本当はアリア殿の護衛なのだろう。護衛である以上君はBランク相当の実力はあるのだろう。参加すれば君の悪評も多少はなくなるだろうに」

その情報をどこで知ったのか、そう問おうとしてソラはやめた。
相手は≪超人≫ヨハン・エメリッヒだ。彼の二つ名は常人では明らかにできないことを平気でやってのけるためにつけられたものだ。
これもまたその一環だとソラは思ったのだ。
「目立つと護衛の仕事に差し支えますし、あなたもいるのなら大丈夫でしょう」
やはり敬意はこもっていない。
「儂は見ての通り老いぼれにすぎんよ。君はアリア殿の護衛だというなら君が≪黒の魔術師≫殿で間違いないかのう？」
学園長がわざわざソラに話しかけてきたのはこの質問をするためだろう。
「いいえ違いますよ。僕なんかが彼と並ぶなんて笑い話にもなりませんよ」
ソラは間髪入れずに答える。
こういうのは戸惑ったら負けだとソラは思っているからだ。
「どうしてそんなに彼のことを知りたがるんですか？」
学園長は困ったように頭をかきそれから答え始めた。
「この学園では二つ名持っている生徒は生徒会に入ることが義務付けられているのじゃよ。その理由は生徒通しのいざこざを解決するのが生徒会で実力行使の場合もあるからじゃ。しかし二つ名もちが生徒会の席を全て占める必要はなくあいている席は二つ名もちでなくともよい。しかし今年は異例とも言える二つ名もちの入学……があったかもしれないということで生徒会は人事で困っているらしくてのう」
なるほど、ソラはそう思った。
確かに生徒会を実力的にも優位に立たせておけば目立った違反行為などは起きないだろう。
納得の選択ではあるがそれで学園長自らが≪黒の魔術師≫を探している理由がソラにはわからなかった。
「だから生徒会長が儂に言ってくるのじゃよ。いるのかいないのか

はっきりさせろ、と。いるなら誰なのかおしえろ、と」
「なんでそれで学園長が動いているのですか？」
「生徒会に孫がいてのう……」
要するに≪超人≫といえど人の親、いや人の祖父ということだろう。
「とはいえアリア殿に聞いても教えてくれそうにない。怒らせでもしたら大変だ。女性は怖いからのう。だから君に聞いているのじゃよ」
情けない人だ、ソラの学園長への評価は下降が続いている。
「そんなことを言われても僕からは何も言えませんよ。女性も怖いことは認めますが二つ名もちも怒らせたら怖いですからね」
「そこを何とかしてくれないかね」
「無理ですね」
「頼む」
もはやどちらの立場が高いかわからない。
「学園長、侵入者です」
ソラと学園長の問答を遮ったのはマルセル、補助魔法を担当する教師だ。
「人数と場所は？」
先ほどの情けない様子などみじんも想像させない威厳のある態度と言葉
「人数は一名、場所は競技会場です。」
「ということはアリア殿の暗殺が目的のようじゃのう。警備のものは？」
「既に向かっておりますが何分この競技場は広いので……」
「そうか、ならば儂も出るとするかのう」
「学園長自らが？」
マルセルは驚く。
たかが賊一人のために学園長が出ようとしているのだから。
「大事な生徒を守るのも学園長の役目じゃからな。それに狙いがアリア殿なら≪黒の魔術師≫殿と会えるかもしれんしのう」

ソラの方を見る学園長
「君も来るかね？」
ソラの答えは決まっている。
「いえ、結構です。アリアはあるものを≪黒の魔術師≫さんに渡されていますから」
「そうかね。それなら私は行くとするかのう」
気づけば学園長は目の前にはおらずいずこかに消えていた。
（これが≪超人≫か……）

◆◇◆◇◆◇

ソラが学園長と歓談（？）をしていた頃アリアはフレイヤと対峙していた。
迫りくる魔法の雨を紙一重でアリアは躱していく。
アリアとフレイヤは別チームに振り分けられた。
そしてここでは今総力戦が行われている。
両チームの主力の一人である二人がぶつかるのもまた必然と言えた。
「甘いですよフレイヤさん」
フレイヤが使っているのはこの学園に来る前にソラに教えられた魔法の一つだ。
魔法「極光」
ソラが創った魔法の一つだ。
魔力を込めた分だけ指定された魔法を連続で放つというもの。
効果はそれだけだ。
放つ魔法によって威力がかなり変わる。
ソラが教えたものは各属性の使用が許可されている魔法すべてからランダムで放つというもの。
本来の用途はまた別にある。
フレイヤはそれを使って最前線で相手を蹂躙しているところにアリアが割って入ってきたのだ。

アリアが割り込んでなければそのまま本陣まで突き進むような勢いであったためこちらにはアリア以外にも主戦力級の生徒が何人かいたがやられてしまった。
なにしろ魔法が雨のように降ってくるのである。
雨の一粒一粒を全て躱すなんてことは常人であれば不可能である。
しかしアリアは何事もないように次々と魔法を躱していく。
そして時折フレイヤに向かって魔法を放つ余裕さえある。
「んっ」
アリアの放った魔法がまるでフレイヤの放つ魔法をよけるかのようにしてフレイヤに向かう。
しかしそれをフレイヤは魔力障壁によって防御する。
フレイヤは記憶や人格と同様に技術も失っている。
魔法を同時に二つ以上使えるほどの腕はまだない。
そのためソラはわざわざ「極光」を教えてフレイヤの成績が下がらないようにしたのだ。
障壁を張る代わりに「極光」が途絶える。
その瞬間隠れていたアリア側の生徒掛け声をあげながらが次々と周りから出てくる。
フレイヤは純粋な魔術師である。
接近戦は専門外である。
近づいてくる生徒に魔法を放つが間に合わない。
一人の生徒の剣がフレイヤに後ろから迫る。
フレイヤはその生徒に気づいていない。
鉄の打ち合う音、慌ててフレイヤは後ろを振り向く。
後ろにいたのはレティシア、フレイヤに振り下ろされる剣を防いだのもまたレティシアだ。
「フレイヤ、よそ見は禁物だ」
そう言ってフレイヤに襲いかかってきた生徒に一閃、その生徒は地に伏した。
そしてレティシアに周りの敵を任せているうちにフレイヤは再び「

極光」を展開。
蹂躙を開始する。
（……きりがありませんね）
先ほどから自分がフレイヤの魔法を消すとフレイヤに周りの生徒が襲いかかり、フレイヤの護衛がそれを防ぎながら時間稼ぎ、その間にフレイヤは魔法を展開しなおす。
その繰り返しであった。
アリアがフレイヤの「極光」を躱せているのはアリアが一瞬後の光景を予言しているからだ。
いくら雨のように降ってきていると言っても落ちる場所がわかれば躱すことはたやすい。
とはいえ無制限に使えるものでもないためフレイヤの魔法を消した後は近くの物陰に隠れ体力を回復させている。
あの二人、レティシアとフレイヤを崩さない限りアリアのチームに勝機はないだろう。
不幸中の幸いともいえるのはレティシアも「極光」の発動中はフレイヤに近づけないということだ。
きりがなくともここでやめればフレイヤはまた進軍を開始してしまう。
アリアは再び降り始めた魔法の雨の中に突入した。
その背中を狙うものがすでに近くまで来ていることを知らずに。

◆◇◆◇◆◇

≪超人≫ヨハン・エメリッヒがフレイヤとアリアが戦っている場に到着したのはソラと別れてから実に十分も経っていなかった。
彼は目の前で行われていることに戦慄せざるを得なかった。
一方の少女はとても入学したばかりとは思えないような、そしてヨハンですらも今までに数度しか見たことのないような量の魔法を平然とうち続けていた。

方やもう一方はと言えばその魔法の雨と表現するにふさわしいものを平然と躱し、もう一方の少女に魔法をうつ余裕さえ見せている。
この学園で彼女らと同等の力量を持つ生徒は何人いるだろうか、二年や三年を含めてもそう数が多いとは思えない。
ヨハンが彼女らの様子を見守ること更に十分、アリアの後ろから明らかに生徒ではない黒づくめの男がアリアに斬りかかろうとしている。
アリアは今目の前の光景を予言しているため後ろまで気が回っていない。
ヨハンが気付いた時には既に黒づくめの短剣はアリアの喉もとまで迫っていた。
間に合わない、ヨハンはそう思った。
ヨハンとアリアには距離にして約百メートルの間がある。
この程度の距離ならヨハンなら数秒の間につめることができる。
しかしもう黒づくめの刃はアリアに当たる寸前、その数秒すらも命とりである。
フレイヤもレティシアもこのことには気づいていない。当然ほかの生徒もだ。
黒づくめの凶刃を防ぐ手立てはない。
黒づくめの短剣がアリアに突き刺さろうとした。
アリアの肌に触れる一瞬前、突如黒づくめの短剣は弾かれた。
気づけばアリアの指、正確には指にはまっている指輪が光を発している。
アリアの経つ地面にはいつの間にか魔法陣が描かれている。
魔術師なら一目でわかるが魔力障壁である。
もちろんソラの渡した指輪が発動したものである。
この魔力障壁はソラのオリジナル、指輪に注ぎ込まれた魔力を使いあらゆるものから魔法陣内を守るものである。
これにはソラが魔力を馬鹿みたいに込めているためやすやすとは破られない。

アリアはこの時点で襲撃者の存在に気づいた。
自分の身が障壁によって守られていることを確認したためアリアはその場を動かない。
ソラの魔法だと分かったため心配する必要がないと判断したのだ。
黒づくめは間をおかずに何度も障壁に斬りかかる。
本来の魔力障壁なら何回も攻撃すれば意外と簡単に破れるものであるので本来なら黒づくめの判断は妥当と言える。
黒づくめの短剣以外にもフレイヤの「極光」も命中しているのだからなおさらだ。
アリアの動きの不自然さにフレイヤとレティシアは戸惑う。
一点に止まって的になるようなことをしているのだ。
不審に思ったフレイヤは「極光」を解く。
罠の可能性を考えたのだ。
「極光」が解かれそれによって起こっていた砂煙が徐々にフレイヤとレティシアの視界を鮮明にしていく。
二人が目撃したのは明らかに生徒ではない黒づくめがアリアが作ったように見える魔力障壁を攻撃している様子、即座にレティシアはアリアの方へ走りだしフレイヤは魔法を唱え始める。
アリアは攻撃しようにもすべてソラの魔力障壁に阻まれ何をすることもできない。
自分に戦闘態勢をとっているレティシアとフレイヤを視界に映した黒づくめは逃走を開始する。
しかし黒づくめよりもレティシアの方が速い。
暗殺者とまっとうな騎士の差であろう。
レティシアは逃走しようとしている黒づくめに斬りかかる。
刃はないが鈍器としても充分に使える模造剣が黒づくめを襲う。
黒づくめはそれを持っていた短剣で受ける。
空いた手で新たな短剣を取り出しそれをレティシアに投擲。
両腕が塞がっているレティシアは横に飛びずさってそれを回避。
レティシアの後ろからはフレイヤの魔法「炎の槍（フレイム・ランス）」が放たれる。

黒づくめはそれに対し魔力障壁を展開、相殺することに成功する。
本来の魔力障壁の使い方はこのように相手の魔法や攻撃と相殺することだ。
黒づくめはそのまま逃走を図る。
レティシアは再び黒づくめに斬りかかる。
黒づくめは懐から次々と短剣を取り出しをを投擲しながら距離をとろうとする。
レティシアは飛んでくる短剣のせいで思うように動けず黒づくめとの距離がどんどん離れていく。
レティシアは短剣を無視して黒づくめを追い始める。
頬、腕、脚、様々なところに短剣が掠め傷ができるが致命的な部位に当たりそうなものはすべて弾いている。
レティシアはついに黒づくめに追いつく。
追いついたことに対するかすかな安堵、それがレティシアに隙を作る。
黒づくめはそれを見逃さずレティシアの脚をめがけて短剣を二本投擲、油断していたレティシアは反応できずにそれを受ける。
今までの訓練ではありえなかった刺し傷による痛み、思わずレティシアはうずくまる。
黒づくめは勝利を確信し逃走を再開しようとする。
黒づくめは気付いていない、アリアの周りにあった魔力障壁が消えて、アリアが攻撃できるようになったことを。
アリアはこの光景を予言していた。
レティシアがうずくまった瞬間アリアの「水の槍（ウォーター・ランス）」が間髪入れずに黒づくめに飛ぶ。
魔力障壁を張る間もなく黒づくめに命中、黒づくめは衝撃で吹き飛ばされる。
そのまま黒づくめは背後にあった木に激突、そのまま動かなくなる。
「大丈夫？」
「大丈夫ですか？」

フレイヤとアリアがレティシアのうずくまっている方に駆けよる。
「傷自体は深そうではないのだがな……」
三人はレティシアの脚に目を向ける。
そこには短剣が二本刺さっていた。
血が出るため短剣は抜かれておらず、生々しいありさまだ。
とても歩けるようには見えない。
今アリアたちがいる場所はちょうど森の中央あたり、女性二人で人一人を運ぶには厳しい距離だ。
更に間違って今もなお試合をしている生徒から攻撃されるかもしれない。
三人はお互いいい案も出ず頭を悩ませていると
「その心配はない、儂が運ぶからのう」
そんな声がアリアたちの後ろから聞こえてくる。
言うまでもなくヨハンだ。
「すまんのう。もうちょっと早く来てもよかったのじゃが君たちの戦いぶりをもう少し見ていたくなってのう」
それは暗にレティシアたちの戦いが素晴らしかったと言っているのだ。
「さあレティシア君の傷も深そうじゃ。早くこの森を出るとしよう。君たち二人も念のため来たまえ」
そういうとヨハンはレティシアに肩を貸し、空いている方の手で黒づくめを担ぐ。
「心配しなくても儂の近くにいれば生徒が間違って攻撃することはないじゃろう」
生徒どころかその黒づくめでも攻撃はしないだろう。
アリアとフレイヤは黙って後ろについて行った。

第八話　食事

「オルレアンさんごめん」
ソラはレティシアに頭を下げていた。
というのも先日の学年別チーム対抗試合の時にレティシアは黒づくめを抑える際に怪我をしてしまった。
誰が悪いかと言えば元凶はそもそもアリアを狙った黒づくめやレティシアが怪我をするまで見ていた学園長にあるのだがソラが学園長について行っていれば途中で介入していれば少なくともレティシアが怪我を負うことはなかったのだ。
「やめてくれ、そんなに頭を下げられても困る。私のの未熟さが原因でもあるのだからな」
「けど……」
「それならソラ昼食でも奢って差し上げればどうですか？」
「それでソラの気が済むならそうしよう」
「私たちも当然ご相伴にあずかれるのよね？」
「私も楽しみだよ」
「遠慮無用」
レティシアだけでなく何故かアリアやフレイヤ、シルヴィアにリチャードにまで奢ることが決定していた。
ちなみに最後の言葉はソラではなくフレイヤが言ったものだ。
「わかったよ。それなら明日の昼食のときにでも……」
「何を言っているの？」
シルヴィアが馬鹿を見るような目でソラを見る。
「え？ご飯を奢るって話じゃ……」
「それはそうだけどせっかく奢ってもらうなら高いところで食べるべきじゃない？」
「そうですね。どうせなら次の休日にでも街で豪華なものを奢ってもらいましょう」

ソラの懐をかんがみる気はこの二人にはないようだ。
「そうだね。じゃあ次の休みに奢ってもらうことにしよう」
リチャードまで乗ってしまった。
「ソラ、すまないな」
申し訳なさそうな顔でレティシアに謝られたソラだがもはやこの流れは止められない。
「あはは、いいよいいよ」
渇いた声で言いながらソラは頭の中では必死に財布の中身を思い出していた。

◆◇◆◇◆◇

そして時は流れ次の休みの日となった。
ギルドのシステムでは依頼をクリアした場合ギルドからその分のお金を引き出せるようになる。
ソラは全財産の十分の一近くを持ってきた。
待ち合わせは学園の校門前、集合時間はソラとフレイヤはその五分前に着いた。
男としてはどうかと思うところだ。
待ち合わせ場所には既に全員そろっていた。
「ごめん、おくれた？」
「いいえ。遅れてはないわ。尤も男性が女性を待つのが普通と思うけど？」
さりげなく毒を吐くシルヴィア。
「さあ行きましょう」
堂々と歩き出すシルヴィア。
「自信満々に歩き出しているとこ悪いけどどこに向かってるの？」
「以前この街を回った時にあまりにも異様な雰囲気があって入れなかったところがあるのよ」
王族すらもためらう店、ソラの額に冷や汗が浮かぶ。

「ああ、あの店か。確かに私たちでは入れそうにない雰囲気だったな」
「そうよ。さあ行きましょう」
ソラは今から既にお腹が痛かった。

「着いたわ」
シルヴィアに案内されたのはさびれた定食屋ともいうべきところだった。
「あれ？アマルティアさんが言ってたところってここ？」
「そうよ。王都の街に一回行ったときにもこんな雰囲気の店は見たことないわ」
「そうだな。ゆっくり見たわけではなかったがこんな店は見覚えがないな」
「私も見覚えがないね」
アマルティア王国組は口々にそんなことを言う。
王都にそんな寂れたところは出店できないだろうし、してもすぐつぶれるだろう。
「私は見たことありますよ」
「……私も」
反対にフレイヤとアリアはソラといろいろな街に行ったことがあるため見慣れているとまではいかなくても見覚えくらいはある。
無論入ったことはない。
アリアにそんなところで食事させるわけにはいかないしソラがフレイヤをそんなところに連れて行くはずはない。
「本当にここでいいの？」
「もちろんよ」
シルヴィアは勇んで店へと入っていく。
ソラ以外のメンバーは順々に入っていく。
「大丈夫かな……」

呟いた後ソラもまた店へと入っていった。

「……いらっしゃい」
そうやって店に向かいいれてくれたのは４０代と思われるあまり態度のよくなさそうなおじさん。
六人がけのテーブルへ案内される。
店の中は外装とは違い寂れてはなくむしろ手入れが行き届いていた。
「注文は？」
ソラたちはメニューに目を通す。
そこにはシルヴィアやレティシアは勿論、ソラでさえも知らない名前がたくさん載っていた。
「あの、ここの店はどんな料理を扱っているんですか？」
「うちは大陸南部にあるとある島国の料理を扱ってる、お前たちが見たことがないのも当然だろう」
店主はソラたちの顔が困惑したのを見ていたようだ。
「おすすめとかあります？」
「そこにおすすめって書いてあるやつがあるだろう。それだ」
本当に態度が悪い店主である。
「じゃあこのおすすめセットとやらを六人前お願いします。」
無言で調理場へ戻る店主。
「ずいぶんな態度だったね、こういう店はこれが普通なのかい？」
「ここまで極端なところは少ないと思うけど……」
「これで美味しくなかったら最悪ね、せっかく街にでたのに」
「そういうな。そもそもこの店を希望したのは私たちだぞ」
「まあそういうのもこのような店の醍醐味というありませんか？」
「そういうものなのかしら……」
他愛のない雑談をすること数分、店主が注文のおすすめセットを持ってきた。
名前すら聞いたことないのだから当然誰もが見たことのない料理が

来た。
一人を除いて、である。
ソラは思わず目を開く。
運ばれてきたのはソラの遠い記憶の中、前世で同じようなものを見たことがあったのだ。
（ラーメンじゃないか）
そう、運ばれてきたのは入ってる具材に差はあれど前世ではラーメンと呼ばれるものだった。
この世界に来てから麺類を食べた記憶はソラにはない。
一度自分で作ったこともあるが麺が太くなったり、だしの取り方がわからなかったりとできたのは犬のえさであった。
当然のようにラーメンには割り箸がついてきている。
ソラは割り箸を割りラーメン（仮）を食べる。
それはまさしくラーメンであった。
ソラが食べだしたのを機に他のメンバーも恐る恐る食べだす。
ソラのように麺類はこの世界では珍しいため食べたことのある人は少ない。
「美味しいです」
「美味しいな」
「美味しいわね」
口々に賞賛を漏らす。
美味しいとしか言わないのはそれ以外に言い表せる言葉がないからであろう。
前世では麺類、ラーメンを食べたことは当然あるソラでさえも今までトップレベルに美味しいと思うほどなのだから。
あっという間に一杯食べてしまう一同。
「ソラ、ここはあなたのおごりだったわよね？」
「そうだけど？」
「もう一杯頂けるかしら」
ソラの奢りを確認した後お代わりを頼むシルヴィア、ほかの面々も

次々とお代わりを頼んでいく。
そんなにラーメン（仮）がおいしかったのだろうか。
なお、フレイヤはすでに三杯目に差し掛かっている。
だんだんと話す暇すら惜しみ食べだしていく。
その光景はただ一人お代わりをしていないソラに麻薬でも入っているのかと思わせるほどだった。
ちなみにソラがお代わりをしないのはここの値段が意外と高いうえに先ほどからどんどんお代わりの注文が殺到していく、財布の中身が心配で胃が痛くてとても食べられないからだったりする。

「ありがとうございました。またのご来店をお待ちしています」
無愛想だったはずの店主が満面の笑みで腰を９０度折って行ってくる。
ソラはお金を引き出したはずだったのだがその半分を持っていかれた。
実質全財産の二十分の一を使った計算だ。
まだ時間は昼過ぎである。
帰るにはまだ早い時間だ。
「さあこの後は買いものね」
「そうですね。せっかく出かけたのですし」
不吉なことを言い出した両名にソラは寒気を覚えた。
「ちなみにお支払いは？」
「今日はソラが奢ってくれるのでしょう？」
「はい、そのはずです」
いつの間にか一食から一日となっていた。
「僕ちょっとギルドまで行ってきていい？お金おろしてきたくて」
ソラの財布にはまだ庶民からすれば大金が入っているが王族や貴族から見ても大金とは限らない。
「あら、私はてっきりここであなたが泣きついてきて奢りはなしになると思っていたのだけれど」

ソラの所持金がシルヴィアの予想金額を大きく超えていたのだろう。
「え？」
「お金があるというならやっぱり買い物も奢ってもらいましょう」
ソラは選択肢を間違えたようだ。
「それなら早くギルドに行ってみないか。私も一度は行ってみたかった場所なのだ」

歩くこと数分ギルドに到着する。
「ここがギルドというところか……」
レティシアが落胆したような声音で言う。
ギルドというものに期待を抱いていたのならそれは間違いというものだろう。
ギルドはある程度大きな町ならばなくてはならない場所であるので整備されるのは早い。
しかしその反面作ることが優先のため外装内装には気を使われないのだ。
「じゃあ僕はお金をおろしてくるから」
ソラは正面にあるカウンターへと歩いていく。
ギルド証を見せ引き出す金額を言おうとするが受付の女性がソラを奇異の目で見てくる。
それは当然の話でギルド証には二つ名も表記してある。
ソラのものには当然≪黒の魔術師≫とある。
今まで正体不明だったAランカーが堂々と姿を晒しながら現れたのだ。
「あなたがあの……」
大声で自分の二つ名を言いそうになる受付の女性の口を慌ててふさぎ小声で言う。
「それは黙っておいてくれると助かります」
Aランカーは非常に貴重なためその要求はたいてい通る。

受付の女性はコクコクと頷くと改めて引き出す金額を聞いてきた。
ソラはさらに全財産の十分の一を引き出す。
アリアたちは依頼の貼ってある掲示板の周りで「こんな依頼があるのか」とか「この依頼なら私にもできそうね」とか言っている。
ソラはそちらのほうに歩いていくと
「もうお金を引き出したから行こう」
そう言って扉の方に歩き出す。

「ギルドの依頼は様々なのだな」
ギルドに関心を持っていたレティシアの言葉だ。
「そうだね、ギルドは戦闘が主だと思われてるけど採取とかもあるしね」
「やはりランクによって難易度は変わるのか？」
「Bランクまでは変わらなかったよ。ただBランクとAランクの差はかなり大きいらしいからAランクからはかなり難しいらしいよ」
「そうか。ところで君はBランクまで依頼を受けたことがあるということはランクはBなのか？」
「一応ね」
「君はアリアの護衛だというし腕もたつのだろう。君は何を使うのだ？」
レティシアはソラの戦闘を見たことがないため気になるのだろう。
「僕は一応剣を主に使うけど……」
アリアが笑いをこらえているのがソラの視界に移ったが無視して続ける。
「他にもいろいろ使うよ。もちろん魔法もね」
「そうか。それなら今度私と手合わせしてもらえないだろうか。Bランカーと戦うなんてなかなかない機会だからな」
「時間があったらね」
「ねえ、それならあなたは何故装備科を希望したの？他の科でもよ

かったでしょうに」
シルヴィアが不思議に思ったのか聞いてくる。
ここで魔法は習うことはないし武器よりも魔法を使うからとかいうのはまずい。
「アリアの護衛だから僕がいなくても何とかなるような魔道具を作ろうと思ってね」
「そんなに楽がしたいのあなたは」
あきれた声音で言ってくるシルヴィア。
「それならこの前アリアがしていた指輪は君が作ったのか？」
「この前って？」
「ああ、この前の模擬戦の時にアリアを守った指輪だ」
「そんなことがあったんだね。多分僕が作ったものでと思うけど……」
「そうか。それならその……私にも作ってもらえないだろうか？」
「僕なんかよりも上手な人はいると思うけど？」
ソラの魔道具を作る腕前は学年平均程度だ。
もっとも書き込める魔法の種類や効率を無視した魔力量だけでごり押しして効果を出すのなら学年トップだろう。
「それはそうなのだが……」
「それくらいいいじゃない。あなたが作ってあげれば今後レティシアの怪我もなくなるだろうし」
シルヴィアがレティシアの足などに巻いてある包帯を見ながら言う。
「それを言われたらできる限りのことはやるけど」
「それなら決まりね。当然私たちの分も作ってくれるわよね？」
リチャードも苦笑いしながらソラを見てくる。
「それは……」
「アリアさんやレティシアの分は作ってくれるのに私やリチャードの分は作ってくれないの？」
「……わかったよ。時間がかかるけどそれでもいいなら」
「それは構わないわ。それなら今から媒体となるアクセサリーでも

買いに行きましょうか」
「それなら私たちのものを買ったところがよかったですよ」
家具を買いに来た際によった場所である。
お値段は……アリアが普通に買うくらい高かったとだけ言っておこう。
「こっちです」
アリアの先導でそのアクセサリーショップ、ソラにとっては不幸の象徴とでもいうべき場所に一同は向かっていった。

結果としてソラの財布の中身は非常に軽くなった。
最初のアクセサリーショップの時点でレティシアには腕輪、シルヴィアにはイヤリング、リチャードにはベルトを買った。
いまいちそういったものの価値がわからないソラでもいいものと分かるレベルのものだった。当然お値段もお高くなった。
更にアリア、フレイヤを含めた女性陣は洋服店のはしごを開始、ソラの財布は一軒回るごとにどんどん軽くなり、ソラとリチャードの手荷物はどんどん重くなっていった。
荷物持ちをさせられたためだ。
「買いましたね」
荷物で顔が隠れかかっているソラたちを見てアリアが呟く。
「満足したからいいじゃない」
今回の買い物はすべてソラの財布からお金が出ているためそのセリフは適切ではない。
まるで自分たちが使い過ぎたように言っている。
「アマルティアさんが満足したならそれで良しとするよ」
若干の皮肉を込めてソラが言う。
「……その呼び方やめてくれないかしら？」
急にシルヴィアの機嫌が悪くなる。
「アリアやフレイヤのことは名前で呼んでくれるのにどうして私た

ちはそうしてくれないの？たしかレティシアのこともオルレアンさんって呼んでたわよね」
「……境界だよ。僕が馬鹿なことをしでかさないためのね」
そう、ソラは気を付けて彼らの名前を言っていたのだ。
間違っても昔の呼び名で呼ばぬように。
自分とこれ以上は親しくならないように。
異常（じぶん）にこれ以上は関わらせないように。
そういう意思の表れだった。
「いったいどういうこと？私たちを名前で読んだら何か不都合があるの？」
ソラはただ一言、
「全てが終わった後にはまた名前で呼ばせてもらうよ」
それ以上の説明はしなかった。
その時のソラの表情は笑ってはいたがどこか悲しげだった。
「さあ帰ろう。もう時間も遅いしね」
「説明してくれないのかい？」
「それもすべてが終わった後だよ」
「そうか……終わる見込みは？」
「十年以内には」
えらく現実的な数字だ。
だがその期間内にソラは終わらせるつもりだ。
「早まることは？」
「あり得るよ」
「なら私は聞かないでおこうかな」
ソラが驚いた顔をする。
それは黙って聞いていたレティシアとシルヴィアも同じだ。
「なぜ聞かないのだ？」
「いずれソラの方から話してくれるのなら無理に聞く必要はないだろう？」
「それはそうだが……」

レティシアはせっかく得た友達に名前で呼ばれないのは嫌なのだろう。
「それにソラは私たちのことが嫌いじゃないみたいだしここで嫌われたいなら無理やりにでも聞いてみる？」
「それは……」
「この話はこれでお終いにしよう。それでソラ、今日買ったのはいつぐらいまでに魔法をかけられる？」
「そうだね、一つ三日はほしいな」
「それならまとめて二週間後に渡してよ。シルヴィアとレティシアもそれでいい？」
「か、構わないわ」
「……」
急に話を振られて焦るシルヴィアとまだ納得がいかない様子のレティシア。
その後も歓談しながら歩くとつくソラとリチャード、その様子を見ながら納得できずに愚痴を漏らしながら後ろに続くレティシアとシルヴィア、ソラの様子を悲しげに見守るアリアと興味なさそうに周りを眺めているフレイヤ、様々な思いを胸に一同は帰途へとつく。

第九話　果たし状

みんなで食事に行ってからあと二日で二週間が経つ。
あの日以降ソラはレティシアたちと会っていない。
もっと言えばフレイヤ以外と会っていない。
しかしそれはレティシアたちに避けられてるのではなくソラがレティシアたちを避けているのだ。
理由は皮肉にもあの日のソラ自身の言葉にある。
ソラは本来レティシアたちと関わるつもりはなかった。
しかし偶然の再会によってその考えは覆された。
別人として再開したはいいもののレティシアたちの友達としてかかわることになった。
幾多の友達の一人としてなら避けるほどにはならなかっただろうし、そもそも避けるほど多く会うこともなかっただろう。
そのつもりでソラも最初は接していた。
しかし実際はレティシアたちに友達が、正確には対等な友達がなかなかできずソラはその第一号となってしまった。
このままいけば三年間の学園生活でより一層かかわっていくだろう。
レティシアたちが友達を作るのは難しい以上それは免れない。
おそらくはレティシアたちの方から関わってくるのは間違いないだろう。
相手が近づいてくるなら自分が遠ざかればいい、そうすれば距離は保たれる。
そう考えソラは避けている。
アリアとも会っていないのはレティシアたちから友達を奪うのはもともとソラの本意ではないし、アリアの行動を制限する権利はソラにはないからだ。
そのためフレイヤとも寮でしか会っていない。
休み時間に教室に誰かが来れば隠れ、アリアが迎えに来る前に昼食

を買い食堂以外の場所で食べ、帰りもやはりアリアたちが迎えに来る前に帰った。
帰ってからはすぐに出かけるので寮に誰かが来てももぬけの殻だ。
寮には基本的にその寮に住んでいる人しか入れないため寮で待つことはできないし、そもそもかなり遅い時間に帰るため長居していると寮の門限にかかる。
そして今日もまたソラは夜遅くに寮へと帰った。
「ただいま」
「……おかえり」
フレイヤはかなり不機嫌なようだ。
夜遅く帰るということはフレイヤのお世話があまりできないからだ。
「怒ってる？」
「怒ってる」
「今度何か食べに行こうか？」
フレイヤは指を三本立てていう。
「……あれ」
「あれって？」
「……細いやつがいっぱいあるやつ」
「ラーメン（仮）のこと？」
「……ラーメン？」
「フレイヤが言ってるやつのことだよ」
要するにラーメン（仮）を三杯ということだろう。
「わかったよ。明後日から休みだしその時にでも行こうか」
「……なんでレティシアたちを避けるの？」
フレイヤはソラの事情をすべて知っているわけではない。
ソラはフレイヤに必要なことしか話していない。
ルビンシュテインのこと、フレイヤについて、このくらいだ。
ソラについては教えていない。
だからフレイヤにはソラとレティシアたちが初対面だと思っているのだ。

「……三人ともとてもいい人」
「わかってるよ」
「……ならなんで？」
「彼女たちを巻き込まないためだよ」
「……それは私のため？」
ソラはフレイヤに自分の最終的な目的はさすがに話している。
そのことに関係があるのか？、と自分のせいなのか？、とフレイヤは聞いているのだ。
「違うよ。これは僕のわがままだ。フレイヤは関係ないよ。」
扉を開く音がする。
ソラたちが話していた部屋、ソラの部屋にここにはいないはずのアリアが入ってくる。
「そういうことでしたか」
「アリア、どうしてここに？」
「フレイヤさんに頼んで入れてもらっていました。あなたの考えを聞くためというのもありますしちょっとしたお使いを頼まれたので。」
「お使い？」
「はい、これを」
そういってアリアがソラに差し出したのは手紙であった。
「中身は？」
「自分で確認してください」
ソラは封筒から手紙を取り出す。
そこには難しい言葉でいろいろ書かれていたが要約するとこういうことだった。

『ソラ君、勝った方は何でも言うことを聞くという条件付きで私と決闘してくれないだろうか？
明日の放課後体育館裏で待っている。

レティシア』

「これを僕が呑む理由がないんだけど」
もっとも明日はどうせ他の用事でもそこに呼ばれているため体育館裏に行く必要はあるが決闘する必要はない。
「それに勝てば命令権がもらえます。それはレティシアさんたち全員に有効だそうです」
つまりこれを使えば適度な距離をとることができるとアリアは言っているのだ。
「なるほどね。けどこのままでも別に変らないと思うけど？」
「それではあなたは三年間の学園生活を棒に振ることになりますよ？」
「学校生活はもう一度体験したことがあるからね。無理にでも経験する必要はないよ」
「しかし私が困ります」
「？」
「あなたは仮にも私の護衛なのですからいつもそばにいてもらわないと」
顔をほのかに赤く染めながらアリアは言う。
何故赤くなったのかソラにはわかっていない。
「アリアは僕が挙げた指輪をいつでも持ってる？」
「はい。もちろんです」
せっかくのソラからのプレゼントをアリアが手放すわけがない。
「それなら大丈夫だよ。それで僕が行くまでは持つはずだし」
「しかし……」
アリアは妙に必至だ。
それはアリアがソラと一緒に居られなくなるからなのだが、ソラはレティシアたちに頼まれているからだと考えた。
「わかったよ。じゃあ明日はとりあえず体育館裏に行こう。だから決闘をするかどうかはその時に話そう。そう伝えてくれない？」

「わかりました」
それだけ言うとアリアは帰っていった。
もう時間が遅いからだろう。
（面倒なことになったな）
ソラは剣を使うとレティシアに言っているため下手に魔法は使えない。
それに明日はもともとめんどくさそうな先約があるのだ。
ソラはあっさり考えることを放棄し
「フレイヤ、もう遅いから寝よう」
そういって就寝準備に入った。

◆◇◆◇◆◇

「……ということだそうです」
アリアはレティシアたちにソラから言われたことを一言一句変えずに伝えた。
もちろんソラがレティシアたちを避ける理由は言っていない。
「そうか。ありがとうアリア」
レティシアはそう言うとシルヴィアの方を向く。
「明日はシルヴィアも来るだろう？」
「当然よ。さすがに決闘には参加しないけど見る権利くらいはあるはずだわ。それにレティシアなら勝てるでしょう？」
「絶対とは言い切れないがなんとか勝って見せよう。また友達が消えるのはごめんだからな」
「そうね。ソラは私たちを嫌っているわけではなさそうだし私たちも彼が嫌いではない。それにあんなことはもう二度とごめんだしね」
二人は、正確にはリチャードも含めた三人は昔にも同じような約束をした。
一年後に会おうという約束を。
その約束のとき全員が一年後にそろうことはかなわなかった。

その状況とこの状況が似ているのだ。
だからまた会えなくなるのではないかという不安、それが二人の胸の中にはあった。
ゆえに決闘という無茶な手段すらも使っているのだ。
「……ソラは決闘を受けるかどうかは決めてないといっていましたよ？」
「それはきっと何とかなるわ。彼はなんだかんだで私たちには甘いみたいだし」
散々奢ってくれたのがいい例である。
「さあ寝ましょう。寝不足で明日負けるとかいうのは洒落にならないわよ」
「そうだな」
シルヴィアとレティシアは各々の部屋へと帰って行った。
（ソラはどうするのでしょうか……）
そんな思いを抱きながらアリアもまたベッドへと入った。

◆◇◆◇◆◇

決闘の日の放課後、体育館裏には二つの集団があった。
一つは言わずと知れたレティシアたち、もう一つは総勢百人までいくかいかないかという大所帯だった。
ちなみにほぼ全員男である。
そこにソラがやってくる。
レティシアたちが待っていることを考えれば遅刻かもしれないがそもそも時間なんて決めていないのでソラは気にしていない。
「来たか、ソラ。さあ決闘を……」
「あれ？僕は話し合うつもりでここに来たんだけど……まあどっちにせよちょっと待っててよ。先約がいるんだ」
ソラは大所帯の方を向く。
「同じ手で呼び出すのはどうかと思うけど。いちいち一喜一憂する

僕の気持ちも考えてくれないかな」
ソラは今回は少し疑っていたが期待していたのもまた事実だ。
「うるさい、だまされるお前もお前だろうが」
「いや万が一ということも……」
「ないな。それより今日はどうやらオルレアンさんはお前の味方にはなってくれないようだな。年貢の納め時だ。諦めてボコボコにされるがいい」
先ほどからソラと会話しているのは先日もファンクラブ同盟のリーダーをやっていた男だ。
「先に聞いとくけど何で僕を狙うのかな？最近はアリアやフレイヤたちとはかかわってないと思うけど？」
「確かにそうだ。そういう意味ではお前を狙う必要はないだろう。しかしお前がアリア様たちと関わらなくなってから明らかにアリア様たちの元気がなくなっていっている。俺たちはアリア様達を最優先で考えているんだ。そのアリア様たちの元気をなくさせていると思われる元凶を見逃すわけがないだろう」
ずいぶんと献身的なファンクラブのようだ。
彼らの言葉をソラに聞かれたのでアリアは顔を真っ赤にしている。
「冥途の土産に二つほど聞かせてほしいんだけどいい？」
「いいだろう。言ってみろ」
「まず人数が明らかに増えてると思うんだけどなんで？」
この前はアリアとフレイヤのファンクラブで約五十人いた。
しかし今日はその倍はいる。
ソラからしたらたまったもんじゃない。
「それか。それは今回はアリア様ファンクラブ、フレイヤさんファンクラブに加えレティシアファンクラブ、シルヴィア様ファンクラブもいるからだ。」
「なるほどね。君たちの目的だけどそれって君たちに得があるの？むしろ近づく男がいないなら自分が近づいてとか考えないの？」
「……総員かかれ。肉片の一つも残すな」

リーダーの男はソラの疑問に答えなかった。
痛いところを突かれたのであろう。
ファンクラブに入っている以上手を出せば同志から討たれることになるのだから。
百人が同時にではないが前の方にいた三十人近くが最初にソラに襲い掛かってくる。
彼らはみな模造剣や杖を持っている。
殺す気はさすがにないだろうが病院送りにする気は満々だろう。
彼らはなぜか統率のとれた動きでソラを狙っている。
前衛と後衛に分かれている。
それに対しソラが持ってるのは模造刀一本。
「ソラ！」
レティシアが心配のあまり助太刀に入ろうとするが
「オルレアンさん、せっかく決闘するかもしれない相手が手の内を見せてくれるんだよ。ここはおとなしく見とかないと」
そういって動き出そうとしたレティシアを制する。
「余裕かましやがって」
同盟の前衛の一人がソラに模造剣を振り下ろす。
ソラはそれを紙一重でかわすと振り下ろした男の首に一閃、男は倒れて動かなくなる。
そうしている間にも一人が行ったことによりどんどんほかの前衛たちもソラに攻撃してくる。
ソラは先手必勝とばかりに正面から向かってくる男の懐に入り込み鳩尾を狙って突きを叩き込む。
その男が倒れるのと同時に男の持っていた模造剣を奪い取る。
それを後ろに投擲、後ろからソラに迫っていた男は咄嗟にそれを防ぐ。
その間にソラは右に迫っていた男の方を向きその顔を狙って模造刀を薙ぐ。
しかし狙いがわかりやすかったため防がれる。

男は模造剣でソラの模造刀を防ぐことに気を割いている。
その隙に男の急所に向かって思いっきり脚を振り上げる。
男は思わず模造剣を手放して悶え始める。
その男を無視して今後ろにいるであろう男に振り向きざまに一閃、
それと同時にしゃがむ。
先ほど突きで倒した男、彼がいたスペースを通って魔法「雷の玉（サンダー・ボール）」
が放たれていたのだ。
初級魔法なだけ加減しているのだろう。
もっともソラはそんな攻撃にあたるつもりはないが。
それは新たにその直線上にいた男に直撃、ソラの顔すら見れずにそ
の男は倒れていく。
ソラの頭上から模造剣を大きく振り下ろした一撃がソラを襲う。
ソラはそれを持っていた模造刀で受ける。
刹那の均衡、しかしそれはソラが前にいる男に足払いをかけること
で脆くも崩れる。
倒れざまに蹴りを食らわせソラは立ち上がる。
周りには警戒したのか距離を取って男たちがソラを囲んでいる。
「前衛ひけ、後衛魔法をはなて」
リーダーの男の声、それに従い前衛は引いていく。
このまま待っていても集中砲火を食らうだけのソラは引いていく前
衛にそれ以上のスピードで肉薄し攻撃を放つ。
味方と一緒にいるため後衛が魔法を放つことはできない。
そのまま目の前の前衛を蹴散らし後衛へとたどり着く。
後衛は接近戦闘技術のほとんどない魔術師ばかりだ。
ソラは彼らの間を縫いながら移動する。
もちろんすれ違いざまに一撃ずつ食らわせながらだ。
そうして後衛を五人ほど気絶させると前衛があわててソラに迫って
くる。
彼らに牽制の魔法をいくつか放ちソラは敵がいないところに退避。
そこは再び前衛、後衛の順でソラを囲むために用意された場所であ

ったがそれに気づいてなおそこに踏み入った。
「同時にかかれ」
またもやリーダーの男の言葉。
八人の男たちがソラの周りから同時に斬りかかってくる。
ソラはそれは魔力障壁で弾く。
懐が開いたすきに自分の周りにいる男たちに身体を大きくひねりながら一度で全員を切る。
ソラの周りにいた男たちは倒れる。
威力は高くなかったがソラが模造刀に魔法で雷をまとわせていたため気絶してしまったのだ。
気づけば二十人近くの男たちがソラの周りに死屍累々と転がっている。
「さあ、もうそろそろ準備運動はいいかな」
ソラが挑発のような言葉をつぶやくが本音である。
「虚勢だ。いけっ、いけー」
リーダーの男が叫び再び前衛がソラに迫るがその先頭ををソラは「雷の玉（サンダー・ボール）」で容易に気絶させる。
その様子に男たちは呆然とする。
今まで魔法を使わずに二十人近くを倒したのにさらに魔法まで使ってくるのか、そう思ったのだ。
実際は魔力障壁や模造刀に雷を付加していたりするがその様子は男たちの陰で見えていなかったようだ。
「か、勝てねえ」
一人の男がそうつぶやくと逃げ出した。
それにつられて男たちは次々と逃げていく。
気づけばリーダーの男しか残っていない。
「お、お前は最下位じゃなかったのか？」
「そうだけどあれってあくまで身体能力とかだけだからさ、技術とかは考慮されないんだよね」
ソラはゆっくりとリーダーの男に歩み寄っていく。

「さあ、約束もあるし終わらせようか」
「ひぃ」
ソラの言葉にリーダーの男は腰を抜かして座り込んでしまう。
ソラが模造刀を振り上げる。
そしてソラがリーダーの男の頭に振り下そうとするが、恐怖のあまり既に気絶していた。
「ふう。意外とめんどくさかったな」
ソラは呆然としているレティシアたちの方を向く。
呆然としているのはもちろんソラの実力を見せつけられたからだ。
「それでレティシア、決闘の話だっけ？」
「ああ、そうだが……」
「受けてもいいけど、いいの？僕にわざわざ君たちへの命令権をくれるなんて」
あからさまな挑発、しかし今の光景を見せられた以上それが現実になる可能性は高いとレティシアはわかっている。
「あ、そうだ。今のうちに僕が命令権を得たときの命令の内容でも考えとこうか」
考え込むようなしぐさをするソラ、
「なぜ君はそこまで強いのだ？」
考えていて何もしゃべらないソラにレティシアが質問する。
「ああ、それは所詮この学園にいる人はアマチュアだからね。しかもアマチュアになったばかりじゃないか、彼らは。仮にも僕はプロだよ？あのくらいはできて当然じゃない？」
つまりいくら学園内で強さを誇っていてもそれは井の中の蛙でしかないとソラは言っているのだ。
「よし、これにしよう。僕が勝ったら君たちには一日メイド服で僕に傅いてもらおう」
王族と貴族であるレティシアたちに使用人の真似をしろというこの要求、呑むはずがないと考えた上でのソラの要求だった。
「な、そんなふ淫らな。何故そんな要求を……」

「そうだなあ、僕が庶民で男の子だからレティシアたちみたいな美少女を侍らせるのが僕の夢だったってことでどう？」
これが本当にソラの夢なのかどうかはソラしか知らない。
レティシアたちは美少女と呼ばれて顔を赤くしている。
「さあどうする？これでも決闘する？」
「あなたはプロなのでしょう、なら私たちにハンデをくれてもいいと思わない？」
口を挟んできたのはシルヴィア。
「そのくらいは当然よね」
「うーん……それなら決闘は明後日にしてレティシアたちは何人連れてきてもいいっていうのはどう？」
「……」
とたんに黙り込むシルヴィア、ハンデとしては十分だが先ほどの光景を見せられた後なので簡単に頷けなかった。
「いいだろう、その条件でしようじゃないか」
「ちょっとレティシアそれじゃあ……」
「しかしこれ以上の譲歩は多分無理だろう。それならソラの気が変わらないうちに受けておいた方がいいだろう」
「負けたら私たちはとてもじゃないけど王国には帰れなくなるわよ？」
第一王女、オルレアン家の長女、メイド服で傅く。
王国に流れれば名誉失墜は免れないだろう。
そもそもシルヴィアたちのプライド的にも帰れない。
「負けなければいいのだろう？」
「そうだけど……」
「シルヴィアともあろうものが情けないな。負けることを前提に考えても話は進まないだろう」
「……そうね」
シルヴィアはソラを正面から見据える。
「いいわ、ソラ。その条件で決闘しましょう。私たちが負けたらメ

イド服で傅くなりなんなりしてあげるわ」
この言葉に唖然とするのはソラである。
ソラは決闘しないためにさっきの命令をすると公言したのだ。
ハンデをつけたのは今のを見て数が戦力にならないことをわかっているはずなのでなおさら受けはしないだろうと考えたからだ。
「僕が勝ったら一日中メイド服だよ？」
「構わないわ」
「もしかしたら僕がふしだらな命令をするかもしれないんだよ？」
「……負けなければいいだけの話だわ」
ここまで言ったのに引く気がないということはもう決闘をしないのはあきらめるべきだろう。
「はあ、わかったよ。何人連れてきてもいいけど手加減はしないからね。」
そう言ってソラは体育館裏から去っていく。
「シルヴィア、ああは言ったがどうする？数だけ集めても勝てないのは間違いないぞ」
「それは今日と明日で考えましょう」
名案ははたして生まれるのだろうか。

第九話　果たし状（後書き）

感想への返事は二章が終わった後にさせてもらうのでそれまで持ってください。
感想で指摘されたことについてはやはり二章が終わった後で改善するつもりです。
そのことに関しても三章の一話目のあとがきにでも書かせていただきます。

第十話　決闘

フレイヤが伝えてきた決闘場所は街の外にある森の中、時間は正午からだ。
（なんでこんなことになったのかなあ……）
ソラはただ適度な距離をとってレティシアたちを巻き込みたくなかっただけなのだ。
それなのにいつの間にか彼女たちと決闘することになっていた。
（それはいいか。とりあえずはあれを……）
ソラは再び作業に戻る。
決闘を明後日にしたのはレティシアたちに時間を与えるというのともう一つ目的があった。
約束を破るのは一回で十分だろう、そう思いながらソラは魔法を刻んでいく。

◆◇◆◇◆◇

シルヴィアとレティシアは寮で話し合いをしていた。
「やはり数をそろえるべきだろうか？」
「ちなみに声をかけれそうな人はいるの？」
「ぐっ」
今のところレティシアたちの勝利は絶望的だ。
あまり親しくない同級生たちに負けほぼ確定の決闘を手伝ってください、というのはレティシアには無理だった。
「しかしそれならどうする？国から応援でも呼ぶか？」
学生一人のためにわざわざアマルティア王国が兵を動かす、まるで災害級の魔物と同じような扱いだ。
もっともソラが本気で戦ったら災害級よりもひどいことになる可能性はあるのだが。

「それは戦力的には十分かもしれないけど時間が足りないわ。同じ理由でギルドに依頼を頼むにも時間が足りないわ」
ソラを倒せるほどの人材が簡単に見つかるとはシルヴィアは思っていない。
ソラは自分で自分がプロだと言っていたのだから、Bランクはあるとシルヴィアは思っている。
Aランク以上が二つ名を得て超一流であることを考えるのならBランクは一流と考えるのが妥当だし世間一般でもそういう認識だ。
そんな人材がコロコロ転がっている道理はない。
「ならどうするというのだ。あんな風に言ったのはいいがこのままでは負けるのは目に見えているぞ」
勝てば問題ない、と言ったことについて言っているのだろう。
「ま、負ければその……」
「わかってるわよ。だから必死に考えてるじゃない」
いら立ちを隠さずシルヴィアは言う。
「大変そうですね」
扉が開きアリアが入ってくる。
「あらアリア、いったい何の用事？」
「いえ、お困りでしょうと思って」
「それはありがとう。わざわざ来てくれたというのなら何か策でも授けてくれるのかしら？」
「残念ながらソラを確実に倒せる策は持ち合わせていませんよ。ただ条件付きなら私が手伝ってもいいと思いまして」
「あら、てっきり私は初めからあなたは手伝ってくれるものだと思っていたのだけど？」
これは半分本当で半分嘘だ。
シルヴィアはアリアを友達だと思っている。
だからと言ってアリアはソラの友達でもあるため手伝ってくれるかは五分五分というところだと思っていた。
「それで条件というのは？」

とはいえアリアが加わってくれるのは非常に心強い。
たいていの条件なら？むつもりだった。
「ソラに勝った際の条件を私に決めさせてくれることです」
「あなたがどんな条件にするかによるのだけれど？」
これで条件をシルヴィアたちの望むものじゃなくされれば本末転倒となる。
「ソラにあなたたちを避けるのをやめさせること。それとできればあなたたちがソラに会う頻度にも制限をかけたいところですね」
「それであなたに利益がないと思うのだけれど？」
今のところ聞く限りではアリアが得するようなことは条件に含まれていなかった。
「ソラはこの前会った時明らかに元気がなくなっていました。体育館裏の時も空元気のように思えました。とはいえソラが行っていることを私には否定できません。そのためにソラの望む状態を作り出したいのです。そのための条件です」
「やはりあなたが得するようには思えないわ」
「私はソラには可能な限りは幸せになってほしいのです」
「それだけ？」
「はい」
一瞬の迷いもなく言い切るアリア。
「なんであなたはそんなにソラのためにしてあげるの？」
シルヴィアたちには理解ができなかった。
「私がソラのことが好きだからですよ、シルヴィアさん」
なんでもないことのようにアリアは平然と言い放った。
「彼には複雑な事情があります。私はそれを全て聞きました。その中には彼の幸せなんて一片もありませんでした。ただただ自分を責め、自分の罪だと思っているものを償おうとしています。彼に非はなかったというのにそれを自分のせいだと思い込んで。私はそんな彼に少しでも幸せになってほしいのです」
「……あなたの言い分はわかったわ。私たちもそれに従いましょう。

ソラに、友達に幸せにになってほしいのは私たちも変わらないわ」
「ありがとうございます」
「やはりソラの事情というのは私たちには教えてもらえないのか？」
「すみません。それについては私の口からは話せません」
「そうか、それもソラのためというのなら君は絶対に話さないだろう。それならやはり今度ソラに話してもらおう」
「それでアリア、あなたが加わるとしてそれで私たちに勝算はあると思う？」
「そうですね……シルヴィアさんはどのくらい戦えるのですか？」
アリアはシルヴィアの実力を見たことがない。
リチャードも含めた三人はみな魔法近接クラスだからだ。
「……平均よりやや高い程度よ」
「そうですか、レティシアさんはこの前の戦いのとき全力でしたよね？」
「もちろんだ。戦いの際に手を抜くなどありえないな」
「そうですか……それなら私たち以外に戦ってくれる人は？」
「……いないわ」
痛いところを突くアリア。
もしかしてソラはレティシアたちに友達がいないのを計算していたのかとすら考えた。
「それなら厳しいですね。勝率は三割程度でしょうか」
ソラは剣をメインに戦わざるをえない。
しかしソラは見た感じ剣を使わせても一流以上というのがこの前わかっている。
あんなことが行えるのは教会の聖堂騎士にもそうそういない。
「けれどフレイヤさんに協力を仰げば何とかなると思います」
「フレイヤは協力してくれると思う？」
「食べ物で釣れば何とかなると思いますよ」
フレイヤはずいぶん軽い女とみられているようだ。
「それならそうしましょう」

「それから明日連携の練習でもすれば八割くらいの確率で勝てると思いますよ」
「そう、ありがとう。ところでもう一つ聞きたいことがあるのだけれどいいかしら？」
「はい、どうぞ」
協力を約束する以上たいていのことは答えるつもりであったアリアだが次の質問には驚いた。
「ソラはあなたの気持ちを知っているのかしら？」
「し、知ってるわけないじゃないですか」
言いながらどんどんアリアの顔が朱に染まっていく。
「それだとあなたがこんなにしていることを知らないの？」
「はい、知っていたとしても親切くらいにしか思わないでしょうね」
「それでいいの？」
「今はそれで構いません。ソラの邪魔はしたくありませんから」
「思いを伝えることがソラの邪魔になるの？」
「わかりません。ただソラは今あまり精神的に余裕がないと思うので……」
「そんなことまで考えているの？」
「言ったじゃないですか。私はソラに幸せになってほしいのですよ。その彼を苦しめるような真似はしませんよ」
「苦しむかどうかはわからないと思うけど？」
「いえ、きっとソラは苦しむ、というより悩むと思いますから」
「そう、あなたがそれでいいなら私はそれで構わないわ。それにしても今日はありがとねアリア、あなたのおかげで何とかなりそうだわ」
アリアが来なければまず間違いなくシルヴィアたちは勝機がないまま決闘へと赴いていただろう。
「礼には及びませんよ。私たちは友達なのでしょう？」
「そうだったわね」
アリアはその言葉を聞くと満足そうな顔で部屋から出ていく。

「……レティシア、何としても勝つわよ。」
「もちろんだ。」

◆◇◆◇◆◇

少ないな、ソラが抱いた感想だった。
ソラがいざ決闘の場所に来てみればいたのはレティシア、シルヴィア、アリア、フレイヤ、リチャードの五人だった。
ソラはてっきりファンクラブたちを連れてくると思っていたので百人近く相手にすると思っていた。
「意外と少ないね。遠慮しなくてもよかったのに」
「……それは私たちにケンカを売っているのか？」
ファンクラブはいても友達が少なかったことを忘れていたソラ、レティシアに睨まれる。
「本当にやるの？」
「ああ、もちろんだ。ただ一つルールの追加をしたいのだがいいか？」
「いいよ。いったいどんなルール？」
「時間切れだ。二時間以内に勝負が決まらなければ引き分けというものだ」
「いいけどその場合勝敗は？」
「リチャードに決めてもらう」
ソラに不利どころか出来レースだ。
「それは僕が不利とかそんなレベルじゃないと思うけど……」
「大丈夫だ、リチャードは今日は審判として呼んだのだからな」
レティシアが視線をリチャードに移す。
「そういうことだよソラ。公平に審判するから心配しないでくれ」
「わかったよ」
リチャードが不正をするとはソラは思っていないし、もとより疑う気もない。

リチャードは本当に公平に審判をやるつもりだ。
「それじゃあ両者ともに準備はいいかな？」
「ちょっと待って。その前に渡すものがあるから」
ソラは懐から何かを取り出す。
「はい」
まずは近くにいたリチャードにベルトを、次にシルヴィアにはイヤリングを、最後にレティシアには腕輪を、それぞれ渡した。
「約束は守ったからね」
「ありがとう」
シルヴィアとレティシアは目を真ん丸にして言葉を失っている。
今から戦う相手が自分たちに武器を贈ってきたのだから当然だろう。
「ああ、先に言っておくけど今日の決闘には使えないからね。衝撃緩和とかなら働くと思うけど」
「さあ、もうそろそろはじめようか」
審判ことリチャードが言う。
その言葉に促されソラ、レティシアたちは共に戦闘態勢をとる。
「正々堂々戦ってくれ、始め」
戦いの火ぶたが切って落とされた。

◆◇◆◇◆◇

決闘が始まってからもうすぐ一時間半が経つ。
ソラは焦っていた。
決闘が始まってから誰も倒すことができていないのだ。
何回か攻撃をヒットさせてはいるが致命的なところにはあてられていない。
それはひとえに四人が絶妙な連携を見せているからだ。
二人同時に戦うのではなく基本的に一人で戦いつつ、もう一人はいつでも戦いに入れるように待機、やられそうになったところでソラの相手を変える。

ソラが一気に決めにかかればアリアとフレイヤが弾幕を張り、防ぐしかなくなる。
こうやってやられにくくしておいてフレイヤの魔法で決めにかかる。
「凄い連携だね。これを昨日だけで完成させたのなら驚きだよ」
「余裕だな。よそ見をしていていいのか？」
レティシアは横薙ぎの一撃を放ってくるがソラはそれを後方に飛ぶことで回避。
「いやまあ実際余裕だしね」
レティシアたち優勢に見えるかもしれないがそれは誤りである。
確かにソラは誰一人として倒せてはいないが終始攻勢なのはソラの方である。
レティシアたちはやられないことを重視しているあまり攻撃にまで手が回ってないのだ
「このままだと僕の判定勝ちだと思うけど……」
事実だろう、どう考えても優勢なのはソラだし四対一でいまだソラは傷という傷を負っていない。
せいぜいかすり傷くらいだ。
「そうだろうな」
にやりと笑うレティシア、さもまだ秘策があるような様子だ。
ちなみに先ほどからソラとレティシアしか喋っていないのは他の三人はそんなこと使う体力がないからである。
「ソラ、ここから先は他言無用で頼むぞ」
レティシアはそう言って剣を胸の前で掲げ言葉を紡ぐ。
「剣よ、わが敵を切り裂き我に勝利を与えよ」
レティシアの周りに光の剣が次々と現れる。
「それはオルレアン家の？」
「そうだ。我が家に伝わる秘術の一つだ」
秘術とは魔法を自らの手で開発したものの家に代々受け継がれる魔法のことである。
それは普通の魔法とは違い使い手に宿る血が魔法を構成している一

部となっているので他者は絶対に、ソラでさえもまねできない魔法だ。
尤も同じ効果の魔法を創り出すことは可能なのだが。
「いけ」
レティシアの号令とともに光の剣がソラへと飛んでくる。
確かに数は脅威かもしれないがそれ以外はソラには問題にならないレベルだ。
ソラはそう思い自分に当たりそうなそれを弾いていくことにした。
ソラの剣がレティシアの光の剣に当たり、斬れた。
光の剣が、ではなくソラの持っていた剣が、だ。
「！！」
とっさに地面に倒れこみ回避するソラ、顔の前を光の剣が次々と通過していく。
それらはソラの頭上を通り過ぎるとソラの背後にあった木を何もないかのように貫通してどこかへ飛んで行った。
それを目で追った後ソラは
「オルレアンさんはもしかして僕を殺す気だったりする？」
あれがソラに全弾命中していれば今頃ソラは細切れと化しているだろう。
「君ならよけると思っていたからな。それにいつまでも寝転がっていていいのか？」
見ると他の面々、シルヴィア、アリア、フレイヤがソラに魔法を放とうとしている。
ソラはそのまま転がりながら近くの木の陰に身を隠す。
轟音、それとともにソラの隠れていた木や周りの木までが倒れていく。
「剣がなければ私たちの方が有利だからな」
地に膝をつきながらレティシアは言った。
先ほどの秘術とやらは消耗が激しいようだ。
そしてレティシアたちの作戦とはソラの剣を何らかの方法でなくす

ことだったようだ。
ソラと剣で近接戦をするよりは魔法戦で戦った方が有利と思ったのだろう。
あちらにはフレイヤがいるため魔法で負けることはないと踏んでいるのだろう。
確かに今ソラは魔法を使うことはできないが負けるわけにもいかないし、負ける気もない。
ソラは飛んでくる魔法を避けながらシルヴィアの方へと向かう。
この中でレティシア以外に剣を持っているのはシルヴィアだけだ。
レティシアから奪うよりよほど簡単だろう。
「な、ちょっと離しなさいよ」
「いや、離したら僕黒こげになっちゃうからね」
今ソラめがけて魔法が飛んでこないのはシルヴィアが近くにいるからだ。
離れた瞬間的になるのは目に見えている。
ソラは徒手空拳に対しシルヴィアは剣を持っている。
普通に考えれば圧倒的にシルヴィアが有利だがソラの技術がそれを覆す。
そもそもソラが近接戦闘の技術を得たのは生き残るためである。
魔術師とは本来、ランクが高くなれば高くなるほど前衛がいなければ成り立たない職業となっていく。
それはランクが高い魔物を倒すにはそれ相応の手順が必要となってくるからである。
しかしソラはAランクという身でありながらチームを組んだことはない。
正確には巻き込むのを恐れて組めなかったのだ。
ならソラはどうしたか。
自分で前衛と後衛を兼ねるようにしたのだ。
そのおかげで今ではAランク相当の魔物なら魔法を使わずに倒せるようになっている。

つまり実質剣技においてもAランク相当ということだ。
ソラは今シルヴィアと剣で綱引きをしている。
というのもシルヴィアの攻撃をソラが真剣白羽どりにてキャッチ、そのまま奪い取ろうとしているのだ。
フレイヤやアリアはシルヴィアに当たるのを恐れて攻撃できず、レティシアはそもそもそんな余力が残っていない。
味方からの支援が期待できない中シルヴィアはあることを思いつく。
「引いてダメなら……」
ソラの第6感がソラに回避を命じる。
これは危険区に立ち入った時に幾度となく感じた感覚だ。
これによって命を救われたことも多い。
たかが学生同士の決闘とはいえソラには無視できなかった。
ソラは剣を離して後ろに飛ぶ。
それと同時にシルヴィアは言った。
「押してみる」
そう言いながら剣を引くのではなく突き出した。
ソラが回避してなければソラの喉は今頃風通しの良いものとなっていただろう。
「……やっぱり君たちは僕を殺す気なのかな？」
先ほどから命の危機を頻繁に感じているソラ、当然の疑問であった。
「アリアさんから殺す気でいかないと勝てないって言われてるもの。現に死んでないしいいじゃない」
ソラはアリアに視線を送る。
気まずそうに眼をそらすアリア、アリアとしては意気込みとして言ったつもりだったが実際に殺しかける事態が起こるとは思ってもみなかった。
「いえ、そのくらいじゃないと勝てないと思いましたので……」
ソラが本気になったのはこの決闘では二回、どちらも殺されかかった時なので間違ってはいない。
「ひどいことするなあ全く」

状況は振出しへ、ソラの剣がなくなった状態に戻ってしまった。
残り時間は少ないためこのまま攻められ続ければソラが時間切れで判定負けしてしまう。
しかしレティシアはおそらくもう戦闘不能、ならあと一人倒せば戦力的にも判定的にもソラの勝利は確実となるだろう。
「君はこんなにも強かったのだな、私も剣には自信があったのだが……」
木に寄りかかって暇をしているレティシアがソラに話しかけてくる。
「まあ僕もそれなりの訓練は積んでるからね」
「今度は私と一対一で試合をしないか？私はもっと強くなりたいのだ」
「良いわね。私にも是非とも教えてほしいわ」
「私もですね」
「僕魔法は専門じゃないからな～」
アリアが睨んでくる。
今の設定上ソラは魔法が得意ということにはなっていないが実際は魔法が専門である。
アリアの反応も無理はないだろう。
この間にも魔法は雨あられのごとくソラに殺到している。
それをソラは紙一重で避け続ける。
見切っているのではなく本当にギリギリだったりする。
「まあいいけど、それは僕に勝ったらね」
そういってレティシアの方に笑いかけるソラ。
そこで気づいた。
レティシアの後ろで影がうごめいている。
「レティシア！！」
レティシアは不思議そうな顔をしてソラを見ている。
ついレティシアを呼び捨てにしてしまったが気にしない。
ソラはアリアたちの攻撃を無視してレティシアに駆け寄る。
何発か魔法がソラを掠めるが気にしない。

その影は今にもレティシアに襲いかかろうとしているように見える。
影の牙が光を浴びて光る。
ソラは今とある事情で魔力がほとんど残っていない。
しかし魔法を使わなければ無傷でレティシアを守るには時間が足りない。
ソラは仕方なく自分の身体を影とレティシアの間に入れ込む。
何とか手で防御したものの噛みつかれた左腕は血だらけだ。
影の正体はある意味で予想通り魔物であった。
ソラは噛みついてきた魔物をなけなしの魔力でつくった魔法で殺す。
「ソラ！」
ようやく事態に気づいたレティシアが声を上げる。
その声を無視してソラは叫ぶ。
「リチャード、レティシアを連れて逃げて。アリアたちは今すぐ街に戻って学園長を連れてきてくれると嬉しいかな」
いつの間にかソラたちは魔物に囲まれていた。
「しかしソラ、血が」
心配そうな声音でアリアが言う。
「大丈夫だよ、それよりアリアは確実にみんなを連れて帰ってくれると嬉しい。それからシルヴィア、剣を貸してくれない？」
「……私が残る」
思わぬフレイヤの発言、たしかに純粋な攻撃力だけで言うならソラが魔法を使えない以上フレイヤが最高だろう。
しかしフレイヤは実戦に慣れていない。
ソラはフレイヤを危険にさらす気はない。
いや、ほかの皆も危険にさらす気はソラには毛頭ない。
「いや、僕が残るよ。この中で一番魔物と戦いなれてるだろうし。それよりシルヴィア、早く剣を」
こうしている間にも虎視眈々と魔物たちはソラたちに飛びかかるタイミングを見計らっている。
シルヴィアが剣をソラに向かって投げる。

右手だけでもソラは器用に剣を掴み取る。
「アリア、フレイヤ、その三人を頼んだよ」
「わかりました。死なないで下さいよ」
「もちろんだよ」
リチャードとシルヴィアがレティシアに肩を貸しながら街の方向へ歩いていく。
ソラはリチャードたちが周りの魔物を上手く倒しながら街の方へ向かうのを見届けると誰に言うでもなく呟いた。
「さあ、ここは死んでも通さないよ」
ソラと魔物たちの死闘が始まった。

第十一話　死闘

「さあ、ここは死んでも通さないよ」
ソラの後ろには街へ戻ろうとしているアリアたちがいる。
街の方向には魔物はほとんどいなかったのでアリアたちの心配はしなくても大丈夫だろう。
尤もソラがここを死守できればの話だが。
そもそも魔物は普通の動物たちが何らかの要因で魔力を得たものだと言われている。
彼らは人間にはない能力をいくつか兼ね備えている。
一つは魔力の感知、言葉通り魔力を感知する能力だ。
これで獲物の魔力を確かめる。
当然同じ種類の魔物でも魔力が高い方が強い。
魔力とは魔物の強さの基準でもあるのだ。
もう一つは魔力の吸収、殺した相手の持っていた魔力を奪い取るというものだ。
つまり魔物たちはどんどん強くなっていくのだ。
それは単に魔力が大きくなるというだけではなく身体的な能力もベースとなる動物によって差はあるが上昇する。
魔物たちは生存本能だか何だかは不明だが魔力を得て強くなっていこうとする傾向がある。
そのため魔力感知で自分より弱いものを見つけそいつを殺し魔力を得る。
それでさらに強いものを殺しそいつの魔力も得る。
魔物がいなくならないのが不思議なくらいだ。
そうやって魔物たちは強くなっていく。
だから魔力を持った人間の方によって来ることも当然と言える。
フレイヤたちは魔力を常人よりもはるかに多く持っておりソラとの戦いで消耗していた。

それを狙ってこの魔物たちは群がってきたのだろう。
また魔力を得ることで変化する魔物もいる。
場所によって同じ魔物でも強さに極端な違いが出ることもある。
その場所の魔物の平均ランクがBランク以上だと危険区に指定される。
更に魔物の中には時にギルドから名前がつけられることがある。
強い人だけでなく強い魔物にも二つ名というものは存在する。
名付きと呼ばれる魔物たちである。
これらは魔物のランクとは別に名付きのランクに分けられる。
上から災害級、怪物級、人外級だ。
一番下の人外級が人間でいうAランク冒険者に匹敵する。
怪物級ならSランク、災害級なら国が総動員で対応に当たらなければならないレベルだ。
もっとも名付きはほとんどが危険区にいるため人生で名付きと関わるような人はそうは多くない。
（さっきのやつはギルドの手配書に載ってた気がするなあ……）
ソラがわざわざ学園長を名指しで呼んできてもらった理由、それは名付きらしきものを発見したからだ。
それがなければ決闘を中断してみんなで迎撃していただろうが名付きがいるなら話は別だ。
ソラ以外ではなす術もなく殺されるのがオチだ。
ソラの見間違いかもしれないが用心した方がいいだろう。
ソラの見たところ魔物のランクはDランクに届くかどうかという程度、数が多くても万全の状態であれば文字通り秒殺だ。
魔法を使わなくても一時間かからない量だ。
しかし今は左手が使えず出血も多い。
先ほどから魔物を屠っていっているがいつものように一撃で倒すことができていない。
（まずいなあ、まだ名付きと戦うには魔力が足りないなあ）
１０分前までは足止めに徹していたがもうその必要はなくなってい

た。
アリアたちが追い切れないところまで逃げたのか今ではソラに群がっている。
先ほどからとびかかってくる魔物を切り裂くという単調作業が続いている。
しかし目に見えて減ったようには見えない、先は遠そうだ。

◆◇◆◇◆◇

アリアたちは森を出るために全力を尽くし、もうすぐ町に着く。
もちろん魔物に襲われる恐怖というのもあったがそれはソラの懸命な引きつけによりアリアたちを追ってきた魔物はおらず、進行方向にいた魔物だけだった。
それも数が少なくアリアとフレイヤの尽力もあって全員無傷で切り抜けることができた。
ソラは怪我をした状態であたり一面を覆うような魔物の群れと戦っているのだ。
心配するなという方が無茶なことだろう。
「アリア、ソラを残してきてよかったのかしら？」
「ソラの実力ならあのくらいの魔物の群れなら負けるようなことはないと思いますけど……」
アリアは言葉を途切れさせながら俯く。
「何か心配なのか？」
「はい。ソラは今左手を怪我していますし今日はなぜか一回も魔法を使ってなかったようなので……」
「それは私も不思議に思ったぞ。魔力障壁すらも使っていないのだからな」
模擬戦などではソラはアリアたちに手加減をするだろうが今回に限っては例外のはずである。
「そうだったの？」

「ああ。魔法を使ったのは私に飛びかかってきた魔物相手だけだった」
黙っていたリチャードが口を開く。
「ソラは今魔力がほとんど残っていないらしいよ」
「どうして？」
「これを今日の朝方まで作っていたそうだ」
リチャードは懐から見覚えのあるベルトを取り出す。
「それはさっきの……」
そう、ソラに強引に作らせようとした魔道具だ。
シルヴィアたちは喧嘩別れのような雰囲気だったのでてっきりその話はなくなったものだと思っていた。
「ソラはまだ作りなれていないらしくてね。一つ作るにも魔力のほとんどをもっていかれるらしいよ」
「え？それならソラは魔力の枯渇した状態で私たちと戦っていたのですか？」
アリアは思わず叫んでしまった。
アリアがソラの指示に従ったのはソラの実力を知っているからだ。Aランク冒険者≪黒の魔術師≫、彼が魔法を使えば魔物の群れなんかに負けることはまずありえない。
そう考えてのことだった。
しかし実際は今ソラは魔法が使えず剣も満足に振れない、そんな状態のソラをあの場所に残してきてしまったのだ。
アリアは森へ戻ろうとするもフレイヤに腕をつかまれ、とめられる。
「何をするのですかフレイヤさん。早く戻らないと」
「どうしたのアリア？急に焦って」
先ほどまでソラの無事を最も信じていたのはアリアであったが今は違う。
「このままではソラが死んでしまいます」
「ソラは勝算があって残ったのではないのか？」
「いえ、それは……」

違います、言いかけた言葉を必死に呑み込んだ。
ソラは多分もう大事な人を殺させないために残ったのです、そう言いかけた。
しかしここでそんな事を言ってはソラの秘密がばれてしまう恐れがある。
そんなことになってはソラの帰ってくる場所がなくなってしまう。
それにソラのことだから何か解決策を用意しているかもしれない。
アリアはその可能性を信じた。
否、信じたかった。
「……きっとそうでしょう。だから私たちは早くこのことを学園長先生に知らせましょう」
何故ソラはギルドではなくわざわざ学園長に知らせるように言ったのか、このあたりの魔物なら当然街のギルドでも処理できるはずではないか。
そんな不安をアリアは抱いたまま街へといそいだ。

◆◇◆◇◆◇

（今ので……何匹目だったかな……）
ソラはもはや数えきれないくらいの魔物を殺していた。
思い出す合間にもイノシシのような魔物が突進してくる。
それを紙一重で躱しすれ違う際に目玉を串刺しにする。
血飛沫とともにイノシシのような魔物は倒れる。
魔物の血がソラにかかるがもはやソラは気にしていない。
既に自分の血と魔物の返り血で真っ赤だったからだ。
ようやく終わりが見えてきたがソラの左手の出血も激しい、他にも左腕に比べれば軽いがそれでも出血するような傷をいくつも負っている。
普段ならこんなに傷を負うことは危険区でもなかなかない出来事だ。
それはやはり魔法が使えないのと左腕の傷が原因であろう。

ソラはようやく終わりが見えてきたのを確認すると魔法陣を描き始めた。
しかもそれなりに大きなものだ。
魔物たちは魔法陣に警戒して近寄ってこない。
魔物は魔力を感知できるのだから魔法陣に込められた魔力の大きさに気づいたのであろう。
ソラの魔力は再び大きな魔法が使える、一回しか使えないが、量まで回復していた。
そのまま魔法陣を完成させる。
魔法陣が生み出したのは三振りの風の剣。
しかし風の剣は何故か剣の形状を解いて空気の中に溶けてしまう。
それを好機と思ったのか魔物たちが一斉にソラに襲いかかってくる。
しかしソラは顔色一つ崩さない。
ソラに近づいてきた魔物が飛びかかってきた瞬間、突如として魔物とソラの間に風の剣が生まれる。
風の剣は近づいた魔物を切り裂く。
そしてまた空気中に溶けていく。
ソラの周りの魔物はそれに気づかない。
飛びかかっては切り裂かれていく。
ソラが発動したのは先ほどのレティシアの魔法をアレンジしたものだ。
自分の出したいところ――もちろん空気中だ――にあらかじめ作っておいた風の剣を生み、半自動的に魔物を切る、といったものだ。
風は不可視のため魔物たちが気づくこともない。
ソラは斬り傷以外で魔物が死ぬのはおかしく見えるだろうし自分の近くで死んでいないのもおかしく見える、そう思って簡単に殲滅できる魔法を使わずにこのような魔法を創った。
現に魔物たちはソラに近づいては切り裂かれて死んでいる。
魔物たちはソラの魔力が目に見えて減ったことをいいことに途切れることなく襲いかかっている。

このペースならあと五分もあれば魔物はすべて片付くだろう。
そう思って気を緩めた瞬間、風の剣のうちの一振りが砕かれた。
ソラは思わず剣の砕かれた方向を向く。
その方向では猿がむかつく顔で笑っていた。
しかしソラは笑うことができなかった。
まず、魔法を砕くには魔法をはじめとした魔力を込めた攻撃をぶつけなければ砕くことはできない。
もちろん魔力障壁などの例外も少なくはない。
つまり魔法で作った火の玉を魔力の込められていない剣で切っても一瞬は二つに分かれるがすぐに戻ってしまうということだ。
更に魔法で魔法を砕くには魔法に込められる魔力の量が勝負を決める。
先ほどのソラの剣は魔法を魔力が感知できないようにした上に三つに分けていたせいで剣そのものに込められた魔力の量は使った総量からするとそう多くはなかった。
しかしそれでも常人からすればはるかに多い量を注ぎ込んでいた。
それを砕くのは先ほどから倒している魔物たちでは無理だろう。
そして、その猿はかなり遠くにいるのにソラの位置から見える。
ソラの周りには魔物が群がっていたはずなのに、だ。
ソラは確信した。
あの猿が間違いなく≪猿真似≫と呼ばれる名付きの魔物であると。
しかしソラの記憶ではやたら武器を扱うのが上手く近接戦では人間のAランクに匹敵するとさえ言われる猿だったはずだ。
ともあれあの猿が魔法を放った――しかも強力な――ことは状況証拠が物語っているためソラは周りの雑魚を無視して≪猿真似≫の元へ走る。
途中≪猿真似≫が魔法をいくつも放ってくるがそれを剣で切り裂く。
もちろん魔力を込めたものだ。
今は風の剣が魔物を常に殺しているので魔力は徐々に回復しているためこの程度の魔力で心配する必要はない。

≪猿真似≫が射程範囲に入った瞬間ソラは剣を振り上げる。
しかし≪猿真似≫は真上に跳躍、木の枝につかまり回避する。
≪猿真似≫はソラを馬鹿にするような表情をした後、魔法をソラに放った。
≪猿真似≫が先ほどから要所要所でソラを馬鹿にするのは挑発のためだろうか。
それならその作戦は大成功である。
現にソラは今思わず剣を≪猿真似≫に投げてしまったのだから。
普段なら考えられない失態であるが出血によって判断力が鈍っていたのかもしれない。
後悔するももう遅い剣を上手くつかんだ≪猿真似≫はそのままどこかへと放り投げてしまった。
剣の行方はソラにはわからない。
仕方がなく風の剣の一振りをソラの手元に出現させつかんだ。
そのまま大きく振りかぶって≪猿真似≫がいる木を切り倒す。
魔法で創った剣の切れ味だからこそできた芸当だ。
しかし≪猿真似≫は器用に他の木に移ってしまう。
そして再びソラを馬鹿にする。
ソラも再び剣を投げた。
しかし今度は風の剣、つまりは不可視の剣だ。
しかもつかまれれば空気中に戻せばよい。
≪猿真似≫もそれに気づいたのかソラが風の剣を投げたと思われる軌道上から移動する。
ソラは手元に風の剣を回収、そして投げる、その動作を繰り返す。
何回か繰り返した後ソラは風の剣を投げるフリをした。
≪猿真似≫はソラが風の剣を投げたと思い込みまた移動する。
枝から枝へと跳躍する瞬間、その時を狙いソラは風の剣を本当に投げようとした。
空中ならいくら≪猿真似≫でもかわせまい、そう考えての行動だったがそれは失敗する。

ソラは風の剣を投げる代わりにソラに向かって飛んできている物体を弾く。
それは先ほど≪猿真似≫が放り投げたソラの剣であった。
ソラが不思議に思っていると弾かれたソラの剣によっていく影がある。
それは見間違いでもなく≪猿真似≫だった。
しかし木の上にも≪猿真似≫はいる。
（……こいつら二匹いたのか。二匹合わせれば下手すると怪物級くらいかもね……）
一匹で人外級なのだからソラの予想もあながち間違ってもいない。
いまさらになってソラは≪猿真似≫にやられた冒険者には明らかに魔法で死んだと思われる者がいたことを思い出す。
カラクリは簡単で武器専門と魔法専門がいたという話だ。
ここからは厳しい戦いになりそうだ、そう気を引き締めなおしソラは≪猿真似≫の武器専門へと切りかかった。

◆◇◆◇◆◇

休みの日だというのに校舎内を走る音がする。
部活動ならばそとでやっているはずだ。
その音は学園長、ヨハンのいる学園長室に近づいている。
暗殺者ならばこれほど間抜けなこともないだろう。
そう思っているヨハンの前に息を切らせて少女が一人、学園長室に扉を勢いよく開けて入ってくる。
「学園長先生」
勢いよく入ってきたのはアリア・ナイアデス、教国の誇る巫女様だ。
「何がありましたか、アリア殿」
アリアの格好は見るからに戦闘服であり、しかもボロボロであった。
何かあったと思うのは当然の反応だ。
「ソラが……ソラが森で魔物に囲まれて……」

「どういうことかね？説明してくれないかのう」
アリアは半ば錯乱しているため上手く説明ができていないがどうにかソラが危ないということだけは伝えられた。
「君はレティシア君と合流して待っていなさい」
ヨハンはそれだけをアリアに言うと窓を開けてそこから出て行った。

時を同じくして冒険者ギルド、そこにはフレイヤが向かっていた。
ソラからは学園長に、としか言われていないが魔物の数が数だけにそれだけでは無理だと思ったのだ。
珍しく少女がギルドに入ってきたため奇異の目線がフレイヤに突き刺さるがそれを無視してフレイヤは受付に走る。
「魔物が森にたくさん出た。今友達が一人で戦ってる」
簡潔に伝えたいことを述べたフレイヤであったが受付としてはそんな発言を安易に呑み込むわけにはいかない。
「すみませんがそれを証明できるものは……」
「……ない」
「それだけではギルド側としてはちょっと……」
フレイヤは困った。
この間にもソラは危機に瀕しているかもしれない。
ふとフレイヤは名案を思い付いた。
フレイヤは懐からソラの、≪黒の魔術師≫のギルド証を取り出した。
「……これじゃ証明にならない？」
「しょ、少々お待ちください」
受付の女性は慌てて奥へと消えていった。
フレイヤとしては一分でも時間が惜しいところであるがこればかりは仕方がない。
ほどなくして受付の女性の代わりに年配の男性が出てきた。
「それで魔物とはいったいどの程度の数が出たのでしょうか？」
「百匹くらい……？」

「わかりました。ギルド所属の冒険者を向かわせましょう。場所はどちらでしょうか」
「街を出て近くの森の……」
フレイヤはわかる限りの説明をする。
「わかりました。至急冒険者を送ります」
そう言って受付の奥へと消えて行った。
「……レティシアたちと合流しないと……」
フレイヤはギルドを出るときおそらくソラの応援であろう冒険者たちを目にした。

◆◇◆◇◆◇

手ごわい、ソラの感想はそれ一つだった。
ソラの剣の腕はAランク相当、しかし現在は左腕が使えない。
いままで張り合えているのはひとえに魔法を同時に使っているからだ。
しかしその魔法も肝心の魔力がなく威力としては名付きの致命打にするには威力が足りない。
この≪猿真似≫×2はコンビネーションがこれでもかというくらい絶妙である。
先ほどレティシアたちのコンビネーションをほめたがそれとは比べ物にならない。
ソラの風の剣も残り一振り、先ほど使っていたのは武器専門の≪猿真似≫に砕かれてしまった。
しかしソラもただやられているわけではない。
≪猿真似≫たちのコンビネーションのパターンなどを見て隙を探している。
しかし隙らしきものは見当たらない、もうそろそろ左腕の怪我も限界が近いと思ったソラは一気に武器専門との距離を詰める。
そこから武器専門に向かって剣を振り下ろす。

が、当然≪猿真似≫はそれを防ごうと剣で対抗する。
その時ソラは風の剣にありったけの魔力を込めた。
見事に≪猿真似≫の剣は切れてしまう。
そのまま≪猿真似≫まで切ろうとするもそれはさすがに回避される。
≪猿真似≫は回避すると同時にソラに折れた剣を投擲、ソラはそれを剣で弾く。
その時ソラは剣を横に振りぬいていた。
それが致命的なミスとなった。
≪猿真似≫はどこからともなく取り出していた剣と槍をソラに向かって投擲。
ソラの腕はいまだ振りぬかれたままだ。
ソラの右腕、左足に剣と槍が刺さる。
≪猿真似≫は武器を複数持っていたのだ。
考えてみれば≪猿真似≫は武器を持っていて当然のはずだった。
今まで≪猿真似≫が殺してきた冒険者から奪い取っていたはずなのだから。
≪猿真似≫の投げた剣はソラの腕を容易に貫き、そのままソラを背後の木に縫いとめる。
ソラはもう満足に動くことができない。
両腕と右足はもはやソラの意思で動かすことは不可能だ。
≪猿真似≫は無造作にソラへ近づいてくると無造作にソラの足に刺さる槍を抜く。
思わぬ痛みにソラは声をあげそうになる
しかし≪猿真似≫は間髪入れずにその槍をソラの脇腹へと刺す。
ソラの顔が苦痛にゆがむ。
もはや声を出すことすらままならない。
いつの間にか≪猿真似≫の魔法専門までソラの近くに来ている。
≪猿真似≫はソラの苦痛にゆがんだ顔を見ながらおかしそうに嗤っている。
そして≪猿真似≫の魔法専門がソラにとどめを刺すべく巨大な火の

玉を作り出す。
それをソラにぶつける寸前で≪猿真似≫は動きを止めた。
≪猿真似≫たちは街の方を一瞥すると街とは反対、森の奥へと消えて行った。
ソラは≪猿真似≫たちが消えたのを見ると緊張感が途切れたのか意識を失った。

第十二話　重傷

ヨハン・エメリッヒは魔力を探知してソラを探していた。
なにも魔力の探知は魔物の特権というわけではない。
そこそこ実力がある冒険者なら魔力を辿ることはたやすい。
ましてやSランクともなれば呼吸をするように行うことができる。
常時であれば抑えられているものであるが戦闘時までそういうわけにはいかない。
ヨハンは森の入り口に立つと三つの魔力を感じた。
アリアの話ではソラは魔物たちに囲まれているとのことだったので三つしかないことを訝しんだがそれ以外に魔力が見つからないためその魔力へ向けて進んだ。
その魔力に近づくにつれてだんだんと血の匂いが濃くなっていく。
それに伴いヨハンは心を切り替えていく。
すると二つの魔力がもう一つの魔力から遠ざかっていくのがわかった。
そちらも気になったがヨハンはひとまずは今動いていない方の魔力へと近づいて行った。

絶句。
ヨハンがその光景を見た際の様子を表すにはこの言葉がふさわしいだろう。
それは魔物の群れ、アリアの言った通り百は超えているだろう。
切り殺された魔物の群れ、だ。
しかし肝心のソラの姿はない。
魔物の死体の中を魔力を頼りに歩いていくと木に剣が刺さっているのが見えた。
ヨハンはその木の方へと歩いていく。

そこにはソラが右腕だけではあるが磔にされて木にもたれかかっていた。
その光景を見るやいなヨハンはソラの方へと近づいていく。
幸いソラはまだ死んではいない。
しかし死んではいないだけで一刻を争う状態であるのは確実だ。
なにせソラの身体に赤く染まっていないところがないくらいだ。
ヨハンはソラの負っている傷を大きいものだけであるが止血しソラは背負う。
止血をするとすぐさまヨハンはソラの容体に影響しない範囲で全速力で街へと戻った。

◆◇◆◇◆◇

エリュシオン学園の近くにある街の病院、その一室だ。
言うまでもなくソラの病室である。
ソラは身体の至る所を包帯で巻かれていた。
手当をした医師の診断では全治一か月は下らないとのことだ。
今病室にはアリア、フレイヤ、シルヴィア、レティシア、リチャードがいる。
ヨハンからソラがどのような状態で発見されたのかは既に全員聞いている。
皆入ってからしばらくの間言葉を発しなかった。
レティシアが懺悔をするように切り出す。
「すまない。私が油断したばかりに……」
「レティシアさんのせいではありませんよ」
「そうよ。あなたは動けなかったのだから仕方がないわ」
「しかし私がもっと早く気づいていれば……」
確かにソラが怪我をしたのは紛れもなくレティシアを庇ったせいである。
それがなければここまでボロボロにされなかったかもしれない。

「それを言うならそもそもあの場所を指定した私がいけなかったのです」
街はずれの森の中を決闘の場所を指定したのはアリアである。
場所に選択の余地がなかったというのもあるがソラを相手にするのだから周りの被害を気にせずやれるところを選んだのである。
現にソラたちが戦った場所は見るも無残なものとなっている。
「いやそれは仕方がない。あんなに魔物がいるなんて、しかも私たちに襲いかかってくるなんて想像もしていなかったからな」
それはレティシアたちがまだ魔物という存在に出くわしたことがあまりないからだ。
多少なりとも魔物と関わったことのあるものなら魔物は魔力をまき散らす人間に襲いかかることは誰でも知っている。
レティシアたちも知識としては知っていたが実際にそのような状況に陥ったことはなかった。
故に魔物たちのことについて楽観視していた。
「……私が魔力を使いすぎたせいで……」
フレイヤが自らそういってうなだれる。
「フレイヤのせいではないわ。そもそも私たちが決闘なんて言い出したから……」
責任の擦り付け合いではなく責任のかぶりあいをするアリアたち、なかなか見られない光景ではあるだろう。
それだけソラがこんな状態になってしまったことを悔やんでいるのだろう。
（けどソラに言ったら……）
アリアはソラにこのことについて言ったら笑って自分たちを許してくれるどころかむしろ自分たちが無事かどうか心配するだろうと思っている。
それは推測ではなくもはや確信に近い。
今のソラにもっとも長く接しているのはアリアだ。
彼が今何を優先し何を切り捨てるかは知っている。

その経験からいってソラは自分の命よりもアリアたちを優先するのは目に見えてわかっていた。
それでもアリアからすれば好きな人の、ソラの命は自分よりも重いものである。
悔やむのは当然であった。
「もうこの話はやめにしないかい？私たちがいくら言ったところでソラが治るわけではないのだし」
「けれどリチャード……」
「私たちにはあんなことになるとは予想ができなかっただろう。いまさら何を言っても変わらないじゃないか」
慰めのように聞こえる言葉、しかしそれは見方を変えれば断罪ともとれる言葉。
再び病室には沈黙が戻る。
「……今日はもう帰りませんか？もう遅いですし」
今日アリアたちがソラの病室に入れたのは昼過ぎだ。
それも一度病室に入ろうとして門前払いをくらってヨハンに話をつけてもらってようやく入れた形だ。
アリアたちはかなり厳重に注意事項を医師に言われた。
それだけソラの容体は予断を許さないのだろう。
意識が戻るのにもまだ時間がかかる。
どちらにせよ今日意識が戻る可能性はない。
この病室にいては何かのはずみでソラにぶつかったりしてしまっては大ごとだ。
そう考えての発言だ。
「……そうだな」
先ほどのリチャードの発言がまだ尾を引いているのかリチャード以外はあまり元気がない。
アリアたちは順々に部屋を出ていく。
「寮に帰りましょうか」
「すみません、私は少し用事があるので……」

そう言ってアリアはシルヴィアたちと別れた。
そのまま病院へと戻る。
ソラの病室へと脇目を振らずに歩いてゆく。
アリアの予言には種類があるが自分が望むことを予言するためには時間が必要となる。
一秒後を予言するには前に予言した時から一秒の時間がいる、といったように。
アリアが最後に予言をしたのは昨日のソラとの戦闘中だ。
約一日たっているため一日先までならアリアの望むことを予言できる。
ここまで戻ってきた理由は勿論ソラが目覚めるかどうかを予言するためだ。
一人で来たのは仮にも予言には制限があることは国家機密なのでおいそれと漏らすわけにはいかないからだ。
「ソラ……」
アリアはソラが目覚める光景を予言しようとする。
しかしその光景はいつまでたっても頭の中に浮かび上がってくることはない。
それが何を意味しているか。
答えはアリアの予言できる範囲内でソラが目覚めることはないということだ。
その事実にアリアは少し落ち込む。
アリアは既に大神殿から薬を取り寄せるように手配しているが一介の冒険者のために希少な薬が送られてくるかは微妙である。
アリアの頭にはこのままソラが目覚めないかもしれないという漠然とした不安が芽生えていた。
気づけばアリアの頬を涙が流れていた。
「すみません、もうそろそろ面会は終了です」
ソラの病室に入ってきた看護士がそうアリアに言う。
「申し訳ありません。気づきませんでした」

名残惜しそうにアリアは病室を後にする。

◆◇◆◇◆◇

ソラの見舞いに行った次の日の早朝、レティシアは久しくやっていなかった早朝鍛錬を行っていた。
実家、オルレアンの家にいるときはしていたがエリュシオン学園への入学によって忙しくなりここ最近はやっていなかった。
再開した理由は勿論昨日のソラを見たからである。
そもそも決闘の時に自分が力尽きて休んでいなければソラが左腕を負傷することにはならなかった、自分はまた役に立たなかった。
ソラ・ルビンシュテインに誘拐された時に助けてもらった、けれどレティシアも助ける側にいるべき人間だった。
その時の彼はレティシアにはどうしようもなくかっこよく見えた。
そんな彼に近づくために必死で努力した。
彼と同じように自分も何かを守るために。
口調が変わってしまったのもそれが関係しているのかもしれない。
結果として一族の秘術を最年少で扱えるようになった。
けれどソラ、くしくも同じ名前の少年に再び助けられた。
その時自分は何も役に立てなかった。
あの時と同じように。
そんな思いがレティシアの中で渦巻いている。
「私も混ぜてもらえないかしら？」
珍しくシルヴィアがこんな早朝から起きている。
いつもなら遅刻ギリギリまで寝ているというのに。
レティシアは驚きを隠せなかった。
「なんていう顔をしているのかしら。そんなにも私が早起きしていることが不思議？」
「それはそうだろう。私はシルヴィアが早く起きているのを見たのは入学式の時だけだぞ」

「私をそんなに怠け者みたいに言うのはやめてほしいわね。規律を破ったりはしていないのだから」
「……規律を破らずとも君のような生活をしていれば怠け者なのではないか？」
「……」
「それで早起きに加え私の鍛錬に混ぜてほしいとはまたどうしたのだ？明日あたりに大雪でも振らせたいのか？」
「せっかくのいい陽気なのに雪なんて望んでないわよ。あんなの迷信に決まってるじゃない」
「そうなのか？」
「あなた信じてたの？」
「そ、そんなわけがないだろう」
見るからに狼狽しているレティシア、真偽のほどは一目瞭然だ。
「そうね。そういうことにしておいてあげましょう。それで私も混ぜてくれないかしら？」
「それは構わないが……」
レティシアが気乗りしない。
シルヴィアがきちんとついてこれるかどうかわからないからだ。
具体的にいうと三日坊主になる気がするからだ。
「大丈夫よ。今回は無理はせずに自分のペースでやるつもりだから。」
「それならいいが……」
渋い顔をしながらレティシアは了承した。
レティシアは再び早朝訓練、オルレアン流剣術の型を一からこなしていく。
シルヴィアはその型を真似しながら剣を振っていく。
オルレアン流剣術はアマルティア王国で正式に採用されているものでよほどのことがない限りアマルティア王国の人間が剣を習うのであればオルレアン流となっている。
王族も例外ではない。

やはり二人の間には確たる技術の差がありそれは傍から見てもよくわかる。
それでも真剣さで言えばどちらも変わらないように見える。
レティシアは一通り型をやり終える。
それに続いた形でシルヴィアも最後の型を終える。
「どうして急に早朝鍛錬に付き合うなど言い出したんだ？」
レティシアは息一つ切らしていない。
「それは、あなたも、でしょう？」
対するシルヴィアは息切れを起こしている。
言葉も途切れ途切れにしか言えていない。
「私はただ己の未熟さを自覚したにすぎん」
「私も同じよ」
「だがシルヴィアは戦う人間ではないだろう。私は騎士なのだ」
「未熟さを感じるだけならそれは関係ないんじゃないかしら？」
「しかしシルヴィアはどちらかというと上に立って指揮を執る方だろう。なら強さは関係ないではないか」
「それならあなたは私と同じ立場の時そういわれて納得できる？」
「……できないな」
「でしょう」
レティシアとシルヴィアはどちらからともなく笑いあう。
「ところでもうそろそろ学校に行かないとまずい気がするのだけど……」
そう言われてレティシアが時計を見ると既にシルヴィアがいつも起きる時間を過ぎていた。
「急ぐぞ」
規律は守る派のレティシアと無駄な足掻きはしない派のシルヴィアは対照的な態度で寮へと戻っていった。

◆◇◆◇◆◇

（これはいったい何があったというのだ）
ヨハンはソラが倒れていた付近に再度来ていた。
今回はギルドからの依頼でやってきたのだ。
ソラを助けてから二日、魔物の大発生ともいえるべき異常事態が発生したことはギルドもすでに知っている。
ギルド側としては当然このような事態を放っておけず調査員を派遣したのだがその調査員たちが帰ってこない、それでヨハンに依頼が回ってきたわけだ。
引退したとはいえ元Ｓランクにならギルドも安心して任せることができるし、ヨハンも自らの学園の生徒が関わっているため見過ごすわけにはいかない。
生徒の安全面的にも看過できないものである。
だからヨハンは学園の仕事を放りだしてここにきている。
しかしこの場所は明らかにおかしかった。
通常人が魔物を殺した場合魔物が持っていた魔力は空気中に拡散される。
そのため魔物が多く死んでいるところでは空気中の魔力濃度が高いことがおおい。
数少ない例外としては魔物が魔物を大量に殺した場合などだ。
魔力濃度が高ければ高いほどその魔力を感じやすくなる。
これだけの魔物が死んでいればヨハンではなくとも気づくレベルの魔力濃度になっているはずだ。
しかし、実際はヨハンが精神を集中させて念入りに魔力を探知しようとしても他の場所との差異はみられない。
二日前のこととはいえこれだけの数が死んでいるのだから痕跡くらいは残っているはずなのに、である。
ヨハンは自身の記憶をたどる。
ソラをここで発見した時どういう状況だったか、その時の魔力濃度はどのくらいだったか……
ヨハンもあの時は焦っていたためいまいち状況を覚えていない。

立ち止まって思考をめぐらしているヨハンに後ろから剣が飛来してくる。
その速度は弓矢に匹敵するのではないかというほどだ。
それをヨハンは後ろを見ずに難なく掴み取る。
（やはりそういうことかのう……）
後ろを振り向くと猿が二匹。
もちろんただの猿ではない、ソラを重傷まで追いやった≪猿真似≫だ。
ヨハンの推理は極めて簡単である。
魔物が大勢死んでいるのにもかかわらず魔力濃度は低い、それはどういうことか。
魔物が魔物を大勢殺したということだ。
魔物を大勢殺せてなおかつソラさえも瀕死に追いやることができる魔物がいるということ。
そしてソラのランクはBランク、それをあそこまでやれるのは冒険者であればAランク、魔物で言えば名付きレベルだろう。
というものだ。
これには間違っているところもあるのだが結果的には変わらない。
ソラを瀕死にまで追いやったのは≪猿真似≫であるからだ。
ヨハンは二匹魔物がいることもわかっていた。
ソラから離れていく魔力は二つあったからだ。
しかし、二匹ともが名付きレベルだとはさすがに考えていなかった。
名付きとは本来こんな場所にいるべき魔物でないからだ。
ヨハンは迷わず逃げた。
投げられた剣を二匹の≪猿真似≫が一直線上になるように投げ返し、全力でこの場を離脱した。
ヨハンは今武器も持っていないしここに来るまで名付きがいるとは思ってもいなかったため服も通常の服である。
逆に言えば名付き以外ならどうにかできたということだが。
いくらなんでも名付き二匹に何の武装もなしで勝てると思うほどヨ

ハンはうぬぼれていない。
（明日またくるかのう……）
魔物の大量発生どころか学園の近くに名付きがいるとなれば行かないという選択肢はヨハンにはなかった。
とはいえヨハンはすでに一線を退いた身でもある。
≪猿真似≫に遅れをとる可能性もある。
ヨハンは学園の二つ名もちを連れて行くことに決めた。

第十三話　事件

「それでは準備はいいかのう？」
ヨハンは数人の生徒に話しかける。
「内容は昨日連絡した通りじゃ。今から街はずれの森へと向かい名付き≪猿真似≫を君たちに討伐してもらおうと思っておる。儂は基本的には傍観するだけにとどめておこうと思っておる。もちろん危険になったらすぐに介入するつもりじゃから心配せずともよい。何か質問はあるかのう？」
今ここにいるのはエリュシオン学園の生徒会で二つ名を持っている生徒だ。
ヨハンが昨日のうちに連絡しておいたのだ。
一人の女子生徒が手を挙げる。
「はい、は～い。おじい様、クリス質問あります！」
「……なんじゃ？」
「クリスが頼んでたことはどうなったの～？」
ヨハンの呼び方からわかるようにこの女子生徒はエリュシオン学園生徒会長にしてヨハン・エメリッヒの孫でもあるクリスティア・エメリッヒだ。
すでに二つ名も入手しているエ才媛だ。
ちなみ頼んでいたこととは≪黒の魔術師≫についてである。
「……何のことかのう？」
「まだ～？」
「……クリス、今忙しいところでな。その話は帰ってからにせんか？」
「クリスは誤魔化すのはいけないことだと思います！」
「……謝るから許してくれんかのう？」
「まあ別にいいけど早くしてね～」
「……今から≪猿真似≫討伐に向かう。緊張感を緩めず儂について

くるように」
ヨハンの威厳はもはやなくなっていた。

◆◇◆◇◆◇

普通は学園長がいようがいなかろうが学園に大した変化はない。
しかし今日は違った。
何せよ学園の近くに名付きの魔物がいるという話である。
もちろん生徒たちに被害を及ぼさないためにヨハンたちが討伐に行っているのだがそれでも恐怖はぬぐえないだろう。
名付きは人間でいう二つ名もちに匹敵する、今の学園に現れたら名付きにかなうものなどいない。
討伐に行っているといわれても不安は生徒の心からぬぐい切れてはいない。

「学園長は名付きの討伐に向かったそうですね」
話を切り出したのはアリア、今は昼食の時間でありこの場にはアリア、フレイヤ、シルヴィア、リチャード、レティシアが集まっている。
「そうらしいな。ということはソラが戦ったのは……」
「名付きだったということでしょうね……」
アリアたちが学園長から聞いた魔物は全滅していたがソラも瀕死の状態だったということと、この時期にこんな場所に名付きがいるということ、この二つを合わせて考えればソラが名付きと戦ったということは想像に難しくなかった。
「学園長が生徒会の人も連れて行ったって本当なのかしら？」
「そのはずだよ。だってほら」
リチャードは食堂の一角を向く。
そこは生徒会役員たちがいつも使っている場所だ。
食堂の席に特に決まりはないのだがそれらの席だけは生徒会の指定

席となっており他の生徒が座っていることはない。
リチャードの言いたいことはわかった。
今それらの席には誰も座っていない。
それはつまり生徒会は少なくとも昼食をとれる状態でないということだ。
学園から生徒たちに名付きの討伐に学園長と生徒会役員が行くとは伝えられていない。
むやみに伝えて生徒たちをおびえさせなくともよいという学園側の判断であるが情報とはどこからか漏れるものである。
噂という形ではあるが既にこの話は学園の生徒の大半が知るところとなっている。
加えて今生徒会役員の姿が見えないことから噂の真偽は一目瞭然だ。
しかし、学園長が生徒会役員を連れて行ったというのは考え方によっては大変なことと思える。
もちろん一つは生徒の経験を積ませるためという考え方だがこれなら既に二つ名を持っている生徒会役員よりも二つ名に近い生徒たちを連れていくだろう。
ではもう一つの考え方は？
元Sランク冒険者のヨハン・エメリッヒが苦戦するかもしれないと考え生徒会役員を連れて行ったという考えだ。
これらの考え方は学園内では圧倒的に前者が多数派だ。
現にシルヴィアたちは前者の考え、アリアだけは後者の考えだと思っていることからもわかる。
しかしそれは誰よりも今のソラの実力の高さを知っているアリアだからこそソラを倒した名付きの強さがとてつもなく高いと思うのであって正確にソラの実力を把握し切れてないシルヴィアたちはヨハンが苦戦するところなど想像もしていない。
「ソラはずいぶんと無茶をしたようだね」
「あの時ソラは珍しく焦ってましたからね。おそらく名付きに気づいていたのでしょう」

「……私たちは戦えないとソラ君に思われていたということか」
「それは違うと思いますよ」
「何故だ？名付きがいるのならソラだけではかなわないのはわかりきったことではないか。それなのになぜ私たちと共に戦おうとしなかった？」
ソラが自分たちのような初心者がいれば邪魔になると判断したのならまだ頷ける。
だが、もしソラが名付きに気づいていたとなれば話は別だ。
弱い魔物の掃討ならば乱戦になるよりもソラ一人でやったほうが良かったかもしれない。
しかし明らかに強い魔物がいるのなら全員で戦っていたほうが勝率は高かったのではないか。
レティシアはそう言っているのだ。
「私たちを守るためではないのですか？あの場には私もいましたし」
忘れられかけているかもしれないがソラはアリアの護衛である。
アリアを危険な場所から遠ざけるのは当然と言えよう。
もっともソラが守りたかったのはアリアだけではないが。
「しかしだな。名付き相手に負傷した状態で戦うなど自殺行為にも等しいのだぞ。それを……」
「この話はもうやめにしないか。この前も同じような話をしただろう。文句はソラが起きた後にでも言ったらどうだい？」
リチャードが口をはさんだ。
「だがなリチャード。私は……」
『生徒の皆さん、学園内に魔物が侵入したため速やかに講堂へ避難してください。繰り返します、生徒の皆さんは速やかに講堂へ避難してください。』
食堂に取り付けられている魔道具からアナウンスが流れる。
食堂がにわかに騒がしくなる。
もちろん常時であれば一年生はともかく二年生、三年生は怯えるどころか名を上げるために自ら戦いに行こうとする者すらいたかもし

れない。
しかし今は状況が違う。
学園の近くには名付きがいるという情報、学園の警備、結界を破れる魔物がいたということ、これらのことから生徒たちの恐怖は最大限のものになっていた。
食堂にいた生徒たちが我先にと出口へ、講堂へと向かう。
講堂は学園内の施設の中でも最も強力な結界が張られている場所である。
それはもちろんこのような事態のためである。
「私たちも行きましょう。遅れて入れなくなったら大変だわ」
「そうですね。急ぎましょう」
席を立ち、出口へと向かう一同。
そんな中レティシアが不意に立ち止まる。
「どうしたのレティシア？」
「……みんなは先に行っててくれ。私は魔物を倒す」
いきなりとんでもないことを言うレティシア、ほかのメンバーは驚愕をあらわにする。
「ソラが怪我をしたのは私の失態だ。そのかたき討ちといったところだ」
「無謀だわ。あなたじゃ名付きにはとても……」
「心配は無用だ。あれさえ決まればおそらく……」
あれとはオルレアンに伝わる秘術である。
オルレアン家には先祖に二つ名もちが数多くおりその中には名付きを秘術で殺したという話もある。
勝算がないわけではなかった。
「駄目ですよ。レティシアさんにはあの魔法はまだ負担が大きいのでしょう？外してしまえば殺されてしまいます」
「外さなければ問題あるまい」
「相手は名付きですよ。もしレティシアさんが死ねば私たちが悲しいです。それにソラもせっかく守ったのに死なれては悲しむでしょ

う」
「……そうか。ソラが悲しむか……」
少し赤い顔で言うレティシア。
アリアはその様子に危機感をもち、シルヴィアとリチャードは珍しいものを見るような目を向けた。
「すまない。馬鹿なことを言ってしまったな。講堂に急ごう」
前方へと進んでいくレティシアを見送りながらアリアは呟いた。
「……あれはどういうことでしょうか？」
「……」
この呟きはレティシア以外の全員に聞こえたが答えるものはいなかった。

講堂にはほぼすべての生徒が集まりつつあった。
クラスごとに整列し、そのクラスの代表が点呼をとっていく。
ちなみにクラスの代表とはそのクラスで最も成績の良い生徒のことである。
しかしフレイヤは駄々をこねたため魔術Ａクラスの代表は代理という形でアリアがやっている。
ほどなくして教師陣が講堂の扉を完全に閉める。
講堂の結界は強力過ぎるがゆえに誰かが発動する形式のものとなっている。
もちろん危機が去り次第解除できるのであるが外部のものが発動した後発動者が死んだ場合は結界を破壊しなければ出れないようになっている。
だから講堂の地下室には閉じ込められた時のために食料が用意されている。
何とも不便なものである。
壇上に複数の男たちが上がっていく。
アリアはその男たちの中に見覚えのあるものがいた。
入学して一か月も経つのだから自分に直接かかわっていない教師で

あっても見たことぐらいはあるだろう。
故に不思議ではない。
しかし壇上に上がった男はとんでもないことを言った。
「生徒諸君、君たちには悪いがこの学園は占拠させてもらった。諦めて僕たちの指示に従いたまえ」
生徒たちは驚きのあまり言葉を失ってしまう。
「安心したまえ。僕たちは君たち全員を殺そうなんて物騒なことは考えていない」
生徒全員は殺すつもりはないらしい。
逆にいうと一部の人間は殺すつもりだということだ。
「僕たちの目的は今年この学園に入学したとある生徒たちの身柄だ」
今年入学した生徒には四大大国の要人が三人ほど含まれている。
もちろんそれはアリア、リチャード、シルヴィアのことだ。
「≪時の巫女≫アリア・ナイアデス、アマルティア王国第一王子リチャード・アマルティア、第一王女シルヴィア・アマルティア、おとなしく前に出てきてくれないか」
予想よりは少ないが予想通りの人物が呼ばれる。
「彼らにいったい何の用だ」
生徒の中の一人が壇上の男に言う。
よく見ればファンクラブ同盟のリーダーだった男だ。
「ふむ。確かに理由を話さないというのは正義に反するな。よろしい。では私たちがなぜこのようなことを強行したのかを教えて差し上げよう。それもまた目的の一つだからな」

◆◇◆◇◆◇

「まず僕たちの目的について話そうではないか。僕たちがここに来た目的は二つだ。一つは≪時の巫女≫アリア・ナイアデスの殺害、そしてもう一つは勧誘だ。
≪時の巫女≫を殺害する目的は簡単だ。君たちも知っているであろ

う二百年前の大予言、それが間違いであることを証明するためだ。
昔はあの予言のおかげで二百年前は戦争が終わったが、今はあの予言のせいで世の中に犯罪をするものが増えた。どうせもうすぐ滅びるのだからと言う輩がな。そういうやつらを減らすことが目的だ
そして勧誘、これは次世代を担う君たちが僕の目的に賛同してもらいたいがためだ。
今この世界は四大大国と呼ばれる国々に対するほかの国の立場が低い。四大大国の中にはそれを利用して周りの小国から搾取している国すらある。それもまた正義に反するのだが更に悪いことに搾取された国や一部の国の上層部は貧しい民から必要以上に富を搾取している。自分たちの私腹を肥やすためにであったり四大大国からの要求にこたえるためにな。そのせいでそれらの国々では食料がないことなど当たり前、ネズミや草の根を食べて生活しているものがいる。少数ではない、数えきれないほどにだ。
僕は僕のせい偽のためにもそんな彼らを救いたいのだ。ここにいる僕の仲間たちは皆僕の考えに賛同してくれた者たちだ。他にも後援者もいる。この学園の近くに名付きが出現したのは彼らの協力だ。学園長をおびき出すためのな。二つ名付きの生徒まで連れて行ったのは幸運だった。彼らに対抗できるだけの戦力を用意するのは骨が折れるからな。
おっと、話が脱線してしまったな。それでは君たちに問おう。僕の目的に協力してくれるか？」
生徒の間からは話し声が聞こえてくる。
あまりに突然過ぎる問いに近くの友人たちと話をしているのだろう。
「よかろう。人生に関わる問いだ。相談の時間くらいは与えよう。それではその間に先ほどあげた三人には壇上に上がってきてもらいたい」
アリアたちは壇上に上がらない。
それは当然のことである。
アリアなどは殺すことを宣言されているのだ。

ソラもいない今身を守る手段がない。
業を煮やしたのか男が再び口を開く。
「出てこないというのなら大変不本意ではあるが端から生徒たちを殺していくことにしよう。犠牲を少なくするためにもなるべく早く出てきてもらいたいものだ」
壇上の男は生徒たちの近くにいる仲間に合図をする。
するとその男は本当に剣を振りかぶり始める。
「待ってください」
「待ちなさい」
声が同時に上がる。
もちろんそれはアリアとシルヴィアの声だ。
リチャードも立ち上がっている。
「私たちが前に出よう。だからそんなことはやめてくれないか」
「さすが一国の王族だ。肝が据わっている。さあ早く壇上に上がってきてくれたまえ。処刑はやはり公開した方が効果的だからな。尤も王子様と王女様は人質にするのだがな」
「アリアは見逃してもらえないのか？」
「駄目だな。僕は自分の実力は把握しているつもりだ。教国の大神殿にのりこむつもりはない」
それは教国に実力があればケンカを売る気さえあるということだ。
「そこの三人を連れてきてくれ」
アリアたちの近くにいた男たちがアリアたちの元へ来ると腕を縛る。
抵抗されないためだろう。
ここで抵抗しては無関係の人が殺されるため抵抗はできないのだが。
なす術もなく壇上へと連れて行かれる。
そこでアリアははっきりと男の顔を見た。
「あ、あなたは……」
「久しぶりだな、≪時の巫女≫」
「……アリア、こんな男と知り合いなの？」
シルヴィアは声に混ざる嫌悪感を隠そうとはしていない。

「彼は≪正騎士≫の二つ名を持つ騎士ジョルジョ・ヴェロッキオです」
「はあ？二つ名もちが何でこんなことをしてるの？」
「彼は正義のためなら何をやってもよいという思想の持ち主でして……」
「そういうことだ。少しの間そこの王女様たちと最後の歓談でもしておいてくれ」
彼は声を大きくして言う。
「さあ生徒諸君、君たちの考えは決まっただろうか。僕たちの考えに賛同できるものは僕から見て左側へ、賛同できないものは右側へ動いてくれたまえ」
生徒たちが二つに割れる。
どちらも同じくらいの数だ。
先ほどまでのジョルジョの演説は正しいと思える内容ではあったので妥当と言ったところだろう。
「ふむ、妥当な数だな。では同志たちよ、僕が≪時の巫女≫殺すと同時に僕らに賛同しなかったものを痛めつけてくれたまえ」
正義を語るくせにとてもそうとは思えない発言だ。
「どういうことですかっ？
アリアが怒りを声に滲ませながら言う。
「正義の考えに賛同できないなら悪ということだろう？なら矯正するのが大人の役目というものだろう」
ジョルジョがアリアの近くに歩いてくる。
「それより君は自分の身の心配をした方がいいと思うがな」
ジョルジョはアリアの髪を引っ張ると生徒の位置から見やすい場所へと移動する。
公開処刑にするつもりだからであろう。
「君の犠牲は無駄にしない」
しらじらしいセリフである。
ジョルジョは剣を抜き振りかぶる。

「さらばだ」
そして振り下ろす。
その時アリアの指輪が光り、魔力障壁を生みだす。
ジョルジョの剣はその魔力障壁に弾かれる。
「ほう、これは面白いものをもっているな。内蔵する魔力はかなり多いな。だがいつまで持つかな」
にやりと笑うとジョルジョの剣が光に包まれていく。
そしてアリアを守る魔力障壁へと次々と斬撃を繰りだす。
一撃ごとに指輪の魔力が減っていくのがジョルジョにはわかる。
もうすぐ壊れるだろう。
「やめろ」
横合いから光の剣と魔法の嵐がジョルジョを襲う。
それをあろうことかジョルジョは剣の一振りで消してしまう。
「……どういうつもりかな？」
「どういうつもりも何も友達を守るのは当然だろう」
「……アリアは殺させない」
そう言って壇上へと上がってきたのはレティシアとフレイヤである。
「君たちはどうやらその年齢では優秀なようだな。先ほどの攻撃、見事だった。だが……」
ジョルジョの姿が霞む。
少なくともレティシアたちにはそう見えた。
次の瞬間にはフレイヤは気を失っており、レティシアの首には後ろから剣が添えられていた。
「僕の前に出てきたのは不注意と言わざるを得ないな。ここでおとなしく≪時の巫女≫が殺される様でも見ておいてくれ」
レティシアの脚から鈍い音がする。
「ぐあっ」
骨が折れた音だ。
レティシアは声を上げてうずくまる。
ジョルジョはアリアの方を向く。

「さて、その指輪の魔力もあと数回で切れるだろう。もうそろそろ死んでもらおう」
ジョルジョが再び剣に光をまとわせて数撃、ジョルジョの宣言通り魔力障壁は破れ指輪が砕ける。
「さらばだ」
その言葉とともに振り下ろされる剣、アリアにも、レティシアにも、シルヴィアにも、リチャードにも何もできない。
「ちょっと待て」
横から闇よりも黒い剣が伸びてきてジョルジョの剣を止める。
「……何者だ」
その剣の持ち主へと壇上の人間も下で見ていた人間もすべての人間の視線が集まる。
そこには黒いローブで全身を隠している男がいた。
「俺は≪黒の魔術師≫、そいつの護衛だ」
その独特な風貌から見間違えるはずもなくそれは≪黒の魔術師≫そのものであった。

第十三話　事件（後書き）

ジョルジョのセリフが長かったですね

第十四話　怒り

昼間の病室、その住人は前触れもなく起き上がった。
「痛っ」
見れば身体の至る所に包帯が巻いてある。
住人は一通りあたりを見回して自分が病院にいることを理解した。
（……助かったのか。それにしてもこんなところで役に立つなんて……）
病室の住人、ソラは何もなければ今日目覚める筈ではなかった。
それはアリアの予言においても証明されている。
だがアリアは自分の予言を覆すためにソラを呼んだのだからソラが再び予言を覆す可能性があることを忘れていた。
（寝ている時ならまだしもなあ……）
ソラが叩き起こされたのは自分のせいに他ならない。
アリアたちに渡したアクセサリーにかけていた魔法の一つに魔力障壁が破られそうなときにその位置をソラに伝える魔法とソラの意識を覚醒させる魔法をかけていたからだ。
意識を覚醒させる魔法は寝ている時のためにかけていたのだが昏睡状態から目覚めさせられるとはソラも思っていなかった。
とはいえ起こされたということはだれか、おそらくアリアが殺されそうになっているわけだからあまり悠長にしていられない。
（今はお昼みたいだな。てことはアリアは学園か。一応姿は隠した方がいいかな）
学園内には自分を知っているものが多い。
なんせ学園始まって以来の落ちこぼれだ。
ソラは黒ローブを虚空から取り出した。
正確には生み出した。
そもそもソラの黒ローブは隠蔽の魔法などをローブという形にしたものである。

このローブを纏っている間はあらゆる情報をソラから得ることはできない。
性別も、声の高さも、少しだけなら見えているはずの顔の形も、どんな情報も得ることはできない。
ソラは黒ローブを纏うと立ち上がろうとする。
脇腹や左腕に激痛がはしる。
（これ絶対安静とかだよね。動いたらダメなやつだよね）
痛みに耐えながらソラは何とか立ち上がる。
動かなかったらおそらくアリアが殺されるからだ。
（まあしょうがないしなあ。行きますか）
ソラは転移魔法のための魔法陣を描く。
（さてどうなっているのやら）
完成した魔法陣の中へとソラは足を踏み入れた。

◆◇◆◇◆◇

「≪時の巫女≫、これはいったいどういうことだ。」
ソラは咄嗟に口調を変えた。
まさかこんな衆目の前だとはソラも思っていなかった。
「彼は≪正騎士≫、端的にいうと私を殺そうとしています」
アリアの言葉にソラは驚く。
「≪聖騎士≫？なんで教国最大戦力の一人がそんなことをやってるんだ？」
≪聖騎士≫とはSランクの冒険者であり、教国の誇る騎士の一人だ。
「違います。彼は正義の騎士と書いて正騎士です」
「なるほど。だが俺の覚えでは≪正騎士≫もSランクに近いと言われてなかったか？」
「そうですね彼はSランクに上がる条件のいくつかをクリアしていますからね」
「そうか。それでここに転がっているフレイヤと他の彼女たちはど

うしたんだ？」
「倒れている二人は≪正騎士≫に倒され他の2人は人質にされています」
「そうか……下の生徒たちは？」
「左側は保護されていて右側は痛めつけられようとしています」
「ずいぶんと極端だな」
「僕を蚊帳の外に置かないでくれないか。君が≪黒の魔術師≫か？」
「そうだが。どうかしたか？」
「僕の剣を止めるとは噂にたがわぬ実力だ。僕の仲間にならないか？」
節操がないとはこういうことを言うのかもしれない。
ソラは今の惨状を見渡す。
生徒たちが怯えているのが見える。
しかしソラにはあまり関係のない話ではある。
次に壇上、フレイヤとレティシアは倒れ、シルヴィアとリチャードは縛られ、アリアは殺されそうになっている。
これだけでソラが取るべき行動を決めるには十分だった。
ソラから膨大な魔力、そして殺気ががあふれ出る。
その魔力の量は常人十人分の総魔力量と同等だったがSランクに近い魔術師ならありえないこともない量だ。
上位の魔術師は人間と決闘する際には魔力を自らの三割近い魔力を大気中に放出する。
それは相手によっては魔力で魔法の発動、下手すると魔法の威力すらも見破られる恐れがあるためそのカモフラージュとしてだ。
故にジョルジョは勘違いした。
これがソラの魔力の総量の三割であると。
「……ありえないな」
「何故だ？正義のためだぞ？」
「俺は別に正義なんてどうでもいい。だがお前は俺の逆鱗に触れた。だから殺す」

「そうか残念だ。君ほどの人材を殺すなんて」
Ｓランクに近いといわれるＡランク同士の戦いが始まった。

◆◇◆◇◆◇

「さて、やろうか」
「待て。場所を変える。お前も人質が死ぬのはまずいだろう」
「そうだな。しかしどこへ移動するというのだ。僕は君のように転移魔法は使えないのだが」
この結界は転移魔法に対しては対策がされていない。
そもそもそのレベルの魔術師は大陸に１０人いるかいないかだからだ。
「……見破っていたのか」
「この結界の中に入る手段はそれくらいだろう」
「……なるほど」
「それでどうするんだ」
「一分待て」
ソラの姿が薄くなり消えていく。
そしてジョルジョの仲間全員の目の前に出現する。
「眠れ」
ソラの幻影は魔法をジョルジョの仲間へと放つ。
彼らは名付きの生徒用に集められた精鋭中の精鋭である。
とっさに防ぐものも多数いた。
だが次の瞬間にはソラの幻影が二人に増え一人を囲んで魔法を放つ。
防げば防ぐほどソラの幻影は増えていく。
ついにはジョルジョの仲間たちは一人残さず倒されてしまった。
その間わずか一分もかからなかった。
ソラの幻影たちは生徒たちに一つに集まるように指示する。
彼らが集まり次第ソラはそこに結界をかける。
「これで大丈夫だろう」

ジョルジョは突然横に現れたソラに特に驚きもせず言った。
「ますます惜しいな。どうしても僕の仲間にならないか？」
「お前がこの場で死ぬなら考えんこともない」
「そうか……ではやるしかないか」
二人とも講堂のど真ん中へと降り立つ。
向き合うやいなジョルジョがソラに切りかかる。
ソラは再び黒い剣で防ぐ。
「正義を自称する騎士が不意打ちなんてしていいのか？」
「貫けない正義なんて戯言にすぎない」
「なるほど。道理だ」
「それにしても多少は近接もできるみたいだな」
「あんたが弱いだけじゃないのか？」
「これならどうだ」
ジョルジョの剣が光を纏う。
「やっぱりあんたの属性は光か」
「そういう君は闇だろう」
魔法において光と闇という属性は他の属性とは異なる性質を持ち合わせている。
正確には属性固有の性質を持ち合わせていない。
使用者によって性質が変わるのだ。
例えばオルレアンの秘術が開発した人の光属性の魔法の性質が切断であるため何かを切る魔法になっている、といったものだ。
「僕の性質は正義だ」
「……簡単にばらしていいのか？」
「いい。言ってもわからないからな」
「……確かにそうだが」
正義なんてどんな効果かまるでわからない。
だが光と闇の属性に現れる性質は同一のものは少なく、効果もまた特徴的である。
「僕が自分自身の正義を貫いている間は光を纏っている部分を強化

するんだよ」
魔法の発動条件が特殊である光と闇の魔法は少ない魔力量でもものによっては古代魔法（ロスト・マジック）に匹敵する力を発揮する。
何故かというと魔法を使うための条件が厳しければ厳しいほど魔法の威力も上がっていくのだ。
そのためソラの圧倒的な魔力量はあまり有利になってはいない。
「……ご親切に解説どうも」
「冥途の土産というやつだ」
ソラの目からジョルジョが消える。
反射的にソラは闇で球状の膜を作る。
ソラの後方から何かがぶつかる音、そしてそこから剣の先が現れてくる。
「駄目だな。それは光を凝縮させないと貫けないな」
「脚に纏ったのか……」
「正解だ」
ソラは一瞬で背後に回られたカラクリを見破る。
ジョルジョは再びソラの視界から消える。
それと同時にソラは魔法で姿を隠し一歩だけ後ろに下がる。
次の瞬間ソラが立っていた場所にジョルジョが剣を突き立てていた。
「上からなら上手くいくと思ったのだがな」
ジョルジョは落下する力も加えてソラの防御壁を崩そうとしたのだ。
ソラはジョルジョから離れると次々とジョルジョを囲むように自分の幻覚を作り出していく。
そしてそれらが一斉に魔法を放つ。
フレイヤの使う「極光」と同じくらいの魔法の量だが威力がこちらの方が高い。
しかしそれらは全て光を纏った剣に防がれていた。
「見事だな」
それには思わずソラも感嘆の声を漏らす。
「ほめ言葉として受け取っておこう」

声によって場所を特定したのであろう。
ソラの後方から輝く剣が振り下ろされる。
ソラは闇の剣を自分の後方に作り出し、受け止める。
「君の属性はいったい何だ？僕の渾身の一撃を防がれたことは数えるほどしかないのだが？」
ジョルジョの属性は正義、その条件は意外と厳しいため威力もその分高い。
一つの場所に集めれば古代呪文（ロスト・マジック）に匹敵するほどに。
「教える義理はない」
しかしソラの剣は難なくそれを防いでいる。
そういう性質なのだから当然である。
ソラは振り返り様に闇の剣を掴み取る。
ジョルジョへと切りかかる。
「お前がＡランクまで上がれたのはその圧倒的な速度と力のおかげだろう。剣技においてはそう高い実力は持っていないだろう？」
「……よくわかったな。君は本当に魔術師か？」
速度と力さえあれば技術の差を覆すことはそう難しくない。
極端な話、相手が剣を振る前に切り捨てればいいのだから。
「ああ、魔術師だよ」
そのためジョルジョの剣技はソラの我流の剣技よりも劣るであろう。
ソラとジョルジョは剣を切り結ぶ。
劣っている部分は身体強化の魔法で強化してジョルジョについていっている。
しかしソラはあまり長く戦っていられない、既に傷口が開きかけているためだ。
おそらく包帯は血で滲んでいることだろう。
痛みにに耐えながらソラは戦っているのだ。
（もうそろそろ本当に拙いかも）
ソラは剣を手放し後方へと思い切り跳ぶ。
その瞬間ソラの持っていた闇の剣が爆発した。

「……ひどいことをしてくれるものだ」
ジョルジョはそこかしこに小さな傷を作っている。
しかし大きな傷はない。
直撃は回避したのであろう。
「知らないな。それよりわかっているのか？この距離は魔術師に有利だぞ」
「そのくらいわかっている。だが僕にはないに等しいな」
ソラとジョルジョの距離は目測で１０ｍあまり、普通の剣士対魔術師なら魔術師の必勝距離だ。
それすらも速度で覆せるというのだ。
さすがはＳランクに近いといわれるだけのことはある。
「……そうか、なら近づいてみろ」
「言われなくてもそうしよう」
ジョルジョの姿が消え、ソラの目の前で止まる。
ジョルジョは剣を振りかぶっておりやろうと思えば一秒もかからずソラの首を落とせるだろう。
「どうして首をはねない？」
「面白いことを言うな。ここで動いたら首が飛ぶのは僕のほうだろう？」
よく見ればジョルジョの首筋には斬り傷が生まれており、そこから流れる血がソラの魔法をあらわにする。
それは剣である。
風の剣、≪猿真似≫に使ったものと同じものだ。
ジョルジョは後方に跳んで身を引く。
「僕の攻撃に耐えうる闇属性の魔法に風属性の魔法まで……本当に殺すのが惜しいな。どうしても仲間にならないのか？」
「……言ったはずだ」
「そんなに≪時の巫女≫を殺そうとしたのが許せないのか？」
「……」
「それは仕方のないことだ。君の友達かもしれないが彼女の祖先の

予言で苦しめられている人もいるのだ。いわばこれは世界のためだ」
「……世界のためか……」
誰にも見えないフードの下、ソラの顔は怒りに満ち溢れていた。
「そんなもののために俺は自分の友人を捨てる気はない。こんなくだらない世界など滅びればいいと俺は思っているのだからな」
もしこの世界があの神を名乗る男が作ったというのならソラは本心から滅べばいいと思っている。
自分から家族を奪ったのだから。
ソラの記憶から思い出される世界への怒り、そしてアリアたちが傷つけられたという怒りがソラから完全に枷を取り払った。
ソラから再び魔力が噴き出る。
しかしそれは先ほどの比ではない。
実体のないはずの魔力が物理的な圧力（プレッシャー）として感じられるほどの魔力、この世界のSランクの魔術師の総魔力量と同等、しかしそれすらもソラの魔力のほんの一部でしかない。
それは明らかに人の域を超えたものであった。
「なんだこれは、いったいどうなっている」
魔力は単体では攻撃となりえない、故にジョルジョや結界内の生徒を含む全員にその圧力（プレッシャー）がかかる。
ソラの結界に守られた生徒たちが次々に倒れていく。
ソラの姿は消え、壇上に現れる。
壇上とジョルジョの一直線上には生徒たちを守る結界も存在しない。
「消えろ」
ソラが魔法陣を一つ、ソラの身体よりも一回りも二回りも大きいものを描き始める。
「くそっ」
その魔法陣に込められる魔力の大きさが今の状態ですらもわかったのであろう。
ジョルジョの剣に光が集まっていく。
どうやら放たれるソラの魔法に対応するためのようだ。

しかしその顔には先ほどまであった余裕がない。
確かに光と闇の属性魔法は魔力に威力を依存しないため他の属性よりも有利であることが多い。
だが、初級魔法「火の玉（ファイヤーボール）」に魔法陣が壊れる限界ぎりぎりまで魔力を注げば下級魔法「火の槍（フレイム・ランス）」を通常発動するのと同等の威力を誇る。
魔力量が多ければ他の属性魔法の威力も光と闇の属性魔法に匹敵するレベルにすることも可能なのだ。
そして今ジョルジョは感じている魔力でそれが可能であることを悟っていた。
それが上級魔法を最大威力まで引き出せるレベルであることも。
故にジョルジョの余裕は消えているのだ。
だが上級魔法の限界、その見通しすらも甘いと言わざるを得ない。
ソラの魔法陣が光る。
その瞬間、講堂が火の海となった。
しかしそれは火の海と言っていいのかはわからない。
講堂を焼く炎、その色は闇よりも黒い。
そしてジョルジョの姿は既に存在しない。
ソラが放った魔法は、ソラが光と闇の属性に二つずつ、他の五属性魔法に一つずつ、そして無属性魔法に幾つか、ソラが神を殺すために創った魔法の一つだ。
火属性「無に帰す焔（レヴァンティン）」、闇よりも黒き炎で世界を塗りつぶす魔法。
前世の神話において世界を焼きつくしたといわれる炎、その名前をとっている。
その名に違わずあらゆるものを燃やし尽くし、消し去る。
当然上級魔法どころか古代魔法（ロスト・マジック）よりも威力は高い。
それは確かに≪正騎士≫どころかその仲間まで消し去っている。
だが、生徒たちを守る結界を除いて講堂は跡形も残っておらず学園の誇る結界すらも壊れている。
簡単にいうとやり過ぎである。
ソラのトラウマとでもいうべきもの引き出されソラは冷静な判断力

を失っていた。
それ故に必要以上に強力な魔法を使ってしまった。
結果として講堂はソラの貼った結界を除けば何も残っていない。
講堂はともかくここにあった結界は世界でも有数の強度を誇る結界として知られている。
このまま放っておくのはいろいろと拙いだろう。
（大変そうだなあ……）
ソラは生徒たちが目覚める前に講堂と結界を元通りにすべく行動し始めた。

◆◇◆◇◆◇

「……きろアリア、起きろアリア」
アリアはレティシアに揺さぶられていた。
見れば周りではシルヴィアたちも心配そうな顔でアリアを見ている。
アリアが起きるのが遅かったのは最もソラに近い場所で気を失っていたためだ。
「……ここは？」
「講堂よ。私たちは気を失っていたみたいね」
いまだ頭が働いていないのかアリアの目は虚空をさまよっている。
「私たちは≪黒の魔術師≫殿に助けられたらしい」
そこまで聞いてようやくアリアはここで何があっていたのかを思い出す。
「≪黒の魔術師≫殿はどこに行きましたか？」
「それがわからないのだ。私たちが目覚めたときには既にこの有様だったのだからな」
講堂は傷一つなく、≪正騎士≫もその仲間たちの姿もない。
無論≪黒の魔術師≫の姿も見当たらない。
ちなみに彼は今頃は病院のベッドの上で痛みに苦しんでいる。
「まるであれが全て夢だったかのようにね」

「だがあれは現実だったのだろう？現に……」
レティシアが講堂の端を指さす。
そこには生徒たちが集団で倒れていた。
ソラが結界で守った名残だ。
つまりあれは本当にあったということだ。
（ソラは大丈夫でしょうか……）
≪黒の魔術師≫の正体を知るアリアはソラの怪我のことを考える。
≪正騎士≫との戦いでは傷を負っていなかったのだがもともとの傷もひどかったはずなのだ。
アリアが物思いにふけっているとリチャードが話題を変えるように言い出した。
「とりあえずこの結界を解除しにいかない？この状況をどうにかしないと」
今目覚めているのはアリアたちだけである。
それはソラが治癒魔法を彼らに使ったからに他ならない。
「そうですね」
これだけ後処理がされているということはソラが死んでいることはまずあり得ないだろう。
それなら一刻も早くお礼を言いに行こう、そう考えたアリアはリチャードの言葉に従い結界を解除することにした。

第十四話　怒り（後書き）

次の話で二章は終了の予定です。
今回の話は後々ところどころ修正を入れるかもしれません。
あと主人公の前世の家族構成を変えました。

エピローグ

ソラは今病室でレティシアたちに先日学園であった事件について聞いていた。
今日はその事件から二日ほど経っている。
ソラは病室に戻った後死んだように眠り今日この日まで目覚めなかったのだ。
「そんなことがあったんだね」
最初の方はソラも知らない話なので聞いていられたが後半からは知っている話どころか当事者に等しかった。
その話を延々とされ、しかもいかに≪黒の魔術師≫が凄かったかを重点的に話されたのだ。
ソラの顔は疲れを色濃く残した苦笑いとなっている。
その様子をレティシアたちは怪我のせいだと思い、アリアとフレイヤは気の毒そうな目で見ていた。
「ごめんね、アリア。僕は護衛だったのに」
「いえ構いませんよ。あなたではなくても≪黒の魔術師≫殿が守ってくださいましたから」
暗にソラをほめているのだがそれに気づけるものはこの病室にはソラとアリアも含めて三人しかいない。
しかし事情を知らない他の三人はソラを貶しているように受け取った。
「しょうがないじゃないかアリア。ソラもアリアを名付きから守ったのだからお相子だろう」
「そうですね。ソラも私の護衛としてよくやってくれました」
レティシアの意図がわかったアリアはレティシアが望む答えを返した。
「どういたしまして……でいいのかな」
「そういえばソラ、あなたはあの時名付きに気づいていたの？」

あの時とは決闘の時である。
「いるかもとは思ってたよ。ちらっとそれらしき影が見えたからね。まあこんなところにいるはずがないから見間違いと思ってたけどね」
これは事実である。
魔物の種類はそれこそ千差万別であり似たような姿形の魔物がいないとは限らない。
その可能性の方が名付きがこんなところにいるよりは高かった。
尤もそれでも考慮すべき可能性の一つではあったが。
「私たちだけを先に逃がしたのはどうしてだ？」
「それは状況がそんな感じだったからだよ。アリアは仕事的に危険なところに置くのは拙かったしオルレアンさんは動けそうになかったからそのオルレアンさんを街へ連れて尚且つその安全を守れるようにしないといけなかったからね」
「けれどそれであなたがそんなに怪我をするのはダメだと思うのだけれど？」
「そうです。ソラの身体は大丈夫なのですか？ずいぶんと無茶をさせてしまったようですが」
「見た目通り僕は元気だよ。身体の方は悲鳴を上げているけどね」
身体が悲鳴を上げているのは昏睡中に叩き起こされたれ、あまつさえ戦いという名の重労働――しかも相手は二つ名もちであった――を行ったためである。
「……アリア、≪黒の魔術師≫殿はこの病室に呼べないのか？」
「難しいと思いますけど……」
なにせソラと≪黒の魔術師≫は同一人物である。
魔法を使えば可能だがくだらない用事ではそこまでする必要はない。
「なぜ急にそんなことを？」
「≪黒の魔術師≫殿は私の怪我を治してくれたようだからな。それならソラの怪我も直せるのではないかと思ってな」
ソラは講堂と結界を治す前にレティシアたちに治癒魔法をかけている。

深い傷がなければ何もしないつもりだったのだが≪正騎士≫がレティシアの脚の骨を折ったことに気づいたためである。
つまり今の段階でソラは魔力が回復しているため自分で怪我を完治させることができる。
それをしないのはレティシアたちに怪しまれないためである。
「≪黒の魔術師≫さんは一応お見舞いには来てくれたよ。残念なことに怪我が深すぎて治せないって言われたけどね」
もちろん嘘である。
ソラは治癒系の魔法でも怪我を治せるがあまり得意ではないため非常に手間がかかる。
それでも治せないことはないのだが。
「そうか。それは残念だな……」
「別にかまわないよ。死んだわけじゃないからね。死なない限りはいくらでも取り返しがつくよ」
そう、死にさえしなければあらゆることは取り返しがつくのだ。
少なくともソラはそう思っている、いやそう思わされた。
「……ソラ、私たちを恨んでいないか？」
ソラが重傷を負ったのはレティシアたちの提案した決闘のせいである。
レティシアがそのことを心配するのは当然であった。
しかも気になる人となればなおさらである。
「全然。僕も冒険者だからね。依頼中の怪我は自己責任だよ」
「それはよかった」
本心から安堵のため息をつくレティシア、その姿にソラは申し訳なさがこみあげてくる。
「それでソラ、その……賭けの内容なんだが……」
レティシアが言いにくそうに口を開く。
「ああ、それがどうかしたの？」
魔物の群れとあの猿によって中断された決闘の結果である。
「その、勝敗についてなんだが……」

中断されたため勝敗はうやむやになってしまっている。
レティシアたちにはうやむやのままにはしておけないものである。
尤も負けた場合は別だが。
「僕の負けで構わないよ」
ソラはもう負けようが勝とうがどうでもよかった。
アリアの護衛の依頼はもう終わったのだから。
「ほ、本当か？」
「嘘なんかつかないよ」
「それなら……ああっ」
レティシアの顔は一瞬華やいだがすぐに落ち込んだような顔となり
アリアの方を向いた。
「……アリア、私たちがソラに会うのにどのような制限をかけるのだ？」
「そうですね。用事があるとき以外はダメという形でどうでしょう？あとは偶然ですね」
「え？どういうこと？」
いまいち状況が呑み込めないソラ。
「私がレティシアさんたちに加勢する際に条件を付けたのです」
アリアは自分のためにこのようなことをしてくれたのだと思うとソラは嬉しくなったが同時にその優しさを無にしてしまうことに申し訳なさを感じた。
「ありがとうアリア。ただそれは必要なかったよ」
「どうしてですか？」
ソラは方針を変えばれてもいいと思ったのだろうか。
いや、ソラが自らまきこもうとするわけがない。
アリアはここまで考えたところで思考が混乱し始めた。
「僕への依頼は終わったでしょ。なら僕がここにいる意味もなくなったからね」
ソラがここにいる義務はなくなった。
フレイヤたちの安全は既に確保してあるし唯一指輪が壊れているア

リアも自分の死を予言できる以上殺されることはない。
ソラのここにいる友人たちの安全は確保されているわけだ。
ならソラが居る必要はないだろう。
学園から逃げるのはそれはそれで大変かもしれないがここにいて友人たちを巻き込む可能性を高めていくことよりは幾分かソラにとってはマシである。
「僕は魔王領にでも行くよ」
その言葉に驚きを隠せない一同、しかしフレイヤだけは動じていない。
なぜなら……
「……帝国の食べ物おいしい？」
ついていく気満々だからである。
更に言えば食べ物の問題なのだろうか。
「なんでついてくること確定なの！？」
「……連れて行ってくれないの？」
捨てられた子犬のような目でソラを見るフレイヤ、ソラの意思が若干揺らぎそうになる。
しかしフレイヤをここに入学させたのはフレイヤの名を上げるためである。
それをやめるわけにはいかない。
「時々見に来るからさ。それじゃダメかな？」
フレイヤは少しの間黙った後一言だけ呟いた。
「……おいしいお土産」
「了解しましたお姫様」
ソラが冗談めかした態度で言う。
普段ならこのやり取りに異論を唱えるであろうアリアはソラの発言に驚いてそれどころではない。
「ちょっ、ちょっと待ってください。この学園から逃げたら大変なことに……」
教国の威信をかけてでもソラを捕まえようとしてくるだろう。

「大丈夫じゃない？学園長なりギルドなりから話してもらえば」
≪時の巫女≫からの依頼であったといえば可能かもしれない。
「しかし私の依頼内容は三年間一緒に学園に通うことだったはずです」
アリアの下心が名目上の依頼ではなく本来の目的を言ってしまっている。
「護衛はまた予言が下されたら来ることでどう？」
名目上は護衛としての依頼のためソラが契約違反をしているわけではない。
ないのだが……
「それは……」
アリアとしては納得ができないことだらけである。
もとはと言えばソラと長くいるために依頼したようなものである。
「依頼があれば君は学園に入学したりもするのか？」
「依頼とあればたいていのことはやるよ。まあ死なない範囲だけどね」
「それでは私からの依頼だ。私たちと一緒に学園に通ってはくれないか？」
予想外の申し出である。
こんな手段を使ってくるとは思ってもいなかった。
しかもこのような形で、だ。
「……依頼の掛け持ちはやらない主義なんだ。一人の依頼者のために全力を尽くそうと思ってるからね」
かなり苦しい言い訳だ。
「だそうだアリア。掛け持ちはしないそうだ」
レティシアが笑いを含んだ声で言う。
「……！、そういうことですか」
アリアは嬉しそうな声で言う。
「ソラ、依頼内容の追加は可能ですよね？掛け持ちは無理でも」
「え？それはどういう……」

「ソラ・シシュフォス、依頼に新たに私の護衛を三年間追加します」
「それは無理かな、僕は約二か月後に依頼が予約されててね」
その依頼は正確には≪黒の魔術師≫宛ての依頼でありそれもまたアリアからの、教国からの依頼である。
とはいえこれは無駄な足掻きに他ならない。
既に言質をとられている。
自分の首を自分で絞めてしまった状態だ。
「それならそのときまでで構いません。引き受けてもらえますね？」
ソラは賭けの内容がレティシアたちのいいようにされていれば是が非でも逃げ出したであろう。
だがあの条件ならいても大丈夫、ソラはそう判断することにした。
「……わかったよ」
「そうか、それはよかった」
ここで一番に喜びを表したのはレティシアであった。
ソラ・シシュフォスがそこまでレティシアの好感度を上げたとはソラは思っていないため友達が少ないから減らずに済んで喜んでいるのだと思った。
事実はレティシアのソラ・シシュフォスへの好感度は魔物から身を挺して庇ってもらった際にかなり上がっている。
それこそ友情から恋慕に変わるほどに。
その事実にうすうす気づきつつあるアリアは心中穏やかではない。
「……そうですね。とてもよかったです」
言葉と態度が矛盾している。
レティシア以外の全員がそう思った。
事情が少しもわからないソラに至っては、さっきとはまるで態度が違わない？あれ？と軽く混乱している。
「わ、私たちはもうそろそろ帰りましょうか。ねえレティシア？」
この場を鎮静化すべくシルヴィアが行動を開始する。
「そうだよ。もうそろそろ帰ろう」
リチャードも続く。

「しかし……」
見るからに悲しそうな顔をするレティシア、その態度がアリアの機嫌をさらに急降下させる。
「いいからいいから」
レティシアを引っ張りながら強引に病室から出ようとするシルヴィア、この状況に耐えられないのであろう。
そのままシルヴィアたちは帰っていった。

「……アリア、いったいどういうつもりだったの？」
ソラの声が冷たい。
まさかアリアが自分を引き留めるとは思っていなかったのだろう。
自分の事情を知っているため特に、だ。
その声に少し気おされながらもアリアは答える。
「あの程度なら大丈夫でしょう」
ソラが狙われた時は明確にソラが狙われたわけではなくソラが含まれる団体が狙われた。
それを考えてのアリアの発言だ。
「まあ今のところ僕とレティシアたちがひとまとめにされるとしたら学年だけだから問題ないかもしれない。けどこれからはわからないじゃないか」
「それはその時にでも考えたらいいでしょう。ソラも少しは自分の幸せについて考えてはどうですか？」
アリアの言葉を聞いたソラは笑う。
嬉しそうに。
悲しそうに。
「自分の幸せを求める権利なんて今の僕にはひとかけらも存在しないよ」
ソラは笑った顔で続ける。
「僕は僕以外の家族全員の人生を奪ったんだよ。ほかならぬ僕のせ

いでね。それなのに僕だけがどうして幸せになれる？なれるわけがないじゃないか」
「ですが……」
「僕は罪を贖わなければならないんだよ。僕のすべてを犠牲にしてもね」
その言葉にアリアはこの上もなく悲しくなる。
「……それならどうしてレティシアさんたちを守るのですか？」
ソラの言い分であれば何よりも優先されるのは罪を贖うことであるはず、ならばレティシアたちを気遣う必要もないはずだ。
「犠牲にしていいのは僕だけだよ。ほかの誰かを巻き込むわけにはいかないじゃないか」
もちろん、レティシアたちだから特別念入りに守ろうとしているのは否定できない。
だがソラから積極的に関わろうとは一度たりともしていない。
「僕に許されるのは罪を贖い、これ以上罪を重ねないことだよ」
フレイヤの名をあげルビンシュテイン家を復興させ、そして神を名乗る男を殺す。
そうやって罪を贖い、自分に関わった人をこれ以上不幸にしないように守り罪を重ねないようにする。
それがソラの意思であり、方針であり、生きる理由である。
アリアはソラの目的や事情をほとんど聞いていた。
それでもここまできちんとした言葉で言われたことはない。
それを聞き、ソラの強い意思を感じてしまったアリアはこれ以上何も言うことはできなかった。
ソラが意図的に省いたのか無意識に省いたのか、それとも考えていないのかはわからないがそこにはソラの未来は入っていなかった。
それを疑問に思ったフレイヤが聞く。
「……ソラはその後どうするの？」
「その後なんて考えてないよ。僕にとってはこれが全てだからね」
「……私が頑張ればそれだけソラも楽になるの？」

「それはわからないよ」
フレイヤのことは半分でしかない。
確かにフレイヤのことがあるのでもう半分に本腰を入れられないのは事実だがたいした差はないだろう。
「もうそろそろ二人とも帰ったら？時間も遅くなってきたし」
「……そうですね。フレイヤさん、帰りましょう」
アリアとフレイヤも病室を去っていった。
「僕の幸せ、か……」
ソラの呟きは寂しく病室に響いた。

◆◇◆◇◆◇

とある危険区の奥地、そこに古代遺跡とも呼べる建造物があった。
間違っても人の住む場所ではない。
しかしそこからは今一組の男女の声が響いていた。
女の方が男の方を責めているようだ。
「ちょっとあんた、いったいどういうことよ。さっきのは明らかにおかしかったわよ」
そのうちの女が男に文句を言っている。
「本当だね。何かあったんだろうか？」
しかし責められているはずの男の態度は軽い。
「やっぱり殺し損ねたんじゃないの？」
「そんなはずはないけどな。確かに全員殺したはず」
「一応確認に行ってきなさいよ」
「ええ～めんどくさいんだけど」
「いい加減にしなさい」
女の方が男の頭をたたく。
男は対して痛くもないだろうに大げさに痛がる。
が、女はそれに対して全くの無反応であった。
「……わかったよ。今彼女はどこに？」

「さあ、どこかしら。けどまあどうせ大神殿でしょ」
「そうか。じゃあ少し行ってくるよ」
「他の管理者たちも気づいてるだろうし次の集会までにどうにかしないとまたねちねち嫌味言われるわよ」
「それは勘弁だね。全く異常(イレギュラー)ってのは面倒だな」
男はそう言いながら森の中へと入っていった。

エピローグ（後書き）

これで二章は終了です。
三章は改稿と感想へのお返事を書いた後になる予定なので一週間から二週間後あたりになると思います。
ただテストももうないので早まる可能性もあります（笑）

ただ今感想の返信をさせていただきましたが何を書いていいのかわからず返信として不適切なものとなっているかもしれません。その時はご指摘ください。

第一話　事件の余波

≪正騎士≫が学校を占拠するという事件から実に一週間が経つ。
学校は事件についてのほとぼりはようやく冷めようとしていた。
しかし一向に冷めようとしないものもあった。
それは入学してきていたといわれていた≪黒の魔術師≫が実際に姿を全校生徒の前に現したことである。
今学校の中では≪黒の魔術師≫の正体が誰なのか、その話題で持ちきりである。
では≪黒の魔術師≫の正体を知るにはどうすればいいか？
ギルドに所属した当初から正体を隠しているため≪黒の魔術師≫が自ら尻尾を出すことはないだろう。
そのため学年に数人いる≪黒の魔術師≫は偽物であろう。
≪黒の魔術師≫が自ら正体を現す気がなく、自分たちに正体をあばくだけの実力はない。
それなら≪黒の魔術師≫と面識のあるものに正体を聞くしか正体はない。
学校内で≪黒の魔術師≫の正体を知っていると噂される者は現在二人である。
一人は≪黒の魔術師≫と一緒に護衛をしていたとされるソラ・シシュフォスであり、もう一人は≪黒の魔術師≫を雇っていたアリア・ナイアデスである。
しかしソラ・シシュフォスこと≪黒の魔術師≫様は入院中である。
病室にまで質問に行くような馬鹿はいない。
したがって学校内の好奇の質問は全て一人の人物へと集中していた。

◆◇◆◇◆◇

「ナイアデスさん、≪黒の魔術師≫様って誰なの？」

「この学園の生徒なのよね？」
「お願いだから教えてよ」
取り入ろうとする生徒以外との会話は実はソラたちを除くとアリアにはつい最近まで経験がなかった。
学園内にはアリアに取り入ろうとする生徒か恐れ多くて近づかない生徒のどちらかがほとんどであった。
稀にアリアに話しかけようとする勇気のある男子、正確には下心のある男子もいたがあまりにもソラにべったりなためあきらめていった。
最近ではファンクラブによりそういった行動も規制されアリアに話しかけてくるのは業務連絡のような場合かフレイヤたちだけだ。
「皆さんすみません。彼から口止めされているもので……」
事件後数日は慣れないこと故に戸惑っていたがもう慣れてしまった。
毎日毎日同じことの繰り返しである。
≪黒の魔術師≫の正体は秘密です、と言い張っている。
それだけならまだよかった。
彼女らは既にファンクラブを結成しているようで組織的に≪黒の魔術師≫の正体に迫っている。
しかもファンクラブということは当然≪黒の魔術師≫に何らかの興味があるわけで……
まあ何らかの興味というのがどういうものかというのはアリアに質問してくる生徒の男女比でわかるわけで……
もしばれた暁には自分の恋路は強力なライバル（レティシア）に加えて他の生徒たちにも妨害されることは目に見えている。
そのため≪黒の魔術師≫の正体はソラが仮にばらしていいと言ってもアリアは決して口を開くつもりはない。
しかしアリアの恋路を邪魔しようとするものはそれだけではない。
「それならソラ君がBランクって本当？」
「アリアさんたちのファンクラブを返り討ちにしたんだって？」
アリアには何故かソラ・シシュフォスに対する質問もされていた。

理由は彼女たちの一人に聞いたら簡単に分かった。
ソラがアリアたちのファンクラブを返り討ちにしてからもう一週間ほど経っている。
その間ソラは学校には来ていない。
ファンクラブも一人にやられたなんて隠しておきたいことではあるがやはり情報とはどこからか漏れるものである。
ソラがファンクラブを返り討ちにしたということは既に噂という形で全校に知れ渡っていた。
しかもいらない尾ひれをつけて、である。
いわく、その日体育館裏に来ていた男子全員を一人残らず返り討ちにした。
いわく、ファンクラブが暴走してアリアたちに襲いかかろうとしたところからアリアたちを守った。
いわく、その実力はもはやAランクに届きつつある。
事実か事実でないかで言うと微妙である。
ソラはファンクラブ全員を倒してはいないが戦意喪失はさせた。
ソラはAランクの魔物となら一対一でも勝つことができるがそれだけでAランクに近いとは言えない。
ただアリアたちを守ったのだけは事実とは全く違うがもともと誇張された噂なので当然だろう。
むしろ事実に近いことが不思議である。
「はい。ソラがBランクなのは本当です」
ソラがレティシアたちにばらしたのなら他の誰に話してもさして問題ではない、アリアはそう判断してソラ・シシュフォスに関する質問にはたいてい答えている。
ソラが巻き込みたくないのは学園内ではあくまでレティシアとリチャード、そしてシルヴィアだけなのだ。
もちろんソラはできればアリアとフレイヤも巻き込みたくはないのだがもう巻き込んでしまっているものは仕方がない。
アリアはフレイヤのほうを横目で見る。

フレイヤもまたアリアと同じように人に囲まれていた。
彼女らも当然フレイヤに質問しているわけだがアリアに集まる人の半分ほどしかいない。
それはやはり質問の量の差であろう。
フレイヤにはソラ・シシュフォスについての質問しかされていないからだ。
なぜならフレイヤと≪黒の魔術師≫との接点を知るものは学園ではレティシアたちだけだからである。
フレイヤの状況を確認した後アリアは再び自分の周りに集まる生徒たちを見る。
（これはソラが来たらどうなるんでしょうか……）
アリアとフレイヤ、聞いたところによるとレティシアたちも質問攻めにあっているらしい。
ソラについて質問してきた人は≪黒の魔術師≫についての人も合わせると相当な数になっている。
上級生もかなりいたのでおそらく百は下らないだろう。
それがソラに一斉に群がったらどうなるか？
……まあ大変なことになるだろう。
アリアとしてはこれを止める気はない。
自分たちも大変な目に合っているのだからソラも同じような目にあえばいいとさえ思っている。
惚れてようが自分への好感度が下がらなければ問題ないし、この件はソラが自分で判断すべきだともアリアは思っているからだ。
尤もソラの退院まではまだまだかかりもうすぐある合宿にギリギリ間に合うかどうかと言ったところらしい。
この質問攻めはまだまだ続くだろう、そう思うとアリアはため息をつきたくなる。
……ちなみにソラ・シシュフォス関係で人が一番集まっているのはレティシアのところである。
何故かと言えばソラがいかにかっこいいかをレティシアが力説して

いるからである。
それが自分の首を絞める可能性があることにはレティシアは全く気付いていない。

◆◇◆◇◆◇

ソラは病室で≪正騎士≫の事件について考えていた。
ソラがアリアたちから聞いた限りだとジョルジョの動機はわからないこともなかった。
そもそもジョルジョの正義自体が歪んでいたためともいえる。
そこは問題ない。
ジョルジョに従っていた彼らの軒並み高い戦闘力――といっても二つ名もちには到底及ばない――も≪正騎士≫の実力と目的が正義のためという大義名分があれば少々無理があるものの納得できないことはない。
問題はジョルジョの後援者とやらだ。
≪時の巫女≫の血筋は世界の破滅とやらを回避した後は非常に教国を有利にするだろうから絶やそうとするのはわかる。
そのために二つ名もちをジョルジョにつけたのならまだわかる。
だが、後援者とやらは名持ちの魔物をつけた。
しかも人外級を二匹――実質怪物級――をだ。
もちろん人的損害がなくなるからと言われれば理解しそうになるが人と魔物には決定的な差がある。
それは人と意思疎通ができるか否かだ。
二つ名もちであれば交渉次第では可能だっただろう。
しかし魔物と交渉するのは不可能だ。
一部の国では竜種の亜種である飛龍を手なずけている国も存在するがそれは何百年にもわたって研究してきた成果であり、飛龍のランクがBランクということでまだ何とかできる強さだったからである。
魔物を手なずけるにはそれほどの労力が必要なのである。

名付きともなれば生態系は独自のものとなっており仮に同じような種類の魔物で研究をつんでいたとしても不可能だろう。
つまり≪猿真似≫たちは誰かに眠らされてエリュシオン学園の近くにまで運ばれてきたのだ。
しかもほとんど無傷で。
それは明らかにそこらの一組織ができるものではない。
それこそ国家レベル、しかも四大大国をはじめとしたある程度力をもつ国であってようやく可能と言ったところだろう。
つまりこの≪正騎士≫の事件はかなり重大な事件だったということだ。
どこかの国がハルモニア教国が誇る巫女、その時期筆頭を殺そうとしたのだから。
これが知れれば世界は荒れるだろう。
下手をするとこれによって世界が破滅するのかもしれない。
しかしソラとしてはそんなことよりも自分の友人を、アリアを殺そうとする勢力を放置するわけにはいかない。
ソラが今自分から守ろうとする人物と守ろうとしない人物の線引きは非常に狭い。
故にソラが守ろうとする人物も非常に少ない。
だからこそソラはその少ない人物達を命を懸けてでも守るつもりだ。
言うまでもなくアリアはその一員である。
（とりあえず魔王領にでも行ってその後帝国に行くかな）
ソラはアリアを殺そうとした奴らと平和的な交渉をしに行くつもりである。
無論交渉が成立しなければ死体が増えるだろうが。
ソラが四大大国に狙いを絞っているのはその他の小国ではアリア一人を殺したところでその国力の差は埋まることがないからだ。
そして教国内の内輪もめという可能性はおそらくない。
それがもし≪聖騎士≫に見つかれば問答無用で殺されるからだ。
教国には巫女という手段がある以上すぐにばれるだろう。

そんな無謀な賭けをするものはおそらくいないからだ。
次にアマルティア王国という線もないだろう。
あの国は直系の王族しか王位を継ぐことができないし今代の王は名君と名高い。
内輪もめが起こる余地はないだろう。
となると必然的にオルトルート帝国か魔王領の二択となるのだ。
（……まあ依頼の延長線上ってことでいいかな）
怒り狂うであろう誰かさんへの言い訳を考えるとソラは何事もないようにベッドから立ち上がると黒ローブを作り出した。
レティシアたちに≪正騎士≫の事件について聞いた後すぐに自分の怪我を治した。
入院しているはずの期間を利用してソラはこの事件について完全にけりをつけるつもりだ。
入院は合宿が始まる直前、あと一週間残っている。
少なくとも魔王領と帝国くらいは回れるだろう。
無論転移魔法を多用しなければ不可能である。
だが仮にこの事件の裏にどちらの大国も関与していないのならソラがある意味最も期待していて尤も忌むべき可能性かもしれない。
神と名乗る男は魔物を種類など関係なしに従えていた。
なら名付きすらも従えられるかもしれない。
今回≪猿真似≫をけしかけたのもあの男かもしれない。
それならここで四大大国以外の尻尾をつかめばソラは目的に大きく前進する可能性が高い。
行かないという選択肢はソラの中にはどこにも存在しなかった。
（まあ身代わりはおいていくから大丈夫でしょ）
ソラはこの部屋に幻覚をかける。
ソラがこの病室にいると思わされる幻覚だ。
「さて、行きますか」
そう呟くとソラはあらかじめ描いておいた転移魔法の魔法陣の中へと消えていった。

第一話　事件の余波（後書き）

この小説を見てくださっている方には申し訳ないのですがこれから更新頻度が落ちるかもしれません。
作者がサボっているわけではないのですが三章の大まかな流れしかまだできていないので一話一話に時間がかかるかと思われます。
どうぞ気長に待ってもらえると助かります。

第二話　生徒会

「ソラはまだ退院できないのか？」
レティシアは不満げに口を開く。
ここは食堂、今は学生の至福の時ともいえる昼食の時間だ。
「仕方がないわよ。あの怪我で学校に出てきてもすぐに病院に送り返されるわよ」
シルヴィアがまたかという顔でレティシアをなだめる。
周りにいるアリアとリチャードはもちろん、感情表現の乏しいフレイヤですらも苦笑いをしている。
レティシアの不満は今日に始まったことではないのだ。
食堂で集まったときにも帰り道でも同じことを言っているのだ。
しかもソラが学校を休んでからというもの日に日に言う回数が多くなっている。
レティシアは真面目な性格であるためアリアに言われたとおりソラに用事があるときしか自分から会いに行くつもりはない。
とはいえレティシアとしてはソラに会いたい。
レティシアは用事と言った用事はソラにないため用事を理由にして会いに行くことはできない。
ならもう一つの条件、偶然というものに頼る他レティシアにソラに会う方法はない。
しかしソラが入院しているのではいつまで経っても偶然ソラに会うということはない。
どんな偶然が起これば、ソラの病室に行けるのだ、という話だ。
ならやはり学校に来てもらわなければソラに会うことはできない。
シルヴィアに相談したところによると偶然食堂で咳が近いことはあるかもしれないと聞いている。
もちろんシルヴィアはソラたちの近くを狙って座るつもりだがレティシアは本当に偶然そうなる確率しか考えていない。

性格の差がよく表れている。
だがそんな名案（迷案？）を考え付いたシルヴィアでも偶然病院に行く方法は思いつかなかった。
当然であろう、偶然というものにも限度がある。
「しかしだな。それではいつまで経っても私がソラに……」
何かを言いかけてレティシアが赤くなりながら俯く。
これで隠せると思っているのだろうか。
レティシアがソラに好意を持っているのは少なくとも周りから見れば一目瞭然だ。
今まではソラの話をしていても赤くなったりはしていなかった。
本人が自覚しているかどうかは微妙なところであるが。
ともあれレティシアがこんな行動をして面白くない人物がいる。
もちろんアリアだ。
アリアから何とも言えぬプレッシャーが噴き出る。
それに気づいたシルヴィアたちは何とか場の空気を換えようと……はしなかった。
なれとは恐ろしいものである。
レティシアが不満を言うたびにアリアの機嫌が降下しているのだ。
最初の数日こそ他の三人は場の空気の改善に走っていたが今は無視している。
「そういえばリチャード、夏休みはどうするの？王国に帰る？」
「私からは特に意見はないよ。シルヴィアはどうしたい？」
「そうねえ。私も特にやりたいことはないわね」
「まあまだ先の話だし焦る必要もないよ。ゆっくり考えよう」
「けれど何かやりたいことができたのに準備する時間がなくてできないとかはいただけないのだけど……」
「確かにそうだね。それなら……」
リチャードとシルヴィアはのんきに休みの計画について話し合っており、フレイヤは食べ物を買いに行ってしまっている。
すっかり今の状況に適応しきっている。

そこにいつもとは違うことが起こる。
『一年魔術クラス、フレイヤ・ルビンシュテインさん、アリア・ナイアデスさん、魔法近接クラス、レティシア・オルレアンさん至急生徒会室に来てください』
アナウンスが食堂に流れる。
何かはわからないがアリアとレティシア、それにフレイヤに用事があるようだ。
……シルヴィアとリチャードは確かにこの状況になれはしたがそれは無視できるようになったという意味で場を鎮めるのに慣れたというわけではない。
シルヴィアはアリアとレティシアの方を向く。
そこには対照的ともいえる雰囲気がいつも通り展開されている。二人とも自分の世界に入りきっており今の放送は聞こえていなかったようだ。
誰かが二人に伝えなくてはならない。
「お兄様、お願いします」
シルヴィアが聞いたこともないような媚びた声でリチャードに頼む。
「……シルヴィア、ここは公平に……」
「お兄様」
シルヴィアがさらに畳み掛ける。
「……わかったよ」
リチャードが少し離れたところ———シルヴィアたちが避難しているためだ——にいるアリアとレティシアの方へ近づく。
シルヴィアが面白いものを見るような目でリチャードを見ていることに当のリチャードは全く気付いていない。
「……ひどい」
食べ物を腕いっぱい抱えたフレイヤが呟く。
「いいのよ。ああいうのはリチャードの役目なのよ」
悪びれもせずシルヴィアは答えた。

「それよりフレイヤも呼ばれていたけれどいいのかしら？」
フレイヤはちらっとアリアたち（リチャード特攻中）の方を見る。
「……あの二人が収まったら一緒に行く」
フレイヤもあまりシルヴィアと変わらなかった。

「二人とも、さっきの放送は聞いていたかな？」
アリアたちに近づいたリチャードが聞く。
「放送？何のことだ」
答えたのはレティシア、どことなく浮ついた声だ。
ちなみにアリアは無言でリチャードを見てきた、いや睨んできたと言ってもいいかもしれない。
「二人とも生徒会室に呼ばれてるみたいだよ」
アリアの視線に怯えながらもリチャードは言った。
「生徒会か……いったい何の用だ？」
「私に聞かれてもねえ」
「……そうでしたか。レティシアさん行きましょうか」
アリアは公私混同はしないようだ、リチャードはほっとしかけたがアリアの目がいまだに笑っていないことに気づいて考えを改める。
アリアは表面上は公私混同はしないようだ、と。
「……行こう」
見計らったかのようなタイミングで三人に近づいてきたフレイヤ。
「そうだな」
レティシアが先頭をきって歩き出す。
「……うん」
それに続く形でアリア、フレイヤも席を立った。

エリュシオン学園の生徒会室は学園長室、職員室から最も遠い校舎三階の端にある。

理由は生徒の頂点たる生徒会は守られる存在ではなく守る存在であるからだそうだ。
それはともかくレティシアたちは今その生徒会室の前にいた。
レティシアがノックをし扉越しに言う。
「失礼します。一年レティシア・オルレアンですが入ってもよろしいでしょうか？」
レティシアの声には少し緊張が含まれていた、それに対し扉の奥から聞こえてきた声は何ともゆるそうな声であった。
「いいよ～」
許そう声であったが入室を許可されたのは事実である。
レティシアたちは生徒会室の中へと入る。
部屋のど真ん中にある机、その上座に一人の少女が座っていた。
もちろん生徒会長のクリスである。
「来たね～　座って座って」
クリスは嬉しそうな声で言う。
「はあ、失礼します」
二年生、三年生のなかでは周知の事実だがレティシアたち一年生はまだ公の場でしかクリスを見たことがなかったため戸惑ってしまう。
入学式などで見たクリスは凛とした姿だったからだ。
その様子を見て戸惑いに気づいたクリスは言う。
「入学式とかのクリスの記憶は消しちゃっていいよ～あんなの疲れるからああいうときだけだしね～」
クリスは苦笑いである。
クリスの体感では今のゆるっとした状態と儀式などの凛とした状態では消費する体力が十倍以上である。
「何故私たちを呼んだのですか？」
レティシアより驚きの少なかったアリアが聞く。
ちなみにフレイヤは表情を動かさずに驚いていた。とても器用な真似である。

「ああ。それはもちろん用事があるからだよ～」
「用事……ですか？」
「そうだよ～」
アリアやレティシアは勿論フレイヤにも生徒会からの用事などまるで心当たりがない。
生徒会は学校の運営に深くかかわっているため、生徒に時間を費やす場合にはそれなりに大きな理由がなければ時間を割くことができない。忙しいのだ。
たとえば今度ある一年生の合宿、その実行委員などであれば生徒会に呼ばれても不思議ではない。それもまた学校運営の一つであるからだ。
しかし三人のうちだれもそんな役職はしていない。アリアとレティシアはクラスの代表であるため掛け持ちはできないし、フレイヤはそんなものをやるのならクラス代表もしているだろう。
「それじゃあ聞くけどソラ・シシュフォス君が≪黒の魔術師≫さんなのかな？」
アリアとフレイヤはなんとか動揺を隠した。尤もフレイヤは動揺していてもしていなくてもあまり表情は変わらないのだが。
今の段階でソラが≪黒の魔術師≫と特定することはできないはずだ。
なぜならソラが≪正騎士≫の事件の際に生徒の前に現れた時は黒ローブを纏っていたからだ。
あれがあった以上あの場でソラの正体を知ることなど不可能であっただろう。
反論したのはアリアではなくレティシアであった。
「それはありえません。ソラはあの時重傷を負って入院していたんですよ？意識さえなくて動けなかったんですよ？」
それは正論である。
しかしまあ実際は目覚めるどころか動き出してあまつさえ戦闘という名の過酷な運動をしていたわけだが。

「う～ん、それは知ってるけど今学園内で実力がわからないのってシシュフォス君だけなんだよね～」
ソラは魔法を間違えたことにより学年どころか学校の底辺の称号をもらっている。
「それにシシュフォス君は百人近くを余裕で相手にできるんでしょ？レティシアちゃんも熱く語ってたって聞いてるよ？」
クリスの熱く語ってた、という箇所でレティシアが赤くなり始めるがアリアはそれを珍しく無視する。
今はそれどころではないためだ。
しかし反論をしたのは誤魔化すように言ったレティシアであった。
「≪黒の魔術師≫は魔術師です。しかしソラの武器は剣ですよ？」
武芸と魔法、二つともを同時に極めることは不可能と言われている。
もちろん剣士が目くらましや身体強化などの魔法を使うことは珍しくない。
だが中級魔法以上の魔法の使える剣士はほとんどおらず、上級魔法以上を使える剣士はいないとされている。
武芸にしろ魔法にしろ一流まで鍛え上げるのは至難の業であるからだ。
ソラも魔法は圧倒的な才能で、剣技に関しては反則のようなことをしてあのレベルにまでしているのだ。
そのようなことをしなければ二つを極める――一流と言われるレベルにまでする――ことは不可能なのだ。
二つ名もちのレベルともなれば武芸なら武芸を、魔法なら魔法だけを鍛え上げなければ到達不可能なレベルだ。
世間一般ではそういうものとなっている。
従って普通に考えればソラ・シシュフォス＝≪黒の魔術師≫とはならないはずなのだ。
「そこなんだよね～　おじい様もそこが引っ掛かるって言ってたよ～」

「おじい様？もしかして学園長も疑っているのですか？」
学園長が関わっているという情報はさすがに聞き捨てならなかった。
いくら≪超人≫と言えどソラを出し抜けるとは思えないがソラにとっても油断できない相手であるのは確かだろう。
「そうだよ～　もともとおじい様が調べてたんだけど今ちょっと用事で出かけてるから代わりにクリスが調べてるんだよ～」
つまりクリスは≪黒の魔術師≫の正体を知るためにアリアたちをここへ呼んだということだろうか？
「それで結局シシュフォス君が≪黒の魔術師≫なの？」
「違います。ソラではありません」
アリアは間髪入れずに答えた。そうしなければならないような気がしたのだ。
クリスは少しの間黙る。
「……本当みたいだね～　じゃあ本題に入ろうか～」
「今のが用事ではなかったのですか？」
「違うよ～アリアちゃんたちを呼んだのは別の理由だよ」
予想外の展開である。三人は、アリアなどは特にソラのことを聞くために呼ばれたのだと思っていた。
「フレイヤちゃんにアリアちゃん、それにレティシアちゃんを呼んだのはある期待がかかってるからだよ」
「期待……ですか？」
「そうだよ期待、二つ名を得るかもっていうね」
その発言で驚いたのはレティシアだけである。
他の二人は二つ名に関しては当然だと思っている。
「毎年この学園では二人か三人二つ名もちが生まれてるんだよね～だから学年で上位二人を呼んだの。アリアちゃんは二つ名もちの家系の出身だからだよ～　一応聞くけどアリアちゃんは≪時の巫女≫の名前を継ぐよね？」
≪時の巫女≫という二つ名はアリアに与えられたものでもアリア

の母親に与えられたものでもない。未来を予言できる家系、ナイアデス家に与えられたものだ。
原則としてその直系が二つ名を継ぐこととなっている。
アリアは一人っ子であるため受け継ぐことはほぼ間違いないだろう。
「はい、まあ受け継ぐと思いますが……」
「それならやっぱり呼んで正解だったね」
「ですが二つ名もちの家系というのなら私以外にも……」
そう言ってアリアはフレイヤを見る。
二つ名もちの家系とは何もナイアデス家だけではない。
異世界の勇者の末裔であり≪救世の勇者≫の二つ名を継ぐカミト家や空間魔法を遺伝的に得意とする≪空間の支配者≫ディーリアス家、そして何より≪魔を統べる≫一族ルビンシュテイン家などがある。
フレイヤは表向きルビンシュテイン家最後の生き残りということになっている。
ならば二つ名を受け継ぐのはフレイヤのはずだ。
「フレイヤちゃんね～」
クリスは悩むような声で言う。
「はい。フレイヤさんはルビンシュテイン家唯一の生き残りです。なら彼女もまた≪魔を統べる≫という二つ名を受け継ぐべきです」
アリアはそう主張する。
しかしクリスは驚くべきことを言ってくる。
「クリスこの部屋に嘘発見みたいな魔法をかけてるんだけどね、フレイヤちゃんは本当に生き残ったの？この魔法も確実じゃないんだけどそこが嘘って反応しててね～」
「そんなはずはないでしょう。フレイヤはルビンシュテイン家の特徴であるすべての属性魔法の使用ができますよ？」
反論したのはレティシアだ。
ここでもしフレイヤがルビンシュテイン家でないのなら自分たち

の努力が、何よりシルヴィアが報われないと思ったのか少し必死な様子だ。
「だよね～　まあどちらにせよフレイヤちゃんは候補から外れないからいいけどね～」
クリスは大して気にしていない様子であるがアリアの内心の動揺は半端ではなかった。
まさかこんなところで見破られかけるとは思ってもいなかった。
「三人とも二つ名もちは生徒会に強制的に入れられるのは知ってるよね～？」
三人ともが頷く。
「だからアリアちゃんたちは生徒会候補ってわけなんだよ～」
二つ名もち候補＝生徒会候補ということだろう。
「まあ本当はこれにシシュフォス君も含むんだけどね～」
クリスは軽そうな雰囲気で言っているがレティシアたちとひとまとめにされていると言ったら学園を消す勢いで怒るだろう。
「だからまあシシュフォス君は怪我で無理としても三人には今度の合宿でグループを組んでほしいんだよね～生徒会の練習としてさ～」
この瞬間レティシアの顔は喜色満面としか言い表せないくらい輝いたがアリアの顔は苦虫をかみつぶしたように暗くなった。
レティシアとしてはこれで合法的にソラとグループを組む理由ができつつあるがアリアとしてはそんなことになってはソラにとっても自分の恋路にとっても良い結果とはならないだろう。
「返事は今日じゃなくてもいいからね～」
そう言ってクリスはなぜかアリア達を置いて生徒会室を出ていった。
しかもなぜか急いでいる様子であった。
するとすぐに生徒会室の扉が開いて上級生と思われる男子生徒が入ってきた。
「君たち何をしている？」
厳しい目つきで聞いてくる。

「生徒会長に呼ばれたのですが……」
そう言うとその男子生徒は―よく見ると副会長だ――は怒り出した。
ただしレティシアたちにではない。
「あの会長はまたサボってたのかーーー」
一通り吐き出すとレティシアたちに聞いてくる。
「それで生徒会長はどこに行ったのかね？」
「ついさっき扉から出ていきましたが……」
そう言うと副会長は風のように扉から出ていった。
おそらくクリスを探しに行ったのだろう。
（どうしましょう……ソラが聞いたら絶対おこりますよね……）
アリアはそんなことにも気づかないほど考え事にふけっていた。
ソラにどう説明するか考えていたためだ。

◇◆◇◆◇◆

「……ということになったのですがどうしましょう？」
アリアは放課後ソラの病室に来て事の顛末を話していた。
しかしソラの反応はアリアの予想とは違った。
「それは大変だね。まあ何とかするよ」
何でもないような口調でこういうのだ。
いつもならもうちょっと焦ったりするのだが……
これはなぜかというとソラの幻覚が処理容量を超えたため半ば暴走しているのだがそれに気づくことはなさそうだ。
「それは迷惑をかけたね。まあ何とかするから大丈夫だよ」
それから世間話を一通りしてアリアは帰った。
世間話の間ソラは「何とかするよ」を連呼していた。
（今日のソラは変でしたね……大丈夫でしょうか……）

アリアはソラの頭の心配をしながら寮へと帰った。

第二話　生徒会（後書き）

今回はもしかしたら誤字脱字が多いかもしれません。
本当は十二時に予約投稿するつもりが間違って消してしまったので遅くなってしまいました。
なのでこの話はあとで大幅な改正が入る可能性が大だったりします。
後更新ペースは一時これが続きそうです。申し訳ありません

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0049y/

贖罪の魔術師

2011年12月22日00時23分発行